

岩手県埋文センター文化財調査報告書第77集

長者屋敷遺跡発掘調査報告書(Ⅲ)

東北縦貫自動車道関連遺跡発掘調査

(遺物編—本文)

(財)岩手県埋蔵文化財センター

日本道路公団

長者屋敷遺跡発掘調査報告書(Ⅲ)

東北縦貫自動車道関連遺跡発掘調査

(遺物編 - 本文)

序

地域開発にともなう交通網の整備事業は、本県にとって重要な施策のひとつであり、特に東北縦貫自動車道の建設は、産業経済開発の大動脈として多方面からの期待をになうものであります。

一方、私たちは、貴重な文化遺産を保護するとともに、後世にひきついでいく責務があり、開発との均衡を保つことも大きな課題であります。

当埋蔵文化財センターは、昭和52年に発足して以来、県教育委員会の指導と調整のもとに、開発によって消滅する遺跡の発掘調査を行い、記録保存する措置をとってまいりました。

東北縦貫自動車道青森線建設に関連する発掘調査は、西根町から秋田県境までの19遺跡について実施し、昭和53年から56年にかけてすべての野外調査を終了しました。発掘調査によって出土した資料の整理及び報告書の作成は、これまで17遺跡について、11分冊の発掘調査報告書として刊行しております。

本報告の長者屋敷遺跡は、すでに昭和55年に岩手県埋文センター文化財調査報告書第12集、昭和56年に同第20集として遺構編を刊行しました。その後、ひきつづき出土遺物の整理および報告書作成の業務をすすめてまいりましたが、このたび遺物編を発刊するはこびになりました。

この報告書が先に刊行しました遺構編とともに、研究者のみならず多くのかたがたに活用され、埋蔵文化財に対する理解を深めていただく一助になれば幸いです。

最後になりましたが、発掘調査から報告書の作成にいたるまでの間、御援助と御協力を賜りました日本道路公団仙台建設局、松尾村教育委員会をはじめ、関係各位に感謝申し上げますとともに、今後の御指導と御協力をお願い申し上げます。

昭和59年3月

財団法人岩手県埋蔵文化財センター

理事長 金子 彰 吉

財団法人 岩手県埋蔵文化財センター組織

役員

理事長	金子 彰 吉	(県教育長)
副理事長	榮内 眞	(県教育次長)
常務理事	熊谷 正 男	(県立埋蔵文化財センター所長)
理事	吉田 具 和	(県農政部次長)
〃	高橋 健 之	(県林業水産部次長)
〃	穂積 昭 慧	(県土木部次長)
〃	板橋 源	(県立博物館長)
〃	草間 俊 一	(県立盛岡短大大学長)
〃	小形 信 夫	(元常務理事)
監事	佐藤 公 志	(県教委総務課長)
〃	小原 吉 雄	(県教委財務課長)

職員

所長	熊谷 正 男
副所長	鈴木 信 吉
[総務課]	
総務課長	菊池 勉
庶務係長	阿部 昭 夫
主任	佐藤 久 四郎
〃	戸草 内 幸 男
〃	立花 多加 志
技能員	佐藤 春 男
[調査課]	
調査課長	嶋 千 秋
主任専門調査員	近藤 藤 宗 光
〃	国生 生 尚 二
専門調査員	朝野 孝 利 和
〃	菊池 木 恵 治
〃	鈴木 辺 洋 一
〃	渡辺 原 一 則 夫
〃	大田 田 鎖 夫
〃	佐々木 嘉 直

専門調査員

〃	板田 沢 満 郎
〃	岩村 村 壮 一
〃	光井 文 久 行
〃	玉川 英 喜 喜
〃	石川 長 利 幸
〃	工藤 藤 重 幸
〃	中川 川 義 紀
〃	高橋 橋 与 右 門
〃	高橋 橋 義 介
〃	佐々木 々 清 文
〃	酒井 井 宗 孝
[資料課]	
資料課長(兼)	鈴木 木 信 吉
主任専門調査員	昆野 野 靖 進
専門調査員	平井 井 隆 英
〃	鈴木 木 浦 一
〃	三 三

緒 言

1. 長者屋敷遺跡は岩手県岩手郡松尾村大字松尾第5地割大花森54ほかにある。発掘調査は昭和53年と翌54年の2カ年にわたって実施した。

2. 遺構に関する報告書は2分冊計3冊としてすでに刊行している〔岩手県埋文センター文化財調査報告書第12集・第20集 松尾村長者屋敷遺跡(Ⅰ)・(Ⅱ)〕。したがって本報告書は遺物についての記載を主とし、本文編および図版編によって構成した。

3. 検出された遺構などの数は遺構編の記載といくぶん異なる点があるため、以下のように訂正する。

竪穴住居址……………257群352棟	ピット……………347基
陥し穴状遺構……………2基	配石遺構……………3基
焼土遺構……………16基	土器埋設遺構……………3基
遺物包含層……………2カ所	溝址……………6条
巨岩障群……………1カ所	

4. 出土遺物の主な整理と本報告書の作成は昭和56年度に始まり、昭和58年度に終了した。

5. 整理担当者は、昭和56年度と翌57年度が高橋文夫、昭和58年度が三浦謙一・佐々木勝・昆野 靖である。

6. 本文の執筆分担は次のとおりである。

I 遺物整理と報告書……………三浦謙一

II 出土遺物

1. 竪穴住居址

縄文時代前期に所属する住居址を中心として……………三浦謙一

縄文時代中期から弥生時代に所属する住居址を中心として……………佐々木勝

平安時代に所属する住居址……………昆野 靖

2. ピット～7. その他……………三浦謙一

III 要約

1. 出土遺物

……………三浦謙一・佐々木勝・昆野 靖

2. 検出遺構

以上であるが、分担したそれぞれの文末に執筆者名を付した。

7. 本調査の出土品にかかわる鑑定と分析は次の個人と機関に委託した(敬称略)。

石質鑑定……佐藤二郎（岩手県立大船渡農業高等学校教諭）

^{14}C 年代測定…日本アイソトープ協会・学習院大学

8. 図版・写真図版の作成には、川村京子・浅沼幸子をはじめとする多くの室内整理作業員の協力を得た。写真撮影の大部分は岩淵希士が担当した。

9. 本調査の記録類や出土遺物などは、現在、岩手県埋蔵文化財センターが保管している。

序

緒 言

本文目次

I. 遺物整理と報告書

1. 報告書作成の経過 1
 2. 報告書の構成 1

II. 出土遺物

1. 竪穴住居址 2
- | | |
|-----------------|------------------|
| D V区..... 3 | E III区..... 4 |
| E IV区..... 5 | E V区..... 5 |
| E VI区..... 12 | F II区..... 13 |
| F III区..... 15 | F IV区..... 20 |
| F V区..... 29 | G III区..... 29 |
| G IV区..... 36 | G V区..... 47 |
| G VI区..... 51 | G VII区..... 56 |
| H III区..... 57 | H IV区..... 63 |
| H V区..... 67 | H VI区..... 73 |
| H VII区..... 75 | I II区..... 86 |
| I VI区..... 87 | I VIII区..... 87 |
| J V区..... 99 | J VIII区..... 99 |
| J VII区..... 130 | K VIII区..... 133 |
| L VI区..... 138 | L VIII区..... 139 |
| M V区..... 140 | M VI区..... 140 |
| N VI区..... 144 | N VIII区..... 147 |
| O VI区..... 148 | Q IV区..... 150 |
| R IV区..... 150 | S III区..... 151 |
| S IV区..... 152 | S V区..... 157 |
| T III区..... 163 | T IV区..... 164 |

T V区.....168

2. ビット168
 3. 配石遺構215
 4. 施土遺構216
 5. 土器埋設遺構217
 6. 包含層221
 7. その他233

III. 要約

1. 縄文土器240
 (1)はじめに240
 (2)前期240
 (3)中期初頭—中葉251
 (4)中期後葉—末葉252
 (5)後期258
 (6)晩期258
 2. 弥生土器259
 3. 土師器・須恵器259
 4. 刺片石器260
 5. 礫石器261
 IV. おわりに264

挿 図 目 次

- 図版 i 土器集成図(1)268
 図版 ii 土器集成図(2)269
 図版 iii 土器集成図(3)270
 図版 iv 土器集成図(4)271
 図版 v 土器集成図(5)272
 図版 vi 土器集成図(6)273
 図版 vii 土器集成図(7)274
 図版 viii 土器集成図(8)275
 付表 ¹⁴C年代測定値276
 付図 重複する住居址間の新旧関係分解図...277

I 整理の経過と報告書

1. 整理の経過

2カ年にわたる調査の結果、61,210m²の調査区域からは257群352棟^(註)の竪穴住居址や347基のピットをはじめとする遺構、遺構以外から出土した石器類を除いた重量が約6,200kgにのぼる遺物が検出された。それらの大部分は前期・中期を中心とした縄文時代に位置づけられるが、一部は弥生時代や平安時代のものを含んでいる。

検出された数量が膨大であったため、整理と報告は、遺構と遺物とに分けて順次進めることにした。遺構については昭和54年度と翌55年度に整理し、それぞれの年度に2分冊計3冊の報告書を刊行している。引き続き遺物の整理に入ったが、水洗や注記・接合などの基礎的な作業は、すでに野外調査時から進めていた。

昭和56年度と翌57年度は高橋文夫が整理を担当した。この間の主な作業は、掲載遺物の選択からはじまり、遺物の実測やトレース・拓本図の作成、そして報告書用の図版の割付けまでの一連の過程を終えている。ほかには写真図版の一部を作成するとともに、床面積や出土遺物の重量などを測定している。

昭和58年度には整理担当者に変更があり、三浦と佐々木・昆野の3名が引き継いだ。この年度は、前年度までに終わった図版や写真図版の修正・図版への必要事項の記入・残りの写真図版の作成・データ類の整理をするとともに、本文の記載を主な作業内容としている。

2. 報告書について

本報告書は、各種の遺構や包含層・その他から出土した遺物のうちから、それぞれを代表するものを掲載している。遺構は種類別に分け、個々のなかでは30m×30mの各ブロック順に図版を組んでいる。遺構以外では、2カ所に形成された遺物包含層（付図1参照）からの出土遺物を載せ、つづいて、表土あるいは遺物包含層としての性格をもつII層などから出土した土器を中心に、〈その他〉とした。

掲載遺物の選択は、土器が完形品や復元できて実測が可能なるものを主体に、遺構の時期決定資料となる破片、あるいは时期的な特徴をよく示している口縁部や体部の文様帯を含む部分を優先している。石器は製品を中心に選び、土製品や石製品・鉄製品は出土点数が少ないことから大部分を載せた。もちろん、遺物の全体量からすれば、掲載できたのは一部にしかすぎない。とくに包含層や〈その他〉からの出土遺物は、実測が可能であった土器の大部分に掲載したものの、破片の多くは割愛している。写真図版は、図版に載せたなかから、さらに選択して組ん

ている。図版との対照が容易になるように、いくつかに分けた種類別のなかでは、原則として遺物番号の若い順に並べている。

整理は、調査員が計画の立案と指示、室内整理作業員が実際の作業の大部分をおこなう方法をとっている。多量の遺物に対処する必要から、当初の2カ年は大勢の作業員が同時に実測などを進めてきた。図版の方法は統一化を目指してはいたが、個々に若干のバラツキが生じている。同じく図版に関することであるが、遺物番号の欠番について述べることにする。遺物番号は、昭和58年度当初、個々の遺物に対して第1図から付けていったものである。その後、遺物を観察するなかで、接合や削除などの理由によって図版の組み替えの必要が一部にでてきた。欠番はその際に生じたのであるが、番号の全部を変更することによって起きるいくつかの混乱が予想されたため、あえて欠番扱いとし、図版中にその旨を記入した。

最後に、遺構編の記載とのくいちがいについて触れておく。実際は遺物が出土していたにもかかわらず、遺構編のピットの記載で、出土遺物はないとした例がある。これは、遺物の一部が未整理であった段階で記載をしたためにおきた誤認によるものである。個々については述べないが、遺物の記載をもって訂正することにする。同様の例は住居址の場合にもわずかながらある。それに対して、逆の場合、つまり遺構編に記載がありながら、遺物を欠くために本報告書に掲載できなかった例がある。しかし、そのくいちがいがどの過程でおきたのかが不明であり、個々の記載はしていないことをお断りするとともに、今後の反省点としたい。

(三浦 謙一)

注1)本調査の報告書では、住居址が単独である場合は住居址、重複関係にある複数が集めた状態のときは住居址群の名称をもちいている。本報告書は、単独の場合は1群1棟、集合体の場合は1群X棟として住居址の棟数を集計している。

II 出土遺物

1 竪穴住居址

検出された住居址の時代別の棟数は、縄文時代が243群318棟、弥生時代が4群24棟、平安時代が10群10棟である。量的に多い少ないはあるものの、遺物を出土した住居址は図版にはほぼ網羅している。この項では、遺物の観察事項と住居址の所属時期を記載していくが、いくつかの点を注意しておきたい。

第1に、住居址群の場合、遺物は原則的には最新期の住居址に固有のものと考えられることである。しかし、重複形態によってはそれ以前の住居址に伴う遺物を含む場合もありうるが、その分離はほとんどの場合不可能である。第2に、住居址の所属時期についてである。先の遺構編では全部の住居址の所属時期を明らかにしている。その場合、たとえば縄文時代であれば、前期前半期あるいは中期中葉期などのように、現在一般的におこなわれている時期区分の大別に基づいたものであった。その見解を踏まえながら、本報告書では、できるかぎり土器型式や土器分類群に対応した時期を出土遺物にもとづいて示している。それが不可能な住居址や遺物を出土していないものについては、遺構編の見解やほかの時期決定要素を考慮したうえで、所属時期を記載した。第3に、重複関係にある住居址間の新旧は一覧図として巻末に載せてあるので、必要なとき以外は個別の遺構名を記載していないことをお断りしておく。

DV区

DV-1住居址(第1図・第2図1-19、写真図版1・87・158)

土器(1-18) 1は頸部と口縁部上端に配した沈線が口縁部に連なって3個1対のゼンマイ状渦巻文を描くもので、後期初頭に相当しよう。2-12・14-16は、土師器の甕形土器と高台付環形土器である。甕形土器14点には、中型のもののほか、5・12・15・16等小型の土器が含まれるが、いずれもロクロ不使用であり、12は手捏ね土器である。共に外面はヘラ削り痕、内面にナデ調整痕をもち、2・11・18には巻上げ痕が残る。また、11の外面には曲線を交錯させたヘラ描きが認められる。4の高台付環形土器は、坏部の3分の1が遺存し、高台内に糸切り痕をもつ。内外面にヘラ磨き痕が横走り、内面に黒色処理される。13は晩期中葉の壺形土器とみられ、口唇部に刻みをもつ。17は胎土に繊維を含む前期前半の網代痕をもつ底部片である。

鉛滓(19) 長径12.0cmの鉄滓断片である。両面とも錆化して褐色を呈し、一部海綿状をなす。重量は480gである。

遺構の時期 2・3・5-12の甕形土器は床面出土、4の高台付環形土器は柱穴内出土であり、平安時代の住居址と認められる。

DV-2住居址(第2図・第3図20-28、写真図版2・87)

土器(20-28) 20・22-26は土師器の甕形土器である。22を除く5点は、ロクロ不使用で小型の甕形土器を含むが、いずれも外面にヘラ削り痕、内面には横方向のナデ痕を有する。22はロクロ成形による中型の甕形土器である。底部に回転糸切り痕をもつ。21は高台付環形土器である。高台内に糸切り後の脚部貼付にともなう押圧痕をもつ。内面はヘラ磨き痕が不定方向に走るが、赤褐色を呈して黒色処理が明確でない。27・28は沈線に磨消帯をもち、大木10式の体部片である。

遺構の時期 床面出土の遺物は、24の甕形土器であるが、出土遺物の大部分が土師器であり、また住居址の構造上からも平安時代に位置付けられる。(昆野 靖)

DV-3 住居址 (第3図・第4図29-40, 写真図版2・87・117)

土器 (29-37) 29は沈線で区画した無文帯が曲折文を描く深鉢形土器で、燃糸文を地文とする。32は体部下半に最大径をもち、口縁部に向かって内傾気味に立ちあがる粗製深鉢形土器である。地文は単節縄文を縦回転で施文する。31・33・34・36は粗製の深鉢形土器で、縦回転の単節斜縄文を地文とする。30は地文の単節斜縄文上に沈線でJ字文が描かれる。35は無文の短い口縁部をもつ深鉢形土器で、頸部には単節斜縄文を施文した隆帯が巡る。37は外面に網代痕をもつ底部片である。以上、29は大木10式に相当する。32も器形や作りからみて同時期に含まれよう。30は大木10式併行の大木系土器、35は縄文時代中期中葉に比定される。

剣片石器 (38-40) いずれも削器である。38・40は縦長剣片の両側縁に片面から刃部加工を施した複刃削器で、39は横長剣片の外湾する先端部に刃部加工を施した小型の削器である。

遺構の時期 複式竈をもつことや埋土内出土土器からみて、大木10式期に位置づけられる。

(佐々木 勝)

EIII区

EIII-1 住居址 (第4図43-45, 写真図版2)

土器 (43-45) 43は酸化炎焼成の坏形土器である。外面にロクロ成形痕を残し、内面底部は満状を呈する。底部の切り離しは、回転糸切り無調整である。44・45は内面黒色処理の高台付坏形土器である。44は体部の立ち上がりが高く、口径が小さい。脚部は八の字状に開き、高台内に回転糸切り痕をもつ。45は脚部を欠損し、高台内に押圧痕をもつ。内面はともに放射状及び横方向にヘラ磨き痕が認められる。

遺構の時期 3点とも床面出土の遺物であり、平安時代の住居とみられる。

EIII-2 住居址 (第4図46-51, 写真図版2・87・158)

土器 (46-50) 46・47・50は土師器の甕形土器である。いずれもロクロ不使用の成形であり、47には巻上げ痕が残る。口縁部は指圧痕をもち、全体に不整である。外面はヘラ削り、内面にはナデ調整が施され、46の底部には一定方向のヘラ削り痕が認められる。48・49はロクロ成形の坏形土器である。48は内面にヘラ磨き痕が残り、黒色処理の可能性があるが、両面・胎土とも灰黒色を呈し明確でない。

鉄製品 (51) 刃部の両端を欠損する刀子の断片である。

遺構の時期 床面出土の遺物は判明しないが、カマドの周辺から甕形土器が出土しており、平安時代の住居址である。

EIV区

EN-1 住居址

遺構の時期 出土遺物がないことや残存状態が良くないことから、時代・時期は不明である。

EN-2 住居址 (第5図・第6図52-63, 写真図版2・3・6・117)

土器 (52-59・61-63) 53-59・61・63の9点は、土師器の甕形土器である。すべてロクロ不使用成形であり、53・54・57の内面には巻上げ痕が残る。口縁部はいずれも不整であり、体部は53・54・57がほぼ直線状に立ちあがるのに対し、他は胴部に若干の脹らみをもつ。外面の調整はヘラ削り、内面では横ナデ調整される。胎土に径1cm以下の小石を含み、全体に粗雑である。52・62は酸化炎焼成の坏形土器である。52は内外面にロクロ調整痕を残し、底部は糸切り無調整である。内面の体部下方には、木の圧痕があり、長さ0.55cm、幅0.30cmを測る。胎土・焼成も良好である。胎土の色調は赤褐色を呈する。

土製品 (60) 胴部破片を利用した円盤状土製品である。周縁の研磨はない。

石斧 (64) 小型の磨製石斧である。両面には斜方向、側面に縦方向の研磨痕をもつ。また、刃部には使用にともなう剥落痕が残る。

遺構の時期 床面出土の遺物は判明しないが、埋土出土の土師器及び遺構の状況から平安時代の住居址とみられる。

(昆野 靖)

EV区

EV-1 住居址 (第6図-第8図65-68・70-110, 写真図版3・4・87・117・155)

土器 (65-97) 67は床面出土の深鉢形土器である。沈線区画の無文帯が連結逆S字文を展開するもので、文様接触部には連続刺突文が施され、文様連結部には刺突文充填の円形区画帯が伴う。文様は4回繰り返され、文様区画外には燃糸文が充填される。77・80・82は無文の口縁部片である。83は沈線区画の無文帯、87は隆起線区画の無文帯が文様を展開するもので、87には隆起線に沿って連続刺突文が施される。65・66は縦回転の単節斜縄文を地文とする小型土器の体部下半である。以上は床面ないしは埋土内下部より出土しており、文様の分かるものはすべて大木10式に相当する。

72は口縁部に綾絡文、74は絡条体圧痕文が施され、74の頸部には連続刺突文を配した微隆起帯が巡る。75は口唇端に指頭状の刻み目文を施し、口縁部には非結束の無節羽状縄文を施文するものである。73は波状の口縁部に半載竹管で山形文が描かれる。以上、72は縄文時代前期I群1類、75はIII群、74はI群2類に分けられ、73は大木7a式に相当する。

68は隆起線で曲線文を描くもので、隆起線上には細い単節斜縄文が施される。85・86は地文

の無節斜縄文上に、89・90(同一個体)は燃糸文上に沈線と曲線文が描かれる。92は地文の単節斜縄文上に斜行沈線文を展開する小型壺形土器である。以上は縄文時代後期初頭に比定されよう。

71・79は折り返し口縁をもつ粗製の深鉢形土器で、71の頸部には横紐の側面瓦痕文が施される。双方とも縦回転の無節斜縄文を地文とするが、71の口縁部には横回転で施文されている。70は朱塗りの壺形土器で、2条の平行沈線が入組文が描かれる。76は口縁部に、91は体部に網目状燃糸文が施され、96は無文研磨された器面に曲線文が描かれる。以上は十穀内I式や大湯式に併行し、縄文時代後期前葉に比定されよう。

78は大型深鉢形土器の耳形突起である。93-95は口縁部に刻み目帯をもつ鉢形土器で、体部には大腿骨文が描かれる。81は間隔のあいた燃糸文を地文とする体部片、97は縦回転の無節斜縄文を地文とする体部下半、84、88は縦回転の単節斜縄文を地文とする粗製深鉢形土器である。以上、78は縄文時代後期中葉に比定され、93-95は大洞C₁式に相当する。

剥片石器 (98-107) 98は縦形石匙で、両側縁から先端部に連続する刃部加工が施される。99-100は縦長剥片の1側縁を刃部とする直刃状の削器で、100の基部は折断されている。101は縦長剥片の先端部に急傾斜の刃部加工を施した掻器である。表面には自然面を大きく残す。102・103は2辺が折断され、1個の刃部をもつ折断石器である。102の刃部は未加工で、103の刃部には細部調整が加えられる。104は細部調整を施した1個の刃部をもつ抉入石器、105は非折り面尖頭型の彫器である。106は2個1対の刃部をもつピエス・エスキューで、両極には階段状剥離痕がみられる。107は2次加工を施した小剥片である。

礫石器 (109・110) 109は偏平な楕円形礫を素材とする凹石で、表面に深い1個の凹みをもつ。110は三角柱形の磨石で、裏面は擦られたことによる光沢が著しい。敲石との複合石器で、1側面に敲打痕を伴う。

石製品 (108) 硬質泥岩で作られた有孔石製品である。表面中央を縦走る凹線に重ねて円孔が穿たれる。表裏2面とも剥落していることから形状は不明である。

遺構の時期 床面出土土器や炉の形態からみて、大木10式期に位置づけられる。

(佐々木 勝)

EV-2 住居址 (第9図・第10図114-149、写真図版4・87・158)

土器 (114-139) 114は小型の深鉢形土器である。磨耗が著しいため、文様意匠ははっきりしないが、磨滑縄文をもつ縄文時代中期末葉の土器である。125は絡条体瓦痕が口縁部に施文された前期III群、116はX字状の貼付文の上に円形竹管文を伴う大木4式の土器である。体部破片123・124・126は単節斜縄文などを地文にし、胎土には織維を含む。

133・134は同一個体の破片で、口縁部無文帯に沈線による小渦巻文を主にした文様を描く。第1図Iと同類であり、後期初頭に相当しよう。135は沈線、136・137は隆起線と沈線による曲線的な文様を口縁部にもつ以外は無文である。127とその同一個体破片129は燃糸文を施文した上を磨消している。130は網目状燃糸文、131は条の間隔の広い燃糸文を体部地文にした体部破片である。以上は後期前葉に含まれる。なかでも127・129は初頭に入るであろう。118は低い高台をつけ、そのつけ根の両側に沈線を沿わせている。高台部には2個1対の抉りが向い合う位置にある。残存部では無文である。後期の吊手形土器になるであろう。138・139は鉢形土器の破片で、口縁部に沈線がめぐる。晩期の土器である。132は縦位の単節斜縄文、128は網代痕をもつ底部破片である。

117・121はロクロ不使用の甕形土器である。外面にヘラ刮り痕、内面にはナデ痕をもつ。120・122は酸化炭焼成の環形土器で内外面にロクロ調整痕をもつ。122の口縁部外面には、長さ0.60cm、幅0.30cmの椀の圧痕がある。119は須恵器大甕の口縁部片である。外面は黒色でやや光沢があり、内面は灰褐色を呈する。

剃片石器 (140—142) 140は基部の抉りが浅い縦形石匙である。141は基部の2次加工のほか、右側縁に微細な剝離痕をもつ抉入石器、142は右側縁の両面から2次加工によって刃部を形成する鋸歯縁状石器である。

石斧 (144) 全体に2次加工の剝離面を残し、両面にのみ部分的な横方向の研磨痕をもつ。

鋳滓及び鉄製品 (143・145—149) 143は鉄滓の断片である。気泡が多く、海綿状をなし、重量は50gである。145は鑄の破片であり、袋部分に歪みがある。146・149は刃先、または両端を欠く刀子である。146では柄部全面及び刃部の一部に木質が付着し、刃幅が狭い。148は平根型の鉄鏃である。全体に薄手であるが、刃部の錆溜が著しく形状が判明しない。146は楔状をなし、刀子の柄部が不明である。

遺構の時期 床面出土の遺物は土師器環形土器及び須恵器甕、鉄鏃等があり、平安時代に位置付けられる。(昆野 靖)

EV-3 住居址 (第10図150・151)

土器 (150) 磨消縄文をもつ体部破片で、縄文時代中期末葉大木10式に含まれる。

石製品 (151) 断面が不整な六角形をした角柱状の竈で、一端を含む部分が残存している。明瞭な加工痕はみられないが、他の出土例からみて石棒の可能性をもつものである。

遺構の時期 住居址として分類してはいるものの、石囲い炉が検出されただけである。所属時期は不明である。

EV-4 住居址 (第10図・第11図152—173、写真図版4・117・141)

土器 (152—164・169—172) 152は小型の浅鉢形土器である。体部は肥厚した底部から外傾

して立ち上がり、上半ではほぼ直立する。口縁部は沈線で区画されて無文帯になり、体部地文は縦位の単節斜縄文である。器形などからみて、大木10式に含まれるものであろう。拓本土器はすべて縄文時代前期のものである。綾絡文が口縁部に施文された156はI群1類である。単節斜縄文を地文にする口縁部破片158・161、網目状燃糸文が施文された170はI群2類である。いずれも胎土には少量の繊維を含む。154・155は施文原体が不明である。153とその同一個体の破片172は太い原体の燃糸文が地文で、条の間隔が広い。160は類似の施文をもつ体部下端の破片である。いずれも少量の繊維を含む。157・162は指頭状押圧痕が施文された隆帯を頸部に伴う。159・163・164は単節斜縄文、169は撚り戻し縄文が地文である。159・169は胎土に繊維を含まない。157・162はI群1類あるいはII群、他はI群に含まれる土器である。171はIII群2類の土器で、口縁部には撚紐と絡条体の側面圧痕による施文、頸部には隆帯を伴う。

剃片石器 (165・167・168) 165はピエス・エスキーユである。2個1対の刃部をもつが、剝離面の奥行きは浅く、とくに下端の刃部には細かな剝落痕があるにすぎない。168は小型の削器状石器で、奥行きの浅い刃部が左側縁に作られ、先端部は90°に近い角度で2次加工されている。167は使用痕のある剃片である。

石斧 (166) 両面加工によって打製石斧としての形態を作り出したあと、全体を研磨している。研磨痕が顕著なのは基端寄り側縁を中心とした一部で、大部分は2次加工の剝離面がそのまま残る。局部磨製石斧であることが考えられるが、刃部側の裏面には研磨面を切る打撃を加えて尖頭形にし、別の器種に転用しているために明らかでない。

礫石器 (173) 黒雲母片岩を素材にしたII-A₁型の半円状扁平打製石器である。刃部は両面加工されて鋭利であり、背部には自然面を残している。

遺構の時期 床面上から出土した一括土器の一部の破片155・159・160・172からは縄文時代前期前半期、土器分類群でいえば前期I群の時期に位置づけられる。(三浦 謙一)

EV-5 住居址 (第11図—第13図174—217、写真図版4・5・87・141・155)

土器 (174—209) 175は炉埋設土器である。体部中央が膨らむ粗製深鉢形土器で、地文は綾絡文が伴う複節斜縄文を縦回転で施文する。177・178は床面直上出土の深鉢形土器である。177は沈線区画無文帯がD字文を描くもので、文様変曲部には竹管文が施される。文様は4回繰り返され、文様区画外には単節斜縄文が充填される。178は沈線区画無文帯がJ字文を展開し、文様末端部には鱗状隆帯を伴う。文様は6回繰り返され、文様帯の背景には燃糸文が充填される。174・176は体部が直線的に外傾する粗製深鉢形土器で、縦回転の単節斜縄文を地文とする。176には綾絡文が伴う。183・184・186・189—196・199は沈線で区画した無文帯がJ字文やD字文などの曲折文を展開する沈線文系土器である。以上、文様の分かるものは大木10式に相当する。174—176も器形や作りからみて同時期に含まれよう。

197・200・201は同一個体で、口縁部文様帯を2条1対の平行沈線文で区画する深鉢形土器である。文様は平行沈線で斜行文や渦巻文が描かれ、体部には無節斜縄文が施される。202・205も口縁部に平行沈線で区画された文様帯をもつもので、楕円文や渦巻文が描かれる。204は太い横位の平行沈線で口縁部文様帯を構成し、口唇端に地文と同じ単節斜縄文を施すものである。198は地文の単節斜縄文上に曲線文が描かれ、203は燃糸文上に波頭文が描かれる。208は隆起線で幾何学文を展開し、隆起線上に地文と同じ単節斜縄文を施すものである。以上は縄文時代後期初頭に比定されよう。

179・180は同一個体の朱塗り土器で、無文研磨された器面に沈線で曲線文が描かれる。185は無節の網目状燃糸文を施した体部片、209は無節の燃糸文を施した口縁部片である。206は無文の器面に沈線で渦巻文が描かれる。207は平行沈線で横位に区画した壺形土器の頸部である。以上は十腰内I式に併行する。181は土師器壺の口縁部である。182は口縁部文様帯に横位の燃紐疋痕文を施すもので、縄文時代前期III群に分けられる。

剥片石器 (210-212・214・215) 210は素材のもつ鋭角部に不規則な2次加工を施した剥片である。211は1個の刃部をもつ抉入石器で、刃部は加撃によって作られる。211は非折り面尖頭型の彫器で、刃部には刃こぼれ状の微細剝離痕を伴う。214・215は右側縁に使用痕をもつ剥片である。

礫石器 (217) 球形の自然礫である。機能を類推する痕跡を欠くが、石弾として分類した。

石製品 (213・216) 213は硬質凝灰質泥岩で作られた有孔垂飾品である。長さ6cm、幅1.2cmの棒状隆の偏平部に、両面から穿たれた2個の円孔をもつ。216は石棒で、基部のみを残す折損品である。器面は研磨されており、体部断面形は円形を呈す。

遺構の時期 炉埋設土器や床面直上出土土器からみて、大木10式期に位置づけられる。

(佐々木 勝)

EⅤ-6 住居址 (第13図・第14図220-233、写真図版141・155)

土器 (220-223・225-227) すべて小破片である。221は指頭状押圧痕1個を口唇端に伴う。222は単節斜縄文、223は条の間隔が10mm±と広い縦位の燃糸文、220は附加条が地文である。227は底部の破片で、外面には押圧痕を伴う。編み物の圧痕とは異なるが、小破片のため詳しくは分からない。以上のうち、220を除いては胎土に少量の繊維を含む。221・222は縄文時代前期I群2類、223もI群に含まれる。225・226は縦位の単節斜縄文を地文にした中期の土器と推定される。

剥片石器 (228-230) 228は折り面交差型の彫器で、刃部には微細剝離痕が生じている。229は1辺が折断され、右側縁に微細剝離痕がみられる折断石器、230は左側縁を刃部にする割器状石器である。

礫石器 (224・231・232) 231はII-B型の半円状扁平打製石器である。右側縁の刃部は磨耗が著しい。224・232は磨石である。いずれも扁平な円盤を素材にし、224は全体が滑らかである。232は両端が破砕している。両面が使用面になり、表面はゆるやかな凸曲面、裏面は平坦面になる。

石製品 (233) 一部が破損しているが、ほぼ円の形状をした円盤状石製品である。周縁を打ち欠いたあと、全体を研磨して成形する。

遺構の時期 埋土中の遺物や炉の形態・EV-7住居址に切られていることを参考によると、縄文時代前期～中期中葉に位置づけられるであろう。(三浦 謙一)

EV-7住居址 (第14図・第15図234-250、写真図版5・156)

土器 (234-243) 234は炉埋設土器である。体部中央が大きく膨らむ粗製深鉢形土器で、縦回転の単節斜縄文を地文とする。240・242・243(同一個体)は細くて密な燃糸文を地文とする深鉢形土器で、沈線区面の無文帯で曲折文が描かれる。以上は大木10式に相当する。

235・236・239は口縁部文様帯に絞絡文が施される。237は繊維を多量に含む無文の口縁部片、238は間隔のあいた太い燃糸文が施される体部片である。241は無文研磨された器面に沈線で曲線文が描かれる。以上、235・236・239は縄文時代前期I群1類、237・238はI群2類に分けられ、241は十腰内I式に併行する。

剥片石器 (244-248) 244は4個2対、246は2個1対の刃部をもつピレス・エスキューである。双方とも刃部には使用による階段状の剝離面がみられ、246の表面は全面が剝離面で覆われる。245・247は左側縁、248は右側縁に使用痕をもつ剥片である。

礫石器 (249・250) 249は硬質細粒凝灰岩の扁平な不整角礫を素材とした礫石で、2側面に1個ずつ凹面擦痕がみられる。250は下端を背部とし、ほかの部分で刃部とするII-A₃型の半円状扁平打製石器である。

石製品 (251) 石英安山岩の三角柱礫を素材とした大型石棒である。頭部は丁寧に研磨され、体部との境に明瞭なくびれが作られる。体部断面形は三角形を呈する。凹石として転用されており、2個の深い凹みを伴う。

遺構の時期 炉の形態や炉埋設土器からみて、大木10式期に位置づけられる。

(佐々木 勝)

EV-8住居址 (第15図252-255)

土器 (252・253) 252は条の間隔が10mmほど広い縦位の燃糸文を地文にし、胎土には繊維を含む。253は複節がみられるが、原体がはっきりしない。胎土には繊維を含まない。252は縄文時代前期I群の土器である。253も同じ仲間に入るものかもしれない。

剥片石器 (254・255) いずれも基部を失い、254は使用痕のある剥片、255は剥片である。

遺構の時期 少量の遺物が出土しただけである。それらの遺物や炉の形態を参考にすると、縄文時代前期～中期中葉の時期に位置づけられるであろう。(三浦 謙一)

EV-9 住居址 (第15図・第16図256-267、写真図版5)

土器 (256-267) 256-263は土師器の甕形土器及び坏形土器である。258-263はロクロ不使用の甕形土器であり、いずれも外反する口縁部は不整をなす。外面にはへら削り痕、内面には斜、または横方向のナデ調整痕をもつ。256はロクロ調整される坏形土器である。265-267は中期末葉の深鉢口縁部、257は後期の壺形土器口縁部とみられ、両面に研磨痕をもち、朱塗りの痕跡が認められる。264は後期の体部小片である。

遺構の時期 床面出土の遺物は確認されていないが、カマド付近から土師器甕型土器が出土しており、平安時代に位置づけられる。(昆野 靖)

EV-10住居址 (第16図268・269)

土器 (268・269) 268は口縁部に隆帯を巡らせ、隆帯上から丸棒状工具で斜行沈線文を施すものである。269は沈線で区画した無文帯が曲折文を展開するもので、縦回転の複節斜縄文を地文とする。269は大木10式に相当し、268は縄文時代前期IV群に分類される。

遺構の時期 床面や炉からの伴出遺物を欠くが、複式炉の存在や周囲の遺構のあり方からみて、大木10式期に位置づけられよう。(佐々木 勝)

EV-11住居址 (第16図-第19図270-323、写真図版6・141)

土器 (270-317) 271-278・282-298は土師器の甕形土器、または坏形土器である。272-275・277・282・284-298の21点は、ロクロ不使用成形の甕形土器であり、274・284・285・291には巻上げ痕が残り、全体に歪みが多い。小型の284を除いて、口縁部に最大径をもつ。口縁部は短かく外反し、内反り状を示すものや薄く引き出すもの含まれる。体部はやや直線状に立ちあがる277と若干脹らむ274等があり、底部には丸味をもって体部に続く272とやや括れ状をなす273等がある。外面の調整はいずれもへら削りされ、内面は斜、または横ナデ調整される。そのほか、282の外面には、長さ0.55cm、幅0.30cmの靨の圧痕が横位置に僅かに被覆される状態で認められる。

291はロクロ成形される甕形土器である。口縁部はくの字状に逸き出されて外反し、胴部が湾曲して最大径となる。外面にへら削り痕、内面にナデ調整痕をもち、口縁部では内外面とも横ナデされる。276・283はロクロ調整の坏形土器である。276の底部は回転糸切り無調整である。

270・279-281・296・299・300-317の24点は、縄文土器である。270は単節斜縄文を付す中期末葉の深鉢形土器である。破片では、281・299が刺突竹管文をもち、前期IV群に属し、279・280・288・303・307-309・311・314-317は大木9・10式の中期末葉、296・302・304-306・310・312・313後期前半とみられ、305以下は十腰内I式の特徴をもつ。

剥片石器 (318—320) 318は中央部から先端を欠損する縦形石匙、319は刃部の両側縁に微細な剥離痕をもつ尖頭石器である。320は折損する縦形の剥片である。

礫石器 (321—323) 323は両端に浅い抉入部をもつI—B型の半円状扁平打製石器である。両面に自然面を残すが、両面加工の刃部はやや鋭利である。322は一端がやや扁平になる直角の凹石である。321は断面が楕円形をなす磨石であり、両端に磨耗痕をもつ。

遺構の時期 床面出土の遺物には、縄文時代中期末葉の土器が混入しているが、カマド付近の焼土面や埋土下位から土師器が出土しており、平安時代の住居址と認められる。

(昆野 靖)

E V—12住居址 (第19図・第20図324—343、写真図版7)

土器 (324—341) 324は体部中央が膨らみ、口縁部に向かって内傾気味に立ちあがる粗製深鉢形土器で、縦回転の単節斜縄文を地文とする。底部外面には網代痕がみられる。329・333・337・338は沈線で区画した無文帯が逆S字文などの曲折文を展開する深鉢形土器で、333には文様接触部に連続刺突文を伴う。地文は329・333が単節縄文、330・337が燃糸文、338が複節縄文を縦回転で施文する。332・334は口縁部文様帯が隆起線で区画されるもので、332には隆起線に沿う口縁部無文帯に連続刺突文を伴う。以上、文様の分かるものは大木10式に相当する。324も器形や作りからみて同時期に含まれよう。

327・328は口縁部文様帯に綾格文が施される。331・335は隆起線を貼付して曲線文を展開し、隆起線上に単節斜縄文を施すものである。326は地文の無節斜縄文上に沈線で文様が描かれ、330は磨消縄文帯で方形に近い区画文が構成される。336は体部に網目状燃糸文が施され、340・341は無文研磨された器面に沈線で曲線文が描かれる。341は朱塗りの甕形土器である。339は深鉢形土器の口縁部で、数条の平行沈線が巡る。以上、327・328は縄文時代前期I群1類に分けられ、331・335・326・330は後期初頭、336・340・341は十腰内I式併行の後期前葉、339は晩期中葉に比定される。

剥片石器 (342) 剥片先端部に使用痕をもつ剥片である。

礫石器 (343) 背部は作られず、全周を刃部とするII—B型の半円状扁平打製石器である。

遺構の時期 床面直上の出土土器やがの形態などからみて、大木10式期に位置づけられる。

(佐々木 勝)

E VI 区

E VI—1住居址 (第20図・第21図347—366)

土器 (347—366) 347—357・361—366の15点は、ロクロ不使用成形による土師器甕形土器である。器高25cm以上のものから小型のものまで含まれるが、共に全体に歪みがあり、354・

356・364・366等には巻上げ痕が残る。口縁部は小さく引き出されて外反するものが多く、体部はやや脹らむものと直線状に立ちあがって口縁部に続くものがある。底部は周縁の張り出しをもたず、外傾して体部に続く。外面の調整は斜、または横方向のヘラ削り、内面には斜、または横ナデ調整がほぼ全面に認められる。

358—363は縄文土器である。329は絡条体圧痕文をもつ前期Ⅲ群に属し、362は中期末葉の深鉢口縁部である。他は後期の破片とみられる。

遺構の時期 カマド内及び床面出土の土師器から平安時代の住居址である。調査においては共伴遺物としてほかに土師器環形土器及び刀子があるが、所在が明らかでない。

(昆野 靖)

FII区

FII—1 住居址 (第22図—第26図367—424、写真図版7・88・117・141・142・155・156)

土器 (367—390) 縄文時代前期～後期の土器が出土しているが、前期前半期の土器が卓越している。前期の土器から記載する。367は底部を失っている円筒形の土器である。やや太い横位の単節斜縄文が全面に施文され、胎土には多くの繊維を含む。I群2類に分類できる。368は口縁を欠く部分が多いが、不規則な波状になる。器高は高い部分で10.5cmと小型である。底部はやや揚げ底様になり、外縁が部分的に張り出す。作りは粗雑で、全体が無文である。胎土には繊維を含む。

拓本土器のうち、口縁部に綾絡文帯をもつI群1類は370・371・373・374・377である。370は口唇端に爪形文、373・377は頸部に隆帯を伴う。373の隆帯は指頭状押圧痕を伴う。I群2類の土器のうち、369は口唇部が両面から押圧され、上面観が小波状を呈する。口縁部破片372・375・376・378・380・381は大部分が胎土に繊維を含み、単節斜縄文を地文とするものが多い。網目状捺糸文をもつ379も同じ分類群に入る。縦位の捺糸文が施文された382もI群のなかに含まれる。384は爪形文が施文された隆帯が頸部にめぐるⅢ群2類の土器で、体部には2条1組の綾絡文が縦位に施文される。

中期末葉大木10式に入る破片は鰭状突起をもつ385である。390も同時期の破片であろう。387・389は後期前葉の土器で、387は立石遺跡第Ⅶ群、389は同第Ⅲ群第5類の土器に類似する。389は波状口縁部の破片で、外面は平行沈線による磨消帯、内面は沈線が文様を構成する。386は無節斜縄文が地文で、斜行する磨消帯が交差する部分には瘤状の突起がつく。突起はボタン突状起のように明確な凹みにはならないが、刻みを伴う。文様意匠や突起の存在からは後期前葉に位置づけられるであろう。磨消縄文をもつ体部破片390も後期前葉のものとみられる。

剥片石器 (391—399) 391—393・396・398は縦形石匙である。392が先端部、396がつまみ

部を折損している以外は完形品である。394は尖頭石器、395は右側縁に刃部をもつ抉入石器である。399は自然面と折り面を交差させた彫器で、刃部には細かな櫛状の剝離痕がある。

石斧(400) 小型の定角磨製石斧である。平刃・直刃の両刃石斧で、使用痕はみられない。

礫石器(401・402・404・408—424) 半円状扁平打製石器は11点が出土した。2種類に分類でき、II-A₂型は410・412・414・417・421・422、II-B型は409・411・413・415・419である。421は右側縁から下端の半ばまでが背部になる。414は両面と短かい背部に自然面を残して2次加工したあと、全体を研磨している。右側縁から下端にかけての刃部は鋭利であるが、左側縁は幅6mm～18mmの平坦面が著しく磨耗している。II-B型に含まれる409や411・413は直線部以外の刃部にも部分的な磨耗痕がみられ、415は上端の一部を除いた刃部全体が磨耗している。412は他に比べて小型である。自然面が裏面に部分的に残る以外は全体が粗く打ち欠かれ、背部には平坦面が作り出されている。

402など6点は磨石である。402は円礫、404は扁平な亜円礫を素材にしている。416や418・420・423は断面が三角形あるいは四角形の細長い亜角礫を素材にする。使用面は4面(416・420)・2面(418・423)である。423は両側面に使用痕があり、表裏面には1個ずつの浅いくぼみを伴う。416は表面中央部の長軸方向に幅の狭い線状の潰痕、418は1側縁に敲打痕、1面に長楕円形の深いくぼみを伴った複合石器である。424は凹石あるいは敲石になる。細長い亜角礫の両面に細かな潰痕が散在している。401と408は石弾の可能性があるが、確実ではない。やや扁平な小型の円礫で、器面は滑らかである。

石製品(403・405—407) 403と405・407は石刻である。いずれもホルンフェルスを素材にした完形品で、形状や大きさ・成形方法が似ている。両端寄りの部分が細く薄い作りである形状は共通し、側縁は、403が稜をもつものに対して、405と407が凸辺形になる。3点とも全体がていねいに研磨されているが、405は素材がもつ凹面を研磨しきれずに器面に残す。403は、両面穿孔の貫通孔がある一端に寄った部分に細く浅い2条の刻線がめぐる。406は円盤状石製品である。表面は平滑であるが、裏面は小凹凸が著しい。周縁は研磨されているものの、打ち欠いた痕がよく残っている。

遺構の時期 埋土中から出土した土器や大型住居系列に属する住居形態からみて、縄文時代前期前半期、土器分類群でいえば前期I群の時期に位置づけられる。

FII-2 住居址群(第26図・第27図435—457、写真図版8・88・117)

土器(435—457) 縄文時代前期の土器が卓越している。453は、器形が円筒形を示し、器高が31.9cmである。口縁部には幅4cm±の綾結文帯が形成され、体部には条の間隔が広い燃糸文が斜方向に施文される。同じ原体は口唇端にも不規則に施文されている。I群1類に分類できる。452は底部を含む体部下半が残存している。底部はわずかに揚げ底縁になる。地文は横位の

単面斜縄文で、胎土には繊維を多く含む。

拓本土器のうち、I群1類に分類できるのは455—458である。458は指頭状押圧痕を伴う隆帯が頸部にめぐる。457は口縁部が強く外反する。451・454は指頭状押圧痕が施文された隆帯が頸部にめぐり、454は燃糸文を体部地文にする。それらもI群1類に含まれる可能性がある。地文だけがみられる口縁部破片は441—443・447—450で、単面斜縄文ほか施文される。胎土に繊維を含むのは442・443・449で、網目状燃糸文を地文にする436とともに、I群2類の土器である。II群に分類できる438—440・444・445は同一個体の破片である。燃紐圧痕3条が頸部にめぐり、口縁部・体部とも結束第1種羽状縄文が施文されている。435はIII群1類に分類できる。幅の広い口縁部は外反し、燃りの方向を異にした2本1組の燃紐を押圧して幾何学的な文様を描く。頸部の区画帯は燃紐圧痕と沈線、そしてその間を充填する刺突文で構成される。体部地文は結束第1種羽状縄文である。437は燃紐を平行横線状に施文するIII群の土器である。

446は後期の土器である。複合口縁の上には沈線による楕円形文と竹管文1個が施文されている。立石遺跡第III群第4類に類似することから、前葉に位置づけることができる。

剃片石器 (425—427・429—434) 425は先端部をわずかに折損した無茎平基の石鏃、427は扇形石鏃である。426は削器状石器で、左側縁に刃部があり、429は右側縁に細かな鋸歯状の刃部を2次加工によって作り出している。430—432・434は折断石器である。折り面の数は、434が1面、430と432が2面、431が3面で、431と432の刃部は2次加工されている。433は非折り面型尖頭形の彫器で、断面が三角形の先端部には細長く小さな槌状の剝離痕がみられる。

遺構の時期 埋土から出土した土器や大型住居系列に属する住居形態からみて、縄文時代前期中前半期、土器分類群でいえば前期I群の時期に位置づけられるであろう。

FIII区

FIII-1住居址 (第27図—第29図459—503、写真図版117・142)

土器 (459—480) 459は上半を失っている。体部下半に最大径があり、その上位の体部は内傾してゆく。底部はわずかに揚げ底様になり、体部地文は単面斜縄文である。胎土には少量の繊維を含む。縄文時代前期には含まれるものの、時期の詳細については不明である。拓本土器は475・480を除いては前期に位置づけられる。口縁部に綾絡文帯をもつI群1類は460・462—464・472である。465・467は、指頭状押圧痕や円形刺突文が施文された隆帯が頸部にめぐる。465は口縁部とともに隆帯下に綾絡文が施文されたI群1類、467も同じ仲間であろう。I群2類に分類できるものも多い。476は口唇部の上面観が小波状を呈し、477—479は口唇端に指頭状押圧痕を伴う。地文は単面斜縄文であるが、479は綾絡文の可能性があり、あるいはI群1類に含まれるものかもしれない。469は底部の小破片で、外面の周縁部に刺突文がみられる。468・

471は網目状摺糸文を地文にする。

473は小波状貼付文が口唇端につけられ、体部には縦位の綾格文がみられる。第123図2264と同様の文様意匠をもつもので、I群2類に分類できる。474は肥厚した山形突起を口唇端に伴い、体部は縦位の綾格文3条が施文される以外は無文である。斜位摺糸文を地文にした体部破片470とともに前期のなかには含まれるものの、詳細は不明である。

475は摺糸文と磨消縄文が文様を構成する中期末葉～後期前葉の土器、480は小破片のためはっきりしないが、無文の体部に沈線を伴うことから後期に属する土器であろう。

切片石器 (481—497) 481は無茎凸基の石鎌で、両面が周辺加工される。483は先端部をわずかに折損した縦形石匙である。487は先端部を折損した削器、484・486・496は削器状石器である。496は右側縁に直刃の刃部があり、左側縁には1個の抉入する刃部を伴う。

折断石器は6点である。折り面の数は、485が1面、488—491が2面、482と489が3面である。刃部は、482と485が2次加工、他は微細剝離痕によって識別される。492は、表面からの細かな2次加工によって左側縁に鋸歯縁状の短かい刃部を作る。494・495はピエス・エスキューである。いずれも2個1対の刃部をもち、刃部は階段状剝離になる。495の剝離面は奥行きが深く、互いに対刃の刃部にまで達している。493・497は使用痕のある切片である。493は鋭い縁辺に微細剝離痕が連続し、497は内湾する左側縁に微細剝離痕がある。

石斧 (499) 破損が著しい。幅広の薄い片刃石斧で、刃部は偏刃である。刃縁には、使用による擦痕が狭い幅で明瞭にみられ、細かな剝落痕も伴う。

礫石器 (498・500—503) いずれも半円状扁平打製石器である。498・500・501・503はII—A₂型に分類できる。いずれも、刃部は左側縁が磨耗し、500では下端が両面から研磨されている。500と503が背部に平坦面をもつ。498は、上端が打ち欠かれて平坦面、凸辺部は傾斜する自然面のために稜線になる。501は、一部が平坦面であるが、他の部分は表面が2次加工されることなどから稜線になる。II—B型の502は両面、とくに表面に2次加工が著しい。左側縁から下端の半ばにかけて磨耗が著しい以外は鋭利な刃部になる。

遺構の時期 埋土からの出土遺物や大型住居系列に属する住居形態・占地などからは、縄文時代前期前半期、土器分類群でいえば前期I群の時期に位置づけられるであろう。

(三浦 謙一)

FIII—2 住居址 (第29図・第30図504—522、写真図版8・88・117)

土器 (504—520) 505—508・520はロクロ不使用成形の土師器変形土器である。506・507には巻上げ痕が残る。外面には粗いヘラ削り痕をもち、内面に横ナゲ痕がある。520は底部片で葉脈の大きい木葉痕が鮮明に認められる。519はロクロ調整される須恵器である。壺の体部下半とみられ、外面にヘラ削り痕をもつ。色調は胎土・両面とも灰色を呈する。

504・509—517は縄文土器である。504・509—513は前期に属し、510はI群1類、509・511はI群2類に分類できる。504はI群に含まれるが、細分はできない。514—519は後期の口縁部、または体部片であり、515は折り返し口縁である。

石斧(521) 基部及び側縁を欠損する磨製石斧である。両面に斜方向に走る研磨痕をもつが、中央部に2次加工の剝離面が残る。また、使用にともなう欠落がある。

礫石器(522) 扁平な台石状の亜角礫を利用し、先端を僅かに両面加工している。他は右側縁を除いて自然面を残す。

遺構の時期 床面出土の遺物はないが、埋土中には土師器及び須恵器が出土しており、遺構の構築状況から平安時代の住居址と認められる。(昆野 靖)

FIII—3 住居址 (第30図・第31図523—539、写真図版117)

土器(523—530) すべて小破片である。523は口縁部破片であるが、地文は分からない。524—530は体部破片で、摺糸文が施文された525・527以外は単節斜縄文が地文である。すべて胎土に繊維を含む。縄文時代前期前半期に含まれるものと推定される。

削片石器(531—539) 531は無茎平基の石鏃、532は先端部と基部をわずかに折損した有茎石鏃である。538は大型の削器である。左側縁はほぼ直刃で、反対縁の凸辺部にも短かい刃部が作られる。537は小型の凸刃削器をピエス・エスキューに転用している。539は鋭い縁辺に小剝離痕がある削器状石器である。534は掘器としての短かい刃部が先端部に作られるほか、基部では折り面を交差させて彫器にしている。彫器の刃部は磨滅している。533は2個の挟入部が2次加工によって作られ、535は微細剝離痕が自然の挟入部にみられる挟入石器である。536は基部を折断し、2次加工による短かい刃部が先端部に作られる。

遺構の時期 時期決定のための参考遺物が少ないことや重複関係からも時期を特定できないことから、所属時期の詳細は不明である。しかし、占地や伊の形態などを参考にすると、縄文時代前期～中期中葉の時期のなかには位置づけることができるであろう。

FIII—4 住居址 (第31図—第34図540—598、写真図版8・88・117・118・142・143)

土器(540—567) 出土した土器は縄文時代前期、そのなかでもI群に分類できるものが卓越している。540は小型の鉢形土器である。口縁部は一方へ傾斜して不均整であり、器高は5.6cm～7.7cmになる。無文で、胎土には繊維をやや多く含む。前期のいつの時期に位置づけられるのかは不明である。I群1類に含まれるのは547ほかである。547・551・553・554は同一個体の破片であるが、接合しない。やや外反する口縁部には綾格文が施文され、口唇端には横に細長い刺突が加えられる。頸部には幅広の隆帯がめぐる。その上には縄文原体が回転施文されるほか、円形の刺突と幅の広い横線状の沈線が併用されている。体部は、隆帯の下が綾格文帯になり、その下位は縦位の摺糸文が施文される。546・552・558もそれらに似る。ただ、隆帯の上

には縄文は施文されず、円形の刺突が加えられるだけである。体部地文は552にみられ、太い原体による単節斜縄文である。558は口縁部の文様が不明である。以上は、胎土に多くの繊維を含む。543・544は口縁部が綾絡文帯になるが、隆帯は伴わない。地文だけの口縁部破片541・542・545・548・550は単節斜縄文のほか、0段多条の原体による回転縄文・複節斜縄文などが施文されている。I群2類に分類できる。

II群に分類できる562は、刺突文を伴った低く狭い隆帯が頸部にめぐり、幅1.5cm±の狭い口縁部および体部には結束第1種羽状縄文が施文されている。560・561は捻紐圧痕と低い隆帯状の区画帯が頸部にあり、561は隆帯状の部分に刺突文を伴う。561の体部地文は縦位の結束第1種羽状縄文である。560はII群、561はII群あるいはIII群の土器である。557は幾何学的な文様が捻紐圧痕によって構成されたIII群1類、555・556はIII群2類の土器である。

体部破片563は網目状捻糸文、549は結束第1種羽状縄文が施文され、563はI群2類、549はII群—IV群に含まれる。

以上の前期に属する土器のほかには、中期末葉～後期の土器がある。565は複合口縁状になり、その下の平行沈線間が磨消されている。567は、横位の単節斜縄文が施文された複合口縁状の下位に無文が作られる。2点は後期前葉の土器で、立石遺跡第III群土器の仲間である。磨消縄文をもつ体部破片564は中期末葉～後期初頭、566は狭い平行沈線間が磨消された後期の土器である。

剥片石器 (580—598) 580は無茎凸基の石鏃、581・582は縦形石匙である。583・584は削器、585は削器状石器である。584は基部が両面から調整されている。586は挿器、587・598は挿器状石器である。587は、基部を折断したあと、裏面からの2次加工を折り面に施したものであろう。挿器状の刃部は不規則な2次加工によって作られる。左側縁から先端部半ばにかけては両面加工されている。598は、横長剥片の先端部に不規則な刃部が作られるほか、両側縁の1～2個の挿入部が刃部になる複合石器である。597は石錐で、表面は全面加工、裏面は周辺加工である。

590・591は1面、588は2面の折り面をもつ折断石器で、いずれも刃部には微細剝離痕がみられる。589は折り面交差型、592は折り面—古剝離面交差型の影器である。589は刃部に表面から1条、592は片面に2条の小さく細長い槌状の剝離痕が認められる。593は非折り面型尖頭形の影器で、表面の稜には裏面からの小さく細長い槌状の剝離痕が1条、刃部から続く右側縁には微細剝離痕が連続する。594は左側縁に1個、先端部に2個の刃部が細かな2次加工によって作られた挿入石器である。595・596は2個1対の刃部をもつピエス・エスキューであるが、刃部の剝離痕はいずれも奥行きが浅い。

石斧 (568) 左右非対称形の粗雑な作りの磨製石斧である。折損後、刃部は両面から再生されて鋭利であるが、小剝離痕がわずかにある。基端は傾斜し、薄い。

礫石器 (570—579) 半円状扁平打製石器は5点である。572は両端に挟入部をもつⅠ—A₂型である。両面および背部は自然面である。挟入部は両面、左側縁にある刃部は片面に加工され、刃部は磨耗している。570はⅠ—B型、576はⅠ—A₂型であり、挟入部は一端にある。576は右側縁が背部になる。573はⅡ—A₂型であるが、背部は右側縁下部から下端にかけてあり、短い。571はⅡ—B型であるが、2次加工の奥行きは浅い。いずれも左側縁が磨耗している。

577・578は磨石である。578は円礫を粗割りし、凸曲面を使用面にする。575・579は凹石である。575は小さな潰痕が2面に散在し、579は深く細長いくぼみが両面の中央部に連続している。574は粘板岩が素材で、2次加工によって周縁部は鋭利な刃部状になる。両端はわずかに潰れ、下端寄りの両面には小さな潰痕が集中する。半円状扁平打製石器の仲間なのかもしれないが、敲石や凹石とすることもできるため、ここでは除外しておいた。

遺構の時期 炉上から出土した555—557・560・561・563は縄文時代前期の土器の分類群のⅠ群2類やⅡ群・Ⅲ群に含まれる破片である。それらの遺物や炉の形態・占地を参考にすれば、縄文時代前期の時期内に含まれるものであろう。

FIII—5 住居址 (第34図—第37図599—639、写真図版118・143)

土器 (599—607) すべて縄文時代前期の土器片である。口縁部破片599・600・604・605・607は単節斜縄文、602は複節斜縄文を地文にする。601は小型の土器の破片であるが、この部分では原体は分からない。体部破片606は0段多条の原体とLRの2種類が併用されている。599・600・603・605—607は少量の繊維を胎土に含む。601を除いた口縁部破片はⅠ群2類に分類できる。

剥片石器 (608—629) 608—611は無基の石鏃である。617は主に表面への2次加工によって作られた尖頭石器である。628は、自然の剝落痕が両面に著しい極器で、規則的な刃部をもつ。折断石器は6点である。折り面の数は、613・616・618が1面、612・619・624が2面である。624は基部と1側縁を折断し、刃部である基部の折り面に不規則な剝離痕がある。他はいずれも微細剝離痕が刃部にみられる。614・615は折り面型の彫器である。614は折り面と蝶番剝離を示す先端部の交差部が刃部である。刃部には裏面からの小さな剝離痕、折り面が表裏面と交わる稜線上には微細剝離痕がある。615は折り面—古剝離面交差型で、刃部には不規則な微細剝離痕が生じている。620は2個1対の刃部をもつピエス・エスキューで、奥行きが深く互いに接する階段状剝離面が表面にある。626もピエス・エスキューであるが、2個の刃部には小剝離痕がみられる。627は、左側縁には挟入する刃部、先端部には尖頭形の刃部が細かな2次加工によって作られる。621は周縁に2次加工をした石錐と挟入石器との複合である。622は表面からの急傾斜の2次加工が狭い先端部に施されている。625は楕円形気味の小型の石器で、両面が2次加工面に覆われている。623は2次加工痕をもつ剥片である。629は基部の一部を折損した寛状石器

である。表面には、規則的で奥行きのある急傾斜の2次加工が施されている。

礫石器 (630—639) 半円状扁平打製石器は6点である。632—634・636はII—A₂型、630・638はII—B型に分類できる。II—A₂型でも、633は背部が短かく、逆に632は上端から右側縁を背部にしている。刃部の磨耗痕は、633が右側縁のほぼ全部、632が左側縁から下端、636は左側縁と上端の一部にみられる。634の刃部は磨耗痕がみられない。II—B型の630は左側縁が磨耗、638は左側縁から下端の部分を除いて磨耗している。

631は磨石で、破損面以外は使用面である。635は幅が広く浅い凹面が形成された砥石、637・639は凹石である。637では径の大きな浅いくぼみが複数あり、639では浅く不定形な濃痕が連続している。

遺構の時期 炉中から出土した599・600・604・605の土器片や大型住居系列に属する住居形態からみて、縄文時代前期前半期、土器分類群でいえば前期I群の時期に位置づけられる。

FIII—6 住居址

遺構の時期 出土遺物はない。重複関係からみて、縄文時代前期前半期、土器分類群でいえば前期I群の時期に位置づけられる。

FIV区

FIV—1 住居址 (第37図・第38図640—660、写真図版88・118)

土器 (640—656) ほとんどが縄文時代前期の土器の破片である。641—643は口唇縁にも施文されている。641は体部と同じ単節斜縄文が回転施文される。642も縄文原体の回転施文であろう。643は指頭状押圧痕を伴う。643が胎土に少量の繊維を含むが他は含まない。I群2類に分類できる。645は口縁部の幅が狭く、外反する。体部とともに一部に単節斜縄文が認められるが、なでられて無文になる部分が多い。頭部にめぐる隆帯は幅が広くて高く、上には横位の単節斜縄文が施文される。胎土には多くの繊維を含む。II群に分類できる。

口縁部破片640は単節斜縄文、644は複節斜縄文を地文にする。644は繊維をわずかに含む。646は斜位の太い沈線や押し引き様の沈線が口縁部に引かれ、胎土には繊維を含む。649はこの部分では原体が不明である。652は口縁部の一部を失っているが、綾格文帯をもつ。654も頸部から体部にかけての破片である。0段多条の原体による結束されない羽状縄文が地文である。頸部には隆帯を伴うらしいが、詳しくは分らない。体部破片647・648は単節斜縄文、650は網目状燃糸文、651は条の間隔がやや広い燃糸文を地文にする。656は無文である。651を除いては胎土に少量の繊維を含む。653は体部下端から底部にかけての破片である。単節斜縄文を地文にし、胎土には繊維をわずかに含む。以上の破片のなかで、652はI群1類、640・650はI群2類に含まれる。体部破片655は無節斜縄文を縦に回転し、縦位の綾格文が2段にわたってみられる。施

文方法や胎土などからみて、中期前葉に位置づけられる。

剥片石器 (658-660) 658は、小さく奥行き浅い抉入部3個が先端部に不連続的にある鋸歯縁状石器である。660は石核、659は660と同一母岩から得られた剥片である。

礫石器 (657) II-A₂型に属する半円状扁平打製石器で、やや小型である。背部は打ち欠かれた平坦面である。刃部は両面加工によって作られるが、左側縁下半から下端の半ばにかけての剝離面は両面が研磨され、平滑な面になる。その部分では刃部も磨耗している。前述の研磨面が意図されたものかあるいは使用によってできたものかについては明らかでない。

遺構の時期 床面からの出土遺物はないが、埋土はほぼ下部付近が残っていただけであり、掲載した土器は本住居址と時間的に近い関係にあることが考えられる。その点からは、縄文時代前期前半期、土器分類群でいえば前期I群の時期に位置づけられる可能性がある。

IV-2 住居址 (第38図-第45図661-798、写真図版8-10・88・118・119・143・144・155・156)

土器 (661-721) 実測が可能な多くの土器群が出土した。それらはすべて縄文時代前期に位置づけられるものである。I群I類に分類できるのは673である。器高が13cmと小型の円筒形の土器で、底部は平底で、外縁がわずかに張り出す。口縁部は幅4.5cm±の綾絡文帯になり、体部は磨耗が著しいが、単節斜縄文を地文にする。胎土には繊維をやや多く含む。I群2類に分類できるのは661ほかである。661は器高30.5cm±を計る円筒形の土器である。口縁部は2単位の低い波状になると推定される。体部は横位の綾絡文がほぼ全面に密に施文され、その間には単節斜縄文を伴う。底部は平底で、外面の周辺部の部分にはスグレ状圧痕を伴う。胎土には小礫が多く、繊維は含まれていない。670は底部を含む下半が残存している。底部は平底で、その作りはI型(「要約」の項参照)である。体部には綾絡文が横方向へ密に施文される。676は網目状燃糸文が施文された器高29.8cmの深鉢形土器である。口唇部は両面から交互に押圧されているため、上面観が小波状を呈する。底部はやや揚げ底様で、外縁がわずかに張り出している。670と676は小礫を多く含む胎土や焼成が良く似ている。ただし、670は少量の繊維も含んでいる。662・666は単節斜縄文を地文にする。662は28cmの器高に比べると口径と底径が大きく、体部の外傾度は小さい。666は形がややいびつで、器高は36cmと高い。2点は底部がわずかに揚げ底様になり、666では外面の周辺部から中央部に向いやや長い沈線状の押圧痕が平行して認められる。いずれも胎土に繊維を含み、662は底部にそれが著しい。668は複節斜縄文を地文にする。円筒形であるが、口縁部がやや外反気味になる。器高は23.3cmである。底部の作りはI型で、外縁がやや張り出す。外面には体部と同じ原体が回転施文されるが、ほぼ中央部に限定されて、周辺部まではおよばない。胎土には繊維を含む。

以上は口縁部から底部までが残存していたものである。口縁部を含む上半が残っているのは

672・674・675・677で、単節斜縄文を地文にする。672は、実測図が実際以上の外傾度をもって描かれているが、体部は外傾し、口縁部はやや外反する。675は原体が部分的に認められるだけで、多くの部分は器面がなでられている。677はやや太い原体が施文されるが、同一原体は口唇端にも回転施文されている。672・674は胎土に少量の繊維を含み、675・677は含まない。以上はI群2類に分類できる。底部を含む下半部が残存するものうち、663—665・678は単節斜縄文を地文にするが、669・671は磨耗などのために地文が不明である。底部の作りがI型であるのは663・669である。底部の形態は、664・678がやや揚げ底様になり、663・664・669は外縁が張り出す。664・678は外面の周辺部に沈線状の圧痕を伴うが、666のように顕著なものではない。664を除いては胎土に繊維を含むが、含有量は少ない。これらはI群に分類でき、そのなかでも663・664・669・678は2類に入る。667は高台部の破片で、残存部からは小型の土器であることが分かる。無文で、胎土には繊維を多く含む。ともに出土している土器からみて、I群に位置づけられるものであろう。

これまで記載してきた土器について要約すると、661・670が体部全体に横位の綾絡文をもつ点に共通性がある。底部の作りがI型であるのは663・668—670の4点。底部の外面への施文は、体部と同じ原体が施文されるのが668、刺突が加えられるのが661である。意図的な施文かどうかは後述するとして、底部外面に沈線状の圧痕を伴うのが664・666・678である。

拓本土器は、719と720を除いてはすべて前期のものである。I群1類に入るものうち、口縁部に綾絡文帯が形成されているのは692・711である。705は、口唇部には縄文が回転施文され、その下位には縄文原体の側面圧痕が横3列までは確認できる。I群2類に分類できるものは多い。679—681・698・703は単節斜縄文を地文にする口縁部破片で、同一の原体は口唇端にも回転施文されている。口唇部が両面から押圧され、上面観が小波状を呈するのは682・701で、701は無文である。口縁部破片の多くは単節斜縄文を地文にする。他には688・689などは複節斜縄文、702・708・718・721は縦位・斜位の撚糸文で、721は条の間隔が10mm土と広い。686は附加条、717は網目状撚糸文である。691は661と同様の文様構成になる。694・695・702・708・715・718は口縁部の形態が小波状を呈している。

713・714もI群の土器である。713は体部下端から底部の一部が残る。底部はやや揚げ底様で、外縁が若干張り出している。体部には横方向の綾絡文1条のほかに、条の太さがちがう異条斜縄文が施文される。同じ原体は底部の内外面にも施文されている。底部外面には、このほか、沈線状圧痕1条が周辺部に認められる。胎土には少量の繊維を含む。体部下端まで綾絡文が施文されている点では661の仲間なのかもしれない。714は、口唇端と頭部の隆帯上に指頭状押圧痕が連続する。幅の狭い口縁部は無文で、隆帯の下には横位の綾絡文1条が確認できるが、その下位を欠くために詳しいことは分からない。裏面には横位の単節斜縄文が施文されている。

繊維の含有量が多い。2類に含まれる。

体部破片は、687が附加条であるほか、707が網目状櫛糸文、712が櫛糸文である。相伴土器や地文からみて、これらも1群2類に含まれる。706は無文の鉢形土器の口縁部破片で、繊維を含む。前期以外の時期の破片は、719が大木10式であるほか、720が回転糸切り痕をもつ土器の底部である。

剥片石器 (736-798) 736-740・745・748はいずれも無茎の石鏃である。736は基部の両面にタール状の付着物が残る。741-744・749は縦形石鏃、747は横形石鏃である。744・749は折損している。746・752・753・758・760の5点は削器で、752・753・760は基部や先端部を折損している。753は右側縁の挟入部も刃部になる複合石器である。751・755・756・759は細かく奥行きが浅い2次加工が連続する削器状石器である。756は両側縁に挟入部があり、挟入石器に分類できるかもしれない。757・764は擗器である。757は基部を折損し、狭い先端部には急傾斜、それに続く縁辺には細かな2次加工が施されている。754・762は、急傾斜であるが奥行きが浅い刃部を先端の一部にもつ擗器状石器である。

折断石器は8点である。折り面の数は、750・767・776が1面、775・778-780が2面、761が4面である。刃部は、761が2次加工され、776が相対する2辺に小剥離痕がある以外は微細剥離痕から識別される。778は折り面の交差部にも微細剥離痕が生じており、彫器的な機能が考えられる。彫器は7点である。折り面型2点と非折り面型3点のほかに、高橋(1982)が、非折り面型に含めながらも、折り面尖頭形として分類できる可能性があるとして検討の余地を残した769ほかがある。769は基部を折断し、先端部を折り面に挟まれた部分が刃部になる。刃部には小さく細長い穂状の剥離痕が生じているほか、磨耗痕がみられる。773は折り面と1側縁が交差する角が刃部になり、769と同様の分類ができるであろう。折り面型の768・786は折り面-古剥離面交差型で、786は削器状石器からの転用である。非折り面型尖頭形に分類されるのは763・765・766である。763は刃部が磨耗し、鈍くなっている。770は折り面-古剥離面交差型、771は折り面-自然面交差型、774は折り面交差型の彫器状石器である。774は折り面以外の部分に2次加工が施されており、折断石器に含めた方がよいかもかもしれない。

782・784・785の3点は石錐である。782はつまみ部に対して錐部が非常に短い。784は先端部を斜めに折断して三角形の刃部を作り、折り面と裏面が交わる稜線にも2次加工している。781・783・788・794はピエス・エスキューで、大型の783が4個2対の刃部をもつ以外は2個1対の刃部である。781は左側縁が刃部になる削器からの転用である。788の剥離面の奥行きは深く、互いの刃部に達している。787・792は1個、793は3個の刃部をもつ挟入石器である。787は削器との複合石器である。797は左側縁に不規則で小さな挟入部が連続し、鋸歯状の刃部が作られている。789・790は尖頭石器である。789は小型で、尖頭部先端が丸味をおびている。790

は粗い2次加工が両面に施されている。側面観はジグザグである。777や791は折断石器かもしれないが、折り面がはっきりしない。796は不規則な2次加工による刃部を先端部にもつ。772・795・798は使用痕のある剥片で、798の表面にはタール状の付着物が広く認められる。

礫石器 (722・723・725—731・734・735) 半円状扁平打製石器は7点である。分類すると、723・725・729がII—A₂型、727がII—A₃型、726・728・731がII—B型である。727は両端が背部になる。左側縁の刃部は、723と729が鋭利である以外は磨耗しているが、磨耗の度合いにはバラツキがある。730・734・735は磨石である。730は扁平な垂円礫の全体が使用面になる。734は、表面と右側面に擦痕がみられるほか、1箇所ずつのくぼみを両面に伴う複合石器でもある。735は4面が使用面で、下端には敲打痕を伴った複合石器である。

石製品 (724・732・733) 724は断面が不整な六角形を示す石棒で、完形品である。上端は研磨された傾斜面、上端寄りの一部は研磨されて凸曲面になる。732と733は円盤状石製品である。732は一部、733は大部分を失っている。全体がていねいに研磨され、ほぼ円形に作られていたものであろう。

遺構の時期 多量に出土した土器群からみて、縄文時代前期前半期、土器分類群でいえば前期I群の時期に位置づけられるものである。

FN—3 住居址 (第46図—第54図799—928、写真図版10・11・89・119・144・145・156)

土器 (799—857) 実測できた土器は縄文時代前期に位置づけられる。I群1類に分類できるのは799・806である。799は円筒形の器形をもち、器高が26.7cmである。口縁部はわずかにゆがみ、小さく波打つ。底部は平底で、外縁がわずかに張り出している。口縁部は、口唇部から狭い幅で地文帯、その下位が無節の綾絡文帯で、幅は5cm±である。体部は横位の単節斜縄文を地文にする。同じ原体は底部外面の中央部付近にも施文されている。胎土にはやや多い量の繊維を含む。806は、最大径をもつ体部上半の部分から上がやや内湾し、くびれた頭部からは外傾して口縁部を作る。底部はやや揚げ底様になる。口縁部には捻紐瓦痕が横3列にめぐり、磨耗の著しい体部には部分的に単節斜縄文が残る。胎土には多くの繊維を含む。

I群2類に分類できるのは3点である。805は円筒形で、器高は30cm±である。数単位の低い波状口縁になる。底部はやや揚げ底様になり、外縁が張り出している。底部の作りはI型である。体部は無節斜縄文を地文にし、直径約13cmの底部外面にはスダレ状瓦痕が認められる。圧痕は周辺部を主とする部分に残る。タテ糸の間隔は約7mm、ヨコ糸のそれは約5mmである。胎土には繊維を多く含む。804は下半を失っている。直立している体部は、上半からやや開き気味になる。口唇部が幅の狭い無文帯になるほかは、横位の単節斜縄文が施文される。胎土には繊維をわずかに含む。口縁部には補修孔1個が認められる。801は網目状燃糸文を地文にした体部下端から底部の一部にかけての部分で、胎土には繊維を含まない。

以上が前期Ⅰ群の土器である。802は小型の土器のほぼ底部の部分である。底部は完全な揚げ底で、外縁が張り出す。残存部にかざれば無文で、胎土には繊維を含む。800は底部を含む下半が残る小型の土器である。底部は平底で、外縁がやや張り出す。体部地文は縦位の単節斜縄文が施文され、胎土には繊維を含まない。802の器形は6358に類例があるだけである。共伴する土器を考慮に入れば、800とともにⅠ群の仲間と推定される。

拓本土器は前期Ⅰ群のものが卓越する。Ⅰ群Ⅰ類のなかで、口縁部に綾絡文帯をもつのが811・812・832・833・843である。832は体部原体は燃り戻しのおこなわれたものとみられるが、811の体部原体は不明である。833を除いては胎土に繊維を含む。829・835・836は口縁部に燃紐が横2列あるいは3列に押圧されている。829は口唇端に指頭状押圧痕を伴い、836は口縁部が外反する。829が胎土に繊維を多く含むのに対し、836はごく少量で、835は含まない。Ⅰ群Ⅱ類に分類できるのは814ほかである。口唇端に施文される土器のうち、830は縄文の回転施文、807は施文具不明となっている。815は内外面および口唇端に単節斜縄文が施文されるが、内面への施文は口唇部から5cmの幅内に限定されている。828は無節斜縄文を施文したうえに隆帯を貼り付けて区画帯としている。口唇端に爪形文、隆帯上に指頭状押圧痕を伴うほか、縦位の綾絡文1条がみられる。847は外反する口縁部が無文帯になり、その下位は網目状燃糸文を地文にする。840は口縁部、853は口唇部に1条の綾絡文を伴い、853の口唇部は上面観が小波状を呈する。848は底部の外縁が張り出し、外面には沈線状の圧痕ないし調整痕を伴うが、詳しいことは分からない。以上のうちで、繊維を含むのは807・814・815・840である。

いままで記載してきた以外に、口縁部破片は808・809などをはじめとして18点であるが、大部分は単節斜縄文を地文としている。837は複節斜縄文である。磨耗していて原体が不明な820・838などもある。823・824・838が胎土に繊維を含まないが、他は量の多少はあるがすべて含んでいる。以上もⅠ群Ⅱ類に含まれる。体部破片839・842は横位の綾絡文が1条あるいは2条認められる。841は網目状燃糸文を地文にする。845は頸部にめぐる幅広の低い隆帯の上には横2列の円形竹管文が施文されている。体部地文は縦位の燃糸文である。810・821は原体が分からない。胎土に繊維を含むのは810・821である。841はⅠ群Ⅱ類に分類できる。ほかの大部分も、Ⅰ群のなかに含まれるものであろう。また、口縁部破片834は、燃紐が幅約5.5cm土にわたって不規則な横線状に施文されている。胎土には繊維を含む。850は口唇部が肥厚して外反し、低く狭い隆帯に区画された口縁部には燃りの方向を同じくする2本1組の燃紐が山形状に押圧されている。胎土には繊維を含まない。内面はいいいにみがかれている。Ⅲ群に分類したなかには類例がなく、具体的な位置づけは不明である。先の834も同様である。底部破片849は胎土に繊維を含む。底部外縁が張り出す形態などからみて、Ⅰ群に含まれるであろう。

以上が前期Ⅰ群を中心とした破片である。他の時期に属するものには、後期前葉の852、晩期

大洞C₂式の855がある。小破片856・857も晩期に属する。851・854は粗製深鉢形土器の破片で、中期以降のものである。スダレ状圧痕が底部外面に施文された846は時期不明である。

土製品 (803) 全体の約半を失っているが、直径3.2cm±の土製の小玉である。胎土には繊維をわずかに含んでいる。

剥片石器 (858—894) 858・859は無茎平基の石鏃である。860は縦形石匙である。861—869・874の10点は削器である。刃部形態は、861が直刃、862が凹刃、863・867が凸刃、866・874が複刃である。864—866は折損している。869は折損した尖頭削器である。870は両側縁、871は左側縁が刃部になる削器状石器である。873は基端を2次加工した搔器状石器である。刃部に続く両側縁には、奥行きが浅い抉入部が作られる。872・875・885・886・889はピエス・エスキューである。889が4個2対の刃部をもつ以外は2個1対の刃部である。872は縦長剥片の両側縁を刃部にする。886は剝離痕の奥行きが深く、一部は反対縁の刃部に達している。

877と880は折断石器である。877aは2面が折面で、その1面は877bに接合する(877c)。いずれも、刃部には微細剝離痕が認められる。880は先端部と1側縁が折断されている。879は彫器である。打面を利用して彫刻面を作り出す旧石器的な技法による刃部をもつ。881は右側縁から先端部にかけて3面の折面があり、折面交差部のひとつに小剝離痕が生じている彫器状石器、884は非折面型尖頭形の彫器で、刃部には1条の小さく細長い楯状の剝離痕がみられる。887は石錐である。両面加工によるが、基部を折損している。888・890・891は抉入石器である。888は表面からの加撃によって抉入部が作られている。893は打面を含めた左側縁が折断され、右側縁には自然の抉入部を含めた3個の刃部が連続し、微細剝離痕を伴っている。抉入石器になるものであろう。876・878・883・892・894は使用痕のある剥片である。

石斧 (895・896) 895は両面加工された小型の打製石斧、896は刃部側を折損した磨製石斧で、左側面には擦切り痕がある。

礫石器 (899—931) 16点という多くの半円扁平打製石器が出土した。分類の内訳は、II—A₂型が900・903・904・906・907・911・915、II—A₃型が905・909・917・919、II—B型が899・901・902・912・913である。II—A₂型でも、907・915は背部が非常に短い。II—A₃型のうち、905は両端に背部が作られ、他は一端にある。II—B型の901は表面を粗削りして形状を整える際に鋭利な刃部を作り出し、一部ではさらに2次加工を施している。同様に902は、明確ではないが、周縁が研磨されたものかもしれない。刃部は、II—A₃型の905や917・919、II—B型の899などは鋭利であり、他は左側縁が主に磨耗している。900では上端が磨耗している。磨耗の度合いにはバラツキがある。なお、911は裏面中央部に浅い凹みを伴う複合石器である。

磨石は5点である。908は両面と左側面に擦痕を伴う。いちおう磨石と考えておくと、形状は半円状扁平打製石器に類似し、機能的にも近いことが考えられる。920は断面が三角形の細長い

亜角礫が素材で、3面と稜線部に形成された幅の狭い1面が使用面になる。925・927は球形の礫で、小型である。926は、使用面は平担で擦痕を伴い、他は凸曲面を示す。一部には幅が狭くて浅い3条の溝状の擦痕がみられるが、短い。

凹石は11点と多い。素材の形状は、幅が広く楕円形気味になる921・924・929以外は、細長い。使用面の数は、931が1面、910・914・916・921-924・929の8点が2面、918・930が3面である。くぼみの状態や形状はバラツキがあるが、単独あるいは複数がある以外に、910や914では長軸方向に浅い潰痕が連続する。他器種との複合の状況は、914・918・922が磨石、930が下端面に著しい潰痕を伴った敲石である。そのほかに923や929が磨石と複合している可能性がある。916は全体に、924は多孔質な素材の自然孔に赤色顔料が付着している。928は扁平な巨礫である。使用痕は認められないが、床面からの出土という点からは台石としての機能が考えられる。

石製品 (897・898) 2点は石剣である。897は一端を含むものの、破損が著しい。898は1/2弱を失っている。全体がていねいに研磨され、一端はやや狭くて薄くなっている。

遺構の時期 実測土器799や806は埋土下部、拓本土器808・810・811をはじめとする数点が床面や床面直上から出土している。出土土器を参考にすれば、この住居址は縄文時代前期前半期、土器分類群でいえば前期Ⅰ群の時期に位置づけられる。

FIG-4 住居址 (第54図-第57図932-966, 写真図版11・119・145・146・156)

土器 (932-939) すべて縄文時代前期に属する。932は円筒形の器形をしたやや小型の土器で、器高は14cmである。粗雑な作りで、無文である。口縁部破片933や体部破片935-937は単節斜縄文、939は異条縄文を地文にする。934・936・938の底部は、外縁が張り出し、936の外面にはスズレ状圧痕の一種がみられる。以上の土器は胎土に繊維を含み、932・934・936がやや多くの量を含む。933・939はⅠ群2類に分類でき、他もⅠ群に含まれる。

剥片石器(940-954) 940は尖頭石器である。表面は上半、裏面はほぼ全体に周辺加工され、尖頭部先端は傾斜している。941-943・947は削器である。941・942は折損している。943は小型の削器で、両側縁が刃部であるほか、先端部には急傾斜の2次加工が施されている。947は大型の複刃削器である。945は基部を折損した複刃の削器状石器である。944は2次加工された先端部を除いた3面の折り面をもち、946は先端部が折断されている。954は基部と1側縁が折断され、その面を除いた周縁には微細剝離痕がみられる。951は基部と右側縁が折断され、側縁の折り面と裏面が交わる稜線に不規則な小剝離が生じている。949は彫器である。折り面と古剝離面にはさまれた狭い刃部に微細剝離痕が生じている。948・950・952は使用痕のある剥片、953は剥片である。

礫石器 (957-966) 5点は半円状扁平打製石器である。964はⅡ-A₂型、957・958・966はⅡ-B型で、962は両端に抉入部があるⅠ-A₃型に分類できる。2次加工によって刃部を作り出

したあと、964は表面、966は両面が研磨されている。958は右側縁の両面を研磨して刃部を作る。966の刃部が鋭利である以外は左側縁が磨耗し、957は反対縁の一部も磨耗している。959・960は凹石である。959は両面の長軸方向にくぼみが連続する。下方は片刃様の刃部になり、先端部には細かな剥落痕が生じている。960は表面に1個、裏面に2個のくぼみがある。965は小型の石皿で、完形品である。浅いが大きな凹面が表面に形成されている。963は扁平な細長い亜角礫を素材にする磨石、961はやや扁平な凹礫であることから石弾の可能性はあるが、いずれの場合も確実ではない。

石製品 (955・956) 2点は石剣である。955は裏面下方の一部が破損している。下端は敲打によって加工されているが、研磨されていない。全体的にはいいに研磨されているが、素材の凹面がそのまま残る部分がある。956はやや小型の完形品である。他端に比べて一端の幅が狭い形になっている。

遺構の時期 934は床面からの出土である。出土土器や大型住居系列に属する住居形態、あるいは重複するFIV-5住居址との新旧関係からは、縄文時代前期前半期、土器分類群でいえば前期I群の時期に位置づけられる。

FIV-5住居址 (第57図・第58図967-977, 写真図版89・146)

土器 (967-969) 967・968は、横位の綾絡文が間隔をおいて口縁部にみられる。胎土には繊維を多く含む。969は、横位の単節斜縄文が施された口縁部に燃紐圧痕1条がめぐる。口唇端には1個の刺突文を伴うが、それは縄文原体の末端によるものかもしれない。胎土には少量の繊維を含む。967・968は縄文時代前期I群2類に分類できる。969はI群1類に含まれる。

剥片石器 (970-973) 970は右側縁に刃部をもつ削器状石器、971は打面から右側縁が折断された折断石器、972・973は使用痕のある剥片である。

礫石器 (974-977) 974はII-B型の半円状扁平打製石器である。左側縁に磨耗痕が著しいが、他の部分も全体に鈍くなっている。975は大きく深いくぼみが両面に2個ずつあり、976は小円形のくぼみ4個が片面の長軸方向に並んでいる。977は複輝石安山岩を素材にした有溝砥石で、両面に2〜3条の深い溝がみられる。

遺構の時期 土器は床面から出土したものの一部である。それらや大型住居系列に属する住居形態からみて、縄文時代前期前半期、土器分類群でいえばI群の時期に位置づけられる。

FIV-X住居址・FV-Y住居址

遺構の時期 出土遺物はない。重複するFIV-4住居址やFIV-5住居址との新旧関係、あるいは重複形態からみて、縄文時代前期前半期に位置づけられるであろう。(三浦 謙一)

FV区

FV-1 住居址 (第58図978-988、写真図版11・89・119・146)

土器 (978-984) 978は炉埋設土器である。単節斜縄文を充填した沈線区画帯が横S字文を描く深鉢形土器で、口縁部内面には鱗状隆帯が伴う。文様は4回繰り返される。979は床面出土の深鉢形土器である。沈線区画の無文帯が連結逆S字文を描くもので、文様連結部には刺突充填の円形区画帯、文様末端部には鱗状隆帯を伴う。地文は単節縄文を縦回転で施文する。981・982は縦回転の単節斜縄文を地文とする粗製深鉢形土器で、980は絞絡文を伴う単節斜縄文が施された体部片である。983・984 (同一個体) は沈線で区画した無文帯が横に連結した逆S字文を展開するもので、文様接触部には連続刺突文を伴う。文様区画外には縦回転の複節斜縄文が充填される。以上、文様の分かるものはすべて大木10式に相当する。980-982も同時期に含まれよう。

銅片石器 (988) 縦型の石匙である。両側縁から先端部に連続する2次加工が施され、全縁が刃部となる。先端部は両面加工で刃部が作られる。

石斧 (987) 閃緑岩を素材とする定角式の磨製石斧で、刃部は両凸の円刃である。

礫石器 (985・986) 双方とも球形の自然礫である。用途・機能を類推する手がかりを欠くが一応石弾として類別した。

遺構の時期 炉埋設土器や床面出土土器からみて、大木10式期に位置づけられる。

(佐々木 勝)

GIII区

GIII-1 住居址

遺構の時期 出土遺物については不明である。住居址間の重複関係からは、縄文時代前期前半期、土器分類群でいえば前期I群の時期に位置づけられる。

GIII-2 住居址群 (第59図-第63図991-1073、写真図版11・12・89・119・120・146)

土器 (991-1025) 実測できた土器は縄文時代前期と後期に属する。前期の土器から記載してゆくことにする。991は器高32cmで、円筒形をしている。底部は外縁が張り出し、作りはI型である。地文は横位の単節斜縄文が主体で、一部には0段多条の原体も施文される。胎土には繊維をわずかに含む。992は11cm土、999は12cm土の器高を計るやや小型の土器である。992は作りが粗雑で、器面には小凹凸が著しい。一部に単節斜縄文がみられるが、大部分は磨耗している。胎土には少量の繊維を含む。999は器高に比べると口径と底径が大きく、体部は直立気味になり、口縁部は外反する。底部はやや揚げ底様になり、外縁がわずかに張り出す。無文で、含む繊維の量はやや多い。994は上半が残存するやや小型の土器である。磨耗が著しいが、太い

単節斜縄文を地文にし、口縁部下方に、横位の短い綾絡文が1条認められる。胎土には繊維を多く含む。993は体部下半から底部の一部が残る。底部は外縁が強く張り出す。体部地文は横位の単節斜縄文で、胎土には多くの繊維を含む。995はほぼ底部の部分である。横位の単節斜縄文を地文にする。底部はやや揚げ底縁になり、外面の周辺部には圧痕が著しい。スゲン状圧痕なのかもしれないが、はっきりしない。なお、底部の作りはI型である。以上のうち、991・992・994はI群2類に分類でき、底部の作りが991に共通する995も同類である。993・999もI群に含めることができ、ほかの出土土器を参考にすれば2類に相当するものであろう。

後期の土器は3点ある。997は口縁部が大きく開いた深鉢形土器である。小さな底部は揚げ底になる。口唇端には円形竹管文が頂部に施文された数個の小突起が付き、その間には刻目に入ったさらに低い突起が配される。口唇部には半載竹管文が連続する。頸部には1/5周毎に貼瘤があり、その間は横2列の半載竹管文が連絡する。他の部分は無文である。996は鉢形土器である。内湾気味に立ち上がった体部は口縁部で外傾する。直径の大きな底部は揚げ底になる。全体が無文である。998は体部だけが残っている。体部の外傾度は997同様にやや強い。斜行縄文の条が部分的に残るのは、他と同様にその上にみかきに近いケズリが加えられているためである。以上のうち、文様構成の特徴からみて、997は後葉十腰内V式に近いものであろう。996・998はそれと共伴関係にあると推定される。

拓本土器は前期～晩期の各時期のものがあ、前期の土器が卓越する。前期I群2類に分類できる口縁部破片は1000・1003・1005・1006である。1001は無節斜縄文、1003は複節斜縄文で、他は単節斜縄文が地文である。1003は同一原体が口唇端にも施文されている。すべて、胎土に繊維を含む。1017はII群に分類できる。頸部の区画帯は横2列の爪形文である。1011は横2列の爪形文が頸部区画帯になり、口縁部は撚紐圧痕が横線状に施文される。III群2類に含まれる。1019は頸部の区画帯が絡条体圧痕と隆帯で構成され、体部は多軸絡条体が地文である。III群に含まれる。1018はII群あるいはIII群、1020は木目状撚糸文の体部破片で、III群2類あるいはIV群に分類できる。1010・1012の口縁部は平行沈線とその間を充填する絡条体圧痕が文様を構成し、1010は撚紐圧痕の間に半載竹管文が施文された文様区画帯がある。2点は胎土に少量の繊維を含む。文様構成はIII群とIV群の中間的な様相を示す。1013は斜位の刻みを加えられた隆帯が頸部にめぐる。口縁部は幅が広く、肥厚した口唇部に施文された横2列の撚紐圧痕と下位の平行沈線間は半載竹管文で充填されている。胎土にはやや多くの繊維を含む。IV群の仲間として位置づけておく。このほかでは、無文の1007は指頭状押圧痕が口唇端に連続施文され、小波状口縁になる。1021・1022は口縁部破片であるが、地文は不明である。以上の3点は胎土に繊維を含まない。前期前半期、I群2類の仲間の可能性があるが、確実なことは分からない。

中期前葉の土器とみられるのは1008である。無節斜縄文に縦位の綾絡文を伴う体部破片であ

る。縹系文を地文にし、磨消縄文帯に刺突文を伴う1023は大本10式に相当し、1009・1014—1016・1024は後期前葉の土器である。1009・1015・1016は波状口縁で、1009・1015は複合口縁状になる。1016は、口唇部の文様がボタン状突起・小刺突文を伴った隆起線・平行沈線によって構成され、口縁部には垂下沈線や斜行沈線がみられる。1014は外反する口縁部が無文で、縹紐瓦痕1条がめぐる。1025は晩期大洞C₁式である。

剥片石器(1026—1056) 1026は基部を折損した石鏃、1027は無茎平基の石鏃である。1028・1029は縦形石匙で、1029はつまみ部の一部を折損している。1031は挾入部が浅い横形石匙で、表面の2次加工は奥行きが深い。1030は直刃、1037・1052は凹刃、1041は複刃の削器である。1036は奥行きが深い規則的な2次加工が左側縁に施され、反対縁には2次加工による小さな剝離痕が連続した複刃削器である。1037・1041・1052も刃部の反対縁に微細剝離痕が生じている。1032は基部を失っているが、側縁の一部に短かい削器刃部が作られている。1038—1040は削器状石器である。1040の裏面の両端は大きな剝離面があり、上端は階段状剝離を示す。ピエス・エスキューへの転用例である。1044は周辺加工された石鏃で、刃部の断面は菱形である。

折断石器は4点である。折り面の数は、1033・1056が1面、1035・1045は3面である。1045は折り面に挟まれた左側縁に階段状の小剝離痕が生じている。1056は石刃状の剥片の基部を折断し、両側縁が刃部になる。彫器は折り面型のもの5点が出土した。1034・1042・1043・1047の4点は折り面交差型、1046は折り面—古剝離面交差型である。いずれも刃部や折り面が表裏面と交差する後縁に微細—小剝離痕が生じている。1046は裏面が2次剝離面に覆われている。1048は折り面を交差させているが、刃部には使用痕はみられない。1049は4個2対、1050は2個1対の刃部をもつピエス・エスキューである。1049の下端の刃部は折り面と表面が交差する稜線に小剝離痕が生じているだけである。1050は奥行きが深い剝離面が主に表面にある。1051は、右側縁には小挾入部が連続した鋸歯縁状の刃部、反対縁には削器状の刃部が作られる。先端部の両面には奥行きが深い大きな剝離面が生じ、基部表面にみられる小剝離痕との対応関係からみて、ピエス・エスキューに転用したものであろう。1053は3個の刃部をもつ挾入石器、1055は一部を破損した尖頭石器である。1054は石槍の破損品であろう。軟質な流紋岩を素材にし、奥行きが深い2次加工を両面に施したあと、研磨している。

石斧(1057) 小型の磨製石斧の未製品である。片面だけが研磨され、しかもその面でも、縁には成形時の敲打痕を残している。刃部は凹刃になる。

礫石器(1058—1073) 半円状扁平打製石器は12点と多い。分類すると、折損して不明な1063を除いては、I型が4点、II型が7点である。I型はA₂型(1060)とB型(1061・1062・1066)に分類できる。挾入部は1060・1066が一端、1061・1062が両端にあるが、奥行きはいずれも浅い。刃部全体が鋭利な1061を除いては左側縁が磨耗し、1062では両端の挾入部にも磨耗

痕が著しい。II型は、1058・1059・1065・1067・1069がA₂型、1064・1068がB型である。1059は両面に凹凸が著しく、粗割りされて成形されている。両端が鋭利な刃部であるのに対し、左側縁は分厚い。右側縁の平坦面には擦痕が認められるが、左側縁の裏面にみられるような明確な刃部加工がおこなわれていないため、背部と考えた。A₂型に分類したが、あるいはB型に入るものかもしれない。1064は大型で、形状は方形に近いものになり、刃部は全体に鋭利である。1069は背部に挟まれた凸辺部の一部に短い鋭利な刃部が作られる。

1071-1073は凹石である。いずれも両面が使用面で、1072では1個ずつの浅いくぼみ、1071・1073では潰痕が複合して長軸方向に連続する。1071・1073は磨石との複合である。1070は断面が長方形の扁平な直角縁が素材で、ほぼ全体が使用面になる磨石である。

遺構の時期 床面から出土した991や大型住居系列に属する住居形態からみて、縄文時代前期前半期、土器分類群でいえば前期I群の時期に位置づけられる。

GIII-3 住居址

遺構の時期 出土遺物はない。住居址間の重複関係からは、縄文時代前期前半期、土器分類群でいえば前期I群の時期に位置づけられる。

GIII-4 住居址

遺構の時期 出土遺物については不明である。住居址間の重複関係からは、縄文時代前期前半期、土器分類群でいえば前期I群の時期に位置づけられる。

GIII-5 住居址・GIII-6 住居址 欠番

GIII-7 住居址群 (第64図-第71図1074-1199、写真図版12・13・120・146・147)

土器 (1074-1117) 実測して掲載した土器はすべて縄文時代前期に属する。口唇部に特徴をもつ一群から記載してゆく。1075は器高が13.2cmと小型である。体部の外傾度はやや強い。口唇端には小円形刺突文が連続的に施文される。地文は単節斜縄文で、胎土には繊維を含まない。1076も器高が13.5cmと小型である。底部はわずかに揚げ底縁になり、外縁がやや張り出す。作りはI型である。体部および口唇端には横位の単節斜縄文が施文される。胎土には少量の繊維を含む。1078は器高が33.5cm±を計る。外傾して立ち上がった体部は半ばが最大に膨らみ、その上位は緩やかな内傾に転じたあと、直立してゆく。口唇端には3個1対の小突起があるが、破損部分があるために、その数は不明である。突起以外の部分は、指頭状の押圧が連続して加えられ、小波状を呈している。体部には単節斜縄文が施文され、胎土には繊維を含まない。1091は下半を失っているが、かなり大型の深鉢形土器である。体部上部に最大径があり、その上位はやや内傾している。口唇部は、両面から交互に押圧が加えられるために、上面観が小波状になる。地文は縦位の無節斜縄文で、胎土には繊維を含まない。

次に、底部に特徴があるのは1081と1088である。1088は器高に比べると口径と底径が大きく、

ずんどう気味の円筒形になる。底部の作りはI型で、底部外面の周辺部には沈線状の圧痕3条が認められる。地文は横位の単節斜縄文で、胎土には繊維を含まない。1081は底部を含む下半が残存する。底部の作りはI型で、やや揚げ底様になり、外縁が張り出す。底部外面の周辺部には沈線状の圧痕数条が平行して認められる。体部地文は横位の単節斜縄文で、胎土には少量の繊維を含む。

口縁部から底部まで残っている1074・1077は器高が21cm±で、体部がやや外傾する円筒形になる。1074は横位の単節斜縄文が地文で、胎土には少量の繊維を含む。1077は底部外縁が張り出す特徴をもつ。地文は複節斜縄文で、繊維をやや多く含む。1079・1083は円筒形の器形をもち、1083では底部外縁が張り出している。単節斜縄文が施文されている。1083は器面がなでられているため、地文は上半に部分的にみられるにすぎない。いずれも少量の繊維を胎土に含む。器高が10cm以下の小型の一群1080・1084・1085がある。3点とも円筒形であるが、1080は体部の外傾度がやや強い。また、底部の形態は外縁が張り出す点で共通し、1084・1085はやや揚げ底様になる。1080は横位の単節斜縄文が施文されるが、他の2点は無文である。繊維は、1080・1085が含まず、1084が少量を含む。

以上のほかに、1082・1089・1086の土器がある。1082・1089は口縁部を含む上半が残存し、複節斜縄文が施文されている。2点は胎土に繊維を含み、1082ではその量が多い。1086は体部下半から底部が残っている。体部には横位の綾絡文がやや間隔をおいて施文され、下端には単節斜縄文がみられる。底部は外縁がやや張り出している。胎土には繊維を含まない。

いままで述べてきた土器のうちで、無文である1084・1085も、出土状況からは他の一群の土器と共伴するものとしてよいであろう。すべて前期I群2類の仲間である。これらといくぶん異なるのは1090である。破片のために詳しくは分からないが、口縁部は強く外反して無文で、口唇端には波状貼付文をもつが、一部を失っている。繊維は含まれていない。口唇端への小波状貼付文は2264などに共通するもので、それらの仲間なのかもしれない。

拓本に掲載した土器もすべて前期のものである。I群2類に分類できるものが多い。1108は内外面および口唇端に単節斜縄文が施文される。胎土には繊維を含まない。1112は単節斜縄文が地文で、口唇端にはやや間隔をおいて指頭状の押圧が加えられる。少量の繊維を含む。1110は外反する口縁部とその下位も含めた幅広い無文帯がある。地文は単節斜縄文で、胎土には繊維を含まない。外反する口縁部とその部分を無文帯にする施文方法は847との共通性が考えられる。地文だけをもつ口縁部破片の多くは単節斜縄文であるが、1096が網目状燃糸文、1095・1097・1100は複節斜縄文である。胎土に繊維を含むのは半数強で、含まれる場合でも、やや多くの量がみられる1095・1097・1111以外は少量である。1115・1117は同一個体の破片で、1090同様の小波状貼付文が口唇端につけられるが、大部分を失っている。

以上のほかには前期中葉の大木式土器がある。1114は頸部に沈線がめぐり、口縁部が無文になる。1116は無文の体部の上に平行沈線による文様をもつ。2点は宮城県宇賀崎貝塚（宮城県教育委員会、1980）のC群土器に相当するものであろう。同報告書ではC群土器を大木3式に含まれるものとしている。なお、そのほかとしては小型の無文土器の口縁部破片1093や単節斜縄文を地文にする体部破片1106がある。1106は少量の繊維を胎土に含み、I群2類に含めることができるが、1093は前期のどこに位置づけられるのか不明である。

剝片石器 (1118—1168) 1118—1122は無茎の石鏃である。基部形態は、1118・1119がわずかに凹基、1120—1122が平基である。1118は基部、1122は先端部の一部をそれぞれ欠く。石匙は7点が出土し、1129が楕形である以外はいずれも縦形である(1123—1127・1131)。1131はつまみ部と先端部を折損している。1128は複刃、1130は凸刃、1132は横形、1148は尖頭の削器である。1143は基部を折損した複刃削器であろう。1148は奥行きが深い不規則な剝離痕が裏面の両側縁に生じている。1134—1136は搔器である。1136は基部と右側縁を折断し、裏面から急傾斜の2次加工を施している。折り面交差部には剝離痕が顕著で、磨耗していることからみて、彫器との複合石器である。1133は不規則な2次加工が先端部に施された搔器状石器で、挟入部を含む両側縁にも小さな2次加工が連続する。

折断石器は9点が出土した。折り面の数は、1138・1145が1面、1137・1139・1140・1141・1144・1147・1149が2面である。1145と1147は刃部が2次加工されているが、他は微細剝離痕が生じている。1146・1157は石錐である。1146は先端部を折断して尖頭部を作り出したあと、2次加工を施して短かい錐の刃部を作る。1157はつまみ部をもつ。1151・1153は折り面型の彫器である。1151は折り面—古剝離面交差型、1153は折り面交差型で、刃部や周辺に微細剝離痕が生じている。1142・1152・1154・1155・1158の5点はピエス・エスキューである。1142は複刃削器の破損品を転用している。1152や1154・1155は剝離面の奥行きが深く、互いに接したり、対辺にまでおよんでいる。1150・1159・1165は尖頭石器である。1159は形態や大きさからみて、石鏃として分類できるかもしれない。1150は基部を折損している。1160・1161・1163・1164は挟入石器である。1160は第一次剝離で得られた自然の挟入部に微細剝離痕がみられる。1161は右側縁に2個、左側縁に1個の刃部がある。1156は基部は失っているが、表面からの小さな2次加工が2辺に連続する。1167・1168は2次加工が両面に著しい。刃部に生じている小剝離痕からみて、両刃石器のような機能をもつ石器なのであろう。1162・1166は使用痕のある剝片である。

石斧 (1169—1171・1195) 1169は剝片を素材にした打製石斧である。1170は凸刃・円刃、1171は凸刃・偏刃の両刃磨製石斧である。1170は刃こぼれ状の小剝離痕が刃縁に連続し、器面には不定方向の擦痕が多数生じている。1171は右側面の下半を製作時に破損し、その面に研磨

を加えている。刃縁には刃こぼれや擦痕はみられないが、器面には不定方向の擦痕が著しい。1195は基部を折損した磨製石斧で、ピエス・エスキューに転用されている。刃部は4個2対で、折損部と対辺の刃縁に形成された剝離痕が大きい。両側面には著しい敲打痕がみられ、折損部から形成された剝離面のために薄くなった右側面が両面に交わる稜縁には小剝離痕を生じている。

礫石器(1172—1199) 半円状扁平打製石器は15点が出土した。折損している1173を除くと、I型が3点、II型が11点である。I型の1182・1185・1186はいずれもB型である。1182は両端が浅い挟入部になり、1185・1186は一端に挟入部が作られる。II型は、A₁型(1172・1177)・A₂型(1178・1187)・A₃型(1175・1183)・B型(1174・1176・1179・1180・1184)に分類できる。A₁型の2点は断面が三角形気味で、稜縁部の両面に、奥行きが浅く小さな2次加工を施して刃部にする以外は未加工である。刃部は磨耗し、1177はやや幅広である。A₂型の2点のうち、1178は打ち欠いて背を作る。両端はわずかに挟入部気味になっている。A₃型の1175は一端、1183は両端が背部になる。1183の左側縁の側面観はジグザグである。B型はII型のなかでもっとも点数が多い。いずれも左側縁が磨耗し、1176・1179は反対縁も磨耗している。1173は折損面にも研磨痕が生じている。右側縁は自然面を残した背部で、左側縁は分厚くて磨耗が著しい。

磨石は4点である。1181・1190は扁平な亜円礫の主に両面を中心にした部分、1192・1193は扁平な亜角礫の狭い一面が使用面である。凹石は7点で、使用面の数は、1188・1196が1面、1189・1194・1197—1199が2面である。1188・1199では長軸方向に潰痕が連続する。1188は断面が三角形で、一端に寄った一部に磨石としての機能面をもつ。1191は敲石である。側面と裏面が交わる稜縁部から側面にかけての一部に著しい潰痕が生じている。

遺構の時期 床面から出土した1080や1087、床面直上から出土した1091をはじめとする土器群や大型住居系列に属する住居形態からみて、縄文時代前期前半期、土器分類群でいえば前期I群の時期に位置づけられる。

GIII—8 住居址(第72図1200—1210, 写真図版14・89)

土器(1200—1210) 大部分の土器が縄文時代前期に属する。1200は体部が直線的にやや外傾している。底部は平底で、外縁がやや張り出している。横位の単節斜縄文が密に施文され、胎土には少量の繊維を含む。1206はほぼ底部の残存である。体部地文は横位の単節斜縄文で、胎土には繊維を含む。1200は前期I群2類、1206も他の出土土器との共存関係からI群の仲間とみることができる。拓本土器1201ほかは前期I群2類に入る。1201—1203・1205は単節斜縄文を地文にする口縁部破片で、1205は指頭状の押圧が口唇端に加えられる。1203は胎土に繊維を含まないが、他は少量を含む。体部破片1210は条の間隔が広い燃糸文、1204は横位の綾絡文が広い間隔をもって横2列に施文されている。ともに少量の繊維を胎土に含む。1210はI群に

は含まれるが、2類とは特定できない。

前期II群に含まれるのは1207である。円形刺突文を伴った幅の広い隆帯が頸部にめぐり、外反する口縁部は幅が3.5cmである。口縁部と体部の一部に単節斜縄文が確認できる。胎土には多くの繊維を含む。1209は頸部に狭くて低い隆帯がめぐり、その上には爪状の丘を伴う。口縁部を失っているが、体部は単節斜縄文が地文で、胎土には繊維を含まない。作りや胎土の点からみて、円筒下層式の系列の土器ではなく、大木2式あるいは大木3式に含まれるものであろう。体部破片1208は縦位のLRが施文されている。中期以降に位置づけられるものであろう。

遺構の時期 埋土最下部から出土した1200を参考にすると、縄文時代前期前半期、土器分類群でいえば前期I群の時期に位置づけられる。

GV区

GV-1 住居址 (第72図・第73図1211-1238, 写真図版14・121)

土器 (1211-1218) 1211は小型の壺形土器の体部上半である。磨消縄文の入組文状の文様が4回繰り返される。崎山弁天貝塚第V群土器(草間ら, 1974)と同類で、縄文時代後期中葉のものである。前期I群1類の土器は1218である。口縁部には幅3cm±の綾絡文帯が形成され、その下位は複節斜縄文が施文される。胎土には多くの繊維を含む。1212は体部と口唇端に横位の単節斜縄文が施文され、内面の口唇部には抉るようなナデ痕がある。胎土には繊維を含まない。1214-1216は単節斜縄文が施文された口縁部破片で、胎土には繊維を含む。以上は前期I群2類に分類できる。体部破片1217も前期I群の土器であろうが、無文の口縁部破片1213の所属時期は不明である。

剥片石器 (1219-1231) 1219は無茎平茎の石鏃、1220は両側縁に両面から2次加工された石鏃である。1221・1224・1226の3点は削器である。1224は主に裏面に2次加工された横形削器である。1223・1227は削器状石器である。1225は非折り面型尖頭形の彫器で、刃部には小さく細長い1条の櫛状剥離痕が生じている。1222・1229はピエス・エスキューである。いずれも2個1対の刃部をもち、1229の剥離痕は奥行きが深く、互いに接している。1230は石槍の破損品である。裏面の両側縁には2次加工の剥離面を切る大きな剥離面が生じており、右側縁では階段状剥離を示す。1228・1231は、鋭利な縁に縦細剥離痕が連続する使用痕のある剥片である。

石斧 (1232・1233・1235) 3点とも定角磨製石斧である。1232はほぼ平刃・丸刃の両刃石斧で、刃縁には刃こぼれである微細な剥離痕が生じている。1233・1235は小型である。1233はやや凸刃・やや円刃、1235は平刃・直刃の両刃石斧で、使用痕はいずれにもみられない。

礫石器 (1234・1236-1238) 半円状扁平打製石器は2点である。1234はII-B型、1236は一

端を折損している。1234は表面は粗割りされ、両面の2次加工面は広い範囲を占める。2点とも左側縁が磨耗し、1236では下端半ばまでおよんでいる。1237は小型の垂円縁の平坦面を使用面にする磨石である。1238は石皿の破片で、縁は高く作り出される。裏面には赤色顔料が付着している。

遺構の時期 遺構編では、床面上にわずかに散在していた土器片から、縄文時代前期前半期に位置づけている。しかし、該当する土器が1212以下であるかどうか分からない。占地や炉の形態などからは前期～中期中葉の時間内には位置づけることができるが、確実な点は不明である。

GV-2 住居址 (第73図・第74図1239-1245, 写真図版14・121)

土器 (1239-1243) すべて縄文時代前期の土器である。1243は体部だけが残存し、最大径が31cmを計る大型の土器である。全面に横位の単節斜縄文が施文され、胎土には少量の繊維を含む。1239は単節斜縄文と異条斜縄文の2種類が施文されている。底部はほぼ平底で、外縁がやや張り出す。作りはI型である。底部外面は、磨耗のためにはっきりしないが、附加条とみられる原体が中央部付近に回転施文され、その周辺部には沈線状の圧痕2条が並んでみられる。繊維の含有量が多い。拓本土器1240・1241は単節斜縄文が地文で、1241の口唇端には指頭状押圧痕を伴う。2点は少量の繊維を胎土に含む。1242は磨耗しているために施文原体は不明である。胎土には繊維を多く含む。以上の土器のうち、1239-1241はI群2類に分類できる。1242・1243も前期に位置づけられるが、時期についての詳細は不明である。

剥片石器 (1244・1245) 1244は基部を折断した折断石器、1245は表面に周辺加工を施した尖頭石器である。

遺構の時期 少量の遺物が出土している。埋土の残存状態を考慮すると、遺物は埋土下部の層準から出土したものとよいであろう。重複関係の面では、縄文時代前期前半期、土器分類群でいえば前期I群の時期に位置づけられるGV-3B住居址群を切っている。それらのことや占地・炉形態などを参考にして、前期の中に位置づけておく。

GV-3 住居址群(第74図-第89図1246-1527, 写真図版14-17・89・90・121-123・147・148・156)

土器 (1246-1370) 実測が可能な土器が多く出土した。それらは縄文時代後期に属する1254以外はすべて前期の土器で、I群1類に分類できるのは1249である。円筒形であるが、器高は14cmとやや小型である。底部の外縁はやや張り出している。口縁部は、口唇部に幅1.5cm±の地文帯があり、その下位に幅2cm±の綾絡文帯が形成されている。地文は複節斜縄文で、胎土には少量の繊維を含む。網目状燃糸文を地文にするのは4個体である。器形は円筒形であるが、1247の体部は直線的にやや外傾している。1251の口唇部は両面から交互に押圧されて上面観が小波状を呈する。1252は口縁部が一部しか残っていないが、小波状口縁になる。口唇部はやや

肥厚し、外面はなでられて無文になり、内面には口唇部に沿うように細い沈線が引かれている。底部が残る1247・1261は外縁が張り出しているが、1261のそれは部分的なものである。また1261の底部外面は周辺部にスゲラ状圧痕と沈線状圧痕1条がみられる。作りはI型である。以上のうち、1251以外は少量の繊維を胎土に含む。地文からはI群2類に分類できる。

単節斜縄文が施文され、口縁部から底部までのほぼ全体を知ることができる一群の土器がある。1250・1259・1266・1269で、器形は円筒形である。口縁部をみると、1250は緩やかな波状口縁になり、片側へ傾斜している。1259は口縁部が一部しか残っていないが、口唇端には浅い押圧が加えられている。底部の形態は、1250・1259・1269では外縁がやや張り出すが、1259のそれは部分的なものである。1259・1269は外面の周辺部に沈線状の短い圧痕1条を伴うとともにI型とした成形技法をもつ点が共通する。以上の4点はやや多い量の繊維を胎土に含む。他の原体が施文されているものに1246などがある。1246は器高が20cmで、体部は直線的に外傾している。口縁部の横断面は楕円形気味になる。底部は多くの部分を失っているが、作りはI型と推定できる。地文は横位の複節斜縄文で、胎土には多くの繊維を含む。1260は体部下端から底部を欠いている。斜位の燃糸文が一部重なりあうように密に施文されている。胎土には少量の繊維を含む。1250以下の土器はI群2類に分類できる。同じ分類群に含まれるが、器高が16cm以下とやや小型なのは1248・1253・1255・1267である。いずれも円筒形をしているが、1253がややずんどうな形になる。口縁部が緩やかな波状口縁になるのは1248・1267である。底部の形態は、不明である1248を除けばやや揚げ底縁になり、1267は外縁が強く張り出している。地文は、1248が直前段合燃り、1253が単節斜縄文、1255が燃糸文であり、1267は無文になる。他の特徴的なこととしては、1255の底部外面への施文があげられる。施文原体は体部のものと同じで、中央部付近のくぼんだ部分に限られて施文され、周辺部にはおよばない。また、1267の底部外面の周辺部には沈線状の圧痕がまばらな状態でみられる。それぞれはやや多い量の繊維を胎土に含む。

体部下半から底部が観察できる一群の土器のうち、1263・1268は底部へ施文されている。底部はほぼ平底で、外縁がやや張り出している。また作りがI型であることも共通する。1263は体部への施文原体でもあるRLが底部内外面に施文されるが、外面の場合、周辺部は無文帯として残っている。1268は底部外面に体部と同じRLが施文され、周辺部が無文帯になる点は1263に共通する。いずれも胎土に繊維を含む。1257も底部の成形技法はI型である。ほぼ平底で、外縁がわずかに張り出す。体部は磨耗が著しいため、施文原体は不明である。1258は斜位の燃糸文が体部地文で、底部は平底である。胎土には繊維は含まれず、小礫が多い。以上もI群2類の土器である。

これまではI群の土器について記載してきた。1262は下半を失っている。結束第1種羽状縄

文が横方向に不規則に施文されるほか、単節斜縄文も併用されている。胎土には繊維を含まず、小窪が多い。本遺跡の他の羽状縄文が施文される土器群との比較や本住居址での共伴関係からは、前期I群2類の仲間とすることができるであろう。1264と1265はミニチュア土器で、無文である。1265がわずかな量の繊維を含むが、1264には含まれない。他の出土土器との共伴関係からみて、前期I群の時期に含まれるであろう。

後期の土器は1254である。下半を失っている深鉢形土器で、開き気味の口縁部は6単位の波状になり、波状間には、2個の刻みが頂部に加えられた小突起がつく。口唇部の下にはいくぶん浅い沈線1条がめぐるが、やや乱雑である。その下位に、横位の狭い平行沈線区面帯があり、ほぼ半周する部分が小刺突文で充填されている。また、頸部から肩部の部分には横位の単節斜縄文が充填された平行沈線区面帯がめぐる。そのほかの部分は無文である。立石遺跡第IV群第3類と同じ仲間であり、後期中葉に位置づけられる。

以上、多くの土器について記載してきた。そのうち、前期I群2類に入る土器に特徴的な口縁部と底部について簡単にまとめておく。口唇端に施文されるのは1259である。底部がI型の成形技法によるものは1246・1257・1259・1263・1268・1269である。体部と同じ原体が底部に施文されているのは1255・1263・1268で、そのうち1263は内外面への施文である。底部外面に刺突痕をもつのは1261で、この例では沈線状の圧痕も同時に認められる。沈線状の圧痕を伴うのは1259・1267・1269であるが、1条～3条と数は少ない。

拓本土器には前期～晩期の各時期の破片が含まれているが、前期の土器が卓越する。口縁部に綾絡文帯をもつI群1類の土器は1286・1292・1300・1302・1303・1306・1308—1310・1314・1317・1321・1335と数が多く、全部が胎土に繊維を含んでいる。1292は山形突起をもち、口唇端にはやや間隔をおいた指頭状の押圧が加えられている。綾絡文帯の幅は広い。1300も指頭状押圧痕を口唇端に伴う。I群2類の土器のうち、指頭状押圧痕が口唇端に施文されているのは1283・1291・1293—1296・1299・1320、体部と同じ原体が回転施文されているのは1297である。地文は、1320が網目状燃糸文であるほかはほとんどが単節斜縄文である。繊維を胎土に含むものが多い。地文だけが施文された口縁部破片が多い。不明なものもあるが、多くは単節斜縄文が施文されている。そのうちで、1278・1285は小波状口縁である。1271・1289・1338は複節斜縄文、1331は燃糸文、1313・1315・1345は網目状燃糸文を地文にする。また1304は直前段合燃り、1311が残存部全体に不整な燃糸文、1333は燃り戻し縄文である。繊維を含むものが一般的である。本遺跡での出土土器と比較し、それらのほとんどはI群2類に含まれる。

体部破片のうち、I群2類の識別形質のひとつである網目状燃糸文をもつのは1318・1319・1332である。また、1279—1281・1341・1357は燃糸文、1282は複節斜縄文が施文されている。底部破片は1340・1343・1359である。それぞれは底部外縁が張り出す特徴をもつ。1340は小刺

突文と沈線状の圧痕を底部外面に伴うⅠ群Ⅱ類の土器であるが、小破片のため詳しいことは分からない。

頸部に隆帯がめぐる土器がある。1276の隆帯は低く、その上には円形刺突文が連続する。口縁部は上半を欠くために詳細は不明であるが、体部には縦位の燃糸文が施文される。1322・1326・1327・1363はやや高い隆帯が区画帯になる。口縁部は幅が狭く、単節斜縄文が施文される点は共通性がある。隆帯への施文法はさまざまで、1322が爪形文、1326が指頭状押痕、1327が単節斜縄文、1363は棒状工具による1条の沈線である。磨耗しているため不明な1322以外は体部にも単節斜縄文が施文される。繊維は1363を除いては含まれる。これらの土器は、繊維を含まない1363に疑問が残るが、分類群としてはⅡ群に含まれる。頸部の破片1323・1324も同じ仲間と推定される。そのほかでは1347・1348がⅡ群に分類できる。1348は口縁部に結束第1種羽状縄文が施文される。頸部の区画は絡条体圧痕による。Ⅲ群Ⅱ類の土器は1349・1350・1353で、1350は頸部に施文された綾絡文が区画帯になる。円形竹管文が頸部の隆帯状の部分に施文された1351はⅢ群Ⅱ類あるいはⅣ群に含まれる。結束羽状縄文をもつ体部破片1346はⅡ群-Ⅳ群に含まれる。1342は、口縁部文様は鋭い沈線による波状文を主とし、頸部には刻目目状になる刺突が加えられた細い隆帯がめぐる。1354-1356・1360-1362は接合しないが、1342の同一個体の破片で、それによると体部地文は縦位の単節斜縄文と綾絡文である。大木2式に相当するであろう。1344は、無文の体部にのの形をした貼付文がつく。大木4式の時期に位置づけられるであろう。1366は、無文の口縁部に円形竹管文が線状に配列されるときも斜行する2条の沈線が認められる。施文法などは大木3式に近いことが考えられるが、確実なことはいえない。

1364は大木7a式になる。隆帯にそって側面圧痕が施された1358は大木7b式～大木8a式、1365は大木8b式、1370は大木10式、1369は晩期に属する。無節の燃糸文と沈線・磨消縄文による文様をもつ1368は後期前葉のものかもしれない。

切片石器 (1371-1474・1477) 1371は先端部と茎部を破損した有茎石鏃である。石匙は9点である。横形石匙が1372・1373・1376・1381、縦形石匙が1374・1375・1378-1380である。1375が先端部を折損している以外は完形品である。1379は2次加工の剥離面に両面が覆われ、先端部は尖鋭になっている。削器は12点と多い。分類すると、直刃(1383・1385・1387・1388・1390・1391)・横形(1393)・その他(1382・1384・1386・1392・1464)になる。1464は表面が2次加工の剥離面に覆われた破損品である。1392は刃部を折損している。削器の多くは刃部以外の縁にも微細～小剥離痕を伴っている。1389・1394・1396・1397は削器状石器である。掘器は4点である。1377は小さく規則的な急傾斜の2次加工が両端に施される。1398は楕円形気味の掘器である。他は1395・1401の2点である。1399は厚手の縦長切片の基端に不規則な2次加

工による搔器状の刃部が作られるほか、両側縁も2次加工される。1405は基部が折断され、先端部から右側縁にかけて2次加工が施された搔器状石器である。

折断石器は19点がある。折り面の数は、1面(1402・1404・1406・1409・1414・1419・1438)・2面(1400・1403・1407・1411・1413・1415-1417・1425)・3面(1412・1420)・4面(1408)である。1414は基部を折断し、その面と交差する側面に、直角に近い角度の不規則な2次加工が表面から施されている。折り面とあわせて刃潰しのような効果を目的にしたものであろう。刃部には微細剝離痕が生じている。1438は大型の剥片の基部を折断し、その面と蝶番剝離を示す先端部とに挟まれた2辺に小剝離痕がみられる。1413は、折り面に挟まれた基端から中央部付近におよぶ大きな剝離痕が両面に生じている。ピエス・エスキューの破損品かもしれない。1408は4面の側面すべてが折り面で、折り面と裏面が交わる鋭利な稜線部の1辺が刃部になる。彫器は7点で、1424を除いては折り面型に分類できる。1418・1422・1429・1433は折り面交差型、1423・1436は折り面-古剝離面交差型である。いずれも刃部とその周辺には微細剝離痕が生じている。1423は先にあげた刃部のほかに、折り面を打面にして彫刻刀面を作り出す旧石器的な技法によって作られた刃部をもつ。1424は、鋭利な左側縁から微細剝離痕が連続する尖頭部先端に、90°に近い角度の小剝離痕が裏面から生じている。

ピエス・エスキューは16点である。刃部数は、2個1対が1427・1428・1430・1434・1435・1440-1444・1450・1474、4個2対が1432・1437・1439・1445である。刃部の剝離痕や奥行き深度にはバラツキがあり、例えば1430では小剝離痕がみられるにすぎない。1431は、上端が両面に階段状剝離痕を生じているのに対し、下端は平坦面に小剝離痕がある。1447は2面の折り面に挟まれた向い合う2辺に不規則な小剝離痕がある。1431・1447の2点もピエス・エスキューに含まれるものかもしれない。挿入石器も14点と多い。刃部数は、1個をもつもの(1452・1453・1456・1457・1459・1463・1465)・2個もつもの(1448・1451・1454・1455・1458)・3個もつもの(1449・1460)がある。刃部形態には、連続する小さな2次加工によるものと刃こぼれ状の微細剝離痕によって識別できるものがある。大部分では挿入部以外の縁辺にも微細剝離痕が生じており、1459は挿入部刃部の対辺に2次加工された削器刃部をもつ。

1410・1461・1462は尖頭石器である。1410は1辺を折断して三角形の形状にしている。折り面と交差する1辺には、裏面からの2次加工が施されている。1461は大型である。尖頭部先端で交わる1側縁には連続する2次加工、対辺には加撃による粗い2次加工が両面から施されている。1462は粘板岩が素材である。細部の2次加工は尖頭部先端と基部の表面にみられる。1466は奥行き浅い挿入部が左側縁に連続し、1477は加撃による大きな挿入部が左側縁に連続した鋸歯縁石器である。1468は表面からの2次加工によって、側面観がジグザグの刃部が右側縁に作られ、1477は基部を失った剥片に表面からの粗い2次加工を施している。1421・1426・1446・

1471—1473の6点は使用痕のある割片である。そのなかで、1421は尖頭部先端に刃こぼれ状の小剝離が著しく、彫器に含めることができるかもしれない。

石斧 (1469・1470・1475・1476・1481・1482・1484) 打製石斧は4点である。1469は刃部を除いては片面加工である。1469・1475は片刃、1470・1476は両刃である。1470は折損して刃部側が残り、1469は中央部付近で折損した製品が接合した。1476は長さが18.7cmと4点のなかでは大型である。磨製石斧は3点出土した。1484は平刃・偏刃の両刃石斧で、刃縁には刃こぼれが著しい。1481は素材が薄い。表面の2/3ほどと基端・両側縁・刃縁は研磨されるが、裏面には2次加工の剝離面がほぼそのまま残る。刃部はわずかに丸刃気味になり、刃縁には微細剝離痕と擦痕が著しい。1482は基端の一部を失なった小型のものである。ほぼ平刃の片刃石斧で、擦切り技法により作られている。断面は厚く、不整な多角形を示す。使用によって生じた擦痕が刃部に著しい。

礫石器 (1483・1485—1517・1519—1527) 数多くの礫石器が出土し、半円状扁平打製石器は24点である。分類は、折損のために不明な1489・1495・1508を除くと、I型が4点、II型が17点である。I型はA₂型(1492・1500・1503)とB型(1494)に分類できる。1492は両端に挟入部をもつが、他は一端にある。1500の挟入部は背部を中断する形で作られ、縁は鋭利である。1503は浅い潰痕が両面中央部の長軸方向に連続してみられ、凹石との複合である。II型のうち、A₂型に属するのは1483・1485・1487・1490・1493・1496・1499・1501・1502・1506である。1506は左側縁からの刃部が下端の一部に続くが、かなりA₂型に近いものである。背部は、1485・1499・1502・1506が打ち欠きによって作られ、他は自然面を残している。1487や1490・1499は背部が短い。1485・1487・1493を除いては左側縁の刃部が磨耗している。1485は左側縁が内湾し、1487や1496は外湾する。B型に分類できるのは1486・1488・1491・1497・1498・1504・1505である。1497は表面が粗割りされ、自然面は小さく残るにすぎない。1498は右側縁が両端をのぞいては未加工である。また2次加工の剝離面よりも新しい研磨面が左側縁や下端・凸辺部の一部に認められる。B型のものはいずれも左側縁に磨耗痕がみられ、1488では反対縁にも磨耗が著しい。折損している1489も1488と同様に、両側縁が磨耗している。

磨石は6点である。1509・1516は球形の礫が素材である。1516は大型で、使用による平坦面が形成されている。1521はやや扁平な円礫で、石質は複輝石安山岩である。1507や1510・1511は細長い垂角礫が素材である。1507は平滑な1面、1511は稜線を含む両側縁に擦痕を伴った2面、1510は4面全部が使用面になる。凹石は9点である。使用面の数は、1面が1515・1523、2面が1513・1514・1517・1519・1522・1525・1526である。いずれも連続あるいは複合した潰痕としてあるのではなく、1個あるいは複数のくぼみが認められる。他器種との複合は、1519・1526が磨石、1523が左側縁に連続する潰痕を生じた敲石になっている。1512は断面が長方形の

細長い隙で、両面に幅が広く細長い凹面が形成されている。凹面は潰痕によるもので浅く、いちおう敲石としておく。1527は石皿の破片である。縁は高く作りだされている。皿面には深く大きな円形のくぼみが1個あり、凹口に転用されている。1524は断面が四辺形の長大な鏝で、右側面を除いた3面が平滑である。台石の可能性はあるが、確実ではない。

石製品 (1478-1480・1518) 1478は石鏃状石器である。粘板岩を素材にした小型の製品で、右側縁には抉入部が作られるが、反対縁は幅の狭い研磨された平坦面が上半に作られる。刃部状の周縁は両面が2次加工されている。1479は多孔質な複輝石安山岩が素材である。全体がていねいに研磨され、両端が凸辺形の長方形の形状をした薄い石製品である。1480は石剣の完形品で、粘板岩が素材である。全体がていねいに研磨され、擦痕が著しい。両側縁には稜線が明瞭である。1518はややいびつな円形をした円盤状石製品である。全体が研磨され、打ち欠いた痕はみられない。

遺構の時期 この住居址群は、A住居址群とB住居址群という、形態を異にし、重複関係にある2群6棟を一括して呼称したものである。

遺構の時期決定資料になる埋設土器1269をはじめ、多量の一括土器は2群が重複している部分から出土した。しかし、新旧関係が不明なことあるいは埋土や床面が両者間では連続していたことから、土器群がいずれの住居址群に固有のものかについては不明である。けれども、住居形態の共通性や重複のあり方などからみて、2群は系列的・時間的に近い関係にあるものと推定できる。ここでは、両住居址群を縄文時代前期前半期、土器分類群でいえば前期I群の時期に位置づけておく。

GN-4 住居址 (第90図・第91図1528-1542, 写真図版17・90)

土器 (1528-1538) 出土土器はすべて縄文時代前期に属する。1530は体部の外傾度が強く、器高が低いいため、バケツ形の器形になる。底部はI型の成形技法をもち、外縁が張り出している。地文は横位の複節斜縄文である。同一原体は底部外面へも施文されるが、I型の特徴である円盤状の部分へだけ施文され、周辺部へはおよばない。胎土には少量の繊維を含む。1529は円筒形の器形をもち、器高は17cmである。底部はやや揚げ底様になり、外縁がわずかに張り出している。体部には単節斜縄文が施文される。底部外面の周辺部には沈線状の圧痕が3条認められる。胎土には繊維をわずかに含む。1528は器高が15cm±と小型である。口縁部は小波状ではあるものの、作り方が粗雑である。底部はわずかに揚げ底様になる。体部の一部には縄文の条が残るが、多くの部分は無文である。磨耗のためというよりはもともと施文されていなかったためであろう。胎土には繊維をわずかに含む。

拓本土器はすべて繊維を含んでいる。口縁部破片は、網目状弛余文が施文された1531以外は単節斜縄文が地文である。1531の口唇部は両面から交互に押圧され、上面観が小波状を呈して

いる。1534は横位の綾絡文1条が破損部に接してみられるが詳細は不明である。頸部の破片1535は指頭状押圧痕を隆帯の上に伴う。1536は網目状燃糸文をもつ体部破片である。

以上の土器は、1535以外はすべて前期I群2類に含まれる。1535は前期I群1類あるいはII群の土器である。

剥片石器 (1539—1541) 1539は搔器状石器である。小型の剥片の先端部に急傾斜の規則的な2次加工を施している。1540は基部を折断し、両側縁と先端部には小さな2次加工が連続する。奥行きが浅い4個の袂入部が両側縁にあり、袂入石器に含まれるものであろう。1541は削器状石器である。鋭利な左側縁の一部に2次加工を施し、他の部分には微細剝離痕が連続している。

礫石器 (1542) II-A₂型の半円状扁平打製石器である。上端から背部である右側縁にかけての部分に2次加工をするが、刃部は素材がもつ鋭利な縁辺を利用している。左側縁から下端にかけては、刃こぼれ状の小剝離痕が部分的に生じている。

遺構の時期 1528—1530は床面直上、1531ほかは床面から出土している。これらの土器を参考にすれば、縄文時代前期前半期、土器分類群でいえば前期I群の時期に位置づけられる。なお、この住居址の形態は長大な大型住居の系列に属するものである。

GV-5 住居址 (第91図1543—1549)

土器 (1543) 1543は、同一原体による単節斜縄文が口縁部と口唇端に施文されている。胎土には織維を含まない。縄文時代前期I群2類に分類できる。

剥片石器 (1545—1549) 1546は打面を失っている複刃削器である。1549は1面、1545は2面の折り面をもつ折断石器で、刃部には微細剝離痕が生じている。1547は使用痕のある剥片である。

礫石器 (1544) II-B型の半円状扁平打製石器である。磨耗痕は左側縁に著しいが、右側縁の一部にも認められる。

遺構の時期 出土遺物からは所属時期を限定できない。占地や住居形態とその規模・周辺部に分布する同系列の住居址群の存在などを参考にすると、縄文時代前期の時期内に位置づけられるものであろう。

GV-6 住居址 (第91図1550—1554)

土器 (1550—1554) すべて小破片である。1550・1554は単節斜縄文、1552は複節斜縄文、1551は網目状燃糸文を地文にする。やや太い燃糸文が施文された1553は刺突文を伴うが、詳しいことは分からない。1550・1552が織維をわずかに含む。1550—1552は縄文時代前期I群2類に分類できる。1553については不明、1554は前期以外の土器の可能性もある。

遺構の時期 埋土からの出土遺物や占地・住居形態とその規模・周辺に分布する同系列の住

居址群の存在などを参考にすると、縄文時代前期の時期内に位置づけられるであろう。

GN-7 住居址 (第91図—第93図1555—1587、写真図版17・90・122・123・148)

土器 (1555—1564) すべて縄文時代前期の土器である。1555は、体部がゆるやかに内湾して立ち上がり、くびれた頸部からは口縁部が外傾している。底部は大部分を失っている。器高は16.5cmである。単節斜縄文が施文されるが、口縁部には無文の部分も多い。胎土には繊維をわずかに含む。I群2類に分類できる。拓本土器1556・1557・1559・1563は単節斜縄文が施文された口縁部破片、1558は同体部破片である。1561は多軸絡条体、1560は網目状然糸文が施文されている。1564は底部の一部を含む体部下端の破片で、単節斜縄文を地文にする。底部外縁がやや張り出している。以上のうち、1560以外はわずかな量の繊維を胎土に含む。1562は指頭状押圧痕を伴う隆帯が頸部にめぐる。狭い口縁部には単節斜縄文を施文し、口唇端には小波状貼付文を伴う。胎土には繊維を含まない。小波状貼付文は2264ほかに共通するものであり、頸部の隆帯の存在を考慮に入れるならば、大木2式に相当するものであろう。口縁部に多軸絡条体をもつ例は金山貝塚A群土器とされるなかに類例があることなどからみて、1562と同時期のものと考えられることができる。一部を型式名に対比させているが、以上の土器はすべてI群2類のなかに包括できる。

剥片石器 (1565—1572) 1565は無茎でやや凸基気味の石鏃、1567は先端部を折損している縦形石匙である。1566は削器である。基部を折断したあと、折断面と表面の交差する後縁部から2次加工を施して調整している。1569は2面の折断面をもつ。1570は1面が折断されているのが分かるが、他の側面については不明である。1568は、先端部にある奥行き深い大きな自然の挟入部を刃部とした挟入石器である。1572は非折断面型尖頭形の彫器で、刃部には小さく細長い槌状の剝離痕2条が生じている。

石斧 (1573) 平刃・両刃の定角磨製石斧である。刃縁とともに基端の傾斜が著しい。刃縁には微細な剝離痕が生じているが、著しいものではない。

礫石器 (1574—1587) 9点は半円状扁平打製石器である。折損している1580を除くと、I型1点、II型7点に分類できる。I型の1578はB型で、浅い挟入部が上端に作られる。II型のものは、A₂型 (1577・1579・1582)・A₃型 (1575・1585)・B型 (1574・1584) に細分できる。1575は自然の挟入部が下端にあるが、未加工であることからII型に含めた。ただ、1579は下端の浅い挟入部を認め、I型に分類した方がよいのかもしれない。A₃型の1575は両端の一部に自然面の背部を残し、1585は上端を打ち欠いて背部にしている。B型のなかでも、1574は右側縁に短い平坦な自然面を残しているが、その部分は左側縁と同様に磨耗痕が著しいことからみて、刃部になるであろう。折損している1580は残存部分には背部が作られていない。磨耗痕は左側縁に著しい。

1581は磨石で、凸曲面を示す裏面が使用面である。1583・1586は凹石である。1583は深くぼみ1個が表面にある。なお、表面の一部には赤色顔料が付着している。1586は三角形の断面をもつ細長い垂角鏝が素材で、3面のいずれにも深くぼみがある。上端には潰痕が著しく、礫石との複合石器である。1587は一部が破損している。形状や大きさからは台石の可能性が考えられるが、使用痕は認められず、確実ではない。1576は器面が滑らかな卵形状の自然礫である。石弾の可能性もあるが、確実なことはいえない。

遺構の時期 1556・1558・1559・1561・1562は床面から一括して出土した土器の一部である。それらを参考にすると、縄文時代前期前半期、土器分類群では前期I群の時期に位置づけることができる。

GIV-8住居址・GIV-9住居址

遺構の時期 出土遺物はない。2棟の間には新旧関係があり、GIV-9住居址が新しい。2棟は縄文時代前期前半期に位置づけられるGIV-10住居址とも重複し、それに切られている。そのことや重複形態からみて、2棟は縄文時代前期前半期、土器分類群でいえば前期I群の時期に位置づけられる。

GIV-10住居址（第93図～第96図1588～1638、写真図版17・90・91・123・148）

土器（1588～1618）すべて縄文時代前期に位置づけられる土器である。1588は体部下端がすぼまり、上半へ急傾斜で広がる器形上の特徴をもつ。底部の大部分は失われている。横位の単節斜縄文が全体に施文されるほか、口唇端には小円形刺突文が連続している。胎土には繊維を含まない。1592は器高が15cm±と小型である。粗雑な作りで、ゆがみが著しい。わずかに残る底部はI型の成形技法によるものと推定できる。地文は横位の単節斜縄文で、胎土には少量の繊維を含む。1589～1591は底部を含む下半が残存している。底部の形態は、1589・1591は平底で、外縁がわずかに張り出し、1591はやや揚げ底縁になる。それぞれは少量の繊維を含む。1593は口縁部を失った小型の土器である。粗雑な作りで、無文である。底部は外縁がわずかに張り出している。以上の土器のうち、1588・1592はI群2類に分類でき、他もI群のなかを含むことはできるであろうが、細分については不明である。

拓本土器1594は綾絡文帯が口縁部に形成され、1608は3条の撚紐瓦痕が口縁部にめぐるほか、口唇端には指頭状押圧痕を伴う。1597は小波状口縁で、波状頂部は上方からの押圧が加えられて二股になる。口縁部には斜位の綾絡文がやや間隔をおいて施文されている。1601も同一個体の破片である。以上の土器は胎土に繊維を含み、1608ではその量が多い。I群1類に分類する。いま述べた以外の口縁部破片は単節斜縄文をもつものである。1600は両面から交互に押圧されるため、上面観が小波状になる。1611は小波状口縁である。すべて胎土には繊維を含む。I群2類に分類できる。体部破片1602と1613は同一個体のもので、撚糸文を地文にする。底部の破

片も多い。成形技法Ⅰ型によるものは1615である。1609・1614・1618は底部の外縁が張り出し、1614のそれは著しい。底部外面に沈線状の圧痕を伴うのは1614—1618の4点で、1条～3条が確認できる。いずれも繊維の含有量が多い。1614—1618はⅠ群2類に含まれる。

剃片石器 (1620—1634) 1620は無茎・平基の石鎌、1621は折損した横形石匙、1622は縦形石匙である。1625は尖頭石器である。表面の周縁には2次加工が施されている。1631は小型の削器、1624・1634は削器状石器である。1623は急傾斜の2次加工が先端部に施され、刃部は傾斜している。折断石器は4点である。折り面の数は、1630が1面、1626・1629が2面、1628が4面である。刃部に2次加工が施されているのは1628と1629である。1628では刃部以外はすべて折り面になる。1627・1632は彫器である。1627は非折り面型尖頭形の彫器で、先端部と左側縁が交わる尖頭部を刃部にする。1632は折り面交差型で、刃部は磨耗している。1633は2個1対の刃部をもつピース・エスキューである。刃部の剥離の奥行きは深く、一部では対辺の刃部へ達している。裏面の両側縁には剥離面の大きな2次加工が施されており、削器状の石器からの転用例とも考えられる。

礫石器 (1635・1637・1638) 1635は折損した半円状扁平打製石器である。左側縁が磨耗している以外は鋭利な刃部である。1638は細長い亜円礫の上端に小剥離面を伴った潰痕を生じている。また、下端に寄った表面にも不規則な潰痕がみられ、敲石になる。1637は卵形をした小型の円礫である。器面は滑らかであるが、磨石としての使用面は確認できず、また石弾とすることができる出土状況でもない。したがって、器種不明にしておく。

石製品 (1636) 円盤状石製品の破片である。

遺構の時期 埋土中の出土土器からみて、縄文時代前期前半期、土器分類群でいえば前期Ⅰ群の時期に位置づけられる。

GV-X住居址

遺構の時期 この住居址は柱穴の存在から確認できたもので、所属時期は不明である。

GV区

GV-1住居址 (第96図1639—1642, 写真図版91)

土器 (1639—1642) 4点とも縄文時代前期の土器である。1642は口縁部の多くを失っているが、その部分に綾絡文帯をもつⅠ群1類である。1639は口縁部が幅の広い無文帯になり、その下方には横位の単節斜縄文が施文される。内面にも、同一原体が口唇部から5cm±の幅に施文されている。胎土には多くの繊維を含む。Ⅰ群2類に分類できる。1640は単節斜縄文、1641は燃糸文が施文された体部破片である。1641は胎土に繊維を含まない。

遺構の時期 遺構編には炉の上から一括土器が出土していることが記載されているが、該当

する土器については不明である。ここでは重複するGV-2住居址に切られていることを参考にし、縄文時代前期～中期前葉の時期に位置づけておく。

GV-2住居址(第96図～第98図1643-1687, 写真図版18・91・123)

土器(1643-1672) 縄文時代前期・中期・晩期の土器が出土しているが、前期のものが卓越する。1643はやや小型である。体部中部に最大径があり、短い口縁部はやや外傾する。先端の鋭い工具によって格子状に沈線が引かれるが、やや乱雑である。胎土には少量の繊維を含む。青森県蟹沢遺跡の出土品に円筒下層式dに位置づけられた類例がある(江坂ら, 1958)。

拓本土器1644・1645は幅広い綾絡文帯が口縁部に形成され、1645では浅い縦の刻みが口唇部に連続する。いずれも胎土には繊維をやや多く含む。前期I群1類に分類できる。他の口縁部破片のうち、燃糸文を地文とするのは1647・1652・1654で、密な状態で縦位に施文されている。1647は口縁部がわずかに外反し、1cm±の無文帯をもつ。3点のなかでは、1647が少量の繊維を含む。1651は単節斜縄文、1650は斜位の燃紐圧痕2条を伴う。1646は原体が分からない。1646以外は胎土に繊維を含まない。体部地文が燃糸文であるのは1649・1653・1655、1656と同一個体の破片1658、1657・1661である。1653・1655は条の間隔が広いが、他は密な状態で施文される。1649は低い隆帯が頸部にめぐり、その上には刺突が加えられている。以上のなかで、1653と1655は胎土に繊維を含まない。1664も燃糸文が乱雑に施文されている。頸部破片1667は刺突が加えられた低い隆帯が頸部にめぐり、体部には羽状縄文が施文されている。胎土には少量の繊維を含む。

これまで述べてきた破片のうち、頸部が残る1649・1667は他の類例からみて前期II群の土器である可能性が高い。条の間隔が広い燃糸文は前期I群に共伴するのが一般的で、これまでもその仲間としてきたものである。本遺跡の場合、燃糸文が地文としてもちいられるのは前期II群の土器に多いが、1647をはじめとする破片の具体的な位置づけは不明である。なお、燃紐圧痕が口縁部に施文された1668は前期III群の土器、1659・1660・1666は実測土器1643と同一個体の破片である。

前期の土器以外では中期に属する1669ほかがある。1669は口縁部の破片で、小波状を呈している。口唇部の小波状貼付文の上には刻み目が連続して加えられ、口縁部文様は隆起線とそれに沿う沈線・単節斜縄文によって構成される。1665・1663は同一個体の破片で、1665は蛇行垂下貼付文を体部に伴う。円筒上層式dに含まれる。1671と1672は同一個体の破片で、細い隆起線とそれに沿う沈線が頸部にめぐり、1669と同じく中期中葉の土器であろう。1662は大木10式、1670は晩期の小破片である。

剥片石器(1673-1686) 1673は、長さが11.2cmと大型の縦形石匙である。削器は3点である。1674は打面と先端部の一部を失っている。1677・1683は基部を折損しているが、表面の大

部分が奥行き深い大きな2次加工面に覆われている。1685は基部が折断されている。左側縁にはやや粗い2次加工による刃部が連続する。1676は搔器である。しかし、裏面をみると側縁からの2次的な剥離面に覆われている。剥離面の奥行きは深く、互いにその先端が接触しているあり方からみて、ピエス・エスキューへ転用しているものである。1678・1679は周辺加工された尖頭石器である。1680は左側縁に2次加工による刃部を作り出した抉入石器である。1682は先端部、1684は基部が折断された折断石器である。1686は折り面—古剥離面交差型の彫器である。刃部では折り面に小剥離痕が著しい。1681は折り面を交差させているが、使用痕が認められず、彫器には含まれない。1675は使用痕のある剥片である。

礫石器 (1687) 大型の角礫で、完形品である。表面はきわめて平滑で、裏面は小凹凸がある。台石の可能性はあるが、埋土から出土したものであるため、確実なことは分からない。

遺構の時期 土器は縄文時代前期のものが卓越するものの、すべて埋土中からの出土である。この住居地の所属時期は特定できないが、大型住居地に分類できる住居形態を岩手県下における類例と比較すると、前期後葉—中期前葉の時期内には含めることができるであろう。

GV—3 住居地 (第98図・第99図1688—1708、写真図版91・123・149)

土器 (1688—1697) すべて縄文時代前期の土器である。1688は底部を含む体部下半が残存している。底部はわずかに揚げ底様になり、外縁が張り出している。体部には単節斜縄文が部分的にみられる。また沈線状の圧痕数条が底部外面の周辺部に残る。胎土には繊維を多く含む。1692は底部の一部である。底部外面の周辺部の一部に圧痕を伴う。平行して密接する10条前後が確認でき、その一端には直交してもぐりこむような圧痕もみられる。スグレ状圧痕の一種かもしれない。周辺部の別の部分には沈線状の圧痕1条が認められる。胎土には繊維を含む。2点はI群2類に分類できる。

拓本土器1689・1690は口縁部に綾絡文帯をもち、I群1類に分類できる。胎土には繊維を多く含む。1696は単節斜縄文、1691は磨耗して原体が不明な口縁部破片で、胎土には繊維を多く含む。体部破片1693は0段多条の原体による非結束の羽状縄文、1694とその同一個体破片1697は横位の綾絡文がみられ、地文は無節の斜縄文である。これらの3点は胎土に繊維を含まない。1695は単節斜縄文が地文で、少量の繊維を含む。以上のうち、1693・1694・1696・1697はI群2類に分類できる。

剥片石器 (1698—1705) 1705は削器である。尖頭部をわずかに破損している。左側縁への2次加工が規則的であるのに対し、外湾する右側縁へのそれはやや粗雑である。1702は右側縁から先端部の一部を破損して失っている。先端部には角度の小さな2次加工が表面から施され、削器の一種であろう。折断石器は3点である。折り面の数は、1699が1面、1698・1703は2面である。1698は先端部に交差する2面の折り面がある。1703は両端が折断され、相対する刃部

2辺には微細剝離痕が生じている。1700は2個1対の刃部をもつピエス・エスキューである。刃部の剝離の奥行きは深く、一部では対辺に達している。1704は折り面交差型の彫器である。刃部には小さく細長い槌状の剝離痕が生じている。1701は両側縁を刃部にした使用痕のある剝片である。

礫石器 (1706—1708) 1706は断面が三角形の細長い直角礫が素材である。一面には小さな範囲に潰痕が集まり、別の一面には浅い円形のくぼみ2個が形成された凹石である。1707・1708は石鉄である。2点とも輝緑凝灰質粘板岩が素材で、形状や両面の周辺に2次加工を施す点では似ている。大きさは、1707が最大長17.8cm・最大幅12.3cm、1708が最大長24.8cm・最大幅15.5cmである。

遺構の時期 埋土中からの出土土器を参考にすると、縄文時代前期前半期、土器分類群でいえば前期I群の時期に位置づけられるものであろう。

GV-4 住居址 (第100図1709—1727, 写真図版91・92・123・124)

土器 (1709—1719) 1711・1716を除いては縄文時代前期に位置づけられる。1718は燃紐圧痕3条が口縁部に平行してめぐり、指頭状押圧痕を口唇端に伴う。1719は口縁部の一部を失っているが、口縁部に綾格文帯をもつ。2点は胎土に織維を含み、I群1類に分類できる。1709・1710・1713は口唇端に施文されている。1709は体部地文と同じ原体の回転施文、1713は指頭押圧痕、1710は施文具がはっきりしないが、斜位の浅い刻目である。口縁部破片1712・1715は斜位の燃糸文、体部破片1714は網目状燃糸文、1717は単節斜縄文が施文されている。以上の土器は胎土に少量の織維を含み、1717をのぞいてはI群2類に分類できる。1711は磨消縄文をもつ中期後葉～末葉の土器、1716は単節斜縄文を地文にした時期不明のものである。

剝片石器 (1720—1725) 1720は先端部を折損しているが、複刃削器であろう。基端も両面から2次加工されている。1724は棒状の石錐である。断面は菱形を示し、刃部には磨耗痕が著しい。1721は非折り面型尖頭形の彫器である。刃部には小さく細長い槌状の剝離痕を含む微細剝離痕が生じている。1722は基部に刃部をもつ鋸歯縁石器である。1723は3面が折り面で、折り面に挟まれた狭い縁に急傾斜の2次加工が施されている。1725は側縁の一部に微細な剝離痕が生じた使用痕のある剝片である。

礫石器 (1726・1727) 1726はII-B型の半円状扁平打製石器である。ほぼ中央部で横折れしていたものが接合した。左側縁は磨耗し、部分的には幅広の平坦面が形成されている。右側縁の裏面は狭い幅で研磨されている。1727は垂直礫が素材である。器面全体が滑らかで、両面に不定型な浅い潰痕があり、凹石に分類できるであろう。

遺構の時期 埋土中から出土している土器からみて、縄文時代前期前半期、土器分類群でいえば前期I群の時期に位置づけられるものであろう。

GV-5 住居址 (第100図・第101図1728—1735)

土器 (1728—1731) すべて縄文時代前期に位置づけられる土器である。1728は底部の一部を含む体部下端の破片である。縦位の燃糸文が体部下端まで施文されている。底部は外縁が張り出し、外面の周辺部には沈線状の圧痕1条が確認できる。1729は単節斜縄文と間隔をおいて施文された横位の縦絡文、1730は燃糸文、1731は単節斜縄文が施文された体部破片である。それぞれは胎土に繊維を含み、1728・1730ではその量が多い。1728・1729はI群2類に含まれる。

剥片石器 (1732—1735) 1732は無茎の石鏃で、基部はほぼ平基である。1733は折り面交差型の彫器である。刃部には小さく細長い槇状の剥離痕を含む小さな剝離痕が顕著である。1735は、縦長剥片の尖頭部先端に小剝離痕を伴うことからみて彫器になるであろう。ただ素材が軟質な珪質細粒凝灰岩であるために、使用痕がやや不明瞭である。1734・1735は使用痕のある剥片である。

遺構の時期 出土遺物は少ない。重複関係にあるGV-4住居址に切られていることからみて、縄文時代前期前半期に位置づけられるであろう。

GV-6 住居址 (第101図1736—1742, 写真図版91・124)

土器 (1736—1739) 1739は大型の破片である。口縁部は大部分を失っているが、外方へ張り出し気味になる。その上には横位の浅い沈線がみられるが、詳細は不明である。地文は複節斜縄文である。縄文時代中期中葉のものとして推定される。1738は沈線で区画された口縁部が無文で、体部にも沈線の一部がみられることから、中期末葉に含まれるであろう。1736は口縁部が幅の狭い無文帯になる。1737は網目状燃糸文をもつ体部破片で、前期I群2類である。

剥片石器 (1740—1742) 1741は縦形石鏃で、両面が2次加工の剝離面に覆われている。1742は先端部に刃部をもつ抉入石器、1740は両側縁が刃部である使用痕のある剥片である。

遺構の時期 埋土中の土器や住居形態・炉の形態などを参考にすると、縄文時代前期～中期中葉の時期のなかに位置づけられるものと推定される。

GV-7 住居址 欠番

GV-8 住居址

遺構の時期 出土遺物はない。また大半の部分は剝削を受けているため、住居形態などから所属時期は不明である。

(三浦 謙一)

GVI区

GV-1 住居址 (第101図・第102図1743—1762, 写真図版92, 148)

土器 (1743—1757) 1745・1746・1749・1752はキャリパー状の深鉢形土器である。1745・1746は隆起線と沈線、1749・1752は隆起線と沈線で口縁部の文様が描かれ、直線文や弧線文が

展開する。地文は1745・1746が単節縄文、1752が複節縄文で、口縁部は横回転、体部は縦回転で施文する。1747は地文の複節斜縄文上に2条の浅い沈線を巡らすものである。以上は大木8 a式に相当する。

1748は隆起線で体部文様帯を区画し、区画内に沈線で円形文を描く浅鉢形土器で、円形文間には刺突文を充填した三角形区画帯を伴う。地文は単節斜縄文である。1750・1754・1755・1757は、沈線で楕円文や円形文を描き、文様内に単節斜縄文や刺突文を充填するもので、1757には1個の補修孔がみられる。1744は頸部に連続刺突文を配した2条の平行沈線が施される。1751・1753は沈線で区画した充填縄文帯が縦方向に規制された文様を展開する深鉢形土器で、C字文か円形文が描かれる。以上は大木9式に相当する。

1743は木目状燃糸文が施された体部片、1756は大髑骨文が展開する壺形土器の体部片である。1743は縄文時代前期III—IV群に分けられ、1756は大洞C₁式に相当する。

剥片石器 (1758—1760) 1758は両面加工で作られた尖頭形の刃部をもつ縦形石匙である。1759は1個の刃部をもつ挟入石器で、刃部は細部加工によって作られる。1760は折り面—古剝離面交差型の彫器で、刃部には刃こぼれ状の微細剝離痕を伴う。

礫石器 (1761・1762) 1761は楕円球形礫を素材とした磨石で、側面の1部に擦痕がみられる。1762は扁平な楕円形礫を素材とした凹石で、1列に並んで5個の浅い凹みが連続する。

遺構の時期 床面や炉から出土した時期決定資料を欠くが、炉の形態や埋土内出土土器を参考にして推定すれば、大木8 a式期に位置づけられるものと考えられる。

GI-2 住居址 (第102図1764—1770, 写真図版92)

土器 (1764—1768) 1765は単節斜縄文を充填した沈線区画帯が縦方向に規制された文様を展開するもので、C字文か円形文が描かれる。1764は沈線文、1766は隆起線文で文様を展開するもので、双方とも楕円文か円形文が描かれる。1767は口縁部文様帯に絡条体圧痕文が施され、1768には燃紐圧痕文が施される。1764—1766は大木9式に相当し、1767・1768は縄文時代前期III群に分けられる。

剥片石器 (1769・1770) 1769は下端の湾入部、1770右側縁に使用痕をもつ剥片である。

遺構の時期 床面や炉から出土した時期決定資料を欠くが、炉の形態や埋土内出土土器から推定すれば、大木9式期に位置づけられる可能性が高い。

GI-3 住居址 (第102図・第103図1771—1805, 写真図版92・149)

土器 (1771—1800) 1772・1774・1786・1787は単節斜縄文を充填した沈線区画帯が縦方向に規制された文様を展開する深鉢形土器で、1772・1787はC字文か円形文、1774・1786はH字文が描かれる。1775・1776・1778・1779・1781・1783—1785・1788・1790・1800は、沈線で楕円文や円形文を描き、文様内に単節斜縄文や刺突文を充填するもので、1785は文様間の口縁部無文

帯に丸棒状工具で円形押圧文が施される。1789は幅の広い無文の口縁部をもつ広口壺形土器で、頸部には細い連続竹管文を配した数条の沈線が巡る。以上、1789が大木9式に併行し、そのほかはすべて大木9式に相当する。

1777は単節斜縄文を充填した沈線区画帯が横方向に流れるC字文を描くもので、区画外の無文帯はやや浮き上っている。1771・1780は磨消線無文帯が文様を展開する深鉢形土器である。1792は地文の単節斜縄文上に沈線でJ字文が描かれる。1791は体部に2本1対の隆起線が縦に貼付されている。1799は細い沈線で区画した磨消帯が直線的な曲折文を展開するものである。1776は口縁部文様帯に三叉文が描かれ、1797・1798（同一個体）は体部に大腿骨文の変形文が描かれる。1773・1782・1793-1795は粗製の深鉢形土器で、地文は1793が燃糸文、そのほかは単節縄文を縦回転で施文する。以上、1777は大木10式の初め、1771・1780は大木10式、1791は大木8a式、1796は大洞B式、1797・1798は大洞C₂式に相当し、1792は大木10式併行の大木系土器、1799は縄文時代後期初頭に比定される。

剥片石器 (1801-1804) 1801は打撃によって作られた1個の刃部をもつ挿入石器である。1803は2辺を折断し、長方形に整えた折断石器で、1個の刃部には刃こぼれ状の微細剝離痕がみられる。1802は2次加工を施した剥片、1804は硬質泥岩の石核である。

礫石器 (1805) 複層石安山岩の長方形礫を素材とする磨石である。全面が平滑で擦ったことによる光沢が著しい。これ自体が何らかの製品として作られた可能性も考えられる。

遺構の時期 床面や炉からの伴出遺物を欠くが、炉の形態や埋土内下層出土土器などからみて、大木9式期に所属するものと思われる。

GVI-4 住居址 (第103図1814-1826, 写真図版19・155)

土器 (1814-1817) 1814は炉埋設土器である。口縁部が内湾するキャリバー状の深鉢形土器で、細い隆起線で弧線文や渦巻文が描かれる。口縁部は横回転、体部は縦回転の複節斜縄文を地文とする。1816もキャリバー形土器の口縁部で、単節斜縄文上に隆起線が貼付される。1815は単節斜縄文を地文とする粗製深鉢形土器、1817はロクロ成形の土師器坏形土器である。以上、1814・1816は大木8a式に相当する。

土製品 (1818-1823) すべて、土器片を再利用して作られた円盤状土製品である。打ち欠いて成形したあと、全周が研磨されている。文様が分かるものはなく、1819・1822が無文のほかは単節斜縄文が施された体部片である。

剥片石器 (1824-1826) 1824は剥片剝離軸に平行する1側縁に直線的な刃部加工が施された削器である。1825・1826は左側縁に使用痕がみられる。

遺構の時期 炉埋設土器からみて、大木8a式期に位置づけられる。

GVI-5 住居址 (第104図-第107図1838-1917, 写真図版18・92・124・149)

土器(1838—1888) 1838は床面出土の小型深鉢形土器である。頸部には2条の沈線が回り、上部の沈線は幅の広い口縁部に連なって葎状の文様が描かれる。沈線区画内は細い連続刺突文が充填される。文様は4回繰り返され、その下部の体部上端には太い円形押印文が配される。地文は単節縄文を縦回転で施文する。1848は頸部に連続刺突文を伴う1条の沈線が巡る。1857は沈線区画の充填縄文帯でH字文が描かれる。以上、1838は大木9式か大木10式の初めに併行し、1848・1857は大木9式に相当する。

1847・1849—1856・1858—1861は沈線で区画した充填縄文帯が横方向に流れる文様を展開し、C字・S字・e字等のアルファベット文を描くものである。1849・1853・1860などはS字文、1850・1867は横S字文、1859はC字文を描く。1864—1869は同一個体で、沈線区画の円形文(渦巻文)や楕円文を、2列の刺突文を充填した平行沈線区画帯で横S字状に取り囲むものである。口縁部(1864)には、連続刺突文を重ねた太い2条の沈線が巡る。以上は大木10式の初めに相当する。

1739は底部が強く外傾する小型土器、1840は鉤手をもつ無文の壺形土器である。1841・1842は口縁部文様帯に撚紐瓦痕文と刺突文、体部に結束第1種羽状縄文を施すもので、頸部には2列の連続刺突文を配した微隆起帯が巡る。1843は口縁部文様帯に撚紐と絡条体の瓦痕文が施される。1844—1846は同一個体で、沈線区画の磨消縄文帯が文様を展開するものである。沈線で直線文、弧線文、渦巻文が描かれる。1883は沈線で渦巻文や横位の区画文が施され、1884は横位の沈線に沿って刻み目状の連続刺突文が配される。1885は頸部に数条の沈線を巡らせ、体部には縦の綾絡文を施すものである。1886は体部上半に雲形文が描かれる鉢形土器、1887・1888は連続刻み目帯をもつ注口土器である。以上、1841—1843・1885は縄文時代前期III群に分けられ、1844—1846は後期中葉、1840・1887・1888は後期末葉に比定される。1883は大木8a式、1884は大木7b式、1886は大木C₂式に相当しよう。

1862・1863は無文の口縁部、1870—1880は粗製深鉢形土器の口縁部である。粗製土器の地文は、1873が無節縄文、1876が複節縄文、ほかは単節縄文を縦回転で施文する。1881は単節斜縄文を地文とする体部下半、1882は無文の折り返し口縁である。

切片石器(1889—1910) 1889・1890は石鎌で、1889は基部、1890は刃部先端を欠く。1890は無茎凹基で、狭長な刃部をもつ。1891は横形石匙である。刃部は片面加工で作られ、左右対称の弧状を呈する。1892は素材の鈍角をも含め、1側縁から先端部に連続する2次加工を施した大型の削器である。1893は縦長切片の両側縁と先端部に刃部加工を施した削器で、刃部は尖頭形を呈する。1894は緩く外湾する1側縁、1895は縦長切片の1側縁を刃部を削器である。1894は挟入石器と複合し、反対側縁に細部加工で作られた1個の刃部をもつ。1896は2個1対の刃部をもつピエス・エスキューで、刃部には階段状剥離痕がみられる。1897は大型の縦形石匙である。基部と先端部が鋭角に連なる横長切片に、両面から連続する2次加工を施して尖頭形の

刃部が作られる。1898は素材の直角部分を含め、1側縁と先端部に直線状の刃部が加工された大型の削器である。1899は折り面交差型の彫器で、刃部を構成する2辺のほか、もう1辺が折断されている。刃部両面には微細剝離痕をもち、刃部と交わる表裏面の稜線上には櫛状の剝離痕がみられる。1900・1901は1辺が折断され、1個の刃部をもつ折断石器で、1900は長方形、1901は切り出し形に整えられる。双方とも刃部には微細剝離痕を伴う。1902は折り面—古剝離面交差型、1904は非折り面尖頭型の彫器で、刃部には刃こぼれ状の微細な剝離痕がみられる。1903は2辺が折断され、1個の刃部をもつ折断石器である。1905は無蓋円基の石鎌で、刃部先端には磨耗痕が伴う。1906は横長剝片の先端部に浅い抉入部が連続する鋸歯縁石器である。1907は2辺が折断され、三角形に整えられた折断石器で、2次加工が施された1個の刃部をもつ。1908は非折り面尖頭型の彫器で、刃部には磨耗痕がみられる。1909は内湾する側縁に刃部加工が施された凹刃状の削器である。1910は抉入石器で、剝片先端部に2次加工が施された1個の刃部が作られる。

石斧(1911) 珪質緑色凝灰岩を素材とした定角式の磨製石斧で、刃部は両凸の円刃である。基端部に敲打痕がみられる。

礫石器(1912—1917) 1912は扁平な楕円形礫を素材とした石皿である。表面は使用によって凹んでいるが、特別な成形は加えられていない。1915は加工によって皿部に縁を作り出した石皿である。1913・1916は偏球形の磨石で、ほぼ全面に擦痕がみられ、光沢が著しい。1916には浅い1個の凹みを伴う。1914・1917は扁平な楕円球形の磨石で、側面が主に使用されている。礫石器の石質はすべて複雑石安山岩である。

遺構の時期 埋土下層出土遺物や炉の形態などからみて、大木10式期の初めに位置づけられるものと考えられる。

GV-6 住居址(第107区1936—1944)

土器(1936—1943) 1940は炉に埋設された粗製の深鉢形土器である。地文は複節縄文を縦回転で施文する。1936・1939は同一個体で、単節斜縄文を地文とする粗製深鉢土器である。1937はLrとlを右捻りにした異条縄文を地文とする体部片で、部分的に撻紐瓦痕文が施される。1938・1942は無文の小型深鉢形土器である。1941は頸部に刺突文列を伴った1条の沈線が巡る小型壺形土器で、体部には沈線で区画した無文帯で文様が描かれる。1943は口縁部文様帯に綾絡文が施される。1941は大木10式に相当し、1943は縄文時代前期I群1類に分けられる。

剝片石器(1944) 左側縁に使用痕をもつ剝片である。

遺構の時期 所属時期の決定資料が欠くが、炉の形態や埋土下部出土土器1941などから推定すれば、大木10式期に位置づけられるものと思われる。

GⅦ区

GⅦ-1 住居址 (第107図1945—1952, 写真図版92)

土器 (1945—1950) 1945は炉に埋設された粗製深鉢形土器である。地文は複節縄文の縦回転施文で、綾絡文が伴う。1946は沈線で楕円文か円形文を描き、文様内に単節斜縄文を充填するものである。1947は単節斜縄文を地文とする小型壺形土器で、無文の口縁部は研磨されている。1948は縦回転の複節斜縄文を地文とする粗製深鉢形土器である。1949は口縁部に非結束の単節羽状縄文が施される。1950は摺糸文を地文とする体部片である。

以上、1946は大木9式に相当し、1949は縄文時代前期1群1類に分けられる。1945・1948は器形や作りからみて大木10式期に含まれよう。

剃片石器 (1951・1952) 1951は横形石匙である。縦長剃片の1側縁に、片面から急傾斜の刃部が作られる。1952は浅い挟入部が連続する鋸歯縁石器で、2片が折断されている。

遺構の時期 時期決定資料を欠くが、埋設土器や炉の形態からみて、大木10式期に位置づけられる可能性が高い。(佐々木 勝)

GⅦ-2 住居址 (第107図・第108図1955—1965, 写真図版92・124)

土器 (1955—1961) 1958・1960は磨消縄文による文様、1956は単節斜縄文の上に沈線をひいた文様をもつ大木10式に相当する土器である。1961は口縁部がわずかに外反し、狭い平行沈線間が円形刺突文で充填されている。体部には磨消縄文による文様をもつ。1959は頸部にめぐる幅の広い沈線のなかに円形刺突文が連続するほかは無文である。2点は大木9式の土器である。1955は粗製の深鉢形土器で、中期後葉～末葉に位置づけられるであろう。1957は中期中葉の土器を素材にし、周縁部を研磨して方形の形を作り出している。円盤状土製品の一種である。

剃片石器 (1962・1963) 1962は小さな2次加工が両側縁に連続して施された削器状石器である。1963は2面が折り面で、それに挟まれた刃部には微細剝離痕が生じている。

石斧 (1964・1965) 1964は定角磨製石斧である。刃部を欠くが、残された両面の剝離面が作る縁は鋭利であり、再生とみることができるともかもしれない。1965は基端を含む一部が残った磨製石斧である。擦切り痕が認められる。

遺構の時期 遺構編では、周辺の遺構群との重複状況を参考にして、縄文時代前期～中期の時期内に含まれるものと推定している。出土遺物からは所属時期の詳細は不明である。

GⅦ-3 住居址

遺構の時期 住居址の残片として記載されたもので、所属時期は不明である。(三浦 謙一)

GⅦ-4 住居址 (第108図1966—1973)

剃片石器 (1966—1972) 1966は玉髓を素材とした無茎平基の石鎌である。側辺が外湾し、

身中央がかなり厚くなっている。1967・1971・1972は2次加工が施された剥片で縦長小剥片の先端部に調整刻離痕がみられる。1768は縦長剥片の両側縁に急傾斜の刃部加工を施した挿器状石器である。先端部につまみ状のつくり出しがみられることから、縦形石匙の末完成品かもしれない。1769は1辺を折断し、三角形に整えた折断石器で、2次加工が施された1個の刃部をもつ。1970は小型の非折り面尖頭型の彫器で、刃部側縁には槌状の剝離痕がみられる。

石製品(1973) 珪質緑色凝灰岩の円形鏝を素材とした有孔石製品である。径1.9cmの鏝中央に、両面から穿たれた1個の円孔をもつ。

遺構の時期 伴出土器を欠くため所属時期は特定できないが、複式炉の存在や周囲の遺構のあり方などからみて、縄文時代中期後葉—末葉に位置づけられよう。炉の形態のみに限定して推定するならば、中期末葉大木10式期に所属する可能性が強い。

GⅦ—5 住居址

遺構の時期 伴出遺物を欠くうえに、住居址の形態・規模も確認できないことから、所属時期は不明である。

GⅦ—6 住居址 (第108図1974—1981)

土器(1974—1977) 1974は口縁部文様帯に燃紐瓦痕文が施され、幾可学文様が描かれる。1975—1977は体部片で、1975は燃永文、1976・1977は単節縄文を縦回転で施文する。1974は縄文時代前期Ⅲ群に分けられる。1975—1977は縄文時代中期後葉—末葉に含まれよう。

剥片石器(1978・1979) 1978は折り面交差型の彫器である。刃部を構成する2面のほか、全辺が折断されている。1979は右側縁に使用痕をもつ剥片である。

石斧(1981) 珪質緑色凝灰岩を素材とする磨製石斧の折損品である。刃部は両凸の円刃で、剝落が著しい。

石製品(1980) 細粒凝灰岩の扁平鏝を素材とする有孔石製品である。両面から穿たれた1個の円孔をもつが、周縁は全て折損しているため全体の形状は不明である。

遺構の時期 床面から出土した時期決定資料を欠くうえに、住居址の形態・規模も不明である。周囲の遺構のあり方や埋土内出土土器から強いて推定すれば、縄文時代中期後葉—末葉に所属するものと考えられる。

GⅦ—7 住居址 欠番

GⅦ—8 住居址 (第108図1982)

剥片石器(1982) 無基平基の石鏝で、ほぼ正三角形を呈する。

遺構の時期 伴出土器を欠くため、所属時期は不明である。 (佐々木 勝)

HⅢ区

HIII-1 住居址群 (第108図—第111図1983—2037、写真図版18・93・124)

土器 (1983—2020) 出土した土器は縄文時代前期・中期のものが主体を占める。1984は円筒形の器形をし、器高は19cm±である。口唇部は不規則に波打っている。地文は単節斜縄文で、一部が残った底部外面の周辺部には刺突状の圧痕を伴う。胎土には繊維をわずかに含む。1985は体部下端が狭くなる器形上の特徴をもつ。底部はI型の成形によるもので、外縁がやや張り出している。横位の単節斜縄文が地文である。胎土には繊維をやや多く含む。1987・1991は底部を含めた体部下半を失っている。1987は横位の太い単節斜縄文が地文である。胎土には繊維をわずかに含む。1991は口唇部が不規則に波打ち、部分的には粘土を貼り付けて小突起状に作り出す。口唇端には刻みあるいは押圧が加えられるが、不規則である。横位あるいは斜位の単節斜縄文が地文になる。胎土には繊維を含まない。以上の4点は前期I群2類に分類できる。1983は口縁部を含む上半の一部が残っている。頸部には沈線をめぐるし、口縁部を無文帯にする。体部の文様は詳しくは分からないが、縦位の複節斜縄文と磨消縄文によって構成される。磨消帯は4周毎にみられる。中期末葉大木10式に含まれる。

拓本土器2000・2001は幅の広い隆帯が頸部にめぐり、その上と口唇端には指頭状押圧痕を伴う。幅の狭い口縁部への施文は、2000が横位の単節斜縄文、2001は横位の綾絡文1条である。2000は体部にも同じ原体が施文される。それぞれは胎土に多くの繊維を含む。2001は前期I群1類、2000は前期II群の分類群に含まれる。口縁部破片1988・1990・1992—1996・1998・1999・2002—2004・2007・2009は地文だけをもつもので、前期I群2類になる。単節斜縄文のものが大部分であるが、摺り戻し縄文の1988・複節斜縄文の1998などもある。すべてがわずかな量の繊維を胎土に含む。1989・1997は口唇部に1条あるいは2条の横位の綾絡文を伴う。また体部破片2005は、横位の綾絡文2条が間隔をあけて施文されている。それぞれは少量の繊維を含み、前期I群2類に分類できる。底部破片2006・2008は体部下端まで単節斜縄文が施文されている。2008は底部外面の周辺部に沈線状の圧痕を伴う。2006は少量の繊維を胎土に含むが、2008は含まない。2008は前期I群2類に分類できる。同じ前期の土器でも、2010は渦巻貼付文を口縁部にもつ。口唇端には刺突が不規則に加えられている。大木4式に相当するであろう。

2012以降は、後期に位置づけられるであろう小破片2017・2018を除いては大木10式に相当する土器の体部破片で、同一個体のものもいくつか含まれている。地文は縦位の複節斜縄文である。2011は大木9式あるいは大木10式に相当するであろう。

剥片石器 (2021—2033) 2021・2022は縦形石匙である。2022は両面が2次加工されている。2023は基部を折損した削器である。先端部と側縁が交わる部分には突出した小さな刃部が作られているのが特徴的である。2032は連続する小さな2次加工が左側縁に施された削器状石器である。2025は両端が折断面である折断石器、2027は左側縁に大きく奥行きの深い刃部をもつ抉

入石器である。2030は小さな2次加工が両側縁から尖頭部にかけて連続する。尖頭部先端の表面には櫛状の剝離がみられる。石錐の仲間あるいは彫器の可能性もある。2026・2028は2個1対の刃部をもつピース・エスキューである。2028では対辺に達する剝離が生じている。2031はピース・エスキューの刃部に似た剝離痕が上端に認められるが、対辺には小剝離痕が生じているだけである。2024・2029は使用痕のある剝片、2033は石核である。

石斧 (2034・2036) 2034は基部を折損している。折損面が器面と交わる稜は敲打され、再生されている。平刃・円刃の両刃石斧で、刃縁には磨耗痕がみられる。2036も基部の折損面を敲打することによって再生している。刃部は平刃・偏刃の両刃石斧で、刃縁には小剝離痕がみられ、磨耗している。不定方向の擦痕が両面に著しい。

礫石器 (2035・2037) 2点は折損した半円状扁平打製石器である。詳細は分からないが、いずれも周辺が2次加工されていて、2035では左側縁に磨耗痕が認められる。

遺構の時期 埋土中から出土した土器や占地、あるいは大型住居址に属する住居形態を参考にすると、この住居址は縄文時代前期前半期、土器分類群でいえば前期I群の時期に位置づけられるものであろう。

HIII-2 住居址 (第111図2038-2042)

土器 (2038-2042) 2038はほぼ底部だけが残っている。無文で、底部は揚げ底縁になっている。縄文時代後期の時期内に含まれるであろう。2039は単節斜縄文、2040は原体が不明な口縁部破片で、胎土には繊維を含む。2039は前期I群2類の土器である。2041は波状口縁で、わずかに複合口縁状になる。それ沿うものや横位の沈線が引かれるが、詳しいことは分からない。中期初頭大木7a式に相当するものであろう。2042は晩期前半の破片である。

遺構の時期 遺構の時期を決定できる遺物は出土していないが、周辺から検出され、同じような形態をもつHIII-3住居址ほかの住居址群を参考にすると、縄文時代前期前半期の時期内に位置づけることができるであろう。

HIII-3 住居址

遺構の時期 この住居址からの出土遺物はない。重複するHIII-1住居址群に切られていることや周辺から検出され、同じような形態をもつ住居址群を参考にすると、縄文時代前期前半期、土器分類群でいえば前期I群の時期に位置づけられるであろう。

HIII-4 住居址 (第112図2043・2044)

土器 (2043・2044) 2点は同一個体の破片で、斜位の単節斜縄文が地文である。胎土には少量の繊維を含んでいる。

遺構の時期 HIII-2住居址の所属時期を推定したのと同じ理由により、縄文時代前期前半期に位置づけられるであろう。

HIII-5 住居址 (第112図・第113図2045-2062、写真図版19・93)

土器 (2045-2059・2062) すべて縄文時代前期の土器である。2045は上半が残存し、口縁部は不規則に波打っている。2046・2062は底部を含む体部下半を欠く。3点は単節斜縄文を地文にし、胎土には繊維をわずかに含む。I群2類に分類できる。拓本土器はI群の土器が卓越する。口縁部破片は、2050が口縁部に綾絡文帯をもち、胎土には繊維を少量含む。I群1類に分類できる。2058も同一個体の破片である。2047は単節斜縄文、2053は斜位の燃糸文、2054は単節斜縄文が地文である。2052・2055は口縁部の部分では無文、2056は施文原体が確認できない。2047を除いては胎土に繊維を含んでいる。2052・2055・2056のほかはI群2類に分類できる。2057は隆帯が頸部にめぐり、その上と口唇端には指頭状押圧痕を伴う。口縁部にはLRと0段多条の原体の2種類が施文されている。胎土には少量の繊維を含む。2048・2049も同一個体の破片である。II群に分類できる。2051は絡条体圧痕が口縁部文様を構成するIII群の土器、2058は単節斜縄文が地文で、胎土には繊維を含む体部破片である。

剣片石器 (2060・2061) 2060は奥行きが深く規則的な2次加工が両側縁に施された複刃削器の破損品である。2061は2次加工による抉入部を先端部にもつ抉入石器である。

遺構の時期 床面から出土した2046を参考にする、縄文時代前期前半期、土器分類群でいえば前期I群の時期に位置づけられる。住居の形態は、周辺に分布するHIII-2住居址ほかに類似している。

HIII-6 住居址 (第113図2063・2064)

土器 (2063・2064) 2063はやや小型の土器の下半部で、形はいびつである。単節斜縄文が施文され、胎土には繊維を含む。2064は磨耗がひどく、施文原体は分からない。胎土には繊維を含む。

遺構の時期 重複関係や住居形態を参考にする、縄文時代前期前半期に位置づけられる。

HIII-7 住居址・HIII-8 住居址・HIII-9 住居址

遺構の時期 3棟からは遺物が出土していない。3棟は重複関係にあり、さらにHIII-6住居址やHIII-10住居址とも重複している。5棟は、そのもっとも古期に位置づけられる住居址の平面形のなかで、床面や壁を再利用しながら重複していることから、同時期・同系列の住居址群として位置づけられる。5棟を古い方から順に記すると、HIII-6住居址→HIII-7住居址→HIII-8住居址→HIII-9住居址→HIII-10住居址となる。

HIII-10住居址 (第113図2065-2071、写真図版93・124)

土器 (2065-2070) 縄文土器の破片が少量出土した。2068は、頸部をめぐる幅広の隆帯上に円形の刺突が加えられている。口縁部・体部とも不整な燃糸文が地文である。胎土には多くの繊維を含む。前期II群に分類できる。2070は羽状縄文が施文された体部破片で、胎土には織

維を含まない。前期Ⅰ群Ⅱ類である。2069は大木10式に相当する。縦位の単節斜縄文を充填した円形区画内と鱗状隆帯の上には刺突が加えられる。

剃片石器 (2065-2067) 2065は折り面交差型の彫器で、刃部は磨耗している。また刃部を構成する以外にも折り面がひとつある。2066は3面の折り面をもつ折断石器である。2067は表面を覆う2次加工の剥離面の形状や大きさからみて、削器の折損品であろう。ただ、裏面に生じている剥離面は奥行きが深く、互いに接しているのはビエス・エスキューに転用されたことによるものである。

礫石器 (2071) 長方形の断面をもつ細長い礫が素材である。左側面と裏面には擦痕がみられ、表面には浅い痕を伴っている。磨石と凹石の複合石器である。

遺構の時期 前述したように、この住居址はHⅢ-6住居址など4棟の住居址と重複し、そのなかで最新期に位置づけることができる。出土土器からは所属時期を決めることが難しいが、占地や周辺部から検出された住居形態に共通性をもつ住居址群との比較から、縄文時代前期半期の時期内に含まれることが推定できる。

HⅢ-11住居址 (第113図2072)

土器 (2072) 無文の土器片で、後期に入るものかもしれない。

遺構の時期 重複するHⅢ-12住居址群に切られ、部分的に残存していたにすぎない。その新旧関係から推定すると、この住居址は縄文時代前期前半期に位置づけられるであろう。

HⅢ-12住居址群 (第113図-第118図2073-2191、写真図版93・94・124・125)

土器 (2073-2136) 縄文時代前期～後期の土器が出土し、前期のものが卓越している。前期Ⅰ群Ⅰ類の土器のうち、2074・2076・2093は口縁部に綾絡文帯がある。それぞれは胎土に繊維を含む。2134は口縁部が外反し、燃紐圧痕2条がめぐる。横位の単節斜縄文が施文され、体部には横位の綾絡文1条を伴う。裏面は、口唇部から5cm±の幅の部分に外面と同じ原体が施文される。胎土には繊維を含む。2073は同一個体の破片である。地文だけをもつ口縁部破片の多くは前期Ⅰ群Ⅱ類に含まれる。単節斜縄文を地文とするものが多いが、2090-2092ほか複節斜縄文、2106が燃糸文、2075が網目状燃糸文、2086・2089が非結末の羽状縄文である。2097は、横位の綾絡文1条が口唇部にめぐる。多くは胎土に繊維を含むが、2075・2078・2080-2082・2086・2089・2105は繊維を含まない。

2080は口唇端に小波状貼付文を伴う。口縁部は幅広の無文帯になり、その下位には単節斜縄文が施文されている。2107は口唇端に小貼付文を伴う。貼付文には剝落する部分があるため、全体の形状は分からない。口縁部は狭い無文帯になり、それに接した部分および間隔をおいた体部の部分には横位の綾絡文を伴う。その間は非結末の羽状縄文である。2122は同じ個体である。2123は口唇端に浅い刻みを伴い、その下方に瘤状貼付文をもつ口縁部破片である。他には

円形竹管文が文様を構成するが、破片のため詳しいことは分からない。以上の土器は胎土に繊維を含まない。I群2類に分類できる。

前期II群に分類できるのは2084ほかである。2084・2085は幅の広い隆帯を頸部に伴い、その上には円形の刺突が加えられている。2085は口縁部・体部ともに縦位の縞糸文が施文される。2084は磨耗しているため、施文原体が分からない。2点は多くの繊維を胎土に含む。なお、2087は2085と同一個体の破片である。

底部を含む破片は6点である。すべて胎土に繊維を含んでいる。体部地文は2114が網目状縞糸文、2118が無文である以外は単節斜縄文である。2124は底部外縁が張り出し、外面には刺突文が規則的に並ぶ。2114・2118のうち、2118は底部外縁が張り出す。2点は底部外面に圧痕を伴う。小破片のため詳しくは分からないが、いずれもスグレ状圧痕などではなく、刺突状あるいは沈線状の圧痕である。2114・2116・2118・2124は前期I群2類に分類できる。2108ほかの体部破片のうち、2120・2121をはじめ単節斜縄文を地文にするものが多いが、2111が複節斜縄文、2125は太い縞糸文、2110は附加条である。

以上が前期土器群である。体部破片2128は縦位の綾絡文と無節斜縄文をもつ。2129・2133も同一個体の破片である。中期前葉の時期に含まれるであろう。2126は波状口縁になる。口縁部には横2列の爪形文が施文され、頸部には低い隆帯がめぐる。体部は、低い隆帯とそれに沿う沈線による楕円形文が文様を構成する。2127は同一個体である。弧状の低い隆起線に円形竹管文を伴う2135とともに大木9式に、また2131は大木10式に相当する。2132・2136は後期前葉の土器で、立石遺跡第III群第5類などと同時期である。

剃片石器 (2137—2172・2174—2184) 石数は3点である。2137・2139は無茎平基、2138は無茎尖基である。縦形石匙は2140・2142・2145の3点、横形石匙は2141・2143の2点である。そのうち、2142はつまみ部を失っている。2144は両面加工された鐮状石器である。2146—2148は削器である。2146は1辺が折断され、その対辺に直刃の刃部が作られる。2147・2148も直刃削器である。2151は凸形の刃部をもつ削器状石器、2150は搔器である。折断石器は8点である。折り面の数は、1面が2153—2155・2162・2169、2面が2152・2159、3面が2158である。刃部に2次加工が施工されているのは2152・2159・2162で、他は微細～小さな剝離痕によって刃部が識別できる。2153は折り面と剝離面が交差する尖頭状部分が磨耗し、微細な剝離痕が生じていることからみて、彫器とすることができるものかもしれない。複数の折り面をもつ2152・2158でも、鋭利な刃部をもつほかに、折り面交差部に小さく細長い櫛状の剝離痕が生じている。

彫器は4点である。いずれも折り面型で、折り面交差型が2160・2166、折り面—古剝離面交差型が2156・2170である。刃部には刃こぼれとみられる微細な剝離痕が生じている。2166は刃部を構成する折り面以外にも2面の折り面をもつ。2170は、彫器刃部の対辺に表面からの2次

加工が施され、鋸歯縁状の刃部になる。2149・2157は2個1対の刃部をもつピエス・エスキーユである。2149は横長の2辺が刃部で、両面に大きな階段状の剝離が生じている。2157は、上端からの大きく奥行き深い剝離痕が裏面に生じているが、対辺に小さな剝離痕のみみられるだけである。挟入石器2161・2163・2167は1個、2168は2個の刃部をもつ。2167・2168では挟入部の刃部以外の縁辺にも微細な剝離痕が連続している。2164は尖頭部先端を折損しているが、石錐である。2165・2171・2174は尖頭石器である。2165は右側縁を折断し、その折り面と表裏面が交わる稜線部に角度の小さな2次加工を施している。2174は長さ8.9cm・幅6.9cmと大型である。基部形態は凹基で、2次加工は基部を除いた表面の部分に連続している。2171は尖頭部先端を折損している。基部を除いた周辺の両面に2次加工が施されている。使用痕のある剥片は11点と多い。番号をあげると、2172・2175—2184である。そのうち、2175・2176・2178—2182は同一母岩から剝離されたもので、石質は玉髄である。

石斧 (2173・2185) 2173は両刃の小型打製石斧で、剥片を素材にし、両面加工している。2185は基部を折損した小型の磨製石斧である。刃部は偏刃・片刃になる。裏面は刃縁寄りの一部が研磨されているだけである。

礫石器 (2186—2191) 半円状扁平打製石器は2点が出土している。2186は両端に浅い挟入部が作られたI—B型、2187はII—A₂型である。いずれも左側縁に磨耗痕が著しい。2188・2190は磨石である。2190は扁平な亜円礫が素材で、使用による平坦面が側面の一部に形成されている。2189は一面に浅い痕痕を伴った凹石である。2191は有孔礫石である。扁平な亜円礫の両面および1側面に幅7mm±の深い溝が認められる。

遺物の時期 2081をはじめとする床面からの出土土器はほとんどが前期I群に分類できるものである。それらや埋土からの出土土器を参考にすれば、この住居址群のうちの最新期のものは縄文時代前期前半期、土器分類群でいえば前期I群の時期に位置づけられるものである。

この住居址は大型住居とすることができる形態をもつ。長軸23.0m±×短軸8.2m±範囲内には、同時期同系列の住居址群が多数重複して存在している。

HIV区

HIV—1住居址 (第118図—第120図2192—2218、写真図版19・125・149)

土器 (2192—2197) 2192は高坏形土器の脚部である。やや小型で、全面にケズリ痕が著しい。2193—2197は縄文時代前期の土器である。I群I類に分類できる2194は口縁部に綾絡文帯をもつ。口唇端が押圧されて小波状になる2195、単節斜縄文が施文された2193はI群2類に含まれる。底部の一部を含む2196・2197は単節斜縄文が地文で、2196の底部は外縁が張り出すとともに外面に沈線状の圧痕1条を伴う。2196はI群2類に分類できる。前期の土器はいずれも

胎土に繊維を含む。

剥片石器 (2198-2211) 2198は縦形、2199は横形の石匙である。2204・2211は削器状石器で、2204は刃部の一部を欠いている。2201は基端に折り面をもつ小型の折断石器である。2205は大型の厚い剥片を素材にしたピエス・エスキューで、2個1対の刃部をもつ。刃部の剥離痕は両面に生じていて大きく、奥行きは深い。2206-2209の4点は抉入石器である。2209が1個である以外は2個の刃部をもち、2206ではその2個が接している。2200は鈍い角度の先端部に2次加工を施している。先端部は磨耗し、石錐のような機能をもつものであろう。2210は使用痕のある剥片である。

礫石器 (2212-2218) 半円状扁平打製石器は5点で、そのうち2点は折損している。2217はI-A₂型で、下端に抉入部をもつ。右側縁にある背部は打ち欠かれて作られ、刃部は上端から左側縁上半の部分に磨耗痕が著しい。II-A₂型の2212は長さ16.7cm・幅12.7cmと大型である。表面と背部には自然面を残すが、裏面は粗削りされている。刃部は、磨耗痕が左側縁にわずかに認められる以外は鋭利である。2216はII-B型で、刃部は、奥行きは浅い小さな2次加工が両面に施されたあと研磨され、鋭利である。折損した2213・2214は折損面よりも新しい研磨痕がみられ、2214に特に著しい。折損後も使用されていることが考えられる。2218は扁平な亜角礫を素材で、主に長軸方向に走る擦痕が両面および上端をのぞいた両面に著しい。右側縁の一部には小さな剥離痕がある。形状からは半円状扁平打製石器の未製品のようにもみられるが、確実ではなく、磨石の一種に含めておく。2215は両刃石器である。やや扁平な亜円礫を素材にし、加撃による両面加工が施された刃部は鋭利である。

遺構の時期 一括の土器群はHIV-2住居址群と重複する部分の埋土から出土している。しかし、埋土はHIV-2住居址のそれと明確な差は認められなかったため、それぞれに固有のものとして分離することができなかった。したがってHIV-2住居址群の遺物として掲載した2219-2221は両者に共通のものである。重複の在り方をみると、柱穴や壁の再利用にとどまらず、床面も再利用されていた可能性があり、時間的には接近した関係にあったものと推定できる。以上の点から、この住居址およびHIV-2住居址群は縄文時代前期前半期、土器分類群でいえば前期I群の時期に位置づけられるであろう。

HIV-2住居址群 (第120図-第122図2219-2236、写真図版19・94・125・150・156)

土器 (2219-2228) 2225を除いては縄文時代前期の土器である。2219・2221は下半を失っている。2221は横位の単節斜縄文を地文とするほか、口縁部付近に1条～2条、体部上部および中部に1条ずつの横位の綾絡文を伴うが、それは断続的な施文である。2219は複節斜縄文が部分的に認められる。2個1対の補修孔を伴う。2220は上半を失っている。体部はやや内湾し、底部の外縁は強く張り出している。底部の作りはI型、地文は横位の複節斜縄文である。

2219と2220は胎土に繊維を含むが、2221は含まない。以上の3点はI群2類に分類できる。

拓本土器2222・2223・2227は単節斜縄文が地文で、2222の口唇端には刺突文が連続する。2224は幅の広い隆帯が頸部にめぐり、その上には円形の刺突文が連続する。口縁部・体部とも磨耗しているため、施文については不明である。2225は無文帯をもつ口縁部破片である。2228は約1/2が残る底部破片である。外縁がやや張り出し、外面の周辺部には刺突文が規則的に施文される。2226も底部の一部を含み、体部には横位の単節斜縄文が施文され、底部外縁はやや張り出している。以上のうち、2225を除いては胎土に繊維を含む。2222・2223・2227・2228はI群2類に分類できる。2224はI群1類あるいはII群に含まれる。

石斧 (2230) 定角磨製石斧である。基端と刃部の一部が破損しているが、刃部の破損部には微細な剝離痕が生じており、そのまま再利用したものであろう。

礫石器 (2231・2232・2234—2236) 4点が半円状扁平打製石器である。2231・2235がII-A型、2232・2236がII-B型である。2231の両面には擦痕が認められ、表面には磨ったことによる緩やかな凹面ができています。2235は2次加工面を研磨し、右側縁にある背部にも打ち欠いたあとの研磨を施している。2236の左側縁下半は成形後の折損ではなく、形を作り出す粗削りの段階で生じた不ぞろいを修正しないまま製品としたものである。刃部は2次加工のあとに研磨されている。磨耗痕は左側縁の上半に著しい。2234は凹石である。くぼみは両面にあるが、浅い痕で、形状も不定形である。

石製品 (2231) 1/2を失った扶杖耳飾りである。石質は緑泥石片岩、長さは2.6cmである。左上方には両面から回転穿孔された小孔を伴っている。

遺構の時期 HIV-1住居址の項に述べているため、省略する。

HIV-3住居址 欠番

HIV-4住居址 (第122図2237—2252、写真図版94)

土器 (2237—2245) すべて縄文時代前期に位置づけられる。2241は口縁部に綾絡文帯をもつI群1類の土器である。2240は撚糸文が斜行し、口唇端には指頭状押圧痕を伴う。2237・2239は単節斜縄文、2238は複節斜縄文を地文とする口縁部破片で、I群2類に分類できる。2244・2245は底部の一部を含む破片である。2244は底部外縁が張り出し、2245の底部外面には刺突文が点在する。2245はI群2類の土器である。2243は条の間隔が広い撚糸文、2242は多軸絡条体を地文とする体部破片である。2243はI群の仲間に含まれ、2242はII群あるいはIII群の土器であらう。

剝片石器 (2246—2251) 2247は両面加工された削器の破損品、2246は削器状石器である。2250は4個2対の刃部をもつピエス・エスキーユである。剝離痕は両面に生じている。2248も、相対する2辺に生じた剝離痕の大きさや形状からみて、ピエス・エスキーユになる。2249は基

部が両面から2次加工され、2251は基部の裏面に不規則な2次加工が施されている。

礫石器 (2252) 半円状扁平打製石器の折損品である。左側縁は磨耗し、上端から右側縁にかけては一部を打ち欠いて背部にしている。なお折れた面よりも新しい研磨痕が部分的にみられ、折損後も使用されていたことが考えられる。

遺構の時期 埋土中の土器や占地などを参考にすると、縄文時代前期前半期、土器分類群でいえば前期I群の時期に位置づけられるであろう。

HIV-5 住居址

遺構の時期 重複するHIV-4住居址の貼り床下に検出されたもので、固有の遺物を欠いている。重複関係や占地、周辺に分布する類似の住居形態をもつ住居址群との比較から、縄文時代前期前半期、土器分類群でいえば前期I群の時期に位置づけられるであろう。

HIV-X 住居址

遺構の時期 重複するHIV-4住居址に切られ、それに床面が再利用される形で存在した住居址のため、固有の遺物を欠いている。重複関係や占地・住居形態からは、縄文時代前期前半期、土器分類群でいえば前期I群の時期に位置づけられるであろう。

HIV-6 住居址 (第122図-第124図2253-2270、写真図版20・94)

土器 (2253-2267) すべて縄文時代前期に位置づけられる。2254・2255は円筒形の甕形をもち、2254が太い単節斜縄文、2255が網目状燃糸文を地文にする。2点は胎土に少量の繊維を含み、I群2類に分類できる。2264は器高が18.5cm±である。体部はかなり外傾している。向い合う位置になる口唇端の2カ所には小波状～鋸歯状貼付文を伴う。その間は指頭状押圧痕が施されるが、中間の向い合う位置に、先の貼付文よりは短かい剝落痕がみられ、本来は長短がある4個2対の貼付文をもつものであったろう。体部は、縦位の綾絡文が密な状態で施される以外、無文である。底部は外縁が貼り出している。胎土には繊維を含まない。これもI群2類に分類できる。2253・2256は底部を含む体部下半が残存している。2253はやや揚げ底様になる。いずれも単節斜縄文が地文で、胎土には繊維を含んでいる。

拓本土器2260は、単節斜縄文を施したあと、口縁部に同一原体を横2列に押圧し、口唇端には指頭状押圧痕を伴う。胎土にはやや多くの繊維を含む。2257は同一個体の破片である。2258・2259・2263は口縁部に綾絡文帯をもつ。それぞれは繊維をわずかに含む。以上の土器はI群1類に分類できる。2265は網目状燃糸文が地文である。胎土にはやや多くの繊維を含む。2261・2262は糸の間隔が開いた斜位の燃糸文、2266・2267は単節斜縄文が地文である。そのうち、2266は縦位の綾絡文1条を伴い、2267のわずかに残った底部外縁には沈線状の圧痕2条が認められる。いずれも胎土に繊維をわずかに含む。分類群I群2類に分類できるのは2265・2267で、2261・2262もI群には含まれる。

剥片石器 (2268・2269) 2点は折断石器である。2268は基部と先端部が折断され、折り面に挟まれた短かい1辺には小さな剝離痕がみられる。2269は3面の折り面があり、刃部はそれに挟まれた2辺である。刃部には2次加工が施され、1辺では急傾斜である。

礫石器 (2270) II-A₂型の半円状扁平打製石器である。両面と上端の一部から右側縁にある背部は自然面である。左側縁は磨耗が著しい。

遺構の時期 遺物の多くは埋土下部から出土したものである。それらを参考にすると、縄文時代前期前半期、土器分類群でいえば前期I群の時期に位置づけられるであろう。

HV-7 住居址 (第124図2271-2275、写真図版125)

土器 (2271) 口唇部が外反している。磨耗しているため、綾絡文が下端にみえる以外、施文については不明である。胎土には多くの繊維を含む。

剥片石器 (2272-2275) 2273は両面加工された刃部からみて、削器の折損したものである。2274は分厚い剥片が両面加工され、先端部には奥行き深い規則的な2次加工が施された匱状石器、2272・2275は使用痕のある剥片である。

遺構の時期 検出面の層位や周辺に分布する類似の形態をもつ住居址群との比較から、縄文時代前期前半期に位置づけられる。

HV区

HV-1 住居址 (第124図2276、写真図版156)

石製品 (2276) 挾状耳飾りの完形品である。大きさは、長さ4.2cm・幅3.7cm・厚さ0.4cmで、石質は珪質緑色細粒凝灰岩である。切込部には擦切りの痕跡をよくとどめている。

遺構の時期 出土遺物は床面から出土した2276以外にない。住居形態などからも所屬時期の特定ができないため、不明としておく。

HV-2 住居址 (第124図・第125図2277-2297、写真図版20・95・125)

土器 (2277-2291) 縄文時代前期の土器のほか、中期などのものがある。2277は上半を失っているが、かなり大型のものになると推定できる。底部は平底で、外縁が部分的に張り出している。横位の単筋斜縄文が施文され、胎土には繊維を多く含む。拓本土器2278・2279は口縁部に綾絡文帯をもち、2279は口唇端に1個の指頭状押圧痕を伴う。2点は胎土に繊維を多く含む。I群1類に分類できる。2281-2283は底部の一部を含む破片で、2281は沈線状圧痕、2283は同様の圧痕と刺突文が底部外面に認められる。いずれも胎土には繊維を含み、I群2類に分類できる。2282は底部外縁が張り出す。燃糸文が地文で、胎土には繊維を多く含む。やはりI群に含まれる。2286は斜位の刻みを口唇部に伴い、その下位には平行沈線がめぐる。体部地文は木目状燃糸文と推定される。IV群に分類できる。なお2289は同一個体の破片である。2280・

2284は木目状燃糸文をもつ体部破片で、Ⅲ群2類あるいはⅣ群の土器である。

以上が前期の土器である。中期末葉大木10式に相当するのは2288である。2290・2291は中期末葉～後期初頭に含まれるであろう。2287は口唇部が無文である。中期後葉以降の土器であろう。2285は、やや幅の広い横線で区画するとともに、縦位の沈線が密に引かれている。所属時期は不明である。

剥片石器 (2292—2296) 2292・2293は縦形石匙である。2292は細身で、先端部の一部を失っているが、長さは10.6cmを測る。両面は2次加工面に覆われる。2293は急傾斜の2次加工が施されている。2295は打面を除いた周辺の両面に2次加工を施した削器である。2294・2296は折断石器である。2294は折りに挟まれて向かいあう2辺に小剝離痕を生じている。2296は折面を交差させ、その対辺を刃部としている。刃部には小剝離痕を生じている。

礫石器 (2297) 卵形をした円礫で、器面は滑らかである。小型であり、磨石あるいは石弾の可能性はある。

遺構の時期 遺物の出土状況から、遺構編では、埋土上層部への廃棄形態がみられるとしている。2277や2279・2281・2283などはそれらの一部を構成する土器である。2277の確実な所属時期が分からないが、それらの土器や占地・住居形態などを参考にすると、縄文時代前期前中期の時期のなかには含まれるであろう。

HV-3 住居址 (第125図・第126図2298—2309, 写真図版20)

土器 (2298—2306) すべて縄文時代前期に位置づけられる土器である。2299は口縁部を含む上半の一部が残っているにすぎないが、口径41cm±と大型である。口縁部には幅5.5cm±の整然とした綾格文帯が形成され、体部には単節斜縄文が施文される。口唇端には縄文原体が広い間隔をおいて斜めに押圧されている。胎土には繊維をやや多く含む。Ⅰ群1類に分類できる。2304は指頭状押圧痕が口唇端に連続している。体部には単節斜縄文が施文され、胎土には繊維を含む。2298は底部の一部を含む下半の残存である。地文は単節斜縄文である。磨耗しているためにはっきりはしないが、底部外面には刺突痕がやや密な状態で並んでいる。胎土には多くの繊維を含む。2304と2298はⅠ群2類に分類できる。

拓本土器はすべて胎土に繊維を含む。2300・2305は単節斜縄文、2301は磨耗して施文原体が不明な口縁部破片である。2300・2305はⅠ群2類に含まれる。底部を含む破片2302・2303・2306のうち、2302・2306は底部外縁が張り出している。2302は底部がわずかしか残っていないが、やや規則的にならぶ刺突文を外面に伴い、Ⅰ群に含まれる。

剥片石器 (2307・2308) 2307は打面を失っていて、両側縁に微細剝離痕が認められる。2308は剥片である。

礫石器 (2309) 折損した磨石である。断面が三角形の細長い礫で、3面が使用面になる。

また稜線部のひとつには使用によって幅の狭い平坦面が形成されている。

遺構の時期 埋土中の土器や占地・住居形態などを参考にすると、縄文時代前期前半期、土器分類群ではいば前期Ⅰ群の時期に位置づけられるであろう。

HV-4 住居址 (第126図・第127図2310—2335, 写真図版20・21・95・125)

土器 (2310—2325) すべて縄文時代前期に位置づけられる。2313は器高が26cmで、円筒形の器形を示す。底部の大部分を失っているが、外縁はやや張り出している。複節斜縄文が地文で、胎土には少量の繊維を含む。2312は下半を失っている。横位の単節斜縄文が地文で、口唇端には円形の刺突文が連続してみられるが、全周に施されるものではない。胎土には少量の繊維を含む。2310・2311は底部を含む体部下端が残っている。2310の底部はやや揚げ底様になり、外縁は若干張り出している。体部地文は、2310が太い単節斜縄文、2311が縦位の太い燃糸文である。2点は繊維を含まない。2312・2313はⅠ群2類に分類できる。

拓本土器2316は幅4cm±の綾絡文帯が口縁部にあり、その下位には燃糸文が施文される。2322・2325は同一個体の破片であり、前述の2311はこれらの底部になる。2317・2323は接合しないが、同一個体の破片である。口唇部と頸部にはやや太い沈線帯が1条ずつめぐり、その間は無節の綾絡文帯になる。2点からはその幅が7cm±と推定できる。口唇端には指頭状押痕が連続し、小波状口縁になる。胎土には少量の繊維を含む。以上の土器はⅠ群Ⅰ類に分類できる。2318は内外面および口唇端に単節斜縄文が施文される。2324は口縁部から一定幅に単節斜縄文が施文され、その下位には不整な燃糸文が横方向へ施文されている。2点は胎土に少量の繊維を含み、2318はⅠ群2類に含まれる。2321は幅の広い陰帯が頸部にめぐり、その上には横2列の円形竹管文が施文される。口縁部には斜行する条がみられるが、磨耗しているため施文原体は不明である。胎土には少量の繊維を含み、Ⅱ群に分類できる。

剥片石器 (2326—2332) 2327は半円状の剥片のほぼ全周に両面加工を施した削器である。2326は打面を失っていて、左側縁から先端部にかけて小さな2次加工が連続する削器状石器、2328は折損した尖頭石器である。2329は先端部の一部に小さな抉入部が作られた抉入石器である。2332は分厚い剥片で、裏面は不規則な凹面に覆われている。2330・2331は使用痕のある剥片である。2330は抉入部も刃部に含まれる。

礫石器 (2334・2335) 2点は半円状扁平打製石器である。2334はⅡ-A₂型、2335は一端が背部になるⅡ-A₂型である。2334の刃部は全体に鈍い。

その他 (2333) 扁平な小型の円礫である。加工痕や使用痕は認められない。石質は粘板岩質チャートで、遺跡とは隔たった北部北山地上山地古生界が産地である。

遺構の時期 遺物はいずれも埋土から出土したものである。それらを参考にすれば、縄文時代前期前半期、土器分類群では前期Ⅰ群の時期に位置づけられるであろう。

HV-5 住居址 (第128図2336-2338)

土器 (2336-2338) いずれも体部の小破片で、2336・2338は単節斜縄文、2337は細い撫糸文を地文にする。3点は胎土に繊維を含み、縄文時代前期に位置づけられる。

遺構の時期 重複するHV-4住居址に切られ、床面の一部はそれに再利用されている。そのことからみて、縄文時代前期前半期、土器分類群でいえば前期I群の時期に位置づけられるであろう。

HV-6 住居址群 (第128図2339-2341)

切片石器 (2339・2340) 2339は縦形石匙である。両側縁は破損とみられるが、その2面に挟まれた短い1辺には小さな2次加工が施されている。2340は使用痕のある切片である。

礫石器 (2341) II-A₂型の半円状扁平打製石器である。背部は一端にあり、刃部は左側縁の一部を除いては鋭利である。

遺構の時期 埋土から土器が出土しているが、不明である。重複関係や占地からこの住居址の所属時期を推定すると、縄文時代前期の時期内には含まれるものとみられる。

HV-7 住居址 (第128図・第129図2342-2354, 写真図版21・95・125)

土器 (2342-2354) 2342は残存状態が良くないが、縄文時代後期前葉十腰内I式に相当する甕形土器である。体部半ばを横3列の平行沈線で区画し、上半には曲線的な文様を描く。他は無文である。拓本土器2344・2346は単節斜縄文が地文で、胎土には少量の繊維を含む。前期I群2類に分類できる。2343・2345は前期III群2類に含まれる。口縁部の文様はともに絡条体匠痕による。2345は刺突文を伴う横2列の隆帯が頸部にめぐり、結束第1種羽状縄文が体部に施文される。2348は単節斜縄文、2347は木目状撫糸文を地文にする体部破片で、2348は繊維を含む。

切片石器 (2349-2353) 2349は無基平基の石匙、2350は縦形石匙、2352は破損している横形石匙である。2351は搔器である。2353は断面が三角形の分厚い切片で、尖頭部先端には小さく細長い数条の槌状剝離痕がある。

礫石器 (2354) 扁平な亜円礫を素材にした磨石である。器面は滑らかであり、側面の一部には磨ることによって生じた平坦面が形成されている。

遺構の時期 2342とそれ以外の土器は出土した層準を異にする。出土土器や住居址間の重複関係・住居形態などを参考にすると、縄文時代前期の時期内に位置づけられるであろう。

HV-8 住居址

遺構の時期 固有の遺物を欠いている。重複するHV-7住居址に切られていることからみて、この住居址は縄文時代前期の時期内に位置づけられるであろう。

HV-9 住居址 (第129図・第130図2355-2386, 写真図版21・95・125・150)

土器 (2355—2372) 出土土器は縄文時代前期のものが卓越し、他には中期・後期のものがある。2355は口縁部を含む上半の一部が残っている。複合口縁状の上には小波状貼付文が1/4周毎につけられる。地文のLRは貼付文の上にも一部施文されている。器形的な特徴や貼付文からみて、中期前葉大木7a式あるいは大木7b式に相当するものであろう。

拓本土器は2356—2369が前期に属する。2357は指頭状押圧痕が口唇端に連続し、口縁部はやや幅広の無文帯となる。その下位には横位の綾絡文数条を伴う。胎土には繊維を含まない。2358は口縁部に2条の綾絡文、間隔をおいた下方にも1条がめぐり、2359は口縁部が無文帯になり、それに接して1条の綾絡文、その下位には羽状縄文が施文される。2358は胎土に繊維を含むが、2359は含まない。他の口縁部破片は、2360・2364・2365が単節斜縄文、2361は施文原体が不明で、いずれも胎土には繊維を含む。2367は網目状捺糸文を地文にした体部下端の部分である。以上は2361をのぞいてはI群2類に分類できる。2356は幅の狭い頸部隆帯と口唇端に爪形文が施文され、口縁部および体部は単節斜縄文を地文にする。胎土には繊維をやや多く含む。II群に分類できる。2369はIII群2類の土器である。2366は0段多条の原体による結束第1種羽状、2368は木目状捺糸文を地文にする体部破片で、2366はII群—IV群、2368はIII群2類あるいはIV群の土器である。

前期以外の土器では、大木10式に相当する2371、貝島貝塚第II群土器に類似して、後期前葉に位置づけられる2372がある。2370も後期あるいは晩期の粗製土器である。

剝片石器 (2377—2384) 2377・2381は凸刃、2382は横形の削器である。2385は基部が折断されており、2379とともに削器状石器に含まれる。2380は2面の折り面をもち、それに挟まれた短かい縁に小さな剝離痕がある。2383は2個1対の刃部をもつピエス・エスキーユで、剝離痕は両面に生じている。2384は粒径1.4cmの小さな剝片で、円に近い形状である。縁の3カ所に小さな剝離痕がみられる。

礫石器 (2373・2374・2376・2385・2386) 半円状扁平打製石器は3点が出土しているが、2373・2374は折損している。2373は雲母片岩が素材で、右側縁から下端が背部、2374は右側縁が背部になる。2385は上端に浅い抉入部が形成されたI—B型である。左側縁は磨耗痕が著しい。2376は扁平な亜円礫が素材で、擦痕を伴った平坦面が側面の一部に形成された磨石である。2386は浅く細長い潰痕が表面にみられ、凹石になるであろう。

石製品 (2375) 軟質な複輝石安山岩を素材にした袂状耳飾りで、ほぼ半分を失っている。現存長は6.5cmで、切込部分が高いのに対して、孔が小さいのが特徴である。

遺構の時期 埋土からの出土土器や占地・住居形態などからみて、縄文時代前期の時期内に位置づけられるであろう。

HV—10住居址 (第130図2387—2391, 写真図版95)

土器 (2387—2389) 2387は幅3.5cm土の綾絡文帯をもつ縄文時代前期I群1類の土器である。2389は底部の一部を含む破片で、単節斜縄文が地文である。底部外縁が張り出す特徴をもつ。前期I群の土器である。2点は胎土に繊維を含む。2388は無文の口縁部破片で、胎土には繊維を含まない。

剝片石器 (2391) 左側縁を折断し、刃部になる対辺には小剝離痕がみられる。

礫石器 (2390) 凹石である。深い潰痕が細長い亜円礫の表面に連続し、幅の広い溝状のくぼみになる。

遺構の時期 埋土中の土器や占地・住居形態などを参考にすると、縄文時代前期の時期内に位置づけられるであろう。

HV—11住居址 (第130図・第131図2392—2403, 写真図版21・95)

土器 (2392・2401) ほとんどが縄文時代前期に属する土器である。2401は大型の破片である。頸部の区画帯は隆帯状の部分をはさむ上下に円形竹管文が連続する。やや外反する口縁部には、横3列の燃紐瓦痕を口唇部にめぐらし、その下位には結東第1種羽状縄文を施文する。口唇端にも頸部同様、円形竹管文を連続して施文している。体部は残存部が少なく、施文については不明である。胎土には繊維を含み、II群に分類できる。拓本2396は同一個体の破片である。2392は1条の綾絡文が口唇部にめぐり、複節斜縄文を地文にする。同じ原体は口唇端にも施文されている。2397は横位の綾絡文2条と単節斜縄文が施文された体部破片である。2点は少量の繊維を含み、前期I群2類に分類できる。2395は燃りの方向を異にした2本1組の燃紐を口縁部に押圧したIII群の土器である。2398・2399は木目状燃糸文、2400は燃糸文をもつ体部破片で、2398・2399はIII群2類あるいはIV群に含まれる。2394は一部に縄文の条がみられる以外は無文である。胎土には繊維を含まないが、前期のものであろう。2393は中期以降のものと推定できる。

剝片石器 (2404—2414) 2404・2413は尖頭石器である。2404は石態に分類できるものかもしれないが、左右非対称であるためにここに含めた。2413は基部を失っている。2412はつまみ部をもつ石錐である。2405は折損しているが、弧状の部分に2次加工された削器、2407は直刃削器である。折断石器は4点である。折り面の数は、2408・2411が1面、2406・2410が2面である。2406は小剝離痕が先端部にあるが、折り面が交差する部分にも小剝離痕が生じていることからみて、彫器との複合であろう。2409は折り面—古剝離面交差型の彫器、2414は打面を失っているが、先端部は、加撃による2個の小さな抉入部が接している鋸齒縁石器である。

礫石器 (2402・2403) 2403は折損している半円状扁平打製石器である。1側縁が分厚い自然礫を素材にし、両面加工による刃部が反対縁に作られている。刃部には磨耗痕が著しい。2402は扁平な亜円礫の両面に使用痕を伴った凹石である。表面には深い円形の2個のくぼみがあり、

裏面では不整形なくぼみが集合している。

遺構の時期 埋土から出土した土器や占地・住居形態などを参考にすると、縄文時代前期の時期内に位置づけられるであろう。

HVI区

HVI-1 住居址 (第131図2415-2421、写真図版125・149)

剥片石器 (2416-2421) 2416-2419の4点は有蓋石鏃であるが、いずれも茎部の一部を失っている。2420はアメリカ式石鏃で、先端部と茎部の一部を失っている。2421は2個1対の刃部をもつピエス・エスキューである。上端の刃部は奥行き深い階段状剝痕を示すが、下端の刃部の剝痕は小さい。

礫石器 (2415) 小型の垂円礫である。小さなくぼみが両面に1個ずつあるほか、潰痕が側面に連続してみられる。凹石と敲石の複合石器である。

遺構の時期 遺構の保存状態が悪く、住居形態などの詳細は不明である。しかし、占地や地床炉の存在から推定して、縄文時代前期～中期中葉の時期内に位置づけられる可能性をもつものである。 (三浦 謙一)

HVI-2 住居址 (第131図・第132図2422-2428、写真図版150)

土器 (2422-2426) 2422は無文の口縁部である。2423は口縁部文様帯に縹紅瓦痕で幾可学文が描かれる。2424-2426は体部片で、2424は縹赤文、2425・2426は単節縄文の縦回転施文を地文とする。2423は縄文時代前期第III群に分けられる。

剥片石器 (2427) 1辺が折断され、1個の刃部をもつ折断石器で、正方形を呈する。

礫石器 (2428) 複輝石安山岩を素材とする石皿である。成形加工で皿部の外周に縁状の高まりが作られる。

遺構の時期 炉や床面から出土した時期決定資料を欠くが、複式炉系統の炉をもつことや周囲の遺構のあり方からみて、縄文時代中期後葉～末葉に位置づけられよう。 (佐々木 勝)

HVI-3 住居址 (第132図2429-2445、写真図版21・25)

土器 (2429-2443) 2429は器高16cm±とやや小型である。体部は外傾して立ち上がり、さらに口縁部が外反する。口縁部と体部下端が無文で、その間には斜位の単節斜縄文が施文されている。器形や胎土などから縄文時代中期後葉を中心とした前後に位置づけられるものかもしれない。拓本土器2430は同一個体の破片である。

2431-2434は前期の土器である。そのうち、2431・2432はIII群2類に分類できる。2432は、絡条体瓦痕と刺突文が口縁部の文様を構成し、体部には結束第1種羽状縄文が縦位に施文される。2434は刺突文をはさむ上下に爪形文が施文された頭部の部分、2433は多軸絡条体を地文に

する体部破片である。2434はII群あるいはIII群、2433はIII群の時期に含まれるものであろう。

前期以外の土器では、2437は複節斜縄文に3条の平行沈線を伴うことからみて大木8b式、2438・2439は大木9式に相当する。2438は沈線区画帯内に刺突文を伴う。2440・2443は大木10式に相当、2435は無節斜縄文の上に沈線によって文様を描いた中期末葉の土器である。2436は後期～晩期に含まれる。2441は縦位の燃糸文、2442は櫛歯状沈線文を地文にする体部破片である。

剥片石器 (2444・2445) 2444は小さな挟入部が右側縁に連続した鋸歯縁石器、2445は使用痕のある剥片である。

遺構の時期 他の遺構と重複する部分が多いうえ、残存状態が不良である。しかし、遺構間の新旧関係や地床炉の存在などからみて、縄文時代前期の時期内に位置づけられるであろう。

HVI-4 住居址

遺構の時期 固有の遺物を欠いている。住居址間の重複関係からみて、縄文時代前期～中期の時期内に位置づけられるであろう。 (三浦 謙一)

HVI-5 住居址 (第132図—第134図2446—2466、写真図版21・95・157)

土器 (2446—2461) 2446は深鉢形土器の体部下半である。地文は単節縄文を縦回転で施文する。2447は小型の粗製深鉢形土器で、縦回転の無節斜縄文を地文とする。外反する口縁部には横回転で施文され、不規則な山形文様を呈する。2448・2451は幅の広い無文の口縁部をもつ広口壺形土器で、頸部には連続刺突文を配した2条の沈線が巡る。2448の体部には沈線で楕円文や∩形文が描かれ、楕円文内には刺突文、∩形文内には単節斜縄文が充填される。2449・2450は沈線で2重の楕円文を描き、内側の楕円文には刺突文、外側には単節斜縄文を充填する深鉢形土器、2454は隆起線で2重の楕円文を区画し、内側の楕円文と外周する区画帯に細い刺突文を充填する浅鉢形土器である。2452・2455は沈線で∩形文を描く深鉢形土器で、文様内は2455が無文、2452は単節斜縄文が充填される。2455の∩形文間には丸棒状工具による円形押圧文が施される。2453は沈線区画の无填縄文帯が縦方向に流れる文様を展開するものである。2456・2457はキャリパー状の深鉢形土器で、口縁部文様帯に隆起線文で渦巻文や弧線文が描かれる。2458—2461は粗製の深鉢形土器で、すべて縦回転の単節斜縄文を地文とする。

以上、2448—2455は大木9式に相当する。2446・2447・2459—2461も同時期に含まれよう。2456・2457は大木8a式に比定される。

剥片石器 (2465・2466) 2465は狭長な縦長剥片の先端部に急傾斜の刃部加工を施した搔器である。2466は尖頭石器で、剥片先端の鋭角部に2次加工を施して尖頭形の刃部が作られる。

石斧 (2464) 小型の打製石斧である。刃部は両凸の平刃で、先端に細破砕痕を伴う。

礫石器 (2463) 特定の用途・機能を類推する手がかりに欠けるが、石器等の製作台として

の機能を想定して台石として分類した。炉石として転用されており、剥落が著しい。

石製品 (2464) 所謂青竜刀形石製品である。刃部の内反りは少なく刃は鋭角を呈する。棟部は弧状にふくらみ、中央には太い溝が走る。棟区には段が作られず、緩やかに柄に連なる。

遺構の時期 床面や埋土下部からの出土土器からみて、大木9式期に位置づけられる。

HVI-6 住居址 (第135図2469-2473、写真図版21・156)

土器 (2469-2471) 2469は炉の埋設土器である。体部中央が大きく膨らむ粗製深鉢形土器で、縦回転の単節斜縄文を地文とする。2470は複節斜縄文を地文とする体部片、2471は外面に網代痕をもつ底部片である。2469は器形や作りからみて大木10式に相当しよう。

剣片石器 (2472) 細部加工で作られた1個の刃部をもつ挟入石器である。

石製品 (2473) 長さ2.9cmの円棒状細粒凝灰岩を素材とした有孔石製品である。表面上部に径0.7cmの円孔をもつが、穿孔は表面から行われ、裏面までは達していない。

遺構の時期 炉の形態や埋設土器からみて、大木10式期に位置づけられる。

HVII区

HVII-1 住居址 (第135図-第139図2474-2601、写真図版22・96・125・150・155)

土器 (2474-2564) 2474-2478は小型土器である。2474は細口壺形土器の口縁部、2475は壺形土器の体部下半、2476・2477は深鉢形土器の体部下半、2478は壺形土器の体部上半である。2474・2478が無文で、そのほかは縦回転の単節斜縄文が施される。2479は算盤玉状の有孔浅鉢形土器である。肩部に成形されたV字状の袂り部分から体部上半にかけて、連続して円孔が穿たれる。体部には沈線で区画した充填縄文帯で横 e 字文が描かれ、文様帯外側の無文帯はやや浮き上がっている。2480は2558と同一個体である。口唇端に連続刻み目を施した隆起線を曲線的に貼付し、その頂部を突起とするもので、頸部には数条の沈線が巡る。2481は調整隆沈線で渦巻文や曲線文が描かれる。以上、2479は大木10式の初め、2480は縄文時代中期前葉、2481は大木8a式に相当する。

2482・2483は広い無文の口縁部をもつ広口壺形土器で、頸部は連続刺突文を配した数条の平行沈線で区画される。2484-2494・2496・2497・2499-2503は沈線で \cap 形文や楕円文を描き、文様内に単節斜縄文や刺突文を充填するものである。2484・2496は楕円文、2489・2494は楕円文と \cap 形文の混合文が描かれる。すべて深鉢形土器で、2485・2486・2488は波状の口縁をもつ。2484は口縁部に太い1条の沈線が巡る。2485・2493は文様区画外に、2494は楕円文に刺突文が施される。2495・2505は隆沈線で楕円文を描く浅鉢形土器で、2505の頸部は隆起線で区画される。以上、2482・2483は大木9式に併行し、そのほかは大木9式に相当する。

2505は頸部に1条の隆起線を巡らす無文の小型深鉢形土器である。2506は隆起線区画の充填

縄文帯、2498・2507-2530は沈線区画の充填縄文帯が横方向に流れる文様を展開するもので、e字・C字・S字等のアルファベット文や波頭文などが描かれる。全体の文様を判別できるものは少なく、2507・2508・2516はS字文、2509はC字文、2510-2513・2519などは横e字文かS字文、2527は横e字文、2525・2526は波頭文を描くものと思われる。口縁部が分かるものはすべて波状を呈し、地文は単節斜縄文に限られる。2515は文様区画外の無文帯が盛り上がるものである。以上、2506-2530は大木10式の初めに相当する。ただ、2514・2518・2521は縦方向に規制されたH字文やC字文を展開する大木9式相当土器に含まれる可能性が高いが、小破片のため充填縄文帯展開文として一括した。

2531-2541は粗製深鉢形土器である。2534・2537が燃糸文、2531が綾格文を伴う複節斜縄文、2539・2540が複節斜縄文、ほかは単節斜縄文を地文とする。口縁部の形態は、2533が内湾、2532・2535・2540が大きく外反するほかは、直立気味に立ちあがるものである。2542は小型土器の体部下半で、2553・2554は深鉢形土器の体部片である。2553には燃糸文、2554には櫛目状沈線文が施文される。以上、大半のものは大木9式-10式に相当するものと考えられる。

2543は口縁部文様部に綾格文が施され、2545-2548・2560は燃紐丘墳文で幾何学文が描かれる円筒状の深鉢形土器である。2544は口唇端に連続指頭丘墳文、口縁部に斜行する燃紐丘墳文が施される。2549・2550は同一個体で、極端に短い無文の口縁部をもつ深鉢形土器である。頸部には刺突列を2段に配した微隆起帯が巡り、体部には櫛目状沈線文が施される。2551・2552は結東第1種羽状縄文が施される体部片である。2555は口縁部に丸棒状工具でV字状の太い沈線文が描かれる。以上、2543は縄文時代前期I群1類、2544はI群2類、2545-2552はIII群、2555はIV群に分けられる。

2556は地文の単節斜縄文上に、2557は無文研磨された器面に沈線と曲線文が施される。2558は前記の2480と同一個体である。2559は口唇端に2個1対の小突起、2561は1個の大突起をもつもので、口唇端上は1条の沈線が施される。2562・2563は体部上半に数条の平行沈線が巡る鉢形土器、2564は口唇端に2個1対の突起をもつ粗製深鉢形土器である。以上、2556・2557は縄文時代後期初頭、2559・2561-2563は大洞C₂式に相当する。2564は縄文時代晩期中葉に含まれる。

土製品 (2593-2601) すべて、土器片を再利用して作られた円盤状土製品である。打ち欠いて成形したあと周縁が研磨されるもので、2593を除き、研磨は全周に及んでいる。

剥片石器 (2565-2584) 2565は無茎凹基の石鏃である。基部の抉りは深く、調整剝離痕で覆われた狭長な刃部をもつ。2566は削器で、縦長剥片の外湾する1割縁に凸刃状の刃部が作られる。2567・2568は2辺が折断され、1個の刃部をもつ折断石器である。2567の刃部には細部調整が施される。2569は折り面-古剝離面交差型、2570・2571は折り面-自然面交差型の彫器

で、いずれも刃部や刃部側縁に刃こぼれ状の微細剥離痕がみられる。2572は折り面一新剥離面交差型に代表される彫器で、折り面と折り面を打面とする剥離面とを交差させて刃部を形成している。この彫器はほかに3つの折り面があり、そのそれぞれが交差する部位や、折り面の1つと古剥離面が交差する部位が刃部となっている。折り面一新剥離面交差型を主形態とし、折り面交差型と折り面一古剥離面交差型を伴う複合形態とみることができる。都合5つの刃部にはそれぞれ刃こぼれ状の微細剥離痕や桶状の剥離痕がみられる。2573は横長剥片の先端部に短い刃部が作られる削器状石器である。2574・2575・2578は非折り面尖頭型の彫器で、刃部側縁には桶状の剥離痕を伴う。2577は2個1対の刃部をもつピエス・エスキューで、両極には使用に伴う階段状剥離痕がみられる。2579は小剥片の鋭角部に奥行きを浅い刃部加工を施した尖頭石器である。石鏃の未完成品かもしれない。2580は1辺が折断され、2個の刃部をもつ折断石器で、双方の刃部には細部調整が施される。2581・2582は楕円形剥片の一部に2次加工を施したもので、不連続な鋸歯縁状の刃部が作られる。2583は石刃で、表面には側縁に平行する2条の稜線が形成されている。2584は片面に急傾斜の刃部加工を施した薙状石器である。

石斧 (2585—2587) 2585は小型の打製石斧である。刃部は両平の円刃で、使用による破砕痕がみられる。2586はプロピライト、2587は珪質緑色凝灰岩で作られた磨製石斧である。2586は基端部、2587は基部の一部を残すだけの折損品である。

礫石器 (2588—2592) 2588は扁平な不整形角礫を素材とする凹石で、表面に1個の大きな凹みをもつ。2589は扁平な長楕円形礫、2590は正方形礫を素材とする磨石である。2589は全面、2590は側面が滑らかで擦ったことによる光沢が著しい。2589はそれ自体が製品として作られた可能性も考えられる。2591・2592は球形の自然礫である。機能や用途を判断する手がかりを欠くが、一応石弾として類別した。

遺構の時期 床面や炉から出土した時期決定資料を欠くが、埋土内下層出土土器や炉の形態などからみて、大木10式期の初めに位置づけられよう。なお、この住居址は、炉の形態などから推定して大木9式期に属するものと考えられる住居址の全周を覆って構築されている。

HVI—2 住居址 (第139図2606—2616)

土器 (2606—2614) 2606はミニチュアの無文壺形土器である。2607は床面出土の口縁部片で、沈線で楕円文か円文が描かれる。2608は内湾する口縁部に隆起線と沈線で横位の平行文を施す深鉢形土器である。2609は口縁部文様帯に結束第1種羽状縄文が施される。2510は口縁部に細い平行沈線で幾可学文様を描くもので、体部には間隔のあいた木目状燃糸文が施される。2611は口縁部が強く屈曲する浅鉢形土器である。屈曲部の上部には隆起線区画文に沿って燃紐疋痕文が施され、屈曲部の下部には隆起線で渦巻文が描かれる。2613の口縁部には刻み目状の連続刺突文が巡る。2612は節目状沈線文を施した体部片、2614は縦回転の単節斜縄文を地文と

する体部下半である。

2602は大木9式、2608・2611は大木8a式に相当し、2609は縄文時代前期Ⅱ群—Ⅲ群1類、2610はⅣ群に分けられる。2613は大木7b式か8a式に含まれよう。

剥片石器 (2615・2616) 2615は先端湾入部、2616は先端部に使用痕をもつ剥片である。

遺構の時期 明確な時期決定資料を欠くが、床面出土土器片や炉の形態からみて、大木9式期に位置づけられよう。(佐々木 勝)

HⅦ-3 住居址

遺構の時期 出土遺物については不明である。住居址間の重複関係では、後述するHⅦ-4住居址群に切られている。そのことからみて、縄文時代前期、土器分類群でいえば前期Ⅲ群以前の時期内に位置づけられる。

HⅦ-4 住居址群 (第139図・第140図2619—2632、写真図版22・96・125・150・155)

土器 (2619・2621—2626) すべて縄文時代前期に属する。2619は波状口縁になるが、1カ所の波状部しか残っていない。その部分での器高が12cmと小型である。体部には、2方向から斜行し、末端部が交差する状態になる沈線によって文様が描かれる。胎土にはやや多くの繊維を含む。このような沈線文が文様を構成する土器は、円筒下層式のなかではd式に共存する例が知られている(江坂ら、1958)。2621は大型の破片である。器面は磨耗が著しい。口縁部の一部に異条縄文がみられるほかは単筋斜縄文が施される。2622は小波状口縁で、頭部の燃紐瓦痕によって区画された幅3cmの口縁部と体部には結束車1種羽状縄文が施文される。Ⅱ群に分類できる。2623・2625はⅢ群に含まれる。2625は燃紐瓦痕による鋸歯状文が口縁部文様を構成し、頭部には区画の爪形文がめぐる。2626は底部の一部を含む体部下半の破片で、結束車1種羽状縄文が下端まで施文されている。内湾して立ち上がる器形の特徴からはⅢ群に含めることができる。2624は2619と同様の文様意匠や施文方法をもつ別個体の破片である。2621—2626は胎土に少量の繊維を含む。

土製品 (2620) 板状の土偶で、完形品である。長さが6.8cm、最大部分での幅が3.8cm、厚さが1.8cmである。上端が一方に傾いて細くなり、上半には両側に突き出す部分がある。その部分の中央には楕円形のくぼみが作られる。下端寄りの中央の部分もわずかに浅いが、明確な形にはならない。浅いくぼみは左側面の突出部をはさんだ上下にも認められる。

剥片石器 (2627・2628・2630・2631) 2627は直刃削器である。2628は1面、2630は2面の折り面をもつ折断石器で、いずれも折り面以外の2辺が刃部である。2631は不定形な剥片の一部に刃部が作られた石錐である。

石斧 (2629) 刃部を折損した小型の打製石斧である。表面は2次加工の剥離面に覆われるが、裏面は1側縁だけが2次加工されている。

礫石器 (2632) 上端が平坦な背部になるⅡ-A₂型の半円状肩平打礫石器である。刃部に施される2次加工の奥行きは浅く不規則である。左側縁は磨耗痕が著しい。

遺構の時期 前述の土器はいずれも埋土下部から出土している。それらを参考にすると、この住居址は縄文時代前期、土器分類群でいえば前期Ⅲ群の時期に位置づけられる可能性が高い。

HVII-5 住居址

遺構の時期 重複するHVII-4住居址群によって切られているために、固有の埋土を欠いている。HVII-4住居址群はこの住居址の床面を再利用する状態で重複しているもので、2棟は時間的には近い関係にあることが推定できる。

HVII-6 住居址

遺構の時期 出土遺物を欠くことや住居形態などが不明なため、所属時間の詳細は不明である。しかし、下位に位置するHVII-7住居址よりは後出するものである。(三浦 謙一)

HVII-7 住居址 (第140図2633-2637)

土器 (2633-2637) 2633・2634 (同一個体) は幅の広い無文の口縁部をもつ広口壺形土器で、頸部は連続刺突文を配した2条の平行沈線で区画される。体部文様は沈線で楕円文を描き、文様内には単節斜縄文が充填される。2635は複節斜縄文、2636は単節斜縄文、2637は結束第1種羽状縄文を地文とする体部片である。以上、2633・2634は大木9式に相当し、2637は縄文時代前期Ⅱ-Ⅲ群に分けられる。

遺構の時期 床面や炉から出土した時期決定資料を欠くが、炉の形態や埋土内出土土器からみて、大木9式期に位置づけられよう。

HVII-8 住居址 (第141図2638-2649、写真図版96・150)

土器 (2638-2645) 2638・2639は単節斜縄文を充填した沈線区画帯が横方向に流れる文様を描くもので、区画外の無文帯はやや浮き上がっている。2640・2642は縦回転、2641は横回転の単節斜縄文を地文とする粗製深鉢形土器である。2643は口縁部文様帯に綾絡文が施される。2644は口縁部に細い平行沈線で幾何学文を描き、体部に間隔のあいた木目状燃糸文を施すものである。2645は鉢形土器で、体部上半に数条の平行沈線が巡る。

2638・2639は大木10式の初めに相当し、2643は縄文時代前期Ⅰ群Ⅰ類、2644はⅣ群に分けられる。2645は晩期中葉に比定されよう。

剥片石器 (2648・2649) 2648は折り面-古剝離面交差型の影器で、刃部には刃こぼれ状の微細剝離痕を伴う。2649は打撃によって作られた1個の刃部をもつ抉入石器である。

礫石器 (2646・2647) 双方とも複輝石安山岩で作られた石皿である。特別な成形加工は施されておらず、片面が使用によって緩く凹んでいる。2647の表面には浅い1個の凹みを伴う。

遺構の時期 床面や炉からの伴出遺物を欠くが、炉の形態や埋土下層出土土器などからみて、

大木10式期の初めに位置づけられるものと考えられる。

HⅦ-9 住居址 (第141図—第144図2650—2699、写真図版22・23・96)

土器 (2650—2682) 2655は床面から出土した。4個の小さな波頂部をもつ波状口縁で、体部中央が大きく膨らむ深鉢形土器である。沈線で Ω 形文やH字文が描かれ、文様内には単節斜縄文が充填される。2653は複式炉前庭部から出土した深鉢形土器で、沈線区画の充填縄文帯がS字文を展開する。2650—2652は小型土器の体部下半で、2650は壺形、2651・2652は深鉢形を呈する。いずれも縦回転の単節斜縄文を地文とする。2654は体部上半に最大径をもち、口縁部に向かって直立気味に立ちあがる粗製の深鉢形土器である。地文は前々段反撚りの複節縄文を縦回転で施文する。以上、2655は大木9式、2653は大木10式の初めに相当する。

2676は浅鉢形土器で、隆沈線で円形文が描かれる。2664・2665は沈線で楕円文かU形文を構成する深鉢形土器で、文様区画内には単節斜縄文が充填される。2671・2672は同一個体で、地文の単節斜縄文上に細い沈線で Ω 形文が描かれる。2660・2663・2675は沈線区画の充填縄文帯が縦方向に規制された Ω 形文かC字文を展開するものである。2674は幅の広い無文の口縁部をもつ広口壺形土器で、頭部には2列の連続刺突文を伴う1条の沈線が巡る。以上はすべて大木9式に相当する。

2677・2678は沈線で区画した充填縄文帯が横方向に流れる文様を展開するもので、2678は横S字文が描かれる。2658は口縁部文様帯に綾絡文が施される。2659は口縁部と隆帯上に絡条体疋痕文が施され、2661は隆帯上に連続刺突文が施される深鉢形土器で、双方とも体部には結束第1種羽状縄文が施文される。2680・2682は同一個体である。口唇端に斜位の連続刻み目を施して2個1対の小突起を貼付する鉢形土器で、体部上半には工字文風の隆沈線文が展開する。2681は体部上半に数条の平行沈線が施される。以上、2677・2678は大木10式の初めに相当し、2658は縄文時代前期1群1類、2659・2661はIII群に分けられる。2680—2682は大洞C₂式に相当しよう。

2662・2667—2670・2673・2679は粗製の深鉢形土器である。2667・2679には櫛目状沈線文が施され、2662は綾絡文を伴う無節斜縄文、そのほかは単節斜縄文を地文とする。2667・2673には補修孔とみられる小円孔を伴う。以上の大部分は大木9式に含まれよう。

土製品 (2656・2657) 土器片を再利用した円盤状土製品である。打割りによる成形のあと、全周が研磨されている。

切片石器 (2683—2693) 2683・2684は縦長切片の両側縁を刃部とする縦形石匙で、2683の両側縁には急傾斜の刃部加工が施される。2684は左側縁に奥行き浅い刃部が加工され、右側縁には微細剝離痕がみられる。2685は横長切片の外湾する先端部に刃部加工を施した削器、2686は2個1対の刃部をもつピエス・エスキューである。2687は2辺を折断し、長方形に整えた折断石器で、2次加工が施された1個の刃部をもつ。2688は折り面—古剝離面交差型、2689・2690

は非折り面尖頭型の彫器である。いずれも、刃部には刃こぼれ状の微細剝離痕を伴い、2690の刃部背面側の稜には櫛状の剝離痕がみられる。2691は2個1対の刃部をもつピエス・エスキューで、両極に階段状剝離痕を伴う。2692・2693は尖頭形の刃部をもつ尖頭石器である。2692は1側辺に片面から2次加工を施して刃部が作られ、2693は2側辺に入念な両面加工を施して刃部が作られる。2693の基部側は折損している。

礫石器 (2694—2699) 2694—2698は複輝石安山岩の扇(楕円)球形礫を素材とする磨石である。2694は側面、2695は両端を除く全面、2696—2698はほぼ全面に擦痕がみられる。2699は表裏2面に1個ずつの浅い凹みをもつ凹石で、側面は磨石として利用されている。

遺構の時期 床面出土土器からみて、大木9式期の最末期に位置づけられる。

HVII—10住居址 (第144図2700—2704)

土器 (2700—2704) 2702は沈線で楕円文か円形文が描かれ、2703は隆起線と沈線を組み合わせて円形文が描かれる。文様内には、2702は単節斜縄文、2703は複節斜縄文が充填される。2700は木目状燃糸文、2704はやや間隔のあいた燃糸文を地文とする体部片である。2701は口縁部に太い沈線で斜行文が施される。2702、2703は大木9式に相当し、2704は縄文時代前期II群、2700はIII—IV群、2701はIV群に分けられる。

遺構の時期 床面や炉からの伴出遺物を欠き、住居址の形態も不明瞭である。ただ、大木9式期に属すHVII—9住居址に先出する重複関係にあることや埋土内出土土器・住居址の残存物の形状などから推定すれば、縄文時代前期後半期に属すものと考えられる。

HVII—11住居址 欠番

HVII—12住居址 (第144図2705—2710、写真図版23・96)

土器 (2705—2710) 2705は幅の広い無文の口縁部をもつ広口壺形土器である。頸部には、連続刺突文を伴う1条の沈線が巡り、体部には地文の単節斜縄文上にゼンマイ状の懸垂文が展開する。2708・2709は床面出土の同一個体で、地文の単節斜縄文に不規則な懸垂文が描かれる。2708・2709は炉の埋設土器で、単節斜縄文上に2条1対の懸垂文が施される。2710も炉に埋設された深鉢形土器で、縦回転の単節斜縄文を地文とする。2711は隆起線と沈線で横位の平行文が構成される。

2705—2709は大木9式併行の中の平III式に比定され、2710も同時期に含まれよう。2711は大木8a式に相当する。

遺構の時期 炉埋設土器や床面出土土器からみて、大木9式併行期に位置づけられる。

HVII—13住居址 (第145図2716—2738、写真図版96)

土器 (2716—2734) 2716—2720は沈線区画の充填縄文帯が横方向に流れる文様を展開する深鉢形土器で、2716は横S字文、2717は横e字文を描く。2716—2718は波状の口縁をもち、2716に

は口縁部の上端に1条の沈線が配される。2721は隆起線で区画した充填縄文帯が横方向に流れる文様を展開するものである。以上は大木10式の初めに相当する。

2722—2724は地文の単節斜縄文上に細い沈線で懸垂文を施すもので、2724にはゼンマイ状の曲線文が加えられる。2725は幅の広い無文の口縁部をもつ壺形土器で、波状口縁の波頂部には丸棒状工具で円形押印文が施される。以上は大木9式併行の中の平皿Ⅲ式に相当する。

2726—2728は粗製の深鉢形土器で、すべて縦回転の単節斜縄文を地文とする。2729は網目状燃糸文、2731は無節斜縄文、2730は櫛目状沈線文を地文とする体部片である。2732は口縁部に2条の沈線を巡らせ、ほかは無文研磨する鉢形土器、2733は口縁部に連続刻み目を施し、体部上半に半肉彫的な雲形文を描く鉢形土器である。2734は台付土器の台部で、数条の平行沈線が配される。以上、2726—2728・2730は縄文時代中期後葉—末葉、2729は後期前葉に含まれよう。2733は大洞C₁式に相当し、2732・2734は晩期後半に比定される。

剃片石器 (2735—2738) 2735はつまみ部を欠損する縦形石匙である。刃部は両面加工で作られる。2736は1辺が折断され、2個の刃部をもつ折断石器で、双方の刃部には微細剝離痕を伴う。2737は狭長な従長剃片の先端部に刃部加工を施した石錐で、刃部には磨耗痕がみられる。2738は右側縁に使用痕をもつ剃片である。

遺構の時期 炉の形態や埋土下層出土土器からみて、大木10式期の初めに位置づけられる。
HⅧ—14住居址 (第145図・第146図2740—2764、写真図版96)

土器 (2740—2759) 2740—2745は沈線で、2748は隆起線と沈線を組み合わせて円形文を描く深鉢形土器である。文様内は、2740—2745の沈線文系土器には単節斜縄文、2748には複節斜縄文が充填される。口縁部が分かるものはすべて波状を呈する。2749は沈線区画の充填縄文帯でH字文が描かれる。以上は大木9式に相当する。

2746は単節斜縄文、2747・2750 (同一個体) は刺突文を充填する沈線区画帯が、横方向に流れる文様を展開するもので、2746は横e字文を描く。以上は大木10式の初めに相当する。

2751は隆沈線で直線文や波形文が描かれる口縁部片、2752は3条の平行沈線で直曲文が施される体部片である。2753は頸部に太い刺突文列を配した隆帯が貼付される。2754・2755は頸部を絡条体の圧痕文で区画し、体部に結束第1種羽状縄文を施すものである。2757は地文の単節斜縄文上に沈線で曲線文が施され、2758は細い沈線で斜行する直線文が描かれる。2759は体部上半に肉彫的な雲形文を展開する壺形土器である。2756は粗製深鉢形土器で、前々段反燃の複節斜縄文を地文とする。以上、2751・2752は大木8a式に相当し、2753は縄文時代前期I群1類、2754・2755はIII群に分類される。2757・2758は後期初頭に比定され、2759は大洞C₁式に相当する。

土製品 (2760・2761) 土器の体部片を再利用した円盤状土製品である。双方とも打割りし

て成形したあと全周が研磨されている。

剃片石器 (2763・2764) 2763は縦長剃片の1側縁から先端部に連続する2次加工を施した削器である。基部側を折損する。2764は尖頭石器で、縦長剃片の先端鋭角部に、片面加工で急傾斜の刃部が作られる。

礫石器 (2762) 偏球形の礫を素材とした磨石で、側面に擦痕がみられる。

遺構の時期 床面や炉から出土した時期決定資料を欠くが、炉の形態や埋土下層出土土器などからみて、大木9式期に位置づけられよう。

HVII—15住居址

遺構の時期 伴出遺物を欠くため、所属時期は特定できないが、周囲の遺構のあり方や住居址の形態から推定すれば、大木9式—10式期、とりわけ大木9式期に含まれる可能性が高い。

HVII—16住居址 (第146図2765—2768)

剃片石器 (2765—2768) 2765はつまみに対して刃部が平行する縦形石匙である。1側縁に片面加工で急傾斜の刃部が作られる。2766は1個の刃部をもつ抉入石器で、刃部には刃こぼれ状の微細剝離痕が伴う。2768は1辺が折断され、1個の刃部をもつ折断石器で、刃部には使用による微細剝離痕がみられる。

石斧 (2767) 小型の打製石斧である。縦長剃片の基部に両面から奥行き深い大きな2次加工が施され、両平で偏刃状の刃部が作られる。刃部には磨耗痕や細破砕痕がみられる。基部側を折損する。

遺構の時期 出土土器を欠くため、所属時期は特定できないが、複式炉系統の炉をもつことからみて、大木9式—10式期に含まれよう。

HVII—17住居址 (第146図・第147図2769—2787、写真図版96・150)

土器 (2771—2784) 2771—2773は沈線区画の充填縄文帯が横方向に流れる文様を展開するもので、2771は横e字文、2773は波頭文を描くものと思われる。文様内は、2771には複節斜縄文、2772・2773には単節斜縄文が充填される。以上は大木10式の初めに相当する。

2774・2775・2778は口縁部文様帯に撚紐瓦痕文、2776・2777は絡条体瓦痕文を施すもので、2774・2775・2777は幾可学文、2776・2778は横位平行文が描かれる。2776の頸部には連続刺突文、2778には絡条体瓦痕文を施した微隆起帯が巡る。2780は結束第1種羽状縄文と撚糸文を施す体部片である。2779は口縁部に結束第1種羽状縄文を施すもので、頸部には2列の連続刺突文を配した隆帯が貼付される。2782は頸部に連続刺突文を伴う隆帯を巡らせ、体部に単節斜縄文を施すものである。2781は口頸部に隆沈線で直線文が描かれる。2783は粗製の深鉢形土器で、縦回転の単節斜縄文を地文とする。2784は頸部に2条の平行沈線を巡らす小型深鉢形土器である。以上、2774—2778・2780は縄文時代前期III群、2779・2782はII群に分けられる。2781

は大木8a式、2784は晩期末葉に相当しよう。

剥片石器(2769) 非折り面尖頭型の彫器である。刃部には光沢のある磨耗痕が生じている。

礫石器(2785—2787) 2785は扁球形、2787は扁平な楕円形礫を素材とする磨石である。2785は表裏2面、2787は右側面に擦痕がみられる。2786は球形の敲石である。表面を主な使用部位とし、顕著な敲打痕を伴う。裏面には擦痕がみられ、磨石と複合する。

石製品(2770) 粘板岩質チャートの扁平な小円形礫を素材とした有孔石製品である。径1.6cmの円形中央に、両面から径0.3cmの円孔が穿たれる。

遺構の時期 床面上や炉からの伴出遺物を欠くが、複式炉系統の炉をもつことや埋土内出土遺物からみて、大木10式期の初めに位置づけられよう。

HVII—18住居址(第147図—第149図2788—2795・2797—2809、第280図・5820、写真図版23・24・97)

土器(2788—2795・2797—2807・5820) 2799は床面から出土した。体部中央に最大径をもち、口縁部に向かって内傾して立ち上がる大型の粗製深鉢形土器である。縦回転の単節斜縄文を地文とするが、口縁部などでは横回転で施文し、山形状の文様が描かれる。2707は床面直上から出土した。幅の広い無文の口縁部をもち、頸部には半載竹管による連続刺突文を伴う1条の沈線が巡る。体部には沈線で2条1対のゼンマイ状懸垂文が4回繰り返して描かれ、1対の懸垂文間は縄文を磨消して半載竹管刺突文が充填される。地文は縦回転の単節斜縄文である。2788は床面出土の小型粗製深鉢形土器である。体部中央が大きく膨らみ、頸部がくびれて口縁部で外反する器形をもつ。地文は単節縄文を縦回転で施文する。2801は沈線で自形文を描き、文様内に単節斜縄文を充填する深鉢形土器である。以上、2707は大木9式併行の中で平Ⅲ式に、2801は大木9式に相当する。床面出土の2788・2799も大木9式併行期に含まれよう。

5820は体部が直線的に外傾する深鉢形土器で、燃糸文を地文とする。底部外面には網代痕がみられる。2789は単節斜縄文を地文とする体部下半である。2793・2795(同一個体)や2800・2806は粗製の深鉢形土器で、地文は、2793・2795が燃糸文、2800が単節縄文の縦回転施文、2806が複節縄文の横回転施文である。2794・2797・2802は体部片で、2794・2802が単節縄文を縦横不規則に回転施文し、2797が縦回転で施文する。

2790・2791は同一個体で、朱塗りの鉤手付壺形土器の頸部である。器面は無文で、研磨されている。2803—2805は同一個体と思われ、頸部下端に1条の隆帯を巡らす無文の壺形土器である。2792・2798は深鉢形土器の体部片で、第1種結束羽縄文が施される。以上、2790・2791・2803—2805は十腰内Ⅰ式に併行し、2794・2798は縄文時代前期Ⅲ群に分けられる。

礫石器(2808・2809) 双方とも半円状扁平打製石器の折損品である。2808は右側縁の直線部を背部とするⅡ—A₂型で、ほかの部分には刃部加工が施される。2809はⅡ—A₁型で、左側縁に刃部が作られる。

遺構の時期 床面直上出土遺物や炉の形態からみて、大木9式併行期に位置づけられる。

HVI-19住居址 (第147図2796、第150図2810・2811、写真図版23・97)

土器 (2796・2810・2811) 第147図2796は埴壇土器である。深鉢形土器の底部片で、縦回転の単節斜縄文を地文とする。2810は口縁部が内湾するキャリパー状の深鉢形土器である。口縁部には2本単位の隆起線(3本の沈線を伴う)によって連結された渦巻文が展開し、体部には沈線で直線文が描かれる。地文は複節斜縄文で、口縁部が横回転、体部が縦回転で施文される。2811は長い頸部をもつ小型粗製壺形土器で、単節斜縄文を地文とする。2810は大木8b式に相当する。

遺構の時期 床面上の出土遺物からみて、大木8b式期に位置づけられる。

HVI-20住居址 (第150図2812-2816、写真図版24・97)

土器 (2812-2816) 2812は床面から出土した深鉢形土器である。沈線区画帯でH字文を展開するもので、文様区画帯には単節斜縄文、H字文内無文帯には連続刺突文が充填される。文様は4回繰り返される。2813は隆起線と沈線を組み合わせて文様を描くキャリパー状深鉢形土器である。口縁部上端には波状隆起線を貼付し、隆起線でC字状に巻き込んだ中空の突起をもつ。口縁部上半の長楕円隆起線区画帯には連続刺突文が施され、下半は隆起線と沈線を組み合わせて横に展開する区画文が描かれる。地文は横回転の複節斜縄文である。2814-2816は深鉢形土器の体部片で、2814が複節斜縄文、2815が複節斜縄文と0段多条の単節斜縄文、2816が木目状燃糸文を地文とする。

2812は大木9式、2813は大木8a式に相当し、2817は縄文時代前期III-IV群に分けられる。

遺構の時期 床面上の出土遺物や炉の形態からみて、大木9式期に位置づけられる。

HVI-21住居址 (第150図2817-2823、写真図版97)

土器 (2817-2816) 2817は沈線で \cap 形文を描き、文様内に単節斜縄文を充填するものである。2818は単節斜縄文上に沈線で渦文や曲線文が描かれる。2819・2820は口縁部文様帯に綾絡文、2821は糜状燃糸文が施文され、2821の頸部は摺紐瓦痕文で区画される。2822は口縁部文様帯に摺紐瓦痕文を施して幾何学文を、2823は平行文を描くものである。2823の頸部には連続刺突文を配した微隆起帯、口唇端には連続刻み目文を伴う。2824は燃糸文、2825・2826は木目状燃糸文を地文とする体部片で、2824の頸部には連続刺突文を配した2条の平行沈線が巡る。

2817は大木9式、2818は大木8a式に相当し、2819・2820は縄文時代前期I群1類、2821はII群、2822-2824はIII群、2825・2826はIII-IV群に分類される。

剥片石器 (2827・2828) 2827は折り面-古刺離面交差型の彫器で、刃部には刃こぼれ状の微細刺離痕を伴う。2828は尖頭形の刃部をもつ尖頭石器である。刃部先端には細部調整が加えられ、磨耗痕がみられる。

遺構の時期 炉や床面から出土した時期決定資料を欠くが、炉の形態や周囲の遺構のあり方からみて、大木9式期に位置づけられる可能性が強い。

HⅦ-22住居址

遺構の時期 出土遺物を欠くため所属時期の特定はできないが、縄文時代前期後半期に所属すると考えられるHⅦ-23住居址に先出する重複関係にあることや炉の形態・周囲の遺構のあり方などから推定して、縄文時代前期後半期に含まれよう。

HⅦ-23住居址 (第151図2829-2844、写真図版126)

土器 (2829-2840) 2829は口縁部文様帯に綾絡文、2830・2831は燕紐の横位平行瓦痕文が施される。2831・2832は頸部に連続刺突文を配した隆帯が巡るもので、2832の体部には結束第1種羽状縄文が施される。2833-2836は同一個体と思われる体部片で、Lと1を右燃りにした異条縄文に縦の綾絡文が伴う。2837-2839は単節斜縄文を地文とする粗製深鉢形土器で、2835の頸部には微隆起帯が貼付される。2840は体部上半に数条の平行沈線文が施される。

2829は縄文時代前期I群1類、2830-2832はIII群に分けられ、2840は晩期に比定される。

切片石器 (2842-2844) 2842・2844は1個の刃部をもつ折断石器で、2842は2辺、2844は1辺が折断されている。双方とも刃部には刃こぼれ状の微細剝離痕を伴う。2843は抉入石器で、1辺に細部調整が施された浅い1個の刃部が作られる。

石斧 (2841) 珪質泥岩を素材とする打製石斧である。刃部は片面が強い凸面となる片刃的な調整が加えられた円刃で、鋭利な先端には細破砕痕がみられる。

遺構の時期 炉や床面からの伴出遺物を欠くが、周囲の遺構のあり方や埋土内出土土器からみて、縄文時代前期後半期に位置づけられよう。

HⅦ-24住居址 (第151図2845-2847)

土器 (2845・2846) 2845口縁部文様帯に燕紐瓦痕で幾何学文が描かれ、2846は体部に竊回転の結束第1種羽状縄文が施される。双方とも縄文時代前期III群に分けられる。

切片石器 (2847) 2辺が折断され、2個の刃部をもつ折断石器である。2個の刃部には微細剝離痕を伴う。

遺構の時期 炉や床面からの伴出遺物を欠くが、周囲の遺構のあり方や埋土内出土遺物からみて、縄文時代前期後半期に位置づけられよう。(佐々木 勝)

III区

III-1住居址 (第151図2848-2850)

切片石器 (2848-2850) 2848は4個2対の刃部をもつビエス・エスキューである。剝離痕は主に表面に生じている。2849は両側縁に刃部をもつ抉入石器である。右側縁では抉入部上位

にも2次加工が施されている。2850は縦長剥片の周縁に2次加工が施されて尖頭形になる。右側縁には表面から、左側縁には裏面から、小さく急傾斜の2次加工が施される。

遺構の時期 埋土からは、網目状燃糸文や単節斜縄文を地文にした破片が少量出土している。それらの土器や占地・住居形態などからみて、縄文時代前期前半期、土器群でいえば前期I群の時期に位置づけられる。(三浦 謙一)

IVI区

IVI-1住居址

遺構の時期 出土遺物を欠くため所属時期は特定できないが、住居址の形態からみて縄文時代前期の時期内に位置づけられよう。

IVII区

IVII-1住居址 (第151図—第153図2851—2868、写真図版24・97)

土器 (2851—2866) 2855は炉に埋設されたキャリバー状の大型深鉢形土器で、隆沈線で文様が構成される。体部には、3本の沈線を伴う2本単位の隆起線で渦巻文が描かれ、渦巻文には轆轤文様を加飾される。地文は口縁部が横回転、体部が縦回転の単節斜縄文である。2851もキャリバー状の深鉢形土器で、口縁部に隆起線で横位の平行文が描かれ、2852—2854は2本1対の隆起線で直線文が描かれる。2856は口縁部上端と頸部に横位の隆起線文が巡る深鉢形土器で、体部には縦回転の単節斜縄文が施される。以上、2855は大木8b式、2851—2854・2856は大木8a式に相当する。

2859・2860・2863—2865は沈線で楕円文や Ω 形文を描き、文様内に単節斜縄文を充填する深鉢形土器で、2859・2864は楕円文と Ω 形文を組み合わせた文様が展開する。2859は直立、2864は外反、2865は内湾する口縁部をもつ。2862・2866は沈線で楕円文と Ω 形文を描き、その外周を Ω 形の隆起線で区画するもので、2866の Ω 形隆起帯は4単位の突起状の張り出しとなっている。双方とも楕円文内には刺突文が充填され、 Ω 形文内には、2862は複節斜縄文、2866は単節斜縄文が充填される。以上は大木9式に相当する。

2857・2858・2861は粗製深鉢形土器で、2857・2861は縦回転の単節斜縄文、2858は燃糸文を地文とする。2857は折り返しの口縁部にも地文が施される。

剥片石器 (2867・2868) 2867は抉入石器で、縦長剥片の先端部に2次加工を施した2個の刃部が作られる。2868は1刃が折断され、1個の刃部をもつ折断石器である。

遺構の時期 炉埋設土器からみて、大木8b式期に位置づけられる。

IVII-2住居址 (第153図2869、写真図版24)

土器 (2869) 体部が直立気味に立ちあがる円筒状の深鉢形土器である。体部には、地文の単節斜縄文上に3条1組の沈線で直曲線文が描かれ、2条1組の沈線で渦巻文が付加される。文様は4回の繰り返りである。大木8a式に相当する。

遺構の時期 床面出土土器からみて、大木8a式期に位置づけられる。

Ⅳ-3 住居址 (第153図-第155図2870-2899、写真図版24・97・126・150・156・157)

土器 (2870-2884) 2870は床面直上より出土したキャリバー状の深鉢形土器である。口縁部は2本1組の隆起線で波線文や渦巻文が描かれ、体部は3条1組の沈線で直線文や弧線文が描かれる。口縁部は横回転、体部は縦回転の単節斜縄文を地文とする。2871は2本1組の隆起線を貼付して直線文を施す深鉢形土器の体部下半で、底部外面では網代痕がみられる。2872は単節斜縄文を地文とする小型深鉢形土器の体部下半である。2873は中空、2874は板状の大型突起で、双方とも隆起線で渦巻状の曲線文が描かれる。2875は口縁部上端に隆起線区面の長楕円区画帯が展開する深鉢形土器である。区画帯内には刻み目状の連続刺突文が施され、区画帯の間にはC字状の隆起線文が貼付される。2878は2本単位の隆起線で曲線文が描かれる。2879は波状の口縁部に沈線で横展開の区画帯や渦巻文を描くもので、区画帯内には連続刺突文が施される。以上、文様の分かるものはすべて大木8a式に相当する。

2882・2884は3条1組の沈線で単節斜縄文上に弧線文を描く深鉢形土器である。2877は口縁部文様帯に撻紐の側面圧痕で幾可学文を、2883は横位の平行文を施すもので、2876・2883の頸部には連続刺突文を配した微隆起帯が巡る。2876は結束第1種羽状縄文、2883は撻糸文を地文とする。2880は口唇端に2個1対の小突起をもち、体部に大髄骨文を施す皿形土器、2881は単節斜縄文を地文とする粗製の深鉢形土器である。以上、2882・2884は縄文時代中期中葉榎林式、2880は大洞C式に相当し、2876・2877・2883は縄文時代前期Ⅲ群に分類される。

剥片石器 (2890-2896) 2890は抉りの深い基部をもつ無茎凹基の石鏃である。2891は縦長剥片の両側縁に刃部加工を施した複刃状の削器である。右側縁の1部を折損する。2892・2895は2個1対の刃部をもつピエス・エスキューであるが、剥離面の奥行きは浅く、とくに下端の刃部には細かな剥落痕があるにすぎない。2893は2辺が折断され、三角形に整えられた折断石器で、2次加工を施した1個の刃部をもつ。2894は硬質泥岩の石核、2896は湾入する左側縁に使用痕をもつ剥片である。

礫石器 (2885・2887-2889・2897) 2885は扁平な楕円形礫、2889は三角形礫を素材とした凹石である。2885は表裏2面に1個ずつの深い凹みをもち、2889は表面に3個の浅い凹みをもつ。2885は右側縁に擦痕がみられ、磨石との複合石器である。2887は扁平楕円球礫、2888は扁平な正方形礫を素材とした磨石で、2887は表裏2面、2888は右側面に擦痕がみられる。2897は円形の石皿で、皿部外周を加工して微高する縁を成形している。礫石器の石質はすべて複輝石安

山岩である。

石製品 (2866・2898・2899) 2866は白色細粒凝灰岩で作られた有刻線石製品である。長さ5.3cm、幅3cmの扁平な楕円形礫を側面から半載した形を呈し、長軸に沿って1条の刻線が施される。両端の一部を折損する。2898は角柱状の石英安山岩を素材とした大型の石棒で、頭部先端を折損する。研磨は頭部付近にのみ加えられ、体部との境に弱くびれがみられる。体部断面形は不整六角形を呈する。2899は複輝石安山岩の扁平な楕円形礫を素材とした岩偶である。楕円形礫の上方両側面に抉りを入れて、ツمامミ状の頭部と三角形の体部を作り出している。頭部表面には浮き彫りにした眼が表わされ、背面には、1条の刻線で首が表現されている。

遺構の時期 床面上や埋土内出土土器からみて、大木8a式期に位置づけられる。

(佐々木 勝)

Ⅶ-4 住居址 (第155図・第156図2933-2946, 写真図版25・97・126)

土器 (2933-2944) 縄文時代前期・後期・晩期の土器が出土している。2933・2934は接合しないが、同一個体の深鉢形土器である。体部は小さめの底部から直線的に外傾して立ちあがり、肩部から外反気味に転じる口縁部は短い。口縁部文様帯は肩部にめぐる2条の平行沈線で区画されている。口唇端には1条の沈線が引かれ、口唇部には前面からの押圧による浅いくぼみが連続する。その下位には刻目文帯があり、3個1対の刺突文によって数多くの単位に区画されている。体部にはLRとRLによる羽状縄文が施文され、体部下端は狭い無文帯になる。拓本2944・2936も同一体の破片である。2935は小型の鉢型土器である。口唇部には刻みが連続して加えられ、小波状になる。その下位には2条の平行沈線がめぐる。体部地文は横位の単節斜縄文である。2940は2935に類似する文様の構成や意匠をもつ破片で、口唇端につけられた1個の小突起の一部が残る。地文は斜位の単節斜縄文である。2933は大洞C₃式であり、2935もそれに伴うのであろう。

拓本土器2937・2938・2941・2943は前期の土器である。2941は網目状燃糸文をもつI群2類の土器、2937は口縁部の大部分を失っているが、体部地文が木目状燃糸文をもつIII群2類の土器である。2941は燃糸文をもつ体部破片、2943は外反する口縁部をもち、縦位の燃糸文を地文にしている。2点は胎土に繊維を含むが、前期内での具体的な所属については分からない。2942は地文の上に平行沈線による文様が描かれていることからみて、後期前葉のものかもしれない。2939は磨耗が著しいが、口縁部が狭い無文帯になり、単節斜縄文を地文にする。

剥片石器 (2945) 断面が三角形の厚肉縦長剥片である。先端部寄りの左側面に加撃による小さな抉入部2個が接し、鋸歯縁状になる。

礫石器 (2946) 半円状扁平打製石器である。両端に抉入部が形成されているが、上端の抉りは打ち欠きによって直角の面を作りだしたもので、磨耗痕を伴う。下端の抉りは両面加工に

よるものである。右側縁には上端の挾入部から続く自然面も背部として残るが、凸辺部で中断され、その部分では鋭利な刃部になっている。他の刃部もほぼ鋭利である。なお、両面の一部には捺痕がみられるが、狭い範囲である。I-A₂型である。

遺構の時期 重複関係では、この住居址は縄文時代中期中葉大木8a式に位置づけられているVII-3住居址に切られている。所属時期を決める遺物を欠くが、その点からみて、縄文時代前期～中期中葉の時期内に位置づけられるであろう。

IVI-5住居址群(第157図・第158図2947-2978・第280図5821, 写真図版25・48・97・126)

土器(2947-2064・5821) 縄文時代前期～晩期の土器が出土している。5821は口縁部の多くの部分と下半を失っている。器形は、体部下半が筒状にせばまる、いわゆる長脚付深鉢形土器である。文様帯は口縁部に集約され、頸部の区画帯は絡条体の側面圧痕による刻目を上に伴う隆帯と平行沈線によって構成される。口唇端には撚紐圧痕が施文された直方体の突起を伴うが、現存するのは1個だけである。口唇部には半截竹管による平行沈線がめぐり、その下方、隆帯との間には撚紐圧痕が施文された弧状の貼付文があり、両側には半截竹管による文様が描かれる。体部には単節斜縄文と2条1組の縦位の綾絡文が等間隔で密に施文される。中期初頭大木7a式に含まれる。拓本2954は同一個体の破片である。

晩期の土器には2947・2950・2952の鉢形土器と2948・2949の壺形土器のミニチュアがある。2947は小型である。底部はやや揚げ底様になる。口唇部には1/4周毎に小突起が配され、その間は刻目文が連続する。口縁部には2条の沈線がめぐり、体部は単節斜縄文を地文にする。2950は2個1対の小突起が口唇部に連続してあり、沈線で区画された口縁部の文様意匠は羊歯状文である。体部には横位の単節斜縄文が施文され、下端には沈線を1条めぐらせて、下位を無文帯にする。2952は器高14cmである。口縁部にめぐり2条の沈線以外は横位の無節斜縄文が施文されている。2948は器高が5cm±で、外反する口縁部は波状、底部はやや揚げ底様になる。体部には横位の単節斜縄文が施文され、赤色顔料が両面に付着している。2949は無文である。以上のうち、2950は大洞B-C式である。2947・2952も太洞C₁式以前の晩期前半の型式に含まれるであろう。もう1点のミニチュア土器2951は下半の残存である。底部は外縁が張り出し、やや揚げ底様になる。無文である。2948などの仲間なのかどうかは不明である。

拓本土器2963は頸部付近の破片で、前期II群あるいはIII群のものである。2953は刺突文が施文された隆帯が頸部にめぐり、体部地文は多輪絡条体である。他の出土土器からみて、前期III群に入るであろう。2958は口縁部が複合口縁状に肥厚する。浅い刻みを伴う2条1組の隆帯が垂下し、両側は撚紐圧痕によって文様が構成される。体部は磨耗が著しいが、単節斜縄文が地文であろう。前期III群2類に分類できる。2959は口縁部に3条の平行沈線がめぐり、胎土には繊維をわずかに含む。前期IV群に入る。2956は口縁部が内湾している。上端に1条、下端に2

条がめぐる隆起線の間には、粘土紐を貼り付けた浮線文による斜格子状の文様意匠をもつ。類似の土器は、関東地方の前期末葉の型式のひとつである十三釜台式に知られている。

以上は前期の土器である。2955は大波状口縁になり、著しく外反する。波状頂部からは横位の刻みが増えられた隆帯が垂下し、その両側は沈線によって文様が構成される。大木7a式に相当する。2960—2962は大木8b式の土器である。2964は無文の上に沈線による入組文の文様意匠をもつ埴形の土器で、赤色顔料が内外面に付着している。後期末葉に位置づけられるであろう。

切片石器 (2968—2978) 2968は無茎平基の石鏃、2969は縦形石匙である。2970・2972は削器で、2972は直刃である。2970は打面が両面から2次加工され、右側縁の内湾する部分を除いた縁辺に2次加工が施される。2971・2973は1面の折り面をもつ折断石器である。2975の側面はいずれも折り面である。その折り面が交差するひとつに小剥離痕が生じている彫器である。2977は石鏃、2978は両面が2次加工の剝離面に覆われた尖頭石器で、左右非対称である。2974は、断面が三角形の分厚い切片の一端の表面に、裏面および縁線部から奥行き深い大きな2次加工が施され、尖頭形の刃部が作られている。2976は両面に不規則な小剥離痕が生じている。

石斧 (2966・2967) 2点は擦切りの定角磨製石斧で、2967は基部を折損している。2966は平刃のやや偏刃気味の両刃石斧で、刃縁は磨耗が著しく、潰れている。両面の中央部を中心として潰痕が著しく、とくに裏面のそれは円形気味で深い。2967は平刃のやや円刃気味の両刃石斧で、刃縁は磨耗して小剥離痕を伴う。

礫石器 (2965) やや扁平な円礫を素材にした磨石である。使用面は両面にある。平坦面が形成され、とくに片面にはそれが著しい。

遺構の時期 炉壇設土器である5821からみて、縄文時代中期初頭大木7a式の時期に位置づけられる。(三浦謙一)

Ⅶ—6 住居址・Ⅶ—7 住居址 欠番

Ⅶ—8 住居址 (第158図2979—2992, 2994—3001写真図版98)

土器 (2979—2992) 2979・2980はキャリパー状の深鉢形土器で、口縁部に隆起線で直線文や波形文が描かれる。2979には1個の補修孔がみられる。2981は口縁部上端に刻み目状の刺突列を配した横長の沈線区画文が施され、2992は口縁部に半截竹管で山形文が描かれる。以上、2979・2980は大木8a式、2981・2992は大木7a式に相当しよう。

2982は頭部に連続刺突文を施した太い隆帯、2983は無文の2本の隆帯を巡らすもので、2982の体部には燕糸文が施される。2984は口縁部に単節斜縄文を施し、口唇端から口縁部上端にかけて刻み目状の燃紐圧痕文が加飾される。2985は口縁部に結束第1種羽縄文を施すもので、頭部は数条の燃紐圧痕文で区画される。以上、2984が縄文時代前期第1群2類、2982・2983・2985が第II群に分けられる。

2986・2987は口縁部文様帯に幾可学文様の撚紐瓦痕文を施すもので、頸部は2986が連続刺突文、2987が連続刺突文を配した微隆起帯で区画される。2988は短い口縁部に沈線で幾可学文を施すもので、頸部には細い2列の連続刺突文を配した微隆起帯が伴う。2989・2990は木目状燃糸文を地文とする体部片である。2991は口縁部文様帯に数列の刺突文を規則的に配し、頸部に撚紐瓦痕文を伴う隆帯を巡らすものである。以上、2986・2987は縄文時代前期Ⅲ群、2988・2991はⅣ群、2989・2990はⅢ—Ⅳ群に分類される。

剝片石器 (2994—2999) 2994は横長剝片の1側縁を刃部とする削器で、刃部は細かな櫛状剝離痕で覆われる。2995は非折り面尖頭型の彫器で、刃部背面側の稜線に微細剝離痕がみられる。2996は狭長な剝片の尖頭部に両面から刃部加工を施した石錐である。2997は1辺が折断され、1個の刃部をもつ折断石器で、切り出し形の刃部には刃こぼれ状の剝細剝離痕を伴う。2998・2999は1個の溝入する刃部をもつ抉入石器である。刃部は2次調整が加えられ、細かな剝離痕で覆われる。2998は削器との複合石器で、左側縁に凸刃状の刃部が作られる。

石斧 (3000) 小型の打製石斧である。刃部は両面加工で両刃状に作られ、細破砕痕を伴う。

礫石器 (3001) 扁平な円形礫を素材とした磨石である。表裏面とも滑らかで光沢が著しい。

遺構の時期 床面や炉からの伴出遺物を欠き、住居址の形態・規模とも不明であることから、所属時期の特定は困難である。ただ、大木7a式期に属すⅣⅦ—Ⅴ住居址に後出する重複関係にることや埋土内出土遺物からみて、縄文時代中期初頭から中葉の間に含まれよう。

(佐々木 勝)

ⅣⅦ—Ⅴ住居址 (第160図3002—3022, 写真図版25・98・126・150・157)

土器 (3002—3013) 縄文時代前期の土器が卓越するが、中期・晩期の土器も出土している。3002は下半を失っている。体部半ばに最大径があり、口縁部は屈曲している。口縁部文様帯は隆帯状の貼付文と沈線・半截竹管文で構成される。貼付文は1/4周毎にあるものであろう。口唇部には斜位の刻みが増えられるが、半截竹管の内側と外側の2種類によるものである。口縁部の文様も、半截竹管の内側による刺突とともに、同じ部分を引いた鋸歯状文が描かれる。頸部の区画帯は横位の沈線とその間を充填する半截竹管文によるものである。体部地文は木目状燃糸文である。胎土には繊維をわずかに含み、前期Ⅳ群に分類できる。

拓本土器のうち、3003ほかは前期のものである。口縁部文様帯は、3003—3005が撚紐瓦痕、3007は撚紐と結条体の交互の側面瓦痕によって構成される。3003は低い波状口縁で、口唇端には撚紐の押圧による斜めの刻みを伴う。体部地文は結束第1種羽状縄文である。3004では口縁部文様帯に接して横位の綾絡文1条がみられる。以上はⅢ群に分類でき、3003・3004は2類になる。3012は、口縁部に横位の平行沈線、頸部に爪形文が施文され、体部地文は結束第1種羽状縄文である。Ⅳ群に分類できる。3006は刺突文が施文された隆帯が頸部にめぐる。3008は木

目状燃糸文、3009は結東第1種羽状縄文、3011は燃糸文が地文の体部破片である。

以上のほかに、中期中葉大木8b式である3010、晩期大洞C₁式になる3013がある。

剥片石器 (3016-3022) 3016は横形石匙である。刃部の2次加工の剝離痕は小さい。3018は表面が急傾斜、裏面が非常に角度の小さな2次加工が施された尖頭石器である。3017は2面、3021は3面の折り面をもつ折断石器である。3019は彫器である。折り面交差型で、裏面には小さく細長い槌状の剝離痕が1条生じている。1側縁にみられる2次加工からみて、削器から転用されたものであろう。3022は基部が折断された大型の厚い剥片が素材である。左側縁には2次加工によって作られた抉入部が連続する。鋸齒縁石器になる。3020は両面が2次加工の剝離面に覆われ、鋭い縁辺には小剝落痕が生じている。

礫石器 (3014) 半円状の扁平な亜円礫を素材にした磨石である。器面は全体に滑らかであるが、表面の一部を打ち欠いている。使用面は側面にあり、幅は1.8cm~2.8cmである。

石製品 (3015) 大きさが7.4cm×6.0cmの楕円形をした扁平な礫の中央部に孔がある。孔は楕円形気味で、両面の大きさが異なり、半ばが最大の膨らみを示す。明瞭な加工痕は認められないが、有孔石製品と考えておく。石質は軟質な両輝石安山岩で、色調は灰白色である。

遺構の時期 この住居址は重複する大木7a式の時期のIVII-5住居址群を切っている。そのことや地床坪をもつことを参考にすると、縄文時代中期初頭~中期中葉の時期に位置づけられるであろう。

IVII-10住居址 (第160図3023-3032, 写真図版126)

土器 (3023) 小破片のため詳細は不明であるが、口縁部文様帯には横位の沈線数条がみられる。体部地文は木目状燃糸文であろう。縄文時代前期IV群に分類できる。

剥片石器 (3024-3032) 3032は複刃削器である。3025は打面から右側縁にかけての部分に2次加工を施した削器である。3030は先端部に急傾斜の2次加工を施した搔器状の石器で、刃部幅は狭い。折断石器は2点である。3026は3面が折り面で、刃部は2次加工されている。3027は基部と先端部が折断され、刃部には微細剝離痕がみられる。3031は彫器である。右側縁と先端部の折り面が作る突出部が刃部である。3028・3029・3032は抉入石器である。3028・3032は右側縁に1個の刃部があるが、3028のそれは奥行きが浅い。3029は横長剥片の左側縁に1回の加撃によって小さな抉入部を作るほか、それに接した下方には自然の抉入部がある。

遺構の時期 重複関係や炬の形態などを参考にすると、縄文時代中期初頭~中期中葉の時期に位置づけられるであろう。

IVII-11住居址 (第161図3033-3039, 写真図版25・98)

土器 (3033-3038) 所属時期が不明な3036を除いては縄文時代前期に位置づけられる。3033は体部中部に最大径があり、その上半はゆるやかに内傾している。狭い口縁部文様帯には絡条

体圧痕3条が横位に施文され、体部地文は木目状燃糸文である。胎土にはわずかに繊維を含む。Ⅲ群2類に分類できる。3034は燃紐、3035は絡条体の側面圧痕が文様を構成するⅢ群の土器である。3037は口縁部が複合口縁状に肥厚し、3条1単位の縦位と横位の沈線文が文様を構成する。体部は木目状燃糸文を地文とし、胎土には繊維を含まない。Ⅳ群に分類できる。3038は単節斜縄文と横位の綾絡文が施文されたⅢ群あるいはⅣ群の土器の体部破片で、繊維をわずかに含む。3036は斜位の燃糸文を地文にした口縁部破片で、胎土には繊維を含まない。

剥片石器 (3039) 断面が三角形の厚い剥片である。

遺構の時期 床面から出土した3033からみて、縄文時代前期末葉期、土器分類群でいえば前期Ⅲ群2類の時期に位置づけられる。

ⅠⅦ-12住居址 (第161図3040-3045, 写真図版126)

剥片石器 (3040-3045) 3040は無茎凹基の石鏃、3041は横形石匙である。3044は両端に刃部をもつ抉入石器である。上端の刃部は方形で、奥行きが深い。3042・3045は鋸歯縁石器である。3042は、右側縁を除いた縁辺に連続する抉入部を、加撃によって作っている。3045は横長剥片を素材にし、打面と先端部の一部を除いた縁辺を折ることによって刃部を作る。3043は急傾斜で尖鋭先端部に1条の小小さく細長い槌状の剝離痕と小剝離痕が生じている。

遺構の時期 土器は出土していない。住居址間の重複関係からみて、縄文時代前期末葉、土器分類群でいえば前期Ⅲ群2類あるいはⅣ群の時期に位置づけられる。

ⅠⅦ-13住居址

遺構の時期 固有の遺物を欠いている。住居址間の重複関係からみて、縄文時代前期末葉、土器分類群でいえば前期Ⅲ群2類あるいはⅣ群の時期に位置づけられる。

ⅠⅦ-14住居址 (第161図・第162図3046-3084, 写真図版98・126)

土器 (3046-3084) 縄文時代前期の土器が多い。3048はⅡ群、3055・3061はⅢ群に分類できる。横位の燃紐圧痕と絡条体圧痕が頭部に施文された3065はⅡ群に含まれるものであろう。3057・3062はⅣ群に分類できる。3063は、剝落があるため口縁部の文様は不明だが、爪形文が施文された頭部の隆帯の下位には平行沈線がめぐる。胎土には繊維を含まない。大木6式に相当する土器であろう。口縁部破片3047は結束第2種羽状縄文、3046・3060は磨耗が著しいが、羽状縄文になるであろう。いずれも胎土には繊維を含む。体部破片3049・3050は結束第1種羽状縄文が施文され、3049は横位の綾絡文を伴う。3052は0段多条の原体の回転施文、3064は木目状燃糸文が地文である。以上のうち、3064以外は胎土に繊維を含んでいる。

以上のほか、3054は中期末葉大木10式のものであろう。3051・3059は無文の口縁部破片、3053は単節斜縄文が施文された体部破片である。

剥片石器 (3066-3078) 3067は両端を折損した無茎尖基の石鏃である。3068・3069は縦形

石匙である。3068の右側縁の挟入部は一次剝離の打面を利用して加撃をおこなって作りだす。3070は小型の複刃削器、3072は尖頭削器である。3066は楕円形気味の素材の周辺に両面加工された削器である。3076は横形削器で、刃部を一部欠いている。3075は表面からの2次加工によって短かい刃部が右側縁に作られた削器状石器である。3071は基部が折断されている。3073・3074は2個1対の刃部をもつピエス・エスキューで、3074は、表面の2次加工からみて、搔器の破損品を転用したものである。3077は両面の周辺に2次加工を施した尖頭石器、3078は1個の刃部をもつ挟入石器である。

礫石器 (3079-3081・3083・3084) 4点の半円状扁平打製石器が出土しているが、いずれも折損している。3080・3083は背部をもち、3083では打ち欠きによって作られている。3084は背部をもたない。3081は表面が自然面を残し、裏面は粗割りされている。上端から右側縁は2次加工が施されていないが、鋭い稜線をもち、右側縁には小剝離痕が生じている。左側縁の刃部には奥行き深い2次加工が施され、鋭利である。

3079は両面に研磨面があり、一端は次第に薄くなって石斧様の刃部になる。その部分には細かな剝離痕が生じている。磨石と敲石の機能をもった複合石器であろう。

石製品 (3082) 石質は軟質な白色流紋岩質凝灰岩である。扁平で、全体がていねいに研磨されているが、上端の一部を破損している。有孔石製品の末製品かもしれない。

遺構の時期 出土土器や住居址の重複関係からみて、この住居址は縄文時代前期末葉期、土器分類群ではⅢ群2類あるいはⅣ群の時期に位置づけられるであろう。

Ⅶ-15住居址 (第163図3085-3095、写真図版98・126)

土器 (3085-3090) いずれも縄文時代前期に位置づけられる。3086・3089は絡条体圧痕が口縁部の文様を構成し、3086では半截竹管文が口唇部に連続している。3089の口縁部の幅は2cmと狭く、体部地文は縦位の燃糸文である。3088は口縁部に燃紐圧痕、頸部の区画には爪形文が施文されている。3点は胎土に繊維を含む。3089はⅢ群2類、3086・3088はⅢ群に分類できる。3087は口縁部が肥厚し、沈線による文様をもつⅣ群の土器である。3085は幅が狭いが高い隆帯が頸部にめぐり、その上には斜位の刻みが加えられる。体部地文は木目状燃糸文と推定され、Ⅳ群の土器であろう。3090は木目状燃糸文が施文された体部破片で、Ⅲ群2類あるいはⅣ群の土器である。以上のうち、3087と3090は胎土に繊維を含まない。

剥片石器 (3091-3095) 3091は両側縁に刃部をもつ削器である。3092は、断面が三角形～台形の分厚い剥片の左側縁に、不規則な2次加工が施された削器状石器である。3095は石錐で、刃部の断面は三角形をしている。3093は3面の折り面をもち、そのひとつには裏面からの不規則な小剝離痕が生じている。3094は使用痕のある剥片である。

遺構の時期 この住居址はⅦ-16住居址の側から全体に貼り床をされ、遺物はその下から出

土している。それらの遺物や重複関係からみて、この住居址は縄文時代前期末葉、土器分類群でいえば前期Ⅲ群2類あるいはⅣ群の時期に位置づけられる。

Ⅶ-16住居址 (第164図3096-3100, 写真図版26・98・150・151)

土器 (3096-3098) 3点は縄文時代前期の土器である。3096は下半を失っている。円筒形の器形で、口縁部はわずかに外反して4単位の低い波状になる。文様帯をもたず、木目状燃糸文が地文である。胎土にはやや多くの繊維を含む。3097・3098は口縁部の幅が2cmと狭く、絡条体圧痕が平行横線状に施文されている。頸部には半截竹管文が施文された低い隆帯がめぐり、体部地文は3097が木目状燃糸文である。3098は半截竹管の内側による斜行沈線文帯が隆帯の下にあり、それに接して横位の綾絡文1条、さらに結束第2種羽状縄文が施文される。2点はわずかな量の繊維を胎土に含む。3097・3098はⅢ群2類に分類できる。3096はⅢ群2類の土器に伴う可能性がある。

礫石器 (3099-3100) 3099は、わずかに扁平な円礫の両面に、大きく深い凹みが2個ずつある。3100は石皿の完形品である。両面が中央部を中心にしてくぼんでいる。石質は複輝石安山岩である。

遺構の時期 この住居址はⅦ-17住居址に貼り床を施して構築されていた。その点を考慮すると、縄文時代前期末葉、土器分類群でいえば前期Ⅲ群2類あるいはⅣ群の時期に位置づけられる。

Ⅶ-17住居址

遺構の時期 この住居址は固有の遺物を欠いている。住居址間の重複関係を参考にすると、縄文時代前期末葉期、土器分類群でいえば前期Ⅲ群2類あるいはⅣ群の時期に位置づけられる。

Ⅶ-18住居址 (第163図-第166図3101-3203, 写真図版98・126・150)

土器 (3103-3171) 出土土器は縄文時代前期のものが大部分を占めるほか、中期・後期のものがある。3101は上半を失ったミニチュア土器である。無文で、胎土には繊維を含む。

拓本土器のうち、前期に伴うものから記載してゆくことにする。Ⅲ群1類に分類できるものに3126がある。Ⅲ群2類の土器は3104・3108・3110・3124・3142である。3110は低い隆帯が頸部にめぐり、体部地文は結束第1種羽状縄文、3124は半截竹管文が施文された隆帯が頸部にめぐり、体部地文は木目状燃糸文である。3142も木目状燃糸文が体部に施文される。このほか、3102・3117・3135がⅢ群に含まれる。3109とその同一個体の破片3116は燃紐圧痕1条が口唇部にめぐり、破片のため詳しくは分からないが、ほかの例からみてⅡ群あるいはⅢ群の土器であろう。口縁部文様帯が主に沈線文によって構成される一群の土器がある。そのなかで、文様や胎土・体部地文などからⅣ群に分類できるのは3112・3114・3115とその同一個体破片3122・3118・3119・3125・3129・3137とその同一個体破片3140である。3125は、低い隆帯で区画された口縁

部の文様はⅢ群2類の意匠に似るが、施文が沈線である点で異なる。体部地文は縦位の撚糸文である。3129は体部に縦位の綾絡文を伴い、胎土には繊維をわずかに含む。次に大木7a式に相当するであろうものをあげると、3105—3107・3123・3141・3145がある。3141は沈線文と貼付文が口縁部文様を構成し、体部には単節斜縄文と縦位の綾絡文が施文される。Ⅳ群や大木7a式として分離できないのは3111・3120・3123である。

以上の土器のほかに、中期前葉に位置づけられるであろうものがある。3128とその同一個体破片である3132・3164は隆帯で区画された幅広い口縁部をもつ。口唇部は内面が肥厚している。単節斜縄文を施文したあと、口縁部には大きな、体部側には隆帯と接した小さな山形貼付文があり、その上には体部と同じ原体が施文されている。3130・3134は無文の浅鉢形土器になる。口唇端には小突起と小波状貼付文を伴う。

これまでは前期～中期前葉の土器について述べた。それ以外で、前期に含まれる口縁部や体部破片がある。3103・3131・3136・3143である。

次に中期中葉大木8b式に相当するものを列記すると、3149—3152・3156—3159・3163・3166がある。3144・3146も同じ仲間なのかもしれない。3165は口縁部が無文、頸部に沈線がめぐる中期末葉のものであろう。後期前葉の土器は3162とその同一個体3167、3168—3171がある。3162・3167は地文の上に沈線を引き、一部は磨消される。3162には波状懸垂文がみられ、立石第Ⅲ群第4類に類似している。他に3171が同遺跡第Ⅲ群第5類の仲間である。無文の口縁部破片3127や櫛歯状沈線文を地文にする3147・3148については所属時期は分からない。また3131は波状口縁で、細い粘土を貼りつけているが、詳しいことは分からない。口縁部に地文だけがみられる3153—3155・3160・3161は中期～後期のなかに含まれるものであろう。

剃片石器 (3172—3200) 3172・3174は無茎平基の石鎌で、3174は先端部を折損している。3173は無茎尖基の石鎌である。削器は7点である。3175は先端部を折損しているが、右側縁に刃部がある。3177は凸刃、3178・3180は横形、3176・3197は尖頭の削器である。3181は複刃削器であるが、右側縁の刃部は鋸歯縁状になる。3179は小さな2次加工が連続した削器状石器である。折断石器は6点である。折り面の数は、3184が1面、3183・3189・3200が2面、3182が3面である。3185は基部が折断されているが、他については確実ではない。刃部は、3189・3200が微細剝離痕で識別できる以外は2次加工によって作られている。3186・3188・3192・3193は折り面型、3191は非折り面型の彫器である。折り面型のうち、3186・3188・3192は折り面—古剝離面交差型である。3193は折り面交差型で、刃部を構成する折り面以外にも2面の折り面をもつ。3191は非折り面型尖頭形の彫器で、刃部には小さく細長い2条の櫛状の剝離痕のほかに、微細剝離痕が生じている。なお、基部は折断され、側面を構成している。3195は横長剃片の基部と先端部が刃部になるピエス・エスキューで、剝離痕の奥行きは深く、互いに接してい

る。3187は裏面に階段状の剝離痕や潰痕状の剝離痕が生じていることからみて、ピエス・エスキューの破片の可能性がある。3194は両面が不規則な2次加工面に覆われた尖頭石器、3196・3199は連続する挟入部が刃部を構成する鋸歯縁石器である。3198は石核である。3190は両面が粗い2次加工面に覆われており、刃部側を失っている打製石斧の可能性もある。

礫石器 (3201-3203) 3201は卵形をした磨石で、一面がわずかに平坦になっている。3202は大きく深い円形の凹みが両面に1個ずつある。石皿の破片を転用したものである。3203は半円状扁平打製石器の破片である。右側縁は自然面を残した背部になるものとみられ、上端は両面加工、左側面は研磨された鋭利な刃部になる。

遺構の時期 埋土からの出土土器や住居址間の重複関係からみて、縄文時代前期末葉、土器分類群でいえば前期III群2類あるいはIV群の時期に位置づけられるであろう。

IV-19住居址

遺構の時期 固有の遺物を欠いている。住居址間の重複関係からみて、縄文時代前期末葉期、土器分類群でいえば前期III群2類あるいはIV群に位置づけられるであろう。

IV-20住居址 (第166図・第167図3205-3221, 写真図版98・99・127)

土器 (3205-3216) 大部分が縄文時代前期に位置づけられる。III群1類に分類できるのは3207・3211・3214である。口縁部文様帯は燃紐圧痕によって構成される。3207と3213は同一個体の破片である。口縁部幅は6.5cmと広く、数条1群の斜行する圧痕が文様を構成する。頸部には燃紐圧痕3条がめぐり、その間は刺突文で充填される。体部は結束第1種羽状縄文とその下に縦位の燃糸文が施文される。胎土には少量の繊維を含む。3211は刺突が加えられた隆帯を頸部にもつ。3214は垂下する2条を中心に菱形などの文様意匠をもつ。口唇端には刻みをもつ小突起がつくほか、燃紐圧痕が刻目状に連続する。いずれも少量の繊維を胎土に含む。3212は口縁部の幅が6.5cmで、平行横線状に燃紐を押圧している。3210は口縁部が外反し、燃紐圧痕が平行横線状に施文される。体部地文は結束第1種羽状縄文である。2点はIII群2類に含まれる。3215・3216は頸部を含む破片で、3216の頸部隆帯の上には燃紐圧痕が刻目状に連続する。2点はIII群に含まれる。3205・3208は木目状燃糸文が体部地文である。III群2類あるいはIV群に含まれるものである。3206・3209は口縁部破片であるが、磨耗が著しい。3209は1条の燃紐圧痕が口唇部にみられる以外は不明である。胎土にはやや多い量の繊維を含む。3206は胎土に繊維を含まない。

剥片石器 (3217-3219) 3217・3218は挿器であるが、3218は折損している。3219は加撃によって挟入部を作り出した横形石匙で、横幅が9.3cmと大型である。横形の刃部は裏面からの加撃によって急傾斜であり、側面観がジグザグになる粗いものである。

礫石器 (3220・3221) 2点は折損した半円状扁平打製石器である。3220は背部をもたず、

磨耗した左側縁を除いてはほぼ鋭利である。3221は右側縁に背部が形成されているものとみられ、左側縁は磨耗が著しい。

遺構の時期 出土遺物や占地などを参考によると、この住居址は縄文時代前期後半期、土器分類群でいえば前期Ⅲ群の時期内に位置づけられるであろう。

JV区

JV-1 住居址 (第167図3222-3229, 写真図版99)

土器 (3222-3228) 3222-3227は縄文時代前期の土器で、胎土には繊維を含んでいる。3223は口唇端に指頭状押圧痕を伴う。地文は複節斜縄文である。3222は単節斜縄文が地文である。2点は1群2類に分類できる。捻紐圧痕が口縁部文様帯に施文された3225はⅢ群1類の土器である。体部破片3224は多軸絡条体、3227は結束第1種羽状縄文が施文されているが、3226の施文原体は分からない。3228は晩期大洞C₂式の破片である。

剥片石器 (3229) 三角形に近い形状の剥片を素材にし、打面を含めた周縁に2次加工を施した小型の削器である。

遺構の時期 この住居址は、JV-2住居址とともに、他の住居址とはやや占地を異にしている。所属時期についての確実なことは不明である。

JV-2 住居址 (第167図3230-3233, 写真図版26)

土器 (3230-3233) 3230は浅鉢形土器で、無文である。頸部が隆帯状になり、短かい口縁部は内傾する。口唇端は内側に傾斜している。外面は、口縁部と底部がいていねいにみがかれ、他は粗いケズリが施されている。内面は口縁部付近にケズリが施される以外はいていねいにみがかれている。器形的な特徴や無文であることなどからみて、縄文時代中期中葉大木8a式あるいは同8b式に相当するものであろう。3231は上半を失っている。器形は、体部下半から上がやや開き気味に外傾する。わずかに残った頸部には2条の細い隆起線が認められるが、詳しいことは分からない。体部地文は縦位の単節斜縄文である。器形や施文の特徴などからみて、中期中葉の土器と推定される。拓本土器3232・3233は単節斜縄文をもつ体部破片で、胎土に繊維を含んだ前期の土器である。

遺構の時期 3230は床面から出土した。推定ではあるが、それを参考にし、この住居址を縄文時代中期中葉の時期に位置づけておく。

JVII区

JVII-1 住居址 欠番

JVII-2 住居址群

遺構の時期 出土遺物については不明である。住居址群間の重複関係をもとにして推定すれば、縄文時代前期、土器分類群のⅡ群あるいはⅢ群Ⅰ類の時期、ないしはそれ以前に位置づけられる。

JⅦ-3 住居址 (第168図・第169図3234—3273, 写真図版26・127)

土器 (3234—3239) 縄文時代前期・中期・晩期の土器が出土している。3234は鉢形土器の破片である。口唇端は指頭状の押圧によって小波状を呈し、口縁部には平行沈線2条がめぐる。地文は横位の単節斜縄文である。晩期大洞C₂式に相当する。3235は撚紐圧痕が口縁部の文様を構成する前期Ⅲ群、3239は口縁部に円形竹管文、体部に結束第1種羽状縄文が施文された浅鉢形土器で、前期Ⅳ群に分類できる。3238は中期中葉、3236は大木10式に相当する破片である。3237は鋭い沈線文が地文になり、口唇端には直交するように刻目が連続する。時期は不明である。

剥片石器 (3240—3273) 3251は先端部を折損した縦形石匙である。3243は削器で、基部を失っている。3240・3264は両側縁、3241は左側縁に刃部をもつ削器状石器である。3253は、削器状の刃部のほかに、2個の抉入部が刃部になる複合石器である。3266は傾斜する刃部をもつ搔器である。3245は1面、3246は2面の折り面をもつ折断石器で、3246の刃部は2次加工されている。3249は折り面—古剝離面交差型の彫器で、幅広い刃部とその周辺には、槌状の剝離痕のほか、微細な剝離痕が生じている。

抉入石器は3点である。3247は右側縁にある抉入部の刃部のほか、先端部には急傾斜の2次加工が施された短い刃部があり、搔器との複合石器である。3250は小型の剥片の先端部、3258は右側縁に刃部をもち、3258のそれは抉りが深い。3252は両面加工された尖頭石器である。3267は大型の、3259は基部を失った尖頭石器である。3267の先端部は厚く、断面は三角形である。2次加工は粗く、側縁は鋸歯縁状になる。3255は三叉状の石器で、それぞれは先端部を失っている。ほぼ両面がていねいな2次加工面に覆われている。

3262は小型の剥片で、直角に近い2次加工が先端部に施されている。刃潰しの可能性もあるが、両側縁に使用痕は認められない。3244・3248は折り面あるいは折損面をもつほか、2次加工された刃部をもつ。3254は左側縁と先端部に2次加工による刃部をもつ。3242・3256・3257・3261・3263・3265は使用痕のある剥片、3268—3273の6点は小型の剥片である。

遺構の時期 住居址間の重複関係からみて、縄文時代前期、土器分類群でいえば前期Ⅱ群あるいはⅢ群Ⅰ類の時期ないしはそれ以前の時期に位置づけられるであろう。

JⅦ-4 住居址

遺構の時期 固有の遺物を欠いている。住居址間の重複関係からみると、前述のJⅦ-3住居址を切っているが、後述するJⅦ-7住居址群などには切られている。それらの住居址に近い時

期に位置づけられるであろう。

JⅦ-5 住居址 (第170図-第172図3274-3326、写真図版26・99・127・150)

土器 (3274-3302) すべて縄文時代前期に位置づけられる。3276は口縁部の多くと底部を失っている。体部はほぼ直壁に近い。頸部には燃紐圧痕3条をめぐらせ、区画としている。わずかに残る口縁部には回転縄文がみられ、体部には結束第1種羽状縄文が施文される。3275は体部、3279は底部を含む下半が残存している。3275は全体に、3279は下端の部分を除いては結束第1種羽状縄文が施文されている。3278は口縁部を含む大型の破片で、結束第1種羽状縄文が施文されるが、文様帯は区画されない。以上の4点は、いずれも胎土に繊維を含んでいる。3276はⅡ群に分類できる。他の3点も、結束羽状縄文が施文されている点や共存土器からみて、Ⅱ群あるいはⅢ群の仲間であろう。

拓本土器3280は小波状口縁である。口縁部には綾絡文が施文され、口唇端には指頭状押圧痕が連続する。Ⅰ群1類に分類できる。3274・3282・3298・3299はⅡ群の土器である。4点は頸部に隆帯をもつ。その上下は燃紐や絡条体の側面圧痕で区画され、隆帯上には3274・3298が刺突文、3299が燃紐圧痕を横位に施文する。口縁部への施文は、3282は横位の単節斜縄文、3298が結束第1種羽状縄文である。3274は燃紐圧痕によって方形に区画し、その内部にLRとRLを施文して羽状縄文としている。

口縁部が燃紐あるいは絡条体の側面圧痕による文様をもつⅢ群の土器は多い。3277・3281・3283-3286・3289-3291・3295・3300-3302で、燃紐を押圧するもの9点、絡条体を押圧するもの3点、2種類が併用されるもの1点である。文様は、3283・3291のように平行横線状になるもの、3285・3302のように菱形文になるものなどがある。頸部の区画は、3277・3283・3301・3302が隆帯、3281が刺突文によっておこなわれる。隆帯上には刺突文・竹管文・燃紐圧痕が施文される。体部地文が分かるものは、3291が結束第1種羽状縄文、3283は縦位の燃糸文であろう。分類群を細分すれば、3285・3286・3289・3290・3302が1類、3281・3283・3291などが2類である。

3292はⅣ群に分類できる。波状口縁で、口縁部文様帯には沈線文と竹管文が施文され、体部は木目状燃糸文を地文にする。胎土には繊維を含まない。3287・3293・3296・3297は口縁部破片で、不明な3296を除いては結束第1種羽状縄文が施文される。3288は燃紐圧痕2条が頸部に施文されるが、詳細は不明である。3294は多輪絡条体をもつ体部破片である。以上はⅡ群あるいはⅢ群の分類群に含まれるであろう。

剝片石器 (3303-3323) 3303・3306は石鏃である。3303は両端を折損し、3306は無茎尖鏃である。3304・3305は横形石匙、3312は尖頭形をした縦形石匙である。3307も折損した縦形石匙である。削器は4点が出土した。3308・3313はいずれも折損している。3313は階段状の剝離

を含む大きな剝離面が裏面の尖端部に生じている。3209は凹刃、3310は凸刃削器に含まれる。3316は撻器である。側縁には粗い2次加工が両面から施されている。3311・3318・3320は尖頭石器である。3320は打面にも2次加工が施されて尖頭形になるが、折損している。3315は2面の折り面をもつ折断石器で、刃部には2次加工が施されている。3314は折り面交差型の彫器である。刃部には小剝離痕が生じている。3317は2個1対の刃部をもつピエス・エスキューである。刃部の奥行きは浅い。3321は加撃による抉入部が先端部に連続した刃部をもつ鋸歯縁石器である。3322は篋状石器、3319は使用痕がある剥片である。3323は残核である。

礫石器 (3324・3325) 2点は半円状扁平打製石器である。3324は三角形の形状をし、先端部と左側縁を除いた部分は背部で、その部分は研磨されている。左側縁は磨耗が著しい。3325は折損している。右側縁の折損部寄りの部分には平坦面が認められ、その部分から背部が続くものであろう。側縁は磨耗しているが、他の部分は鋭利である。

石製品 (3326) 断面が六角形である角柱状の礫で、両端を折損している。石質は石英安山岩で、加工痕は認められない。ほかの例からみて、石棒の可能性をもつものである。

遺構の時期 埋土からの出土土器や重複関係を参考によると、縄文時代前期、土器分類群でいえばⅡ群あるいはⅢ群1類の時期に位置づけられるものであろう。

JVII-6 住居址 (第171図—第173図3327—3353, 写真図版27・127)

土器 (3327—3329) 3327は上半の残存である。口縁部は6単位の大波状口縁である。文様帯は燃紐圧痕で区画され、幅4.5cm～6.5cmの口縁部には横線状に燃紐を押圧施文するが、波状部では口唇に沿い斜めになる。体部は木目状燃糸文が地文である。胎土には繊維をわずかに含む。縄文時代前期Ⅲ群2類の土器である。3328は上半が残存しているもの、その部分でも欠損部が多く、磨耗が著しい。口縁部には2条の沈線がめぐり、下位のものは7ヵ所以上に施文された円形竹管文に区画されて、体部へ垂下している。垂下沈線には長短があり、交互に配置される。短いものは数cmで下端が収斂するが、長いものについては破損のため不明である。地文は単節斜縄文である。中期前葉に位置づけられるであろう。3329は下半を失っている。壘形土器で、体部は外傾して肩部に最大径があり、口縁部は外反している。口唇部には棒状工具による刻み目が連続し、小波状になる。口縁部は無文、体部には横位の単節斜縄文が施文される。晩期大洞式のうち、C₂式以降の後半型式に含まれるものである。

剥片石器 (3330—3353) 3330は横形石匙、3333は折損した削器である。3331は削器状石器で、2次加工による刃部が右側面と表面の交差部が作る稜線部にあるが、磨耗している。3332は削器状の刃部が先端部にあるほか、裏面には不規則な剝離痕がみられる。3334は両面加工による不規則な刃部が左側縁にあり、削器状石器になる。3338は撻器である。3335は折り面交差型の彫器で、刃部とその付近には微細な剝離痕が生じている。3337は2面の折り面をもつ折断

石器、3343は抉りの浅い刃部が左側縁に作られた抉入石器、3342は両面加工の尖頭石器である。3346は2次加工によって打面を取り去っている。3339・3340・3344・3345・3351・3352は使用痕のある剥片、3341・3347-3350・3353は剥片である。

遺構の時期 重複関係からみて、縄文時代前期、土器分類群でいえばⅡ群あるいはⅢ群の時期に位置づけられるであろう。

JVII-7 住居址群 (第173図-第177図3354-3423, 写真図版27・28・99・100・127・151・157)

土器 (3354-3403) 実測できた土器はほとんどが縄文時代前期に位置づけられる。3359・3361はⅡ群に分類できる。3361は器高が38.5cmである。体部半ばがやや膨らみ、口縁部は外傾する。頸部の区画帯は撚紐や絡条体の側面圧痕と幅が狭く低い隆帯状の部分とで構成される。口縁部と体部の大部分に結束第1種羽状縄文、体部下端に単節斜縄文が施文される。3359は下半を失っている。円筒形の器形をもち、口縁部はやや外反する。撚紐圧痕2条が区画帯になり、口縁部・体部とも結束第1種羽状縄文が施文される。2点は胎土に繊維を多く含む。

3357・3358・3360はⅢ群に分類できる。3357は器高が36cm±である。器形は3361に類似する。口縁部は4単位の低い波状口縁になり、底部はやや揚げ底様である。頸部には竹管による斜めの刺突が加えられた狭く低い隆帯がめぐる。口縁部は幅が4cm~5cmで、撚りの方向を異にした2本1組の撚紐を横線状に押圧している。体部地文は0段多条の原体による結束第1種羽状縄文が主体である。3358は下半を失っている。円筒形の器形をもち、口縁部は4単位の低い波状口縁になる。3条の撚紐圧痕を頸部にめぐらせて区画帯とし、口縁部には撚りの方向を異にした2本1組の撚紐を押圧し、菱形などの幾何学的な文様を描く。体部には結束第1種羽状縄文が施文されるとともに、2条1組の縦位綾絡文が器面を3分割している。なお、拓本3386は同一個体の破片である。3360は器高が34.5cm±である。口縁部に比べると底部の直径が大きく、ずんどうの円筒形になる。低い、4単位の波状口縁である。口縁部文様は前2者同様の撚紐を横線状に押圧している。体部は磨耗がひどく、部分的に縦位の羽状縄文がみられるが、結束の有無は不明である。拓本3389も同一個体の破片である。以上の3点は少量の繊維を胎土に含む。3358は1類、3357・3360は2類に細分できる。

3355は器高が12.5cm±と小型である。結束第1種羽状縄文が全体に施文され、文様帯の区画はされていない。胎土には少量の繊維を含む。3354・3356・3362は底部を含む体部下半が残存している。3354は器壁が薄く、この部分では無文である。胎土には繊維を含まない。3356はやや揚げ底様になる。部分的に羽状縄文がみられる以外は磨耗している。3362もやや揚げ底様になる。斜位の撚糸文が施文され、下端は2cm±幅のみがかれていて無文になる。3356・3362は胎土に少量の繊維を含む。3363は朝顔形の器形をもつ浅鉢形土器である。底部は2.5cm±と厚い。胎土には繊維を少量含む。なお拓本3396・3402は同一個体の破片である。以上の土器のうち、

3354は所属時期が不明であるが、他の4点は共伴土器からみてII群あるいはIII群の仲間であろう。

拓本土器はすべて前期に含まれる。II群に分類できるのは3368・3369・3372・3373・3379・3383・3393である。口縁部文様帯は、3369・3372・3379・3383が単節斜縄文、ほかは結束第1種羽状縄文と非結束の羽状縄文である。頸部に施文される区画帯は3373・3383が隆帯で、ほかは撚紐圧痕文である。3373では、隆帯は撚紐圧痕にはさまれ、上には刺突文を伴う。3368・3369・3372では1条、3379では2条の撚紐圧痕が口唇部に施文されるのも特徴のひとつである。体部地文を知ることができる例は少ないが、3369では結束第1種羽状縄文である。

III群に分類できるのは3365-3367・3374・3375、3377とその同一個体破片3378、3380・3384・3385・3388、3392とその同一個体破片3395や3399、3394・3397・3398である。口縁部への施文はすべて撚紐をもちいており、斜位と横位の線状に押圧して幾可学的な文様意匠をもつものが多い。3380や3385は低い波状口縁になる。頸部区画帯が隆帯であるのは3380・3388・3397で、いずれもその上に刺突文が加えられる。体部地文がわかる3394や3398では結束第1種羽状縄文である。以上のIII群の土器はほとんどが1類に分類できる。

口縁部破片3376・3382は地文を施文したあと、撚紐2条ないし3条を平行横線状に施文して口縁部文様帯としている。3382ではその下位に結束第1種羽状縄文がみられる。同様の文様構成をもつものはI群1類としたなかにもあるが、それとは地文や胎土ほかで区別できるものである。共伴土器を考慮に入れるならば、II群あるいはIII群1類の土器の仲間とすることができるであろう。そのほかでは、口縁部破片3364は結束第1種羽状縄文、3370は単節斜縄文、3371は撚紐文を地文にする。3391は波状部に1個の穿孔を伴う無文の土器である。少量の繊維を含む。3387・3390は櫛歯状沈線文が施文された口縁部破片で、胎土には繊維を含む。3401・3403は撚紐や結条体の側面圧痕による区画帯をもつ。この2点はII群に分類できるものの破片とみられる。体部破片3400は結束第1種羽状縄文が施文されている。

銅片石器 (3404-3420) 3404・3405は縦形石匙である。3404は剝離の力が自然面にぬけているが、その面を打面とした加撃によって右側縁の袂入部が作られている。3416は横形石匙である。表面は2次加工面に覆われる。3406は横形削器、3408は打面を失っている直刃削器である。3407は横形の刃部には規則的、他の部分には粗く不規則な2次加工が施された削器である。3409・3415は搔器で、3415は基部を折損している。3413はつまみ部をもつ石鎌である。3414は右側縁に1個の刃部をもつ袂入石器である。また、その側縁と先端部の一部を折断した面が鋭角に交わる部分に2次加工を施し、石鎌様の刃部を作り出した複合石器である。3411は奥行きが深く大きな刃部をもつ袂入石器である。

3412は1面、3417は2面の折り面をもつ折断石器である。3410は折り面交差型の彫器である。

刃部は小剝離痕を伴うほか、磨耗が著しい。3418は左側縁から先端部に刃部をもつ鋸齒縁石器である。3420は寛状石器であり、規則的な槌状の剝離痕が先端部にみられる。3419は不規則な小剝離痕をもつ剥片である。

礫石器(3421・3423) 3421は上端に浅い抉入部をもつI-B型の半円状扁平打製石器である。左側縁は磨耗している。3423は磨石である。両面の一部と直線部の平坦面に擦痕を伴っている。

石製品(3422) 扁平で、不整な楕円形気味の形状をした垂円礫が素材である。器面は未加工である。一端寄りの中央部には両面から回転穿孔されているが、貫通はしていない。石質は凝灰質粘板岩である。

遺構の時期 出土土器や住居址間の重複関係からみて、この住居址は縄文時代前期後半期、土器分類群でいえば前期Ⅲ群1類の時期に位置づけられる。

JⅦ-8 住居址 欠番

JⅦ-9 住居址 (第177図—第179図3424—3478, 写真図版100・127)

土器(3424—3459) 縄文時代前期の土器が主体を占めている。3424は口縁部を欠いたミニチュア土器で、底部は揚げ底である。無文で、胎土には少量の繊維を含む。Ⅲ群に分類できるもののうち、1類とすることができるのは3438・3439である。2類に分類できるのは3429・3432・3433・3436・3437・3441・3443・3445・3446・3450である。口縁部幅は3cm以下の狭いものが多い。口縁部文様帯は、3446が絡条体である以外は撚紐をもちい、平行横線状に押圧している。3446では口唇端にも同じ原体が施文されている。文様区画帯には刺突文を伴った隆帯をもつものが多い。体部地文がわかるものは木目状撚糸文と縦位撚糸文である。以上のほかに、3430・3431・3435がⅢ群に分類でき、頸部を含む破片3440や3451も含まれる可能性がある。

つぎにⅣ群に分類できるものをあげると、3425・3427・3428・3434がある。口縁部は、3428が波状口縁になり、3425・3427では肥厚している。3428は沈線と円形竹管文、3434は平行沈線が頸部にめぐり、口唇部に斜位の刻み、その下位に横2列の刺突文を施文している。3428に繊維がわずかにみられる以外は含まない。体部破片3442・3444は異条斜縄文で、3442は1段の縄の合燃りである。また3449は結束第1種附加条付である。いずれも胎土に繊維を含む。3448は、無文の体部に斜行する沈線が引かれ、大木6式に相当する土器の体部破片と推定される。

以上が前期の土器であるが、そのほかに、3452は中期末葉大木10式の体部破片とみられ、3458は晩期大洞C₂式、3457は大洞C₁式の破片である。3454・3456・3459は研磨された無文の口縁部破片である。3453は頸部の隆帯上に1条の沈線が引かれている以外は無文である。

銅片石器(3460・3465—3478) 3465は長さは短い、両側縁に抉入部を伴うことからみて、錠形石匙である。3467は尖頭形の剥片の周辺に連続する2次加工が施され、尖頭削器の一種である。3468は削器の破片であろう。3460は右側縁から先端部の半ばにかけての部分に小さな2

次加工が連続している削器状石器である。3472は基部が折断され、刃部には小さく不規則な剝離痕が生じている。3476は抉入石器である。3466は折損しているが、奥行き深い規則的な2次加工面に両面が覆われている。3471・3475は使用痕のある剥片、3469・3470・3473・3474・3477・3478は剥片であるが、3473を除いた5点は同一母岩から得られたもので、石質は玉髄である。

石斧 (3464) 刃部側を折損した定角磨製石斧である。

礫石器 (3462・3463) 2点は半円状扁平打製石器である。3463は、上端は粗い打ち欠きがおこなわれて鋭利な刃部になる。左側縁は角度の小さな2次加工が主に表面におこなわれるが、刃部幅は最大1.7cmと広く、磨耗している。右側縁の下方は2次加工されてやや鋭利であるが、上半は未加工で幅広い。しかし、磨耗していることからみて、いちおう下半から連続する刃部とみることができる。下端は折損の可能性もあるが、その面よりも新しい研磨痕が認められる。3462は上端を含んだ小破片で、右側縁には自然面を残した幅広い背部をもつ。

遺構の時期 埋土からの出土遺物や占地などを参考にすると、縄文時代前期末葉期、土器分類群でいえば前期Ⅲ群2類あるいはⅣ群の時期に位置づけられるであろう。

JVII-10住居址

遺構の時期 この住居址はJVII-9住居址の貼り床の下位から検出されたもので、固有の埋土や遺物を欠いている。重複形態や占地からみて、この住居址の所属時期はJVII-9住居址のそれに近いことが考えられる。

JVII-11住居址 (第180図—第182図3479—3514, 写真図版28・100・128)

土器 (3479—3495) 全部が縄文時代前期の土器である。3479は下半を失っているが、やや小さめの土器である。体部はいくぶん外傾する。燃紐圧痕2条をめぐらせて区画帯とし、口縁部・体部とも結束第1種羽状縄文が施文されている。胎土には多くの繊維を含む。Ⅱ群に分類できる。3480は下半を失っている。体部下半に最大径があり、その上位は内傾してゆが、口縁部では外反気味になる。口縁部は6単位の低い波状である。3条の平行沈線をめぐらせて区画帯とし、口縁部は2方向の斜行沈線が文様を構成する。体部地文は木目状燃糸文である。胎土には繊維をやや多く含む。Ⅳ群に分類できる。なお、拓本3485は同一個体の破片である。

拓本土器のうち、3492はⅡ群の土器である。頸部の区画帯は4条の燃紐圧痕によるもので、幅2.5cmの口縁部には横位の単節斜縄文、体部には結束第1種羽状縄文が縦位に施文されている。胎土には繊維をやや多く含む。Ⅲ群に分類できるのは3481—3483・3490・3493・3495である。3490が結条体である以外は燃紐を押圧施文する。体部地文を知ることができる3482・3495は結束第1種羽状縄文である。いずれも少量の繊維を胎土に含む。細分は、3481が1類、3482・3490・3493が2類になり、ほかは不明である。Ⅳ群に分類できるのは3484・3486・3488・3489

の4点である。3484は口縁部、3486は口唇部が肥厚している。3484は刺突文と沈線文が口縁部の文様を構成し、頸部には指頭状押圧痕が施文されている。4点とも、沈線の幅は広く、竹管などの外側の部分を引いているのであろう。3488がわずかに繊維を含む。以上のほかには結束第1種羽状縄文が口縁部に施文された3491、横位の綾絡文を体部に伴う3488、地文が不明の3494がある。3点も前期の土器で、3488・3491はII群以降のものである。

剣片石器 (3497—3506) 3497は小型の尖頭削器、3498・3499は折損した削器である。3503・3505は石錐である。3505は刃部の断面が楕円形であるが、反対の先端は扁平である。3501・3504は2個1対の刃部をもつピエス・エスキューである。3501は先端部と1側縁が折断され、折り面から生じた細長い棒状の剝離痕は稜線を切っている。下端の刃部は幅が狭く、不規則な剝離痕を伴う。3504は相対する部分に階段状剝離痕とともに潰痕状の剝離痕がある。3502は分厚い尖頭部に裏面からの急傾斜の2次加工が施された掘器の一種である。3500は不規則な小剝離痕を伴った石器である。3506は篋状石器で、ほぼ両面加工されている。

石斧 (3496) 刃部側を折損した磨製石斧である。形状はいびつで、研磨加工は粗雑である。

礫石器 (3507—3510・3513・3514) 3507—3509は半円状扁平打製石器である。3507は形態的にやや特殊であるが、II-A₁型に含まれる。内湾する刃部が左側縁にある以外は背部である。背部は右側縁に自然面を残すが、ほかは2次加工によって平坦面が作り出される。刃部はわずかに磨耗している。3509はI-A₂型で、背部は自然面である。挿入する下端の刃部は鋭利であるが、上端から左側縁の部分は磨耗している。3508は両端が折損面である。右側縁は背部になり、左側縁の刃部は2次加工されているが、幅が広く、磨耗が著しい。

3510は、長軸方向に伸びる緩やかな凹面が長大な垂角礫の表面に形成されている。石皿の仲間である。3513・3514は表面に1〜2個のくぼみをもつ。3513では側面や稜線の一部に潰痕を伴い、敲石との複合石器である。

石製品 (3511・3512) 2点は角柱状の長大な礫である。断面は、3511が不整な台形、3512が不整な五角形になる。石質はともに石英安山岩で、加工痕は認められない。ほかの例からみて、石棒の可能性をもつものであるが、確実なことは分らない。

遺構の時期 埋土からの出土土器や占地などからみて、縄文時代前期、土器分類群でいえば前期II群〜IV群の時期内に位置づけられるであろう。

JVII—12住居址 (第182図・第183図3515—3528, 写真図版29・100)

土器 (3515—3525) 縄文時代中期に位置づけられる3522以外は前期に含まれる。3517は器高が35cm±である。円筒形ではあるが、バケツ形に近い器形になる。口縁部は4単位のやや大きな波状、底部はやや揚げ底様になる。頸部に燃紐圧痕3条をめぐらせて区画帯とし、幅5cm〜6.5cmの口縁部には横位の単節斜縄文が施文されるが、半ばにめぐる燃紐圧痕をはさんで羽状

縄文になる。体部は、単節斜縄文が施文された下端以外は結束第1種羽状縄文を地文にする。胎土には繊維を含む。II群に分類できる。3516は上半が残存している。幅3.5cmの口縁部文様帯は1条の撚紐圧痕で区画され、単節斜縄文を施文した上に撚紐圧痕による鋸歯状文を重ねている。体部には5cm土の間隔で撚紐圧痕1条をめぐらせ、その間に横位の単節斜縄文を施文している。含まれる繊維の量は多い。分類群としてはII群に含めることができるが、口縁部文様帯に撚紐の押圧痕を併用している点ではIII群の識別形質を併せもっているといつてよい。3515は底部を含む体部下半が残存している。下端の単節斜縄文帯の上位には結束第1種羽状縄文をわずかに認めることができる。そのような構成は3517に類似している。胎土には少量の繊維を含む。

拓土土器3519・3520・3525は同一個体の口縁部破片である。縄文を回転施文した上に撚紐圧痕5条を平行横線状に重ねている。胎土には繊維をやや多く含む。分類的には先の3516と同様である。3518は低い波状口縁で、口縁部文様が撚紐圧痕、体部地文が結束第1種羽状縄文である。III群に含まれる。3523は結束第2種、3524は結束第1種の羽状縄文をもつ体部破片で、II群-IV群の土器である。3521は絡条体圧痕が施文されている。3522は斜位の刻目が連続施文された高い隆帯が頸部にめぐり、口縁部には撚紐圧痕がみられるほか、隆帯に接して2個1対の貼付文を伴う。中期初頭大木7a式に含まれる。

銅片石器 (3526・3527) 2点は削器状石器である。3527は左側縁から先端部の一部にかけて2次加工が施されるため、尖頭状の刃部をもつ。

礫石器 (3528) 複輝石安山岩の角礫が素材で、一部を欠損している。形状からは台石に類した機能をもつことも推定できるが、使用痕などは認められず、確実ではない。

遺構の時期 3515-3517は埋土下部から出土している。それらの土器や重複関係、占地などからみて、縄文時代前期前中期、土器分類群でいえば前期II群に位置づけられるであろう。

JVII-13住居址・JVII-14住居址

遺構の時期 2棟の住居址は、他の1棟JVII-15住居址とともに同心円状ともいえる状態で重複していたもので、固有の埋土や遺物を欠いている。炉の再利用があることなど、そこにみられる重複形態からは、3棟の住居址は時間的にかなり近い関係にあったことが推定できる。したがって2棟は縄文時代前期後中期、土器分類群でいえば前期III群の時期に位置づけられるであろう。

JVII-15住居址 (第182図-第191図3529-3685, 写真図版29-31・100・101・128・129・151)

土器 (3529-3545・3547-3606) 実測できた土器には縄文時代前期と中期のものがある。まず前期の土器から記載してゆく。3529は器高が27cm±である。器形は円筒形で、4単位の低い波状口縁になる。幅が1.5cm~2.5cmと狭い口縁部には、撚りの方向を異にした2本1組の撚

紐を、波状部では垂線状、そのほかでは横線状に押圧している。体部地文は結束第1種羽状縄文が主体で、下端には縦位の燃糸文が施文される。胎土には繊維を多く含む。3530は器高が18cm±と中型である。体部が外傾しているうえ、口縁部は外反する。低い波状口縁になる。燃紐瓦痕2~3条が文様帯を区画し、口縁部には燃紐瓦痕1条がめぐり以外は無文である。体部は、結束第1種羽状縄文が上半で横1列に施文される以外は0段多条と2段の原体とがつかわれている。胎土には繊維を含み、3529とともにⅢ群2類に分類できる。3534は器高が41cm±と大型である。円筒形の器形をもつが、バケツ型に近いものである。口縁部は4単位の波状になる。頸部の区画帯は燃紐瓦痕を横線状に重ねた隆帯で、その上下をさらに燃紐瓦痕で挿む形になる。口縁部の幅は波状部で9cmと広い。縦位の綾絡文がやや密な状態に施文され、それは体部にも連続する。体部下端には単節斜縄文が施文され、その上位は一部に単節斜縄文が認められるが、大部分は綾絡文以外は無文である。胎土には多くの繊維を含む。この土器の器形や区画帯の作りはⅡ群である第181図3517によく似ている。また体部下端に単節斜縄文帯をもつ点も共通している。一方、縦位の綾絡文は第173図3358の例にもあるようにⅢ群1類の土器の構成要素の一部としてみられるものである。以上の点を考慮に入れ、そして何よりも綾絡文が結節回転文を指すものである以上、この土器はⅡ群に分類できる。

3533は大型の破片である。4単位の波状口縁になり、器形としてはいわゆる長脚付深鉢形土器になるものであろう。文様帯は口縁部から体部上半までの部分を占め、上位から、燃紐瓦痕文帯、半截竹管による小波状文帯、その下位にやや乱雑であるが、半截竹管による横線状文帯の順で施文されている。体部地文は単節斜縄文である。胎土には少量の繊維を含む。燃紐瓦痕を文様のなかに含む点ではⅣ群から逸脱しているが、器形や文様構成法、繊維を含む点などでは前期末葉の時期に位置づけることができる。なお、拓本3551・3563は同一個体の破片である。

3539は口縁部を含む上半を失っている。体部地文は結束第1種羽状縄文であり、胎土には多くの繊維を含む。3531・3532は底部を含む下半が残存している。ともに底部がやや揚げ底様になり、胎土には少量の繊維を含む。3531は器面の磨耗が著しく、単節斜縄文が認められるものの詳しくは分らない。3532は単節斜縄文が地文である。3536・3538も上半を失っている。3536は、直立気味に立ち上がった体部が下半から急激に開いてゆく。単節斜縄文が施文されるほか、2条1単位の縦位の綾絡文が器面を8分割している。胎土には繊維を含まない。3538は縦位の燃糸文が施文され、胎土には繊維をやや多く含む。以上のうち、3539はⅡ群あるいはⅢ群に含まれる。3538は、本遺跡での他の例からみて、Ⅱ群に含まれるものであろう。3536は、器形的にみて、Ⅲ群2類ないしはⅣ群の土器に共存するであろう。

前期以外の土器に3535がある。下半を失っているが、小型の土器で、低い波状口縁になる。

体部下半には文様帯を区画する波状沈線文がめぐり、それより上には、単節斜縄文が充填された大小のU字文や楕円形文による文様が展開する。中期末葉大木10式のなかでも古い段階に位置づけられるものである。

拓本土器の大部分は前期に含まれるものである。網目状燃糸文をもつ3562はI群2類の土器である。II群に分類できるものは3548、3550とその同一個体破片の3558、3576である。3548・3550は口縁部に結束第1種羽状縄文が施文され、頸部の区画は燃紐と絡条体の側面圧痕によるものである。3548は口縁部の幅が2.5cmと狭い。3576は口縁部が横位、体部が縦位に多軸絡条体を回転している。3580は同一個体の体部破片である。III群に分類できるものは多い。そのうち、1類に含まれるのは3541・3543・3549・3552・3553・3572である。3541・3549などの口縁部の文様は平行横線状と鋸歯状の燃紐圧痕を組み合わせている。2類に含まれるのは3540・3555・3556・3559・3568・3570、3583とその同一個体の3584、3585・3590である。3555は大型の破片である。低い波状口縁になり、幅6cm±の口縁部文様帯は平行横線と山形状の燃紐圧痕によって構成される。体部地文は木目状燃糸文である。ほかでは3556・3568が木目状燃糸文、3559が結束第1種羽状縄文、3583が多軸絡条体を体部地文とする。そのほかに、3544・3545・3554・3560・3564・3565・3569・3571・3578・3587・3589がIII群に分類できる。3569は器形や波状部下に円形凹文を伴う特徴からみて、2類の仲間とすることができる。

IV群に分類できるのは3542・3561・3581・3586・3588・3591である。3542は口縁部が肥厚し、幅が狭い。平行沈線で区画されたなかには半截竹管文が連続する。3586の口縁部は平行横線をめぐらすほか、それを区画する縦位の沈線内には刺突文を施文する。2点は木目状燃糸文を地文にする。3588は口唇部が外側に傾斜する。口唇端には縦の刻みと横線がみられ、口縁部には半截竹管による平行沈線とその間を充填する同一工具の刺突文が施文される。以上のうち、3588・3591は胎土に繊維を含む。

体部破片3547・3574・3594はIII群あるいはIV群に含まれる土器である。3582は長脚付深鉢形土器の破片で無文である。大木6式あるいは大木7a式に含まれる。3567は複節斜縄文、3577は非結束羽状縄文、3593は沈線文をもち、いずれも胎土に繊維を含む。

中期以降の土器には3575ほかがある。3575は波状口縁である。口唇部は肥厚し、燃紐圧痕が直交するように施文される。波状部に1個、その下方には縦2列になるように円形貼付文がつく。ほかには燃紐圧痕が文様を構成する。円筒上層式aに相当する。半截竹管による文様をもつ3592や縦位の綾絡文をもつ3595は中期初頭に位置づけられる。中期中葉大木8b式の破片は3566・3596・3598・3599・3603がある。3566・3596は頸部に鈎状の隆帯がめぐり、中期末葉大木10式の破片は3601・3602・3604である。3605は無文の上に沈線によって文様が描かれた後期前葉十腰内I式の土器、3606とその同一個体の3607は沈線区画の磨消帯をもち、後期前葉に位

置づけられる。3577は後期に含まれる粗製の深鉢形土器であろう。

土製品 (3546) 3.0cm×3.2cmの大きさをもつ円盤状土製品である。

剝片石器 (3608—3673) 石鏃は7点である。3609—3612は無茎凹基、3608・3613・3614は無茎尖基で、3613は基部をわずかに破損している。竅形石匙は3615—3618・3631の5点、横形石匙は3620・3621・3623の3点である。削器・削器状石器も12点と多い。3622・3627・3634は凸刃削器、3628は尖頭削器である。3630は左側縁に直刃をもつが、対辺には加撃によって鋸歯縁状の刃部が作られる。3619は表面が2次加工の剝離面に覆われ、裏面にも周辺加工された尖頭削器、3633は左側縁と反対縁の一部に刃部をもつ複刃削器である。3636の刃部角度は急傾斜であり、3625は左側縁の一部に奥行きが深い2次加工による刃部をもつ。3626は両側縁に2次加工が施されるが、右側縁のそれは直角に近い角度のもので、刃部としてよりも刃つぶしの効果を目的としたものであろう。内湾する左側縁には表面からの小さな2次加工が連続する。3624・3629・3666は刃部形態からは削器状石器になる。3666では右側縁に1個の抉入部も含む。3635・3637・3641は搔器である。3641は折損している。3638は素材がもつ先端部の急傾斜の一次剝離面を利用した搔器状石器、3645は基部を折断し、急傾斜のやや不規則な2次加工を施した搔器状石器である。

折断石器は12点である。3642・3646・3651は1面の折り面をもち、3651は刃部が2次加工されている。3632・3639・3640・3644・3649・3650・3652は2面の折り面をもち、3639・3640が刃部に2次加工されている。3面の折り面をもつのは3643・3647で、3647では奥行きが深い規則的な2次加工が刃部に施されている。折り面型の彫器は3点である。そのうち、3648は折り面交差型で、刃部には小さく細長い槌状の剝離痕を含む小剝離痕が生じている。刃部を構成する2面の以外にも2面の折り面がある。3653・3654は折り面—古剝離面交差型である。3654の刃部には小剝離痕が著しく、裏面には小さな槌状の剝離痕も生じている。また、その刃部の対辺になる古剝離面との交差部にも小剝離痕が著しく、2個の刃部をもつ彫器である。3655—3659・3661—3663はピエス・エスキューである。刃部数は、2個1対のものが3655—3658・3661・3662の6点、4個2対のものが3659・3663の2個である。3658・3662・3663では表面の一部に自然面を残している。3655・3659を除いてはいずれも刃部の奥行きが深く、対辺の剝離面に接する例が多い。3660は互いに向いあう4ヵ所に潰痕状の小剝離痕があり、ピエス・エスキューに含めることができるであろう。

3664・3665の2点はつまみ部をもつ石鏃である。3664は両面が2次加工面に覆われ、3665はつまみ部を折損している。3670は右側縁に刃部をもつ抉入石器である。鋸歯縁石器は2点である。3668は剝片の薄い縁を抉りとして抉入部を連続させ、刃部にしている。3671は小さな2次加工によって連続する抉入部を左側縁に作り出している。3667・3673は寛状石器である。刃部

にはいずれも急傾斜の楯状の剝離痕がみられる。3673の刃部裏面では大きな階段状剝離痕が生じている。3672は扁平な球形を示す残核で、石質は珪質泥岩である。

石斧 (3674-3676) 打製石斧は3点である。3674は右側縁には1次剝離面を残し、厚い。刃部は、挿入状に破損したあと、小さな2次加工を施して再生されている。3675は小型の完形品で、両面が2次加工面に覆われた両刃の石斧である。3676は刃部を含む約1/2の残存である。

礫石器 (3678-3682・3685) 半円状扁平打製石器は3点である。折損している3682を除いてはII型である。3680はII-A₂型で、製品と同大の自然礫に小さく2次加工を施している。上端と右側縁に自然面を残して背部にし、左側縁の刃部は、一部を2次加工するものの、大部分は素材の薄い縁を利用している。下端は両面加工され鋭利である。3681はII-B型である。左側縁の上半は磨耗痕が著しい。3682の残存部の周縁は2次加工された刃部である。左側縁は磨耗し、右側縁の一部にも平坦面がみられる。

3678は磨石と凹石の複合石器である。磨石の使用面は両面にあり、平坦面が形成される。楕円形～長楕円形のやや深くぼみが両面に1個ずつある。3679は断面が不整な三角形の亜角礫が素材で、1辺の稜線に沿って狭い磨面があり、平坦な一面には潰痕の著しい部分がある。やはり磨石と凹石の複合石器である。3685は複層石安山岩製の石皿である。直線気味の部分は折損ともみられるが、稜線などは角がとれて丸味をおびている。両面は平滑であるが、やや深くぼみ複数を両面に伴うのは凹石に転用されたためである。

石製品 (3677・3683・3684) 3677は石刻の破片である。石質は粘板岩である。3683・3684は石英安山岩の巨礫で、一端を折損している。3683では加工痕が不明であるが、3684では一面に研磨された平滑面が形成されている。石棒とみられるが、確実ではない。

遺構の時期 3539が床面直上、3534が埋土下部から出土した。それとともにIII群の土器も埋土から多く出土している。複合廃棄物としての性格をもつ埋土の在り方からは、この住居址は縄文時代前期末葉期、土器分類群でいえば前期III群2類の時期に位置づけられるであろう。

JVII-16住居址 (第191図3686・3687, 写真図版101)

土器 (3686・3687) 3686が撻紐、3687が撻紐と絡条体を口縁部に押圧して文様を構成する。2点は縄文時代前期III群2類に分類できる。

遺構の時期 埋土からの出土土器や住居址間の重複関係からみて、縄文時代前期～中期中葉の時期内に位置づけられるものであろう。

JVII-17住居址

遺構の時期 固有の遺物を欠く。住居址間の重複関係や占地などからみて、縄文時代前期～中期中葉の時期内に位置づけられるであろう。

JVII-18住居址群 (第191図-第198図3688-3798, 写真図版31-33・101・129・130)

土器(3688—3745) 実測土器のうち、3690と3708は縄文時代前期の土器である。3690は下半を失っている。円筒形の器形をもち、4単位の低い波状口縁になる。頸部には狭く低い隆帯2条がめぐり、その上には小刺突文が連続している。口縁部文様帯は幅1.7cm±と狭い。捻紐圧痕による文様帯は横線状と斜線状を主にし、部分によっては垂下する2条がある。体部地文は結束第2種羽状縄文で、胎土には繊維を多く含む。3708は大型の破片である。大波状口縁になり、波状頂部には刻み、その下方には小円孔、そして橋状把手と続く。口縁部の文様は、橋状把手より上位の部分には絡条体圧痕、刺突文が施文された低い隆帯で区画された内部と橋状把手の上には磨りの方向を異にした2本1組の捻紐が押圧される。体部地文は木目状捺糸文で、縦位の綾絡文も等間隔に施文されている。以上の2点はⅢ群2類に分類できる。

中期中葉の土器は多い。3691は下半を失っている。口径40cm、残存部の器高が55cmと大型である。口縁部文様帯は、口唇部と頸部に隆起線がめぐり、その間は単節斜縄文で充填した長楕円形文を主な意匠としている。口唇部には渦巻状突起の剥落痕があり、縦位や横位の小波状文も伴うが、破損のため詳細不明である。体部地文は縦位の単節斜縄文である。拓本3721は同一個体の破片である。3693は体部下端から底部を失っている。体部は直線的に外傾して立ち上がり、上半で内湾する。口縁部は幅の狭い無文帯になり、その下には円形押圧痕が施文された低い凸帯がめぐり、体部地文は複節斜縄文である。3707は大型の破片である。円孔を有した大型の突起がつくが、その部分は欠けている。口唇部と口縁部には隆起線による渦巻文ほかの文様が展開する。体部地文は縦位の複節斜縄文である。3688・3692・3705は欠損部分が多い。いずれも縦位の単節斜縄文が施文され、3688・3692では体部下端が無文になる。以上のうち、3691・3707は大木8a式、3693は大木8b式である。3688ほか2点もそのいずれかに属する。

3695は4単位の山形突起をもつ。文様帯は体部上半に集約する。突起下に位置する2個の円盤状突起を中心に、縦位と斜位の細い貼付文によって文様が構成され、口唇部には小波状貼付文を伴う。地文は単節斜縄文である。円筒上層式dに含まれる。3694は大型の破片である。頸部には沈線をめぐらせて口縁部を無文帯とする。文様意匠は明確でないが、直線的な沈線区画帯がみられる。磨消縄文と鱗状隆帯が文様を構成する大木10式の土器である。

以上のほかに、徳利形になる壺形土器の口頸部3689があり、晩期大洞B—C式になる。

拓本土器は前期のものが主体を占めている。Ⅱ群に分類できるのは3702・3706である。3706は口縁部・体部とも結束第1種羽状縄文が施文される。3717は口縁部と体部に縦位の捺糸文を施文し、頸部には絡条体圧痕をめぐらす。これもⅡ群に含まれるものとしておく。Ⅲ群のうち、2類に分類できるのは3697—3700・3709・3711で、口縁部の幅はいずれも狭い。体部地文は木目状捺糸文・結束第1種羽状縄文、そして3698の多輪絡条体がある。3710・3714もⅢ群に入る。Ⅳ群に分類できるのは3696・3701・3712・3720、3722とその同一個体の3727、3723・3724・3728・

3729である。3696は波状口縁で、波状部には円形凹文を伴う。頸部の区画帯は横2列の竹管文である。3720は口唇部が肥厚している。円形凹文と沈線による弧状文・鋸齒状文が文様を構成する。3722にも円形凹文はみられる。3728は波状口縁で、口唇部には鋭い刺突文が沿うように施文される。そのほか沈線文と竹管文が文様を構成する。体部地文が分かる3696は木目状燃糸文である。これらの土器は一部を除いては胎土に繊維をわずかに含む。口縁部を失っているが、3716もIV群に含まれるものかもしれない。3726は口唇端に半截竹管文が連続し、口縁部には細い沈線文によって文様が施文される。3730は半截竹管文による沈線文と押引沈線文が文様を構成する。いずれも胎土には繊維を含まない。IV群とは施文方法などがやや異なり、大木7a式～大木7a式に含まれるものであろう。

以上のほかに、結束第1種羽状縄文が施文された3703・3704・3715・3738もII～IV群のなかに含まれる土器の破片である。3715は結束第1種羽状縄文と燃糸文が体部に併用されている。II群あるいはIII群に含まれる。

前期以外の土器としては3719ほかがある。3719は波状口縁部が外傾している。口縁部には単節斜縄文を施文し、沈線と三角形になる刺突文が文様を構成する。中期初頭大木7a式に対比される土器である。中期中葉大木8式に相当する破片は3725・3731—3736・3739—3741である。3725は縦位の平行沈線区画の磨消帯に蛇行沈線文、3741は垂下沈線に沿う蛇行沈線を伴った体部破片である。3718は中期中葉円筒上層式eの突起部の可能性がある。中期末葉大木10式に相当するのは3737・3742である。3744・3745は中期末葉～後期初頭の破片である。

剥片石器 (3746—3787・3789—3791) 石鏃は8点である。そのうち、無茎石鏃は5点で、3753は平基、3747・3754は凹基、3746・3755は円基である。3746は先端部を折損している。有茎石鏃は3点で、3749・3752では茎部にタール状の付着物がみられ、3748は基部の一部を欠いている。3750・3758は横形石匙、3751・3756・3759は縦形石匙である。3751の刃部は2次加工がおこなわれず、使用痕である小剥離痕が連続する。凸刃削器は3760・凹刃削器は3762・横形削器は3765である。3763は折損しているが、両面加工による凸刃部をもち、反対縁は加撃による不規則な2次加工が施されている。3757・3764・3768の3点は擗器である。3757・3768は基部を折損している。3757の2次加工は、剥離面は小さいが、刃刃になる先端部は急傾斜の加工である。3764の2次加工はやや粗い。3769は、桶状の剥離によって短い刃部が剥片の先端部に作られた擗器状石器である。

折断石器は3点があり、3771・3777は1面、3773は2面の折り面をもつ。三角形の形をした3773の刃部は2次加工されている。4点の彫器は折り面型・非折り面型がそれぞれ2点ずつである。折り面型のうち、3772は折り面交差型、3766は折り面—古剥離面交差型である。いずれも刃部には微細な剥離痕を生じている。3774は自然面と古剥離面の交差部を刃部とし、小さな

櫛状の剝離痕を含めた小剝離痕が裏面に著しい。3774は非折り面型尖頭形の彫器である。ピエス・エスキューは4点である。4個2対の刃部をもつ3776以外は2個1対の刃部をもつ。3770は裏面に剝離痕が著しく、3781では両面に大きな剝離面が生じており、刃縁は階段状剝離を示す。3782の上端は平坦面になる。剝離痕は表面と後縁沿いに生じている。

3778・3780は尖頭石器である。3778は尖頭部先端を欠いている。3780は大型の剝片の周辺に2次加工を施している。3779は先端部に3個の刃部が接してある挟入石器、3783は両側縁に1個ずつの刃部をもつ挟入石器である。3784は不定形な剝片の尖頭部に2次加工を施した石錐である。3786は鋸歯縁石器で、加撃による不規則な挟入部が1側縁に連続している。

3787・3789・3790は篋状石器である。刃部はいずれもていねいに2次加工され、櫛状の剝離になる。3767は両面が2次加工の剝離面に覆われ、先端部には押し剝離によって櫛状の剝離をもつ刃部が作られる。搔器あるいは篋状石器になるであろう。3761は裏面からの2次加工が尖頭部に施されている。左側縁の加工は小さいが、直角に近い角度であり、刃部よりは刃潰しとした方が適当である。右側縁には鋸歯状の刃部がつくられる。3785・3791は使用痕をもつ剝片である。

石斧(3792・3793) 3792は打製石斧である。両面加工が施され、側縁はやや湾曲している。3793はホルンフェルス素材にした偏刃の片刃石斧である。1側面には自然面を残すが、他は敲打のあとに研磨を加えている。

礫石器(3794-3796) 3794は半円状扁平打製石器の破片である。残存部では周辺が両面加工されて刃部になり、左側縁は磨耗が著しく、両面にも及んでいる。3795は凸曲面の一部に使用による平滑面が生じた磨石で、完形品である。3796は浅い複数の潰痕が両面の長軸上に連続して並んだ凹石である。

石製品(3797) 複錐石安山岩を素材にした有孔石製品である。全体はていねいに研磨され、楕円の形状になる。中央部の貫通孔は大きく、両面穿孔のあと、穿孔面も研磨している。

その他(3788・3798) 3788は扁平な角礫の破片である。両面は平滑で、表面の一部にはタール状の物質が厚く付着している。石皿あるいは台石に類するものかもしれない。3798は不整な五角形の断面をもつ石英安山岩である。表面はゆるやかな凹面であるが、これは自然のものである。石棒の可能性が考えられるが、確実ではない。

遺構の時期 この住居址は所属時期を決定する良好な資料を伴う。3705は炉埋設土器、3695は倒立した状態で埋設されていた土器、3691・3692は床面から出土した土器である。この住居址でみるかぎり、円筒上層式dと大木8a式は伴関係にある。住居址の所属時期もそこに求めることができる。なお、住居形態としては大型住居址に含まれるものである。

JVII-19住居址(第200図3799-3811, 写真図版101)

土器 (3799-3809) 3801を除いては縄文時代前期の土器である。3807は波状口縁である。撚紐圧痕3条が頸部にめぐり、幅1.8cmと狭い口縁部と体部には結束第1種羽状縄文が施文される。II群に分類できる。3802・3803はIII群に分類できる。3803は刺突文が施文された隆帯をもち、体部には結束第1種羽状縄文が施文される。3805は口縁部が肥厚し、その上には沈線が引かれる。体部地文は木目状撚糸文である。3809は波状口縁で、沈線と押し沈線が口縁部文様を構成し、頸部には区画の刺突文を施文する。2点は胎土に繊維を含み、IV群に分類できる。3799は磨耗しているが、山形の沈線文、3800は半截竹管の内側を引いた横位の平行沈線を口縁部にもつ。2点は胎土に繊維を含まない。IV群とは施文がやや異なり、大木6式～大木7a式に相当するものかもしれない。3806・3808はII群あるいはIII群に含まれる破片、3804は異条縄文を地文にする体部破片で、いずれも胎土に繊維を含む。3801は大木8b式である。

銅片石器 (3810・3811) 3810は折損した削器である。3811は4個2対の刃部をもつピエス・エスキューである。下端刃部を除いては平坦面であり、また両面に剝離痕が生じている右側縁のほかは、片面にのみ剝離痕が認められる。

遺構の時期 重複する住居址によって切られ、部分的に残っていたにすぎない。その重複関係や占地などからみて、縄文時代前期～中期中葉の時期内には位置づけられるであろう。

(三浦 謙一)

JVII-20住居址 (第199図・第200図3812-3836, 写真図版32・33・35・101)

土器 (3812-3829) 3812は体部が内湾気味に立ちあがる小型の粗製深鉢形土器で、縦回転の単節斜縄文を地文とする。3813は単節斜縄文を地文とし、底部が強く外傾する小型土器の体部下半である。3814は口縁部上端に連続刺突文が施される。3815-3817は沈線で楕円文や円形文を描く深鉢形土器で、文様区画内は、3816では刺突文、3815・3817では単節斜縄文が充填される。3818は幅の広い無文の口縁部片である。以上、文様の分かるものは大木9式に相当する。3812・3818も同時期に含まれよう。

3819・3820はキャリバー状の深鉢形土器で、隆起線で曲線文や渦巻文が描かれる。3820は口唇端には押角状の刺突文、口縁上端部には撚紐圧痕文が施される。3821は隆起線で文様が区画される深鉢形土器の波頂部で、円形の貼付文が加飾される。3822は波頂部に太い沈線で曲折文や渦巻文が描かれる。以上、3819・3820は大木8a式、3821は円筒上層e式に相当し、3822は縄文時代前期IV群に分けられる。

3823・3828は口縁部文様帯に結束第1種羽状縄文を施すもので、3823の頸部は2条の撚紐圧痕文で区画される。3824・3825は口縁部文様帯に撚紐圧痕文で幾何学文様を描くものである。3825の頸部には連続刺突文を充填した3条の撚紐圧痕文、体部には第1種結束羽状縄文が施される。3826は台付鉢形土器の体部片で、体部上半には連続刺突文を配した横位平行の撚紐圧痕

文が展開する。3827は短い口縁部や微隆起帯に横位の燃紐圧痕文を施す口縁部片、3829は木目状燃糸文を地文とする体部片である。以上、3823は縄文時代前期Ⅱ群、3828はⅡ—Ⅲ群、3824—3827はⅢ群、3829はⅢ—Ⅳ群に分けられる。

剣片石器 (3830—3836) 3830—3832は無茎の石鏃である。3830・3831は平基、3831は凹基を呈する。いずれも両面から調整剝離が加えられるが、3830は裏面に1次剝離面を大きく残す。3833は2個の刃部をもつ挿入石器で、縦長剣片の基部に刃部が作られる。3834は剣片の鋭角部に不規則な刃部加工を施し、尖頭形の刃部を作り出した尖頭石器である。基部を折損する。3835は1辺が折断され、1個の刃部をもつ折断石器で、刃部には刃こぼれ状の微細剝離痕を伴う。3836は横長剣片の外湾する1側縁に急傾斜の刃部加工を施した搔器状石器である。

遺構の時期 炉や床面から出土した時期決定資料が欠くが、複式炉系統の炉の存在や埋土内出土土器などからみて、大木9式期に位置づけられよう。(佐々木 勝)

JⅦ-21住居址 (第200図3838)

剣片石器 (3838) 両面が2次加工の剝離面に覆われた小型の製品であるが、器種は不明である。

遺構の時期 住居址間の重複関係からみて、縄文時代前期の時期内に位置づけられる。

JⅦ-22住居址

遺構の時期 重複によって大部分を失っているため、固有の遺物を欠いている。住居址間の重複関係や占地などからみて、縄文時代前期前半期、土器分類群でいえば前期Ⅱ群の時期に位置づけられるものと推定される。

JⅦ-23住居址 (第200図—第208図3839—3991, 写真図版33—35・102・130・151・157)

土器 (3839—3937) 実測可能な土器が多く出土しているが、主体を占めるのは縄文時代前期のものである。3839・3843はⅢ群2類に分類できる。3839は器高が14.5cmとやや小型である。文様帯は燃紐圧痕で区画する。口縁部には、単位は不明であるが、縦位の燃紐圧痕2条を施文して区画線とし、その間には燃紐を山形文状に押圧する。体部には結束第1種同燃りの原体を回転している。胎土には多くの繊維を含む。3843は器高が18.5cm±で、4単位の低い波状口縁になる。体部は直線的に外傾している。口縁部文様帯は幅3cm±で、燃紐を平行横線状に押圧している。体部地文は結束第1種羽状縄文で、胎土には繊維を多く含んでいる。

Ⅳ群に分類できる土器は6点がある。3845は円筒形の器形であるが、最大径は体部半ばにあり、上半は緩やかに内傾している。器高は28.2cmである。口縁部文様帯は2条の沈線間を半截竹管文で充填したもので、幅は1.5cmと狭い。体部には木目状燃糸文が施文される。3847と3849は器形が異なるが、口縁部文様帯は平行沈線数条で区画され、波状文状の意匠をもつ。3849ではやや不規則である。体部地文は、3847が木目状燃糸文、3849が縦位の綾絡文と無節斜縄文で

ある。3846は体部が膨らんだ長胴形のもので、口縁部は外反している。口縁部はやや高くなる部分があるとともに、頂部に刺突文を施した山形の小突起が、1/6周毎につけられる。頸部の区画帯は刺突文をもつ隆帯が主になり、刺突文間には刻みを加えている。一部では楕円形の貼付文によって同様の意匠を表現している。口縁部文様帯は弧状の文様と円形竹管文を充填した平行横線によって構成される。体部地文は木目状燃糸文である。3851は円筒形の器形をもち、5単位の低い波状口縁になる。口唇部はやや肥厚し、2条の沈線が弓かれる。その下位は半截竹管文ほかによる横2列の刺突文が施され、頸部には3条の平行横線がめぐる。体部地文は単節斜縄文である。3855は大型の破片である。波状口縁になり、口縁部は強く外反する。波状部ほかには短く直線的な貼付文があり、その上と口唇部には刻目が連続している。口縁部の文様は沈線による平行横線が主で、頸部には刻目を伴う隆帯がめぐる。体部地文は木目状燃糸文である。これまでの6点のうち、3855が少量の繊維を胎土に含むが、ほかは含まない。

口縁部文様帯をもつものの、文様構成が明瞭でないのは3844である。体部半ばに最大径があり、短い口縁部は外反している。底部はやや揚げ底様になる。頸部には文様帯の区画を目的とした燃紐圧痕1条がめぐる。口縁部の大部分は研磨されて無文であるが、燃紐圧痕が一部にみられる。体部には結束第1種同燃りの原体を縦回転している。胎土には少量の繊維を含む。3840・3842はやや小型の土器である。文様は地文だけで構成される点が共通する。3842は、口縁部が低い波状、底部がやや揚げ底様になる。地文は、3840が結束第1種羽状縄文、3842が木目状燃糸文である。胎土には、3840は繊維を含むが、3842は含まない。3点のうち、3844はIII群に分類できる。ほかの出土土器も考慮に入れるならば、3840はIII群あるいはIV群、3842はIII群2類あるいはIV群に含まれる土器と共存する可能性がある。

口縁部を失っている一群の土器がある。3852は体部だけが残存し、結束第1種羽状縄文を地文にする。胎土には少量の繊維を含む。3848・3850・3854は底部を含む体部下半が残存している。3848は単節斜縄文、3850は結束第1種羽状縄文が施され、3854は研磨されていて無文である。3850は胎土に少量の繊維を含むが、ほかの2点は含まない。3850は地文や共存土器からみて前期III群の土器の可能性が高い。他の2点もIII群あるいはIV群に含まれるものであろう。

以上のほかには3841ほかがある。3841は底部を含む体部下半が残存するやや小型の土器である。窯位の単節斜縄文を地文にし、沈線によって文様が構成される。詳しくは分からないが、円形の沈線文とやや崩れた形の縦渦巻文を文様意匠にもつものであろう。中期後葉大木9式に含まれる。3853は注口部を含む部分で、晩期大洞C₂式の土器である。

拓本土器は前期～後期の各時期のものがある。前期の土器から述べると、III群に分類できるものは3875・3879・3884・3887・3888・3890・3892・3896・3900—3902・3905・3910・3913・3916・3917・3932である。3916・3932は口縁部の外反が著しく、壺形土器に近い器形をもつも

のである。口縁部文様帯に施文される原体は、3913と3932が絡条体である以外は燃紐である。多くが頸部に区画の隆帯をもち、その上には主に刺突文が加えられている。3887・3901・3913は刺突文が区画する。体部地文を知ることができるのは、すべて結束第1種羽状縄文あるいは木目状燃糸文である。3900・3902・3913・3916・3917は口縁部の幅が広い。そのほかは口縁部幅3cm以内と狭い。ほとんどは2類に分類できる。3900は低い波状口縁で、口縁部文様帯の幅が広い。体部に木目状燃糸文をもつことから2類に含めるが、類例は少ない。

IV群に分類できるものは数が多い。3856—3859・3861—3864、3865とその同一個体破片3点3868や3870・3871、3866・3867・3869・3872—3875・3877・3878・3880—3883・3889・3897・3899・3908・3911・3914・3921・3926・3929・3930である。文様帯は沈線と半截竹管文・円形凹文などで構成される。体部地文を知ることができるのは木目状燃糸文や沈線文をもつ。胎土に繊維を含むものは約半数であり、その含有量はわずかである。特徴的な文様構成をもつものをいくつか個別に記載してゆく。3856・3882は円形凹文、3859は瘤状の小突起を伴う。3865は口唇部が肥厚し、その上には、波状部の円形凹文をはきんだ両側に矢羽根状沈線文が施文される。その下位には爪形文が横3列にならび、頸部の隆帯上にも同形の刺突が加えられる。体部地文は木目状燃糸文である。3869は口縁部が外反し、肥厚する口唇端には刻みが加えられる。口縁部の文様は半截竹管による平行横線とその間を充填する半截竹管文で構成される。胎土には繊維をわずかに含む。3899は3条の沈線が文様区画帯になる。口縁部の文様は弧状沈線文、体部文様は、半截竹管による垂下沈線文が区画をし、同じ工具による縦位の小波状文がそのなかを充填している。3897は類似の体部文様意匠をもつ別個体の破片である。頸部には隆帯が1条残り、それに接した体部側には燃紐圧痕1条がめぐる。3914の体部地文も直線的な沈線文である。3876・3915は沈線文による渦巻文の文様をもつ。文様意匠や施文法などはIV群とした土器とやや異なるが、時間的には近い関係にある。

以上がIII群・IV群の土器である。それらの仲間であろうが、やや特殊なものを次にあげる。3860は波状口縁で、波状部には円形凹文を伴う。それ以外の文様は絡条体圧痕によって構成される。絡条体圧痕を口縁部に施文するのはIII群の特徴であるが、文様意匠はIV群の土器3856に類似している。なお3893も同一個体の破片である。3906は竹管の押引文により、絡条体圧痕に似た文様を口縁部に施文する。胎土には繊維をわずかに含む。

IV群からは逸脱し、大木6式あるいは大木7a式に含まれるものは3885・3891・3912である。3919は大波状口縁になり、波状部下には小刺突文や円盤状突起を伴い、絡条体圧痕が文様を構成する。円筒上層式aに近いものかもしれない。

口縁部や体部・底部の破片3886・3894ほかは結束第1種羽状縄文や木目状燃糸文を地文にする。いずれもIII群あるいはIV群の土器である。3928は底部の一部を含む。体部には多軸絡条体、

底部外面には単節斜縄文が施文されたⅢ群の仲間である。3898は実測土器3849と同一個体の破片である。そのほかには櫛歯状沈線文をもつ3931、縦位の沈線文をもつ3927などがある。3931は胎土に繊維をわずかに含む。3904は網目状燃糸文が施文されている。

以上のほか、後期に位置づけられるものがある。3935—3937は同一個体の破片で、前葉十腰内Ⅰ式の土器である。

割片石器 (3938—3972・3975—3978) 石鏃は8点が出土した。折損しているために不明な3943を除いては無茎である。基部の形態は、3938が平基、3939・3944・3945が凹基、3940—3942が円基である。3946—3950の5点の石匙はいずれも縦形である。3946・3949は先端部を折損しているが、3946では折れ面を切る小剝離痕がみられる。削器のうち、3953・3955は直刃、3957は凸刃である。3951は、左側縁から先端部に削器刃部があるほかに、右側縁には抉入する2個の刃部をもつ。3964は、左側縁には急傾斜の、右側縁から先端部には粗い2次加工が施され、刃部の一部が磨耗している。3952は基部を折断し、先端部に短い刃部が作られる。3956・3960・3976は2次加工面の大きさからみて、削器状石器に含める。3976は先端部を刃部にする抉入石器との複合である。3954・3958は搔器である。3967は打面である基端に急傾斜の2次加工を施した搔器状石器である。

折断石器は、3963が1面、3959は2面、3969は3面の折り面をもつ。いずれも刃部には微細剝離痕が生じている。3961は折り面に古剝離面に挟まれた短い縁を刃部にした彫器である。刃部およびその周辺には微細な剝離痕がみられる。3968は縦長剝片の先端部に石鏃刃部を作る。また基部にも2次加工を施し、若干突出した刃部を作っている。3962・3972は尖頭石器である。いずれも尖頭部の断面は三角形で、分厚い。3970は内湾する右側縁に加撃によって作られた抉入部刃部をもち、それに続く縁には小さな2次加工が施されている。3975は自然の抉入部を刃部としている。3971は両側縁に刃部が作られた鋸歯縁石器である。3965・3977は篋状石器で、3965は折損している。3978は石核残核である。

石斧 (3973・3974) いずれも両刃の打製石斧で、両面は2次加工面に覆われている。

礫石器 (3979・3981—3989) 5点が半円状扁平打製石器である。折損の2点を除いては、Ⅰ型が1点、Ⅱ型が2点である。3987はⅠ—B型で、上端に浅い抉入部をもつ。3983はⅡ—A₁型である。断面が二等辺三角形の分厚い素材の左側縁に小さな2次加工を施して刃部としている。刃部には磨耗が著しい。Ⅱ—A₂型である3981は打ち欠きによる背部を下端にもつ。左側縁を除いた部分の刃部は鋭利である。折損している3979は鋭利な縁をもつ抉入部が下端にあるが、奥行きは浅い。右側縁は背部になり、刃部は磨耗が著しい。同じく折損している3985は周辺部がすべて刃部になり、やはり左側縁が磨耗している。

磨石は3982・3984・3988・3989の4点である。大きさにはバラツキがあるが、いずれも円盤

である。3984・3989は使用面がやや平坦になっている。3986は敲石で、扁平な亜円礫の側縁には潰痕が生じている。

石製品 (3980・3990・3991) 3980は凝灰質粘板岩を素材にした石棒で、下端を折損している。体部から頭部へ移行する部分はわずかにふくらみ、頭部は先端へ向い次第に細くなってゆく。表面の右半分から裏面の左側縁寄りの部分はいいいに研磨され、そのほかは剝離痕をそのまま残している。3990・3991は角柱状の石英安山岩である。3990は完形、3991は一端を折損している。2次加工痕は認められない。石棒の可能性をもつが、確実なことは分からない。

遺構の時期 土器の多くは複合廃棄的な人為堆積層から出土したものである。その点からみて、縄文時代前期末葉期、土器分類群でいえば前期IV群の時期に位置づけられる。

JVII-24住居址 (第208図3992-4003)

土器 (3992-4002) 3998を除いては縄文時代前期の土器である。3992・3997は撚紐匠痕が口縁部に施文され、3992は横2列の刺突文、3997は刺突文を伴った隆帯が頸部にめぐる。3992の体部地文は結束第1種羽状縄文である。3993・3995・4000は同一個体の破片で、絡条体匠痕が口縁部の文様を構成する。頸部には隆帯がめぐる。以上の土器は前期III群2類に分類できる。3994・3996・4001・4002はIV群の土器である。3994・4001は口唇部が肥厚し、4001ではその上に沈線と刺突文が施文されている。4002が胎土に繊維をわずかに含むが、ほかは含まない。3999は結束第1種羽状縄文が施文された口縁部破片である。II群-IV群に含まれるものであろう。3998は小型の土器の体部で、無文である。胎土には繊維を含まず、所属時期は不明である。

剥片石器 (4003) 2個1対の刃部をもつピース・エスキューである。下端刃部は潰痕状になり、階段状の剝離を示している。

遺構の時期 住居址間の重複関係や埋土からの出土遺物からみて、縄文時代前期前半期、土器分類群でいえば前期II群の時期に位置づけられるものであろう。

JVII-25住居址 (第208図4004・4005, 写真図版35)

土器 (4004・4005) 4004は体部下半から底部を失っているが、円筒形の器形を示し、口縁部は4単位の低い波状になる。撚紐匠痕3条が区画帯になり、幅4.5cm±の口縁部と体部上半は結束第1種羽状縄文、下半はやや太い原体の察位撚糸文が施文される。胎土には繊維をやや多く含む。4005は口縁部を含む大型の破片で、結束第1種羽状縄文が施文されている。胎土には繊維をやや多く含む。2点は縄文時代前期の土器で、4004はII群に分類できるが、4005はII群-IV群の仲間である。

遺構の時期 4004は床面から出土した。その土器を参考にと、縄文時代前期前半期、土器分類群でいえば前期II群の時期に位置づけられる。

JVII-26住居址群 (第208図-第212図4006-4105, 写真図版35・36・103・130・151)

土器 (4006—4080) 4007は44cmの器高をもつ円筒形の土器である。頸部の隆帯は大部分が剥落している。口縁部・体部とも結束第1種羽状縄文が施文されているが、磨耗のために部分的にしか確認できない。4008は体部上半が残存している。円筒形の器形であるが、口縁部はやや外反する。頸部には刺突文が加えられた隆帯がめぐり、それに沿った上下には捻紐圧痕が施文されている。口縁部は幅が7.5cmで、体部とともに結束第1種羽状縄文が施文されている。いずれも胎土に繊維を多く含む。縄文時代前期のⅡ群に分類できる。4006は底部を含む体部下端が残っている。底部はやや揚げ底様になり、体部地文は斜行する捻糸文である。胎土には少量の繊維を含む。

拓本土器は前期～晩期に位置づけられるものが出土している。主体を占めるのは前期の土器である。Ⅲ群2類に分類できるのは4009、4010とその同一個体の破片4013や4014、4017・4022・4023・4031・4035・4037・4039・4044・4048・4051・4052である。4022・4051が絡条体である以外は捻紐を押圧している。隆帯を頸部にもつものは4009ほか4例で、その上には刺突文や捻紐圧痕が施文される。4037は、刺突文が充填された平行沈線が区画帯になる。体部地文を知ることができる例では結束第1種羽状縄文と木目状捻糸文が施文されているほか、4037は結束第1種同捻りの原体が回転されている。4009・4023以外は胎土に繊維を含む。4010は低い波状口縁である。口唇部は肥厚し、頸部には隆帯がめぐり、波状部ではその間を隆帯がつなぎ、口唇端も含めたそれらの上には小円形刺突文を施文する。口縁部には捻紐を主に横線状に押圧する。体部地文は結束第1種羽状縄文の縦位回転である。Ⅲ群2類のなかではやや例外的な存在である。そのほかには4045・4046・4050・4055・4056・4058・4059・4062・4067がⅢ群に含まれる。4058は肩部が強く張り出し、口縁部が外反する。口唇部下は平行横線状、その下方肩部にかけての部分は菱形文の文様意匠をもつ。4050・4055・4059は絡条体の側面圧痕である。また4011の口縁部は捻紐圧痕を2条にめぐらせ、その間に刺突文を充填している。Ⅳ群的な要素をもつが、これもⅢ群に含めることができる。4058が1類である以外は2類に含まれる。

Ⅳ群に分類できるのは4012、4015とその同一個体の4016や4019・4042、4018・4026・4029・4030・4032—4034・4036・4040・4049・4054・4061・4065・4066・4068・4070・4071である。半数以上は胎土に繊維を含まず、含む場合でもわずかな量である。体部地文を知ることができる例では木目状捻糸文が卓越するが、4032は結束第1種羽状縄文である。4015は口唇部に矢羽根状の刺突文を加え、同一個体の別な破片を参考にとすると、その下位には捻紐圧痕と沈線が横位に施文されている。胎土には繊維をわずかに含む。4018は口縁部が外反する。口唇部には凹面をもつ楕円形文を貼りつけ、その両側には横2列の小円形刺突文が連続する。体部地文は木目状捻糸文である。胎土には繊維を含まない。4026は口縁部が狭く、横2列の刺突文が施文される。4066は口唇部を失っているが、口縁部文様帯は小波状や横線を描く沈線文、頸部区画帯は

刺突文や小波状文・瘤状小突起によって構成される。体部地文は木目状燃糸文で、胎土には繊維を含まない。4029は頸部から体部にかけての部分で、小波状文が体部へ施文されている。4033は頸部にめぐる刺突文によって文様帯が区画されるが、体部へも半載竹管による小波状文や斜行沈線が引かれる。2点は胎土に繊維を含む。IV群としたなかでは例外的なものである。なお体部破片4075は第204図3899と同一個体であり、IV群に分類できる。

4021・4063は口縁部文様帯の構成や施文法などがIV群の土器とはやや異なる。4021は低い波状口縁になり、口唇端には半載竹管文が連続する。口縁部文様帯は半載竹管の内側を引いた渦巻文や曲線文の意匠をもつ。4063は波状頂部がくぼむ。口唇部は折り返されて肥厚し、口縁部には半載竹管の内側を引いた横線や小波状文が施文される。2点は胎土に繊維を含まない。4021は大木6式に相当する時期のものとみられ、IV群に含めてよいものかもしれない。4063は中期初頭大木7a式に近いものであろう。4053も半載竹管の内側を引くが、わずかに繊維を含む。

以上のほかの前期の土器としては、口縁部に結束第1種羽状縄文が施文された4025、同じく木目状燃糸文が施文された4076がある。また、体部破片4027・4028・4056・4057・4064も前期に含まれる。縦位の綾絡文をもつ4043は中期前葉のものかもしれない。4020は口縁部の大型破片で、木目状燃糸文が横位に施文される。胎土には少量の繊維を含む。大木2式に分類できる。4024は、幅1.2cmの燃紐瓦痕帯が口縁部に形成され、その下位には網目状燃糸文が施文される。分類群ではIII群2類に分類できる。岩手県田代遺跡（草間，1958）に類例があり、円筒下層式dに位置づけられている。

そのほかには中期中葉に位置づけられる4047・4069・4073、後期前葉に位置づけられる4072・4078、晩期大洞C₂式に含まれる4079がある。4080も後期～晩期の体部破片である。4060・4074・4077は無文などのため、所属時期が分からない。

剃片石器（4081—4101） 4081・4082は無茎凹基の石鏃で、4081は先端部をわずかに失っている。4094は左右非対称であるが、形態や2次加工のあり方からみて無茎平基の石鏃に入る。4099も無茎平基の石鏃にふくめることができる。4084・4088は削器である。4084は蝶番剝離を示す先端部と左側縁の一部を除いた周縁に2次加工が施される。4088は先端部を失い、刃部は右側縁にある。4085は横長剃片の先端部に急傾斜の2次加工が施された極器である。4089は、自然面を残した表面先端部に粗い2次加工を施した極器状石器である。

折断石器は4点で、4092・4095が1面、4083が2面、4087が3面の折り面をもつ。4092の折り面と先端部に挟まれた短い刃部には微細剝離痕とともに1条の極状の剝離痕が裏面に生じており、彫器とした方がよいのかもしれない。4097は折り面—古剝離面交差型の彫器で、刃部とその周辺には微細な剝離痕を生じている。4098は2個1対の刃部をもつピエス・エスキューである。4093は加撃による2次加工が側縁に施されている。先端部を失っていることや2次加工

の状況からは打製石斧の未製品であることが考えられる。4086・4091は2次加工痕をもつ剥片、4096・4100・4101は使用痕のある剥片である。

石斧(4102) 磨製石斧の破片で、1側面を含む。厚さは2.6cmあり、本来はかなりの大型の製品であったことが予想される。

礫石器(4103-4105) 4103・4104は折損した半円状扁平打製石器である。4103は上端から右側縁が背部になり、左側縁の部分には研磨による平坦面が作り出されている。4104は下端と右側縁の折れ面に近い部分に背部が確認できる。刃部は右側縁の一部と左側縁にあり、磨耗痕がみられる。4105は扁平な亜円礫の側縁に潰痕がみられる敲石である。

遺構の時期 この住居址群は、廃棄物層を間にはさんで上下に重複する2棟の住居址によって構成されている。4007や4008は下位に位置するJVII-26b住居址の埋土に含まれていたものである。しかし、そのほかの遺物がどちらに固有のものなのかは不明である。また、新期の住居址であるJVII-26a住居址に伴う炉の埋設土器が不明である。

2棟は、壁を共有することなどからは系列的あるいは時間的に近い関係にあることが推定される。したがってここでは、出土遺物やJVII-25住居址ほかとの重複関係を参考にして、2棟は縄文時代前期、土器分類群でいえば前期II群からIV群の時期内に位置づけられるものと推定しておく。

JVII-27住居址群(第212図-第226図4106-4486、写真図版36・37・103-105・130-132・151・157)

土器(4106-4125・4128-4312) 実測できた土器には縄文時代前期～後期のものがある。前期の土器から記載してゆく。4117は底部を失っている。体部半ばに最大径があり、その上半はやや内傾して口縁部が直立気味になる。頸部には縞紐圧痕2条がめぐる。口縁部には単節斜縄文、体部には結束第1種羽状縄文が施文されている。胎土には繊維をやや多く含む。II群に分類できる。4113は、器高が15.7cmとやや小型である。底部はわずかに揚げ底様になる。器面の磨耗が著しいが、木目状縞糸文が全面に施文されている。胎土には少量の繊維を含む。4120は底部を含む体部下半が残っている大型の土器である。木目状縞糸文が施文されるが、体部下端にはミガキが加えられる。繊維は含まれない。2点はIII群2類あるいはIV群の土器に伴うものである。4106は台付土器の一部である。無文で、胎土には多くの繊維を含む。4112はほぼ体部下端まで結束第1種羽状縄文が施文され、やや多くの繊維を含んでいる。

以上は前期の土器である。4116は口縁部だけが残っている。4単位の大波状口縁になり、波状部に寄った片側の部分には、細い粘土紐3本1組の貼り付けがある小突起がつく。波状部の下には3本1単位の隆帯状貼付文が垂下し、口唇部と頸部に引かれた沈線間は竹管などの外側を引いた縦位の沈線文で充填される。4119は体部上半が残っている。口縁部には4単位と推定

される短い隆帯状貼付文を伴う。口唇部の一部には半載竹管による刺突文が施文され、頸部には小刺突文が連続する。その間は無文である。体部地文は縦位の櫛歯状沈線文である。4116は後述する4251にいくつかの点で類似することからみて、大木6式～大木7a式に相当する土器で、より限定的に言えば、大木6式になるであろう。4119は大木7a式に相当する。4124・4125は浅鉢形土器の口縁部で、同一個体の破片である。口縁部文様帯は、渦巻文を伴う大突起とその間に配される直方体の小突起のほか、撚紐圧痕による小渦巻文や楕円形状文などで構成される。それらは体部の一部にも広がり、さらに下位には細い隆起線による文様が展開するものであろう。大木7b式に含まれる。

後期の土器も出土している。4121は大型の破片である。やや幅の狭い小波状になる沈線区画の縄文充填帯が縦に並ぶ。前葉十腰内1式の土器である。4102は、上半が大きく開いて5単位の大波状口縁になり、下半は筒状にせびまるが、その一部を失っている。文様帯は体部半ばに集約され、他の部分は研磨されて無文である。文様帯最上部は刺突による刻目帯、その下方は平行線化した磨消縄文帯になる。その部分では、長楕円形の文様が一段おきに向き合うように意図している。中葉加曾利BII式に含まれる。

4115・4118は体部上半を失った大型の深鉢形土器である。いずれも体部が外傾し、横位や斜位の単筋斜縄文が施文されている。4115は0段多条の原体も一部にみられる。4111は体部上半が残存している。ケズリによる調整のあと、ミガキを加えて無文にする。4107—4109はいずれも無文である。4107はミニチュア土器、4108は高台の部分、4109は小型の鉢形土器である。以上の土器は胎土に繊維を含まない。4115・4118は後期～晩期の時期内に位置づけられる。

拓本土器は前期～晩期の各時期のものが出土しているが、前期のものが卓越する。前期のなかでも、III群2類に分類できるものが多い。それらは4128・4129・4132・4133・4135・4136・4140・4141・4143・4144・4147—4163・4166—4172・4176・4180・4182—4185・4187—4190・4202・4249である。頸部に隆帯や刺突による区画帯を伴う例が多い。隆帯は狭くて低いもので、上に刺突文を伴う場合が多い。口縁部文様帯へ施文される原体は撚紐が絡条体の倍以上ある。体部地文を知ることができるもののなかでは結束第1種羽状縄文が木目状撚糸文に卓越する。胎土に繊維を含む例が一般的であるが、少数例では含まない。特徴的ないくつかを個別に記載してゆく。4133は木目状撚糸文を体部地文にするが、縦位の綾絡文も併用される。4140は体部地文が網目状撚糸文である。4143は、口縁部文様帯の下は結束第2種羽状縄文であるが、その下位は結束第1種羽状縄文である。4151は半載竹管文が口唇部に連続する。頸部の隆帯下には横位の綾絡文、その下位が結束第1種羽状縄文になる。4153は口縁部に絡条体を平行横線状3列に押し、その間に刺突文で充填する。4170は波状口縁である。波状部では細い隆起線が垂下して頸部の隆帯につながり、それらの上および口唇部には半載竹管文が連続する。4188は低

い波状口縁である。口唇端には斜位の刻目文が連続する。このほか、Ⅲ群に含まれるものとしては4142・4174・4175・4177、4178とその同一個体の破片4179、4194・4196・4204・4246がある。4196は口縁部がやや外反する。器形としては肩部が張り出した甕形土器に近い。波状部に垂下する3条とそれに交差する平行横線状の燃紐圧痕が文様を構成し、交差部と頸部下部に円形竹管文が施文される。フラスコ形ピットの出土例からみて、2類の土器に共伴するものであろう。4202・4204も器形は4196と同じになる。

Ⅳ群に分類できるのは4130・4137・4173・4203・4207・4208・4211、4212とその同一個体4250、4213・4215—4217・4222・4223・4225・4229—4231・4236・4238・4240・4247・4252・4253・4256・4258・4260・4265—4267・4269・4270である。これらの土器の特徴をいくつかあげると、①文様帯は口縁部に集約する。②竹管などの外側を引いたとみられる幅広の沈線が主に文様を構成する。それに竹管文が加わる場合もある。③口縁部の全体あるいは一部が肥厚する例がある。④頸部に区画のための隆帯を伴う例もあるが、一般的ではない。⑤体部地文を知ることができる例では木目状燃糸文が一般的で、ほかに4207のように縦位の結束第1種羽状縄文の例がある。4211ほかのように単節斜縄文がみられるものは羽状縄文になる可能性もあり、詳しくは分からない。⑥胎土に繊維を含むものが卓越するが、含有量は少ない。などである。次にいくつかを個別に記載する。

4208は口縁部が外反し、頸部には隆帯がめぐる。口唇部には刻目が連続し、口縁部にはやや乱雑な曲線状の文様が描かれる。体部地文は木目状燃糸文である。4212は口唇端から前面にかけての部分に刻みが加えられる。4215は低い波状口縁で、口唇部が肥厚する。口縁部には羽状を主体とする沈線文、その下位には横線と小波状の沈線が引かれる。頸部にめぐる隆帯の上には刻みが加えられる。4216は波状部に隆帯状貼付文をもち、その上には燃紐圧痕が施文される。爪形文や指頭状押圧痕・燃紐圧痕が口縁部の文様を構成する。繊維をわずかに含む。燃紐圧痕を伴う点ではⅣ群のなかでも例外的な存在である。4222はやや小型の土器で、半截竹管の内側を引いた平行沈線文であるが、体部には燃糸文が施文され、木目状になるものと推定される。4225には鋸歯状沈線文がみられ、体部地文は木目状燃糸文である。4252は口唇部が肥厚し、円形凹文を伴う。円形凹文は4213にもみられる。4258の口縁部は肥厚して狭く、矢羽根状沈線文が上に施文されている。4267は平行横線とその間を充填する円形竹管文が文様を構成する。以上のほか、体部に縦位の綾格文をもつ4220がこの群に含まれる。

以上のⅣ群と類似の文様意匠をもつ一群の土器がある。4205・4218・4221・4226・4228・4232・4233・4237・4241・4242、4243とその同一個体の破片の4246、4244・4245、4251とその同一個体の破片3点4248や4246・4272、4255・4257・4259・4263である。これらの群の特徴は、Ⅳ群が幅の広い沈線文を主体にしたのに対し、半截竹管の内側を引いた沈線が主になることである。

体部が確認できる例は少ないが、一部では縦位の綾絡文を伴う。いずれも、胎土には繊維を含まない。また、胎土や焼成などもIV群とはやや異なる。大木6式や大木7a式に相当する土器であろうが、IV群の一部が含まれている可能性もある。いくつかについて個別に記載する。4233は半截竹管文が口唇部に連続し、小波状文や横線が文様を構成する。4237は、口唇部が折り返し状に肥厚し、小波状文が文様の主なものになる。同様の小波状文をもつ4228は縦位の綾絡文を体部に伴う。4251は大波状口縁である。波状部の下には2個1対になるとみられる小突起と瘤状の突起がある。波状部の口唇端には刻目文が連続し、頂部近くには1個の山形突起がみられる。同一個体破片4248では頸部にめぐる竹管文の下にも文様帯が形成されていることからみて、大木6式に含まれるものである。4257は頸部の隆帯と口唇部を結ぶ斜位の隆帯があり、上には半截竹管文が連続する。口縁部には平行横線が引かれ、体部には縦位の綾絡文を伴う。4263は、口縁部の文様が横位の平行沈線とその間の一部を埋めるように施文された刺突文で構成される。頸部には隆帯とともに円盤状突起をもつ。体部には縦位の羽状縄文と綾絡文が施文される。

これまでに記載してきた以外にも、結束第1種羽状縄文あるいは木目状燃糸文が施文された口縁部や体部の破片は4122・4123をはじめ多数がある。4164と4165は同一個体の破片である。単筋斜縄文を施文したあと、口縁部には燃紐圧痕3条をめぐらす。

中期初頭に含まれる土器がある。環状把手のついた4234、沈線沿いに三角形の刺突文が連続する4235は大木7a式に相当する。4219は小突起をもち、その頂部と斜行する隆起線には燃紐圧痕による刻み、頸部の隆帯には工具による刻みが加えられる。口唇部に平行する1条の燃紐圧痕の下には燃紐の末端を折り曲げた側面圧痕と平行沈線が施文される。4201も類似の文様をもつ。4192は波状頂部から隆起線が垂下し、上には燃紐圧痕による刻みが加えられる。口唇部に連続する半截竹管文のほか、燃紐圧痕が文様を構成する。4209は半円形の突起である。口唇端には燃紐が横2列に押圧される。口縁部の文様は弧状の貼付文、その内側に燃紐圧痕、外側に沈線文が施文される。以上の4点は円筒上層式aに相当する。4254は波状口縁である。波状部には円盤状の突起が付き、口唇部と突起の下には燃紐圧痕がめぐる。地文は結束第1種羽状縄文である。前期末葉～中期初頭に位置づけられるであろう。4146は同一個体の破片である。

中期中葉以降の土器がある。4239は口唇端に小波状貼付文を伴うが剥落している。大木8a式に含まれるであろう。4276も同時期とみられる。大木8b式に含まれるのは4210・4273・4274、4277とその同一個体破片4292、4283・4286・4287・4293である。4214・4278は円筒上層式eの突起部である。大木9式に含まれるのは4280・4284・4285・4288、大木10式に含まれるのは4290・4294・4297・4301である。4289・4295・4299も大木10式に相当するであろう。後期に入る4145・4279は前葉、4298は中葉である。粗製の深鉢形土器4191・4281・4291・4296・4300・4302は中

期中葉～晩期のものである。4303—4312は晩期の土器で、大洞C₁式など前半の型式に含まれる。4313は平底の皿で、X字状文をもつ大洞C₁式のものである。

円盤状土製品 (4126・4127) 2点は、胎土に繊維を含む前期の土器を素材にし、周辺部を研磨加工した円盤状土製品である。

剣片石器 (4313—4441・4444—4459・4461・4462) 数多くの石器が出土している。石鏃は17点である。折損している4323・4324を除いては、有茎石鏃が1点(4322)、無茎石鏃が14点と後者が圧倒的である。無茎のもの基部形態は、平基が4315・4321・4325、凹基が4317—4320・4326・4328・4329、円基が4313、尖基が4314・4316・4327である。

石匙は24点である。横形になるのが4330—4332・4336・4338・4342・4343・4347—4349・4352・4355・4375の13点、縦形は4333—4335・4337・4339—4341・4344—4346・4351の11点である。縦形石匙は、著しい尖頭形になる4333をはじめとし、形態にはバラツキがある。刃部の2次加工は大部分が片面加工であるが、4342・4349などでは両面加工である。4337は小型で、石質は黒耀石である。4375はつまみ部を失っている。

削器のうち、4354・4357・4365は直刃、4356・4360・4370は凸刃である。4358・4368・4372・4425は尖頭部を含む部分が2次加工されている。4369・4439も凸刃削器に含めることができるかもしれない。4368は打面も含めて右側縁を折断し、その面にも2次加工をしている。4359・4362は打面にも2次加工を施し、刃部にしている。4373は一部を折損しているが、右側縁に直刃刃部をもつ。4371は右側縁が凹刃気味になり、反対縁には急傾斜の粗い2次加工が施されている。4353は折損しているが、表面はていねいな2次加工面に覆われている。ほかには4350・4421・4422が削器である。4367・4374・4429は削器状石器である。4377・4382・4385・4386は円形搔器で、4386は大型である。4377は厚さが3.3cmである。そのほかでは、4376・4379・4384・4387—4389・4461が搔器である。4461は、急傾斜の2次加工が両端に施されているほか、両側縁は表面から2次加工され、削器刃部となっている。4383は先端部の突出した部分に短い刃部が作られた搔器、4380・4390は不規則な2次加工が施された搔器状の刃部をもつ。

ピース・エスキューは5点である。4361・4420・4423・4424は2個1対、4364は4個2対の刃部をもつ。4361は大きな剝離面が両面に生じている。4424の下端は平坦面であるが、表面と交差する稜線部からは奥行き深い剝離面が生じている。折断石器は16点である。折り面の数は、1面が4391・4395・4396・4398・4402・4404、2面が4392・4394・4397・4400・4401・4412・4419、3面が4414である。多くは微細剝離痕によって刃部が識別できるが、4392・4397・4400は2次加工によって刃部が作りだされる。また、4392は折り面と古剝離面の交差部に、4400は折り面交差部に、それぞれ微細～小剝離痕が生じており、彫器としても機能したものである。彫器は折り面型5点、非折り面型1点である。折り面型の4381・4408・4411・4413・4417は、

いずれも折り面—古剥離面交差型である。4413は交差部が両面に交わる部分に桶状の剥離痕を含む小剥離痕が著しい。また、彫器の刃部の斜向いには短い挿器になる刃部をもつ。4408は刃部が磨耗している。4410は非折り面型尖頭形である。

尖頭石器は4363・4430—4432・4434・4436・4437である。4430は基部を失っているが、4431とともに小型で、石錐の仲間かもしれない。4434・4436・4437は粗い2次加工が施されている。4426はつまみ部をもつ石鏃、4428は尖頭形の石錐である。4428の先端部は両面が2次加工され、磨耗痕が認められる。4409は大型の剥片で、裏面からの2次加工が尖頭部先端に施されている。やはり石錐になるのであろう。4433・4435・4438・4441は抉入石器である。4433・4435の刃部は奥行きが深い規則的な2次加工によって作られている。また、その刃部以外の側縁にも2次加工痕が認められる。4441は、右側縁から先端部に小剥離痕が連続し、そのなかに抉入する刃部を含むものである。4440・4444・4445は鋸歯縁状の刃部をもつ。4440・4444は加撃による刃部が先端部にあり、4445ではほぼ全周にジグザグの刃部をもつ。

4448は急傾斜の小さな2次加工が左側縁に施され、反対縁には微細な剥離痕が生じているナイフ形の石器である。4446・4447もそれに類似している。4449・4450・4462は小型の剥片に2次加工が施されている。4416・4418・4427・4455—4458は2次加工痕のある剥片である。4416は尖頭部先端の両側縁に小さな抉入部が作られ、小さな刃部には微細な剥離痕が生じている。使用痕をもつ剥片は4399・4406・4407・4415・4451—4454・4459である。

石斧(4442・4443・4460・4463—4466・4468・4469) 打製石斧は6点である。4464・4466は完形品であるが、4442・4443・4460・4463は折損している。刃部形態が分かるものは、4464が両刃、4460・4465が片刃である。磨製石斧は、4468・4465は基端を含めた基部が残存し、刃部が残った4469は平刃・偏刃の両刃石斧である。

礫石器(4470—4479・4482・4483・4486) 半円状扁平打製石器は5点である。完形品の4473・4475はII—A₂型で、背部は打ち欠いて作られている。4475は、長さが8.1cm、幅が5.4cmと小型である。4471・4472・4474は折損している。4472は下端の一部が2次加工のあとに研磨され、平坦な背部になる。4471・4474の残存部には背部は含まれていない。以上のうちで、4472・4474・4475は左側縁に磨耗痕が著しい。

4点の磨石は垂円礫や円礫である。擦痕を伴った平坦面が、4470では2面、4482では1面みられる。4476・4477は側縁の一部が使用面になる。4476は凹石との複合石器で、浅く小さなくぼみが両面にある。4479・4483は凹石である。4479は破損しているが、深くくぼみが両面に形成され、表面では複数が連続している。4483はロート状のくぼみ1個が表面にある。

4486は小型の石皿で、完形品である。表面は凹面、裏面は擦痕を一部に伴った平滑面である。

石製品(4467・4480・4481・4484・4485) 4467は石剣である。器面はといねいに研磨され

ている。中央部寄りの部分で折れているが、折れ面を再研磨している。石質は凝灰質粘板岩である。4480ほかは有孔石製品である。4480・4485は完形品、4481・4484は一部を欠いている。貫通孔をもつのは4481で、両面から回転穿孔されている。4480・4484は一端に寄った隅に両面から回転穿孔されるが、貫通はしていない。4485は両端に寄った部分の表面に小さな孔が1個ずつあるが、貫通はしていない。4485は素材をそのまま利用しているが、ほかの3点は研磨加工されている。石質は、4480が千枚岩、4481が粘板岩、4484・4485が凝灰質粘板岩である。

遺構の時期 多くの遺物が出土しているが、遺構編に記載され、縄文時代前期末葉期に位置づけられた際の資料とされた床面上の一括土器については知ることができない。ここでは、その見解をふまえ、埋土の状況やそれからの出土土器・長大な大型住居である形態上の特徴・占地などからみて、土器分類群でいえば前期IV群の時期に位置づけるものと推定しておく。

JVII-28住居址・JVII-29住居址・JVII-30住居址

遺構の時期 3棟はJVII-27住居址群の貼り床の下から検出されたもので、固有の埋土や遺物を欠いている。その新旧関係や重複形態・占地などからみて、3棟は縄文時代前期末葉期に位置づけられるものと推定される。

JVII-31住居址 (第227図4487-4491, 写真図版38)

土器 (4487-4491) 4487の器形は、ゆるやかに外傾して立ち上がった体部が半ばではほぼ直立気味になり、その上位が内傾したあと、ふたたび口縁部で外傾する。地文は横位の単節斜縄文で、胎土には繊維をわずかに含む。4488-4491は単節斜縄文を地文にする体部破片で、4491は胎土にわずかの繊維を含む。

4487は埋設土器である。地文以外の文様をもたないため、所属時期は推定であるが、本住居址がJVII-27住居址群に先行するものであること、器形や胎土に繊維を含む特徴を考慮するならば、4487は縄文時代前期の土器分類群IV群に併行する可能性が強い。

遺構の時期 住居址間の重複関係や4487の存在からみて、縄文時代前期末葉期、土器分類群でいえば前期IV群の時期に位置づけられるものと推定される。 (三浦 謙一)

JVIII区

JVIII-1住居址 (第227図4492・4493)

剥片石器 (4492・4493) 4492は縦長剥片の先端部を刃部とする刮器で、先端尖頭部は螺番剥離のためか刃部加工が施されていない。4493は槌器状石器で、剥片先端部に急傾斜の短い刃部が作られる。

遺構の時期 出土土器を欠き、住居址の形態、規模も確認不能であることから、所属時期は不明である。 (佐々木 勝)

JVII-2 住居址 (第227図4494・4495)

土器 (4494・4495) 2点の口縁部文様は撚紐を平行横線状に押圧して構成される。4495は刺突文が施文された隆帯が頸部にめぐり、体部地文は結束第1種羽状縄文である。2点は縄文時代前期Ⅲ群2類に分類できる。

遺構の時期 少量の土器が出土しているにすぎない。埋土中の土器や占地を参考にすると、縄文時代前期後半期に位置づけられるものと推定される。

JVII-3 住居址・JVII-4 住居址

遺構の時期 2棟から出土遺物があることは遺構編に記載され、それらをもとにして縄文時代前期末葉期に位置づけている。しかし、その遺物は、現時点では不明のものとなっている。ここでは占地の面からみて、前期後半期に含まれる可能性があると推定しておくにとどめる。

JVII-5 住居址 (第227図・第228図4496—4529, 写真図版105・133)

土器 (4496—4498)

縄文時代前期Ⅲ群の土器は4496—4498・4500・4508・4512・4516である。4497は、半截竹管文が施文された隆帯が頸部にめぐり、口縁部には撚紐が横線状に押圧され、口唇端にも同じ原体が回転施文される。体部地文は木目状燃糸文である。4498は低い突起を口唇端に伴い、口縁部には撚紐を縦線状に押圧する。体部地文は結束第1種羽状縄文である。4500・4516は絛条体圧痕を口縁部にもつ。4500の体部地文は結束第1種羽状縄文である。いずれも2類に含まれる。4509は肥厚した口縁部に平行沈線を引き、その間に刺突を加えている。IV群に分類できる。口縁部破片4499・4501・4505は結束第1種羽状が施文されている。II群あるいはIII群に含まれる。体部破片4503・4504は単節斜縄文、4506・4514は燃糸文、4507・4511は木目状燃糸文が施文された前期の土器である。4507・4511はIII群2類あるいはIV群の土器である。

前期以外の時期の破片がある。4517は小型の土器で、口縁部には浅い平行沈線を引いている。前期末葉～中期初頭に位置づけられるものであろう。4502は口唇部が前面に傾斜し、口唇部に沿う横2条、その下位には連続する弧状の文様が撚紐圧痕によって描かれる。中期前葉大木7b式に含まれる。4519は刻目文が口唇端に連続し、口縁部には2条の沈線がめぐり晩期前半型の土器である。4518は粗製の深鉢形土器で、後期～晩期のものである。4510はやや小型の土器で、体部地文は沈線による斜格子状の文様である。4513は地文の上にわずかに貼付文がみられるだけで、詳細は不明である。2点の所属時期は不明である。

刻片石器 (4520—4529) 4520は無茎平基の石鏃、4521・4522・4524は横形石匙である。4525—4527は削器である。4525・4527は凸刃削器で、4525では反対縁に鋸歯縁状の刃部をもつ。4526は楕円形をした小型のものである。4528は折り面交差型の彫器で、裏面からの剝離痕が刃部付近の折り面に著しい。4529は両面加工され、鋸歯縁状の刃部をもつ。4523は、向かい合う2辺の

表面に、潰痕を伴った不規則な剝離痕が生じていることからみて、ピエス・エスキューの破片であろう。

遺構の時期 埋土からの出土遺物や炉の形態からみて、縄文時代前期末葉期、土器分類群では前期Ⅲ群2類の時期に位置づけられるであろう。 (三浦 謙一)

JVII-6 住居址 (第228図-第230図4530-4568, 写真図版38・105・133)

土器 (4530-4561) 4530は床面出土の深鉢形土器である。外反する口縁部は幅の広い無文帯となり、上端に瘤状の貼付文が4個配される。頸部には1条の沈線が巡り、体部には縦回転の単節斜縄文が施される。4533は4530と同一個体と思われる。4534・4535は沈線で凹形文や楕円文を描き、文様内に単節斜縄文を充填する深鉢形土器である。4534・4533は大木9式に相当する。4530も、同時期に含まれる可能性が高い。

4531は小型古付土器の体部下半で、単節斜縄文を地文とする。4532は体部から口縁部まで直線的に外傾する深鉢形土器で、短い口縁部には3条の横位絡条体圧痕文が施される。地文は前々段反摺りの複節縄文を横回転で施文する。4536-4546・4548-4551は短い口縁部に燃紐や絡条体の圧痕文を施すものである。4536・4537・4539・4542・4544・4549は燃紐で横位平行に施文し、4540・4541・4545・4546は幾可文様状に施文する。4538・4543・4548・4550・4551は絡条体で横位平行に施文する。4536-4538・4540・4541・4543・4551は頸部に隆帯ないしは微隆起帯をもつもので、4543を除き1～2列の連続刺突文が配される。体部は、4536が綾格文を伴う燃糸文、4538が多軸絡条体回転文、4539・4542・4543・4545が結束第1種羽状縄文、4551が第2種羽状縄文で施文される。4552-4554は体部片で、4552が結束第1種羽状縄文、4553が第2種羽状縄文、4554が木目状燃糸文を地文とする。以上は縄文時代前期Ⅲ群に分けられる。

4556は口縁部文様帯に綾格文が施される。4547は口縁部から体部上半に結束第1種羽状縄文が施され、頸部は連続刺突文を配した隆帯で区画される。4555は口縁部に細い平行沈線で幾可文様が描かれ、4557は丸棒状工具で太い波状沈線文が展開する。4557の頸部には刺突文を充填した2条の平行沈線が巡る。4560は外反する口縁部に縦位の貼付文が施される深鉢形土器の突起部で、隆起線で区画された文様帯には沈線で網目状文が描かれる。4558はキャリパー状の深鉢形土器で、口縁部には横位の隆起線が平行に貼付される。4559は沈線で区画された文様帯に三叉文が描かれる。4561は折り返し口縁をもつ粗製の深鉢形土器で、口縁部に縦位の貼付文が施される。以上、4556は縄文時代前期Ⅰ群1類、4547はⅡ群、4555・4557はⅣ群に分類される。4560・4561は大木7a式、4558は大木8a式、4559は大木B式に相当しよう。

銅片石器 (4562-4566) 4562は削器で、縦長剥片の側縁から先端部へ連続する2次加工を施し、尖頭形の刃部が作られる。基部と刃部先端を折損する。4563は楕円形の分厚い横長剥片の先端部に急傾斜の刃部加工を施した掘器である。4564は縦長剥片の先端部に急傾斜の刃部を

もつ搔器状石器で、基部側を折損する。4565は折り面交差型の彫器で、刃部には刃こぼれ状の微細剝離痕を伴う。基部も折断され、打撃によって刃つぶし状の剝離が施されている。4566は平基の尖頭石器で、外湾する側面をもつ。刃部は1側面を除き、片面加工で作られる。

石斧(4567) 石製石斧の基端部である。側面には研磨痕がみられる。

礫石器(4568) 複輝石安山岩の球形礫を素材とした磨石で、ほぼ全面が使用されている。

遺構の時期 複式炉系統の炉の存在や床面・埋土内の出土土器からみて、大木9式期に位置づけられる。(佐々木 勝)

KⅧ区

KⅧ-1 住居址(第230図-第237図4574-4685、写真図版38-41・105・106・133・151・157)

土器(4574-4631) 実測できた土器はすべて縄文時代前期に位置づけることができる。4574・4578・4581・4583はⅡ群に分類できる。4574は底部を失っているが、やや小型の土器である。体部は下半から外傾気味に立ち上がり、口縁部はゆるやかに外反する。4単位のやや大きな波状口縁である。文様帯は2条の燃紐圧痕で区画される。4578・4583は下半を失っているが、ほぼ円筒形の器形をもつ。文様帯は、4578が燃紐圧痕が上にめぐる隆帯、4583が3条の沈線で区画される。4581は体部半ばが膨らみ、口縁部が外反する器形をもつ。底部はやや揚げ底気味になる。4単位の低い波状口縁で、文様帯は4578と同様に区画される。施文は4574・4578・4583が口縁部・体部とも結束第1種羽状縄文、4581が各部位とも横位の単節斜縄文である。4点は胎土に多くの繊維を含む。

4579・4582・4585はⅢ群に分類できる。4579は円筒形の器形であるが、直線的に外傾している。結条体圧痕に挿まれた低い隆帯2条が文様区画帯になり、上に刺突文を伴う。口縁部文様帯は結条体が横線状や鋸歯状に押圧され、体部地文は多軸結条体の回転圧痕である。4582・4585は大型の破片である。体部上半が膨らみ、口縁部が強く外反する器形をもつ。4582は低い波状口縁になる。いずれも幅の広い隆帯が頸部にめぐり、その上には刺突文が加えられる。口縁部文様帯は幅広く、燃紐圧痕が横線状に施され、4582では2条の垂線状の押圧が波状部におこなわれる。3点とも、体部地文は結束第1種羽状縄文で、胎土には少量の繊維を含む。分類群としてはⅢ群のなかでも2類に含まれるものである。

4580はⅣ群に分類できる。波状口縁部を含む大型の破片で、頸部がくびれて口縁部は強く外反し、体部は半ばにかけて膨らんでゆく器形をもつ。斜位の刻みを伴った隆帯が頸部にめぐって文様帯を区画し、口縁部は太い沈線と刺突文による文様、体部地文は木目状燃糸文である。胎土には繊維を含まない。

文様帯が区画されないのは4575と4584である。4575は下半を失っている。体部は直立し、口

縁部は外反する。低いのが6単位の波状口縁になり、波状部は外面から押圧されたわずかになくほみになる。体部地文は横位と縦位の単節斜縄文である。胎土には繊維を含まない。4584は円筒形の器形をもつが、ゆがんでいる。底部は外縁がわずかに張り出している。地文は整然と施文された木目状燃糸文で、胎土には繊維を含まない。4576・4577は上半を失っている。4576は横位の複節斜縄文が施文され、繊維をわずかに含む。4577の体部は、下半が膨らみ、上半へは内傾してゆく。結束第1種羽状縄文が施文され、胎土には繊維を含まない。以上のうち、4584はⅢ群2類あるいはⅣ群の土器に伴うものである。4577は器形からみて、Ⅲ群2類の仲間かもしれない。

拓本土器の大部分も前期に位置づけられる。Ⅱ群に分類できるのは4589・4595・4611・4614・4626・4627・4630である。文様帯の区画は隆帯によるものが多く、4611を除いてはその上に指頭状押圧痕や横形の爪形文、刺突文、絡条体圧痕が施文されている。4626・4627は撚紐圧痕によって区画される。結束第1種羽状縄文が口縁部に施文されるのは4589・4611・4620・4630で、4589・4630は同じ原体が体部へも施文されている。4630の口縁部幅は2.7cmと狭い。4627は口縁部・体部とも縦位の綾格文が施文された数少ない例である。

Ⅲ群2類に分類できるのは4590—4593・4599・4600・4602・4604・4605・4607・4628である。4591・4604・4607は低い波状口縁になる。口縁部への施文は、絡条体圧痕文が撚紐圧痕文に卓越し、平行横線状の文様が一般的である。文様帯の区画は、4600が刺突文、4605が撚紐圧痕文であるほかは低い隆帯で、多くはその上に刺突が加えられている。4628は特に区画はされていない。体部地文を知ることができる4599・4600・4602・4604は結束第1種、4607は同第2種の羽状縄文、4628は木目状燃糸文である。4590・4591は単節斜縄文と横位の綾格文が施文される。そのほかに、4588・4601・4608・4609・4623・4625がⅢ群に含まれる。以上の土器では胎土に繊維を含むものが卓越する。Ⅳ群に分類できるのは4597・4598・4622である。4622は木目状燃糸文を体部地文にする。3点には胎土に繊維を含まない。

口縁部破片のうち、4587・4594・4596は横位、4606は縦位の結束第1種羽状縄文が施文されている。縦位の羽状縄文は本遺跡ではⅡ群から出現している。4586は無文で、1個の補修孔をもつ。胎土には繊維を含む。頭部から体部の部分の破片4610・4612・4615・4616・4619・4620は、頸部区画帯が撚紐圧痕や絡条体圧痕・隆帯・爪形文を伴った沈線などで構成されている。体部地文を知ることができる4610・4615・4616・4620は結束第1種羽状縄文である。4613は口唇部を失っているが、結束第1種羽状縄文を施文した上に、4条の撚紐圧痕をめぐらせて口縁部文様帯を構成している。いずれもⅡ群あるいはⅢ群に含まれる。体部破片4618・4621・4624は木目状燃糸文が施文され、Ⅲ群2類あるいはⅣ群に含まれる。4617は綾格文、4631は細い沈線がみられる。4629は晩期の壺形土器の頸部である。

剥片石器 (4632—4675) 石数は8点である。基部を失っているために不明な4638以外は無茎である。基部の形態は、4640が平基、4639が凹基、4632・4633が円基、4634・4636が尖基、4637が偏基である。石器5点のうち、4635・4641は横形、4642・4643・4646は縦形である。4643は表面に自然面を大きく残し、左側縁に刃部をもつ。

削器の刃部形態は、4645が直刃、4649がほぼ直刃、4653が凸刃、4647が複刃である。4644は尖頭削器である。4653の裏面には刃部以外にも大きく不規則な剥離面がある。そのほかでは、4657は基部を失っているが、左側縁から先端部半ばにかけて刃部が作られている。4652は左側縁を刃部にした削器状石器である。4648・4650・4651・4655・4656・4659・4674は搔器である。4648は傾斜する刃部をもち、基端寄り表面にも2次加工痕が著しい。4651は折損し、刃部だけが残っている。4655の刃部は鋸歯縁状を示す。4659は彫器との複合石器である。彫器としての刃部は搔器刃部とは反対の位置、折り面交差部にある。4674は3個の挿入する刃部があり、搔器刃部はそのうちの2個にはさまれた部分に作られ、短い。

4658は折り面—古剥離面交差型の彫器で、刃部とその周辺には微細剥離痕を生じている。折断石器は、4660・4661が1面、4662が2面、4664が3面の折り面をもち、刃部には微細剥離痕が生じている。尖頭石器は7点である。そのなかで、4633は、基部が扁平、先端部が三角形の形状をもち、両面加工されている。石錐の仲間かもしれない。4665は折断した1側縁にも2次加工を施し、尖頭形にしている。4668の2次加工は不規則である。4672は大型で、先端部は丸味をおびて鈍い。4671は断面が三角形で厚く、一部を失っている。4669・4670は小型で、片面加工である。石錐の仲間かもしれない。挿入石器は4666・4667・4673である。4666は両側縁に1個ずつ、ほかは1個の刃部をもつ。4675は横長剥片の先端部に刃部をもつ鋸歯縁状の石器である。4654は急傾斜の不規則な2次加工痕を1側縁にもつ。

石斧 (4676・4677) 2点は磨製石斧である。4676は刃部の一部を含む破片、4677は刃部側を失なった定角石斧である。

礫石器 (4678・4679・4681—4685) 4678・4679・4681・4682・4684・4685は半円状扁平打製石器であるが、いずれも折損している。そのなかで、残存部に背部がみられるのは4681だけである。6点は左側縁の直線部に磨耗が認められる。さらに4678・4684では反対縁にも磨耗痕がみられる。4679は、刃部全体のほか、折れ面にも磨耗痕があり、折損後の使用が考えられる。

4683は凹石と磨石・敲石の複合石器である。くぼみは両面に1個ずつあり、磨石としての使用面は両面と両側縁に擦痕を伴っている。敲くことによって生じた潰痕は、上端に著しいほか、下端部と側面の一部に認められる。

石製品 (4680) 粘板岩を素材にした有孔石製品である。不整な四辺形の形状をした小型の製品で、ひとつの隅に寄った部分に、両面から穿孔された小さな貫通孔がある。

遺構の時期 埋土の状態や出土土器からみて、縄文時代前期末葉期、土器分類群でいえば前期Ⅲ群2類の時期に位置づけられるであろう。

KⅧ-2 住居址 (第237図・第238図4686-4711, 写真図版41・106)

土器 (4686-4706) 実測できた4686は底部を含む下半が残存している。体部は著しく外傾している。胎土に繊維を含まないことや器形からみて、縄文時代中期以降の時期内に含まれる。

拓本土器は前期のものが多い。Ⅱ群に分類できるのは4688・4693・4702である。4688は口唇部を失っている。頸部には幅が狭く低い隆帯がめぐり、それを刻むような円形の押圧痕が加えられる。口縁部・体部とも縦位の燃糸文が施文される。胎土にはやや多くの繊維を含む。4693・4702は口縁部・体部とも結束第1種羽状縄文である。Ⅲ群に分類できるのは4点である。4689は口縁部が大波状になり、強く外反している。波状部には円形凹文を伴い、そこから垂下する数条および口唇部に平行する斜線状の燃紐圧痕が文様を構成する。4692は低い波状口縁部であるが、波状部の間隔は狭い。波状部には円形凹文を伴い、縦位および横位の絡条体圧痕が口縁部の文様を構成する。4695・4698は絡条体圧痕が口縁部に施文される。4698は幅の広い隆帯が頸部にめぐり、その上には刺突が不規則に施文される。体部地文は多軸絡条体の回転圧痕である。以上の4点は、4692を除いては胎土にわずかに繊維を含む。細分では2類に分類できる。4687は幅3.5cmの口縁部に太い燃紐が横3列に押圧されている。頸部には円形の押圧痕を伴った幅の広い隆帯がめぐり、その下位には幅3.5cmの横位の綾絡文帯が形成される。さらに下位には斜行する太い条が認められるが、磨耗しているため、原体は分からない。胎土には繊維を多く含む。村越(1974)が円筒下層式dとしたなかに類例がある。4691・4700はⅣ群の土器である。4691は肥厚した口縁部に燃紐圧痕文と円形竹管文が施文される。4700は口唇部が折り返し状に肥厚し、円形凹文と縦位の短かい沈線、その下位は燃紐圧痕による平行横線状の文様が施文される。文様意匠は4692に類似する。2点はⅢ群とⅣ群の識別形質をあわせもつ。口縁部破片4690は結束第1種羽状縄文が施文されている。下端に横線状の燃紐圧痕が一部みられることから、Ⅱ群に含まれる可能性もある。頸部を含む破片4696・4703はⅡ群あるいはⅢ群、木目状燃糸文が施文された4701はⅢ群2類あるいはⅣ群の土器である。

前期以外の土器では、中期中葉大木8b式の4694、中期末葉～後期初頭に含まれる4699がある。さらに、4704-4706は晩期の土器である。浮彫り様の羊歯状文をもつ4705は大洞B-C式である。

礫石器 (4707-4711) 3点が半月状扁平打製石器である。完形の4711はⅡ-A₃型で、背部は下端に寄った部分にあって、短い。左側縁はわずかに内湾し、磨耗が著しい。折損している4707は右側縁が背部になるが、4708は背部をもたない。2点は刃部が鋭利である。4709・4710は磨石である。4709はやや扁平な亜円礫で、両面が使用面である。4710は不整な四辺形の断面

をもつ細長い歪角礫で、4面が使用面になり、一部には擦痕が著しい。

遺構の時期 大半が調査区域外にあるため、所属時期の詳細については不明である。しかし、占地や埋土からの出土遺物を参考にする、縄文時代前期の時期内には位置づけられるであろう。

KⅧ-3 住居址

遺構の時期 この住居址は縄文時代前期末葉期に所属すると推定される住居址と重複し、それを切っている。縄文時代のなかには位置づけることができるであろうが、詳細は不明である。

KⅧ-4 住居址

遺構の時期 固有の遺物を欠いている。住居形態などからも、所属時期は不明である。

KⅧ-5 住居址 (第238図・第239図4712-4753, 写真図版106・107・133)

土器 (4712-4733) 4712は大型の破片である。貫通孔1個をもつ大波状口縁で、波状部の口唇端には深い沈線が引かれている。口縁部につく注口状把手は波状部から隆起線で連絡され、その上には半截竹管文が施文される。そのほか、隆起線で区画された内部には指頭状押痕、隆起線に沿った両側には円形竹管文が施文される。この部分では体部は無文である。岩手県八天遺跡(北上市教育委員会, 1978・1979)の第Ⅱ群6類に分類された土器群に類例があり、縄文時代後期初頭に位置づけられている。拓本4720・4730・4733は同一個体の破片である。また、4717・4728・4731も同時期のものである。

前期Ⅲ群に分類できるのは4713・4716・4718・4719である。4718は肥厚した口縁部に絡条体が押圧される。4716以外は2類である。口縁部破片4714は結束第1種羽状縄文が施文されている。体部破片4715は結束第1種羽状縄文、4721とその同一個体の破片4725は結束第1種附加条付、4722は木目状燃糸文、4724は斜位の燃糸文と横位の綾絡文、4726は多軸絡条体の回転圧痕が施文された前期Ⅱ群～Ⅳ群の土器である。斜行する低い隆起線をもつ4727は後期前葉、4732は晩期大洞B-C式の破片である。4723は網目状燃糸文を地文にする。口縁部破片4729は複節斜縄文が地文で、口縁部は2cm±の幅で無文になる。

銅片石器 (4735-4753) 石鎌は2点があり、4735は無茎凹基、4736は有茎である。4737・4738は縦形石匙であり、4737は表面が凸曲面になるような著しい湾曲を示す。削器は3点である。4739は基部を失っている。4743は、右側縁から先端部半ばまで2次加工されているほか、右側縁に鋸歯縁状の刃部をもつ。4753は凸形と凹形の刃部をもつ複刃削器である。

4740は折り面-古剥離面交差型の彫器で、刃部には小さく細長い槌状の刺離痕が生じている。折断石器のうち、4741・4742・4744・4745・4748は1面、4746・4749が2面の折り面をもつ。刃部に2次加工が施されているのは4749である。4746・4749は、折り面交差部に微細な刺離痕がみられ、彫器としても機能している。尖頭石器は4751・4752の2点で、4752は基部も含めた

周縁部に2次加工している。4750は、大型の剥片の左側縁に加撃による挟入部が連続した鋸齒縁石器である。4770は基部が折断された分厚い剥片である。90°に近い角度をもつ1次剥離面のひとつが裏面と交わる稜線部からの小剥離痕が折り面の一部に連続している。

遺構の時期 埋土から出土した一括土器の破片4718や4722をはじめ、前後半期の土器が卓越する。埋土は複合廃棄物的な人為堆積相を示していることから、この住居址は縄文時代前後半期の時期内に位置づけられる可能性がある。

LVI区

LVI-1住居址（第239図・第240図4754-4765、写真図版41・106）

土器（4754-4758）すべて縄文時代前期に位置づけられる。4758は口縁部から底部までを含むが、残存状態は良くない。直立気味に立ち上がった体部は、半ばからはゆるやかに外傾してゆく。口縁部は6単位の低い波状で、底部はわずかに揚げ底様になる。文様帯は隆帯によって区画されるが、多くの部分が剥落している。口縁部の幅は2cm～3cmと狭い。燃紐が横線状に押圧され、一部では隆帯の上にも重なる。体部地文は1段の縄を結束回転した羽状縄文である。胎土には繊維を含み、Ⅲ群2類に分類できる。4755は隆帯によって区画された口縁部が幅2cmと狭い。燃紐が横線状に押圧され、同じ原体は隆帯上にもめぐる。4756は低い波状口縁で、外反している。幅4cm±の口縁部には燃紐が主に横線状に施文され、頸部の隆帯には斜位の刻み加えられる。2点とも体部地文は結束第1種同撚りの回転圧痕で、胎土には少量の繊維を含む。Ⅲ群2類に分類できる。体部破片4754は結束第1種羽状縄文、4756は横位の単節斜縄文と綾絡文、4759は木目状捻糸文が施文され、いずれも胎土に繊維をわずかに含む。3点は共伴する土器からみて、Ⅲ群2類～Ⅳ群に含まれるであろう。

剥片石器（4760-4765）4760-4764は石鎌である。無茎のもののうち、4760が平基、4763が凹基、4761・4762が尖基である。有茎の4764は先端部と茎部の一部を失っているが、茎部にはタール状の付着物が残っている。

遺構の時期 床面から出土した4757や4758からみて、縄文時代前期末葉期、土器分類群でいえば前期Ⅲ群2類の時期に位置づけられる。

LVI-2住居址・LVI-3住居址

遺構の時期 2棟はLVI-1住居址とともに、いわば同心円状的な重複をしている。その在り方からみて、3棟は時期的にも近い関係にあったことが推定される。新旧関係を示すと、古期のものからLVI-2住居址→LVI-3住居址→LVI-1住居址の順である。

LVI-4住居址（第240図4766-4768）

土器（4766-4768）いずれも縄文時代前期の土器である。4766の口縁部は幅が狭く、肥厚

している。口縁部には燃紐を斜線状に押圧している。4767は口縁部に平行横線状の燃紐圧痕文をもつ。4768は単節斜縄文をもつ体部破片である。3点は胎土に少量の繊維を含む。4766はIII群2類、4767はIII群の土器であるが、破片のため細分できない。

遺構の時期 少量の出土遺物しかない。それらの遺物や占地・住居形態からみて、縄文時代前期後半期に位置づけられるものと推定される。

L VII 区

L VII-1 住居址 (第240図・第241図4769—4793, 写真図版41・107・133)

土器 (4769—4788) 4769・4770は底部を含む体部下半が残存している。4769は燃り戻し縄文による羽状縄文で、結束されているものであろう。胎土には繊維をわずかに含む。4770はやや小型の土器で、底部はわずかに揚げ底様になる。体部には結束第1種羽状縄文が施文され、胎土には繊維をやや多く含む。2点は縄文時代前期II群あるいはIII群の土器である。

拓本土器は4780・4788以外は前期に位置づけられる。II群に分類できるのは4772である。III群に分類できるのは4773・4775・4777・4783である。4775は刺突文を伴った隆帯が頸部にめぐり、幅1.2cmと狭い口縁部には燃紐圧痕文をもつ。体部地文は結束第1種附加条付である。4777は低い波状口縁である。幅3.2cmと狭い口縁部には絡条体圧痕による文様が施文される。文様帯は刺突文で区画され、体部は、結束第1種羽状縄文が横1列に施文され、その下位は0段多条の原体を斜めに回転している。4点は胎土に繊維をわずかに含み、III群2類に分類できる。IV群の土器は4784である。口縁部は肥厚し、口唇部には瘤状の小突起がつく。口縁部破片4774・4776・3778、体部破片4779・4781・4782・4785—4787も前期の土器II群～IV群の土器である。4778・4782が結束第1種羽状縄文、4781は喉位の燃糸文である。

後期に位置づけられる4780・4788は同一個体の破片である。二股の突起が口縁部につき、その下部は沈線でごく区画される。文様は磨消縄文による入組文状の意匠とみられ、2種類の原体による羽状縄文が施文される。後葉十腰内IV式に相当するであろう。4771は中期以降の粗製土器である。

刻片石器 (4789—4793) 4789は横形石匙である。横形の刃部は、加撃による2次加工が裏面に施され、鋸歯縁状になる。4790は凸刃削器、4793は刃部の一部を失っている横形削器である。4791は右側縁に刃部をもつ挟入石器である。4792は搔器である。刃部以外では両側縁の一部が2次加工されている。

遺構の時期 埋土から出土した遺物を参考にとすると、縄文時代前期後半期に位置づけられるであろう。

(三浦 謙一)

MV区

MV-1住居址(第241図4794-4797)

剥片石器(4794-4797) 4794は石錐で、剥片先端の尖頭部に狭短な刃部が作られる。刃部には磨耗痕がみられる。4975は右側縁、4976は左側縁に使用痕をもつ剥片である。

礫石器(4797) 凝灰質細粒砂岩を素材とした小型の半円状扁平打製石器である。刃部は左側縁に作られ、ほかの部分は背部になっている。II-A₁型に分けられる。

遺構の時期 出土土器を欠き、住居址の形態・規模も確認できなかったことから、所属時期は不明である。

MV-2住居址(第241図4798-4800, 写真図版42)

土器(4798-4800) 4800は炉に埋設された深鉢形土器である。沈線で区画された無文帯がJ字文を展開するもので、縦回転の単節斜縄文を地文とする。文様は3回繰り返される。4798・4799は単節斜縄文を地文とする体部片である。4800は大木10式に相当する。

遺構の時期 炉埋設土器からみて、大木10式期に位置づけられる。

MVI区

MVI-1住居址(第243図4801-4807)

土器(4801-4806) 4801は沈線で口形文を描き、文様内に単節斜縄文を充填する深鉢形土器の体部片である。4802は口縁部文様帯に横位平行の撚紐瓦痕文が施される。4803-4806は体部片で、4804・4806は木目状撚糸文、4803は複節斜縄文、4805は単節斜縄文を地文とする。4801は大木9式に相当し、4802は縄文時代前期III群、4804・4806はIII-IV群に分けられる。

剥片石器(4807) 無茎凹基の石錐の先端尖頭部を刃部として転用した石錐である。刃部は磨耗して丸くなっている。

遺構の時期 床面や炉からの伴出遺物を欠くが、住居址の形態や埋土内出土遺物から推定すれば、縄文時代前期後半期に位置づけられよう。

MVI-2住居址

遺構の時期 出土遺物を欠くが、この住居址はMVI-1住居址に全形を覆う形で切られており、MVI-1住居址出土遺物のなかには、この住居址に伴う遺物も含まれている可能性がある。所属時期は、住居址の諸形態がMVI-1住居址と共通していることから、MVI-1住居址と同様縄文時代前期後半期に属するものと推定される。

MVI-3住居址(第242図4808-4826)

土器(4808-4820) 4808は炉埋設土器である。深鉢形土器の体部下半で、縦回転の単節斜

縄文を地文とする。4809—4811は深鉢形土器の体部下半である。地文は、4809が単節縄文、4810が撚糸文を縦回転で施文する。4811の底部外面には網代痕が伴う。4812・4814—4816・4818・4820は沈線で区画した無文帯がJ字文やS字文などの曲折文を展開するもので、地文は、4816が無節縄文、ほかは単節縄文を縦回転で施文する。4818が壺形土器となるほかは、深鉢形土器と思われる。4819は口縁部文様帯が隆起線で区画される深鉢形土器で、隆起線に沿う口縁部無文帯に連続竹管文が施される。4813・4817は単節斜縄文を地文とする粗製の深鉢形土器である。

以上、文様の分かるものはすべて大木10式に相当する。4808も器形や作りからみて、同時期に含まれよう。

剝片石器(4821—4824) 4821は縦長剝片の両側縁に刃部加工を施した複刃削器である。4822は削器の先端部を折断して作られた折り面—自然面交差型の彫器である。刃部側縁に刃こぼれ状の微細剝離痕を伴う。4823は右側縁に使用痕をもつ剝片である。4824は削器で、縦長剝片の1側縁に奥行きを浅い刃部が作られる。

礫石器(4825・4826) 4825は複輝石安山岩の扇球形礫、4826は扁平な不整角礫を素材とした凹石である。4825は表裏2面に1個ずつ、4826は表面に1個の深い凹みをもつ。

遺構の時期 複式炉の埋設土器や埋土内出土土器からみて、大木10式期に位置づけられる。

MVI—4 住居址 (第242図4827—4830)

土器(4827—4830) 4827は沈線、4830は隆起線で口縁部文様帯を区画する深鉢形土器で、4830の隆起線に沿う口縁部無文帯には連続竹管文が施される。4828・4829は縦回転の単節斜縄文を地文とする体部片である。4827・4830は大木10式に相当する。

遺構の時期 炉や床面から出土した時期決定資料を欠くが、複式炉系統の炉をもつことや埋土内出土土器からみて、大木10式期に位置づけられよう。(佐々木 勝)

MVI—5 住居址

遺構の時期 出土遺物はない。住居址間の重複関係や形態などからみて、縄文時代前期の時期内に位置づけられる。

MVI—6 住居址 (第242図・第243図4831—4841, 写真図版107・133)

土器(4831—4836) すべて縄文時代前期に含まれる。4832—4835はIII群2類に分類できる。4832は刺突文を伴った隆帯が文様帯を区画している。口唇部と隆帯に接した部分に絡糸体圧痕を1条ずつめぐらし、その間は撚紐圧痕を斜めに施文している。4835は低い波状口縁になり、口縁部には絡糸体が平行横線状に押圧される。2点は木目状撚糸文を体部地文にする。胎土には繊維をわずかに含む。口縁部破片4831は単節斜縄文がみられ、体部破片4836は結束第1種羽状縄文が施されている。

剝片石器(4837—4841) 4837は珪化木を素材にした縦形石匙である。扶入部には1条の刻

線がめぐる。長さは3.0cmである。大きさや石質・刻線をもつことからみて、実用品ではないであろう。4838—4840は折断石器で、いずれも折り面は1面である。4841は加撃による刃部加工が施された抉入石器で、2個の刃部をもつ。

遺構の時期 埋土からの出土遺物や住居址間の重複関係などからみて、縄文時代前期末葉期、土器分類群でいえばⅢ群2類に位置づけられるであろう。

MVI—7住居址 (第243図4842—4857, 写真図版42・107・123・151)

土器 (4842—4849) 縄文時代前期～後期の土器が出土している。4842は口縁部と筒状にせばまる体部下半を失っているが、長脚付深鉢形土器といわれるものである。文様帯は体部半ばにめぐる2条の平行沈線よりも上位に展開する。単節斜縄文を施した上に、沈線によって渦巻文を主体とした文様が描かれる。沈線は竹管などの外側を引いたものである。大木6式になる。拓本4846は同一個体の破片である。

拓本土器4847は隆帯の上にも燃紐の施文がみられる前期Ⅱ群、4844は肥厚した口縁部に絡糸体圧痕が施文された前期Ⅲ群2類の土器である。4843は結束第1種羽状縄文が口縁部に施文され、前期Ⅱ群に含まれる。4848は口縁部の破片である。波状口縁の頂部はさらに小波状になり、その下位には渦巻状の貼付文を伴う。ほかには沈線による小波状文などが施文される。大木6式である。

前期以外では、4845が鱗状隆帯をもつ大木10式、4849は磨消縄文をもつ後期の土器である。

剥片石器 (4851—4857) 4851は、右側縁の先端部寄りの部分に刃部をもつ削器状石器である。また左側縁にも小刺離痕が連続している。4855は2個1対の刃部をもつピエス・エスキューであるが、刃部の刺離痕の奥行きは浅い。4856は抉入石器で、両面が2次加工面に覆われている。4852・4857は右側縁に鋸歯縁状の刃部をもつ。4854・4853は使用痕のある剥片である。

礫石器 (4850) 折損した半円状扁平打製石器である。

遺構の時期 遺物はいずれも埋土下部から出土している。それらの遺物や住居形態などを参考にするならば、縄文時代前期末葉期、大木6式の時期に位置づけられるであろう。

(三浦 謙一)

MVI—8住居址 (第243図・第244図4858—4880, 写真図版42・107・113)

土器 (4858—4874) 4858は伊埋設土器である。体部が直線的に外傾する粗製深鉢形土器で、縦回転の単節斜縄文を地文とする。4859はピット内より出土した壺形土器である。単節斜縄文を充塞した沈線区画帯が文様を展開するもので、体部上半にJ字文や波頭文が4回繰り返して描かれる。4860は燃糸文を地文とする小型深鉢形土器の体部下半で、底部外面には網代痕がみられる。4861は無文研磨された小型壺形土器である。

4862—4865・4867・4868は沈線区画の無文帯が横に流れる文様を展開する深鉢形土器、4866

は壺形土器である。体部上半にJ字文や連結逆S字文などが描かれ、4867は沈線に沿って連続刺突文が伴う。地文は、4866・4868が燃糸文、ほかは単節縄文を縦回転で施文する。4869は口縁部文様帯を隆起線で区画する浅鉢形土器で、隆起線に沿う口縁部無文帯に連続刺突文が施される。4870は口縁部が無文の深鉢形土器で、頸部には2本の隆起線が巡る。4871は無文の口縁部片、4871は燃糸文を地文とする体部片である。4773・4774は粗製の深鉢形土器で、単節斜縄文を地文とする。

4859・4862—4869は大木10式に相当する。4858も器形や作りからみて同時期に含まれよう。

剥片石器 (4876—4880) 4876は削器で、縦長剥片の外湾する1割縁に凸刃状の刃部が作られる。4878は2個1対の刃部をもつ小型のピエス・エスキューである。両極の刃部には奥行きが浅い剥離痕がみられる。4979は縦長剥片の先端部に刃部加工を施した石錐で、短い尖頭形の刃部が作られる。4877は左側縁に使用痕をもつ剥片、4880は左側縁に2次加工を施した剥片である。

礫石器 (4875) 斜長石流紋岩の不整角柱礫を素材とした凹石で、表面に浅い2個の凹みをもつ。

遺構の時期 炉の埋設土器やピット内出土土器などからみて、大木10式期に位置づけられる。MVI—9住居址(第244図・第245図4881—4915、写真図版42・133・144)

土器 (4881—4900) 4881は床面出土土器である。体部が直線的に外傾する深鉢形土器で、沈線区画の無文帯で逆S字文が描かれる。文様は3回繰り返され、文様区画外には燃糸文が充填される。4882は単節斜縄文、4883は複節斜縄文を地文とする深鉢形土器の体部下半である。4882は体部上半に沈線区画の無文帯をもち、底部外面には熊笹痕がみられる。4984—4991は沈線で区画した無文帯がJ字文や逆S字文などの曲折文を展開する深鉢形土器である。地文は、4886・4888が燃糸文、ほかは単節縄文を縦回転で施文する。

4892は深鉢形土器波頂部の円孔突起で、連続竹管文を沿わせた鰭状隆帯が貼付される。4893—4897は口縁部文様帯が隆起線で区画される深鉢形土器で、4896を除き、隆起線に沿う口縁部無文帯には連続竹管文が施される。地文の分かるものは、すべて単節縄文の縦回転施文である。4898—4900は粗製の深鉢形土器で、4898・4899が複節斜縄文、4900が単節斜縄文を地文とする。

4883・4898—4900の粗製土器などは特定できないが、ほかはすべて大木10式に相当する。

剥片石器 (4903—4915) 4903は無茎平基、4904は無茎円基の石錐である。4903は狭長な剥片を素材とし、細長い刃部が作られる。4904は正三角形の小型石錐で、未加工部分を大きく残している。4905は両側縁を刃部とする縦形石匙である。つまみは自然面を残し、挟入部の挟りも浅い。4906は縦長剥片の両側縁に短くて奥行きが浅い刃部加工を施した削器状石器、4907は4個2対の刃部をもつピエス・エスキューである。4908は削器で、側縁から先端部に連続す

る2次加工を施して尖頭形の刃部が作られる。4909は左右対称の縦長剥片の両側縁に刃部加工を施した削器である。刃部の1部を折損する。4910は両側縁に使用痕をもつ剥片である。4911は玉髓の狭長な剥片を素材とした石錐で、剥片の全面に入念な2次加工が施される。4912は剥片突出部に片面から刃部加工を施した石錐である。4913は全面加工の狭長な刃部をもつ石錐で、つまみ部が折損している。4914は細部加工で作られた1個の刃部をもつ挟入石器である。4915は掻器状石器を転用したピエス・エスキューで、2個1対の刃部をもつ。両極には剝離痕がみられ、とくに上端は奥行き深い剝離面で覆われる。

石斧 (4901) 珪質緑色凝灰岩を素材とした定角式の磨製石斧である。刃部側を折損する。

礫石器 (4902) 球形の磨石である。表裏面は擦られたことによる光沢が著しい。

遺構の時期 床面上や埋土内の出土土器からみて、大木10式期に位置づけられる。

NVI区

NVI-1住居址 (第246図4916-4920, 写真図版42・43)

土器 (4916-4919) 4916は体部が直線的に立ちあがる深鉢形土器である。沈線で区画した無文帯がJ字文を描くもので、文様末端部には連続刺突文を配した鱗状隆帯が貼付される。文様は4回繰り返され、文様区画外には捺糸文が充填される。4917は床面出土土器である。沈線区画の無文帯が文様を展開する壺形土器で、4回繰り返して逆S字文が描かれる。文様区画内の円形帯には刺突文が施され、文様末端部には鱗状隆帯を伴う。地文は単節縄文の縦回転施文である。4918は頸部に沈線を巡らす沈線文系土器、4919は無文の小型深鉢形土器である。4916-4918は大木10式に相当する。

剥片石器 (4920) 基部に刃つぶし状の剝離が加えられた小剥片である。

遺構の時期 床面出土土器からみて、大木10式期に位置づけられる。

NVI-2住居址 (第246図-第248図4926-4965, 写真図版43・107)

土器 (4926-4961) 4926は隆起線区画文を伴う深鉢形土器である。沈線で円形に区画し、隆起線の貼付や連続刺突文の配列によって構成された抱玉文様が体部上半に描かれる。抱玉文は4回繰り返され、文様間は、鱗状隆帯や連続刺突文を連続的に伴う横展開の沈線区画無文帯で結ばれる。口縁部内面には鱗状隆帯を伴う1条の隆起線が巡る。地文は縦回転の複節斜縄文である。4931は床面出土の深鉢形土器である。4926と同様抱玉文の変形文を展開するもので、沈線区画の無文帯で横に延びるY字状文が描かれる。文様は3回繰り返され、口縁部内面波頂部には鱗状隆帯が貼付される。地文は縦回転の単節斜縄文である。4527はミニチュア土器、4528は小型土器、4529・4532・4533は深鉢形土器の体部下半である。4932の底部外面には網代痕がみられる。4527・4532・4533は縦回転の単節斜縄文、4528・4529は捺糸文を地文とする。4930

は台付土器の体部下半で、沈線で羽状文が描かれる。以上、4926・4931は大木10式に相当する。4927—4929・4932・4933も器形や作りなどからみて、同時期に含まれよう。4930は縄文時代前期IV群に分けられる。

4934—4942は沈線区画の無文帯が丁字文や連結逆S字文などの曲折文を展開する深鉢形土器である。4935はJ字文末端に刺突文が施される。地文が分かるものは、すべて縦回転の単節斜縄文である。4943は口縁部文様帯が隆起線で区画される深鉢形土器の波頂部で、隆起線に沿って連続竹管文が施される。4944—4947・4952は縦回転の単節斜縄文を地文とする粗製深鉢形土器である。以上、4934—4943は大木10式に相当する。

4950・4951・4954は口縁部に横回転の捺糸文が不規則に施されるもので、4954には綾絡文が伴う。4955の口縁部には、捺糸文が木目状に施される。4948は間隔のあいた綾絡文、4953は網目状捺糸文が施された体部片である。4949の短い口縁部には横位平行の捺紐匠文が施され、体部には結束第1種羽状縄文が施される。以上、4948・4950・4951・4953—4955は縄文時代前期I群2類、4949はIII群に分けられる。

4956は外面に熊笹痕をもつ底部片である。4957は無文研磨された器面に曲線文が描かれる。4959は口唇端に連続刻み目文を施し、体部上半に大腿骨文を描く鉢形土器、4960は口唇端に2個1対の小突起をもつ壺形土器である。4961は体部中央に数条の平行沈線文が巡る。4958は細い単節斜縄文を地文とする壺形土器の体部下半で、底部外面は丁寧に研磨されている。以上、4957は十腰内I式、4959・4960は大洞C₁式に相当し、4958・4961は縄文時代晩期に比定される。

剥片石器 (4962—4964) 4962は両側縁に不規則な2次加工痕をもつ剥片、4963は素材のもつ鈍角を挟んで連続する刃部加工を施した凸刃状の削器である。4964は2個1対の刃部をもつピース・エスキューと考えられるが、剥離面の奥行きが浅い。

礫石器 (4965) 楕円球形の磨石である。表裏2面は擦られたことによる光沢が著しい。

遺構の時期 床面出土土器からみて、大木10式期に位置づけられる。

NVI—3住居址 (第248図4967—4986, 写真図版43)

土器 (4967—4981) 4967は炉埋設土器である。沈線で楕円文を描き、文様内に単節斜縄文を充填する深鉢形土器で、口縁部を欠損する。4968は沈線で楕円文か冪形文が描かれる。4969—4973は沈線で区画した無文帯が丁字文や逆S字文などの曲折文を展開するもので、4969・4972は壺形土器、4970・4971・4973は深鉢形土器である。4970は磨消帯に連続刺突文が施され、4972には刺突文充填の円形区画帯を伴う。地文はすべて縦回転の単節斜縄文である。4974は口縁部文様帯が沈線、4979は隆起線で区画される深鉢形土器で、区画線に沿う口縁部無文帯に連続刺突文が施される。4975—4977は縦回転の単節斜縄文、4978は複節斜縄文を地文とする粗製深鉢形土器である。4977では、横回転で重ねて施文して頸部の縁どりを行っている。4980は口縁

部文様帯に綾絡文が施され、4981は三叉文が描かれる。

4967・4968は大木9式、4969—4974・4979は大木10式、4981は大洞B式に相当する。4980は縄文時代前期I群1類に分けられる。

剥片石器 (4982—4984) 4982は尖基の石鏃である。平面形が菱形を呈し、体部中央に最大径をもつ。4983は2個1対の刃部をもつピース・エスキューで、両極に階段状の剥離痕がみられる。4984は非折り面交差型の彫器である。蜂香剥離による末端面と自然面の交差部を刃部とするもので、刃部の剥離面側には刃こぼれ状の微細剥離痕が生じている。

石斧 (4986) 珪質緑色凝灰岩を素材とする小型の磨製石斧である。刃部を折損している。

石製品 (4985) 凝灰質細粒砂岩で作られた有孔石製品である。両面から穿たれた2個の円孔をもつ。破損品のため形状は不明であるが、楕円形を呈していたものと思われる。

遺構の時期 埋土内出土土器の大半が大木10式相当土器で占められることに疑念は残るが、炉埋設土器からみて、大木9式期に位置づけられよう。

NVI—4住居址 (第249図・第250図4989—5023, 写真図版43・107・151)

土器 (4989—5011) 4989は床面から出土した。体部がほぼ直線的に外傾する鉢形土器で、縦回転の単節斜縄文を地文とする。4991も床面出土の鉢形土器である。体部下半に鋸歯状の帯縄文を巡らせ、文様変曲点に瘤状の貼付文が施される。4990は注口土器である。体部上半に沈線で直線文や放射状文が描かれ、文様内は貼瘤文で加飾されている。4992は無文の小型鉢形土器で、器面は粗い磨きで調整される。以上、4989—4992は縄文時代後期末葉に比定され、宮戸IIIa式・新地式に併行する。

4993・4996・5006—5008・5010は沈線で楕円文や冂形文を描く深鉢形土器である。4996が楕円文内に刺突文が充填されるほかは、文様区画内に単節斜縄文が充填される。以上は大木9式に相当する。

4995・4998・5003・5004・5011は沈線区画の無文帯がJ字文や逆S字文などの曲折文を展開する深鉢形土器で、5011は磨消帯に連続刺突文を伴う。文様区画外には、4995が摺糸文、ほかは単節斜縄文を縦回転で施文する。4994・5000・5001は口縁部文様帯が隆起線で区画されるもので、隆起線に沿って連続刺突文が施される。以上は大木10式に相当する。

4997・4999は縦回転の単節斜縄文を地文とする粗製深鉢形土器、5009は摺糸文を地文とする体部片である。5002は小型深鉢形土器で、横回転の単節斜縄文を地文とする。5005はキャリパー状の深鉢形土器で、隆起線で渦巻文が描かれる。5005は大木8a式に相当する。

剥片石器 (5012—5018) 5012・5013は不規則で奥行き浅い刃部をもつ削器状石器で、5012は横長剥片の先端部、5013は縦長剥片の1側縁に刃部が作られる。5014・5015は2辺を折断し、長方形に整えた折断石器で、1個の刃部には刃こぼれ状の微細剥離痕がみられる。5016は非折

り面交差型の彫器で、剝離面と自然面との交差部が刃部となっている。5017は2個1対の刃部をもつピエス・エスキューである。上端には奥行き深い剝離痕をもつが、下端には細かな剝落痕をもつにすぎない。5018は抉入石器で、縦長剥片の左側縁に細部加工を施した1個の刃部が作られる。

石斧 (5019) 珪質緑色凝灰岩で作られた定角式磨製石斧で、刃部側を折損する。

礫石器 (5020—5022) 5020は扁平な方形礫を素材とする凹石で、表裏2面に1個ずつの凹みをもつ。5021・5022は扁球形の磨石である。双方とも表面が滑らかになっている。

石製品 (5023) 石英安山岩の角柱礫を素材とした石棒の体部片である。体部断面形は四角形を呈し、部分的に研磨されている。凹石として転用されており、浅い2個の凹みを伴う。

遺構の時期 床面出土土器からみて、縄文時代後期末葉期に位置づけられる。

NVII区

NVII-1 住居址 (第250図・第251図5024—5029, 写真図版44・107・108)

土器 (5024—5029) 5024・5027は同一個体で、炉の埋設土器である。沈線で区画した無文帯が連結逆S字文を描く深鉢形土器で、口縁部内面の波頂部には鱗状隆帯が貼付される。地文は縦回転の単節斜縄文である。5025は5024・5027と同形文を展開する小型深鉢形土器で、縦回転の捺糸文を地文とする。口縁部内面波頂部には鱗状隆帯が伴う。5026は口縁部文様帯が隆起線で区画される小型深鉢形土器である。口縁部には隆起線に沿う口縁部無文帯に連続刺突文が施され、体部には沈線区画無文帯で曲折文が描かれる。地文は縦回転の単節斜縄文である。5028は5025の底部、5029は5026の底部と思われる。5029の外面には木炭痕がみられる。以上はすべて大木10式に相当する。

遺構の時期 炉の埋設土器や床面出土土器からみて、大木10式期に位置づけられる。

NVII-2 住居址

遺構の時期 出土遺物を欠き、住居址の形態等も不明である。周囲の遺構のあり方からみれば、縄文時代中期末葉期に所属する可能性があるものの特定できない。

NVII-3 住居址 (第251図5042—5046)

土器 (5042—5046) 5042—5044は同一個体で、炉の埋設土器である。沈線で区画した無文帯が逆S字文を展開する深鉢形土器で、文様末端部には鱗状隆帯が伴う。地文は単節斜縄文を縦回転で施文する。5045・5046は縦回転の単節斜縄文を地文とする体部片である。5042—5044は大木10式に相当する。

遺構の時期 炉埋設土器からみて、大木10式期に位置づけられる。

OVI区

OVI-1 住居址 (第251図・第252図5048—5064, 写真図版44)

土器 (5048—5060) 5060は炉埋設土器である。沈線で区画した無文帯が抱玉文を描く深鉢形土器で、横に展開する円形区画文で抱玉文が連結されている。抱玉文と連結帯の接触部には連続刺突文を配した船状隆帯が貼付され、円文区画内には沈線に重ねて連続刺突文が施される。文様は4回繰り返され、文様区画外には縦回転の複節斜縄文が施文される。5048は炉補強用に埋設された破片の復元土器である。沈線区画無文帯で逆S字文を描く深鉢形土器で、縦回転の複節斜縄文を地文とする。5049は外面に熊笹痕をもつ底部片である。

5050・5052は太い沈線で区画した充塞縄文帯が横e字文を描き、文様内に複節斜縄文を充塞するものである。5051は5050・5052と同様、太い調整沈線で区画文が描かれる。5053・5054・5056は沈線区画の無文帯が文様を展開するもので、5053は燃糸文、5054は単節斜縄文を地文とする。5055は横回転、5058は縦回転の単節斜縄文、5057は縦回転の複節斜縄文を地文とする粗製深鉢形土器である。5059は口縁部文様帯に綾絡文が施される。

5060・5048・5050—5054・5056は大木10式に相当するが、5050—5052は大木10式でも初期に属するものである。5059は縄文時代前期I群1類に分けられる。

剥片石器 (5061—5064) 5061は外湾する1側縁に不規則な刃部加工を施した削器状石器である。5062は折り面交差型、5063は折り面—古剝離面交差型の影器で、双方とも刃部には刃こぼれ状の微細剝離痕を伴う。5064は外湾する左側縁に使用痕をもつ剥片である。

遺構の時期 炉埋設土器や炉補強用土器からみて、大木10式期に位置づけられる。

OVI-2 住居址 (第252図5065—5068, 写真図版44)

土器 (5065—5068) 5068は炉埋設土器である。体部上半を欠くため文様構成は明らかでないが、OVI-1住居址炉埋設土器5060と同種の文様を展開するものと思われる。縦回転の複節斜縄文を地文とする。5065は沈線区画の無文帯が文様を展開する深鉢形土器である。5066は縦回転、5067は横回転の単節斜縄文を地文とする粗製深鉢形土器で、5067の口縁部は無文帯となっている。5065・5068は大木10式に相当する。

遺構の時期 炉埋設土器からみて、大木10式期に位置づけられる。

OVI-3 住居址 (第252図、第253図5070—5077)

土器 (5070—5075) 5070は口縁部文様帯が隆起線で区画される浅鉢形土器で、中空の突起が伴う。5073—5075は沈線で区画した無文帯がJ字文や逆S字文などの文様を展開する深鉢形土器である。5073には文様末端に船状隆帯が伴う。5071・5072は粗製の深鉢形土器である。地文は5073が複節縄文、ほかは単節縄文を縦回転で施文する。5070・5073—5075は大木10式に相当する。

剥片石器 (5076・5077) 5076は石錐で、縦長剥片の先端部に2次加工を施して尖頭形の刃部が作られる。刃部以外は1次剥離面をそのまま残す。5077は玻璃質流紋岩を素材とする石刃で、表面には側縁に平行する数条の稜がみられる。

遺構の時期 炉や床面からの伴出遺物を欠くが、大木10式期に属するOVI-2住居址に後出する重複関係にあることや住居址の形態などからみて、大木10式期に含まれる可能性が高い。

OVI-4 住居址 (第253図5078-5081)

土器 (5078-5081) 5078は沈線で楕円文を描き、文様内に刺突文を充填する深鉢形土器である。5081は沈線で区画した無文帯が曲折文を展開するもので、縦回転の単節斜縄文を地文とする。5079は横回転の単節斜縄文を地文とする粗製深鉢形土器、5080は捺糸文を地文とする体部片である。5078は大木9式、5081は大木10式に相当する。

遺構の時期 床面や炉から出土した時期決定資料を欠くが、周囲の遺構のあり方や埋土内出土遺物を参考にして推定すれば、大木9式-10式期に位置づけられる可能性が高い。

OVI-5 住居址 (第253図5082-5089)

土器 (5082-5088) 5082・5084・5086は沈線で区画した無文帯がJ字文や逆S字文などの文様を描く深鉢形土器で、5082・5084は縦回転の単節斜縄文、5086は複節斜縄文を地文とする。5083は縦回転の単節斜縄文、5085は捺糸文を地文とする体部片である。5087は地文の単節斜縄文上に曲線文が描かれる。5088は口縁部に直線的な帯縄文が施される壺形土器である。

5082・5084・5086は大木10式に相当する。5087は縄文時代後期初頭、5088は後期中葉に比定される。

剥片石器 (5089) 三角形の素材の全周に2次加工を施した小型の尖頭石器で、刃部の奥行きは浅い。石錐の未完成品かもしれない。

遺構の時期 床面上から出土した時期決定資料を欠くが、大木10式期に属すると考えられるOVI-6住居址に先出する重複関係にあることや埋土内出土土器を参考にして推定すれば、大木10式期に位置づけられるものと思われる。

OVI-6 住居址 (第253図・第254図5090-5103, 写真図版108)

土器 (5090-5098) 5090は沈線で楕円文か円形文を描き、文様内に単節斜縄文を充填する深鉢形土器である。5091は無文の口縁部で、波状を呈する。5092・5093・5095-5098は沈線で区画した無文帯が横方向に流れる文様を描くもので、5095は連結逆S字文を展開する。地文はすべて縦回転の単節斜縄文である。5094は口縁部文様帯が隆起線で区画される深鉢形土器である。5091-5098は大木10式、5090は大木9式に相当する。

剥片石器 (5099-5103) 5099は1側縁に不規則な2次加工を施した剥片である。5100は2辺が折断され、2個の刃部をもつ折断石器で、刃部には微細剥離痕がみられる。5101、5102は折り面-古剥離面交差型の彫器である。双方とも刃部には刃こぼれ状の微細剥離痕を伴う。5103

は表面右側縁に使用痕をもつ剥片である。

遺構の時期 床面や炉からの伴出遺物を欠くが、住居址の形態や埋土内出土土器からみて、大木10式期に位置づけられよう。

QIV区

QIV-1 住居址 (第254図5104-5123, 写真図版44・108)

土器 (5104-5121) 5113は炉埋設土器である。斜回転施文の横走単節縄文を地文とする粗製の甕形土器で、体部上半を欠く。5118は口縁部が強く外反し、体部上半が大きく張り出す器形の粗製甕形土器である。口縁部は無文で、口唇端には沈線状の凹線が面される。頸部には1条の浅い沈線が巡り、内面には強い稜線が形成される。地文は単節縄文を斜回転で施文する。5107・5108・5116・5117・5120は無文の口縁部片で、5108・5116には口唇端に小波状の刻みが施される。5110・5111・5119は斜回転の細い単節斜縄文を地文とする粗製深鉢形土器、5114は無文の甕形土器の体部片である。5121は鉢形土器で、体部中央に3条の平行沈線が巡る。以上、5113・5118は弥生時代の初期に相当し、谷起島式・二枚橋式に併行しよう。5107・5108・5110・5111・5114・5116・5117・5119-5121の大半も器形や施文方法などからみて同時期に含まれるものと考えられる。

5104・5109は口縁部文様帯に横位平行の絡条体圧痕文を施すもので、5109には連続刺突文を配した微隆起帯が伴う。5112は口縁部文様帯に横位の撚紐圧痕文を施すもので、体部には撚糸文が施される。5105・5106・5115は結束第1種羽状縄文を地文とする体部片である。以上は縄文時代前期III群に分けられる。

剥片石器 (5122・5123) 5122は横長剥片を素材とした縦形石匙で、外湾する先端部に片面加工で刃部が作られる。2123は剥片先端の尖頭部に磨耗痕をもつ剥片である。

遺構の時期 炉埋設土器や埋土内出土土器からみて、東北地方における弥生時代初期に位置づけられよう。

QIV-2 住居址 (第254図5126)

土器 (5126) 体部上半が大きく膨らむ粗製深鉢形土器で、頸部に1条の沈線が巡る。地文は斜回転施文の横走単節縄文である。

遺構の時期 床面や炉から出土した時期決定資料を欠くが、周囲の遺構のあり方や遺構検出面の検討結果などからみて、QIV-1住居址と同時期に属す可能性が高い。

RIV区

RIV-1 住居址 (第255図5127-5139)

土器 (5127-5138) 5127・5128は同一個体で、炉の埋設土器である。粗製深鉢形土器の体

部片で、斜回転の単節斜縄文を地文とする。5129は端部に数条の平行沈線を巡らすもので、高坏形土器の台部と思われる。以上は弥生時代初期に位置づけられよう。

5130は0段多条、5131・5132・5134は正燃の単節縄文を横回転で施文した粗製深鉢形土器で、いずれも胎土に繊維が含まれる。5135は口縁部に、3136は体部に結束第1種羽状縄文が施される。5137は縦回転の複節斜縄文を地文とする体部片、3133は1条の隆起線を巡らす頸部片である。3138は沈線で楕円文か〇形文を描く深鉢形土器で、単節斜縄文を地文とする。以上、5130—5132・5134は縄文時代前期1群2類、5135・5136はII—III群に分けられ、5138は大木9式に相当する。

礫石器 (5139) 複輝石安山岩の扁平角礫を素材とした有溝の砥石である。表裏2面に一定方向の規則的な擦痕がみられる。

遺構の時期 炉埋設土器からみて、東北地方における弥生時代初期に位置づけられよう。

RIV—2 住居址

遺構の時期 出土遺物を欠くため所属時期は特定できないが、周囲の遺構のあり方や住居址の形態などからみて、QIV—1・QIV—2・RIV—1住居址と同時期に所属する可能性が高い。

SIII区

SIII—1 住居址 (第255図5140—5152, 写真図版134・151・157)

土器 (5140・5141) 5140は縦回転の複節斜縄文を地文とする体部片、5141は外面に網代痕をもつ底部片である。

剥片石器 (5145—5152) 5145は横型の削器で、蝶番剝離による横長剥片の末端面に急傾斜の刃部が作られる。5146は縦長剥片の1側縁に刃部加工を施した削器状石器で、刃部の奥行きは浅い。5147は2辺が折断され、1個の刃部をもつ折断石器である。刃部には刃こぼれ状の微細剝離痕がみられる。5148は2個1対、5149は4個2対の刃部をもつピエス・エスキューである。5150は3辺を折断し、切り出し形に整えた折断石器で、2次加工を施して1個の刃部が作られる。5151は三角形の小剥片に尖頭形の刃部加工を施した尖頭石器である。石鏃の未完成品かもしれない。5152は2個1対の刃部をもつピエス・エスキューで、両極に奥行きの浅い剝離面を伴う。

石製品 (5142—5144) 5142は凝灰質粘板岩で作られた石剣状石製品の折損品である。刃部断面形は完全な凸レンズ状を示さず、側面に狭い平坦面をもつことから、小型磨製石斧となる可能性もある。5143はプロピライトの扁平な円形礫を素材とした円盤状石製品である。全面が研磨されている。5144は細粒凝灰岩の扁平な不整形円形礫で作られた有孔石製品で、礫中央に片面から径0.4cmの円孔が穿たれる。

遺構の時期 床面や炉からの伴出遺物を欠くが、大木10式期に属すと思われるSIII—2住居址に先出する重複関係にあることや周囲の遺構のあり方などからみて、縄文時代中期後葉—末

葉期に位置づけられよう。

SIII—2 住居址 (第255図5153—5159)

土器 (5153—5157) 5153は床面出土の深鉢形土器体部下半である。5154は小型深鉢形土器の体部下半で、縦回転の単節斜縄文を地文とする。5155は沈線区画の充填縄文帯、5556・5557は沈線区画の無文帯が横方向に流れる文様を展開するものである。すべて単節斜縄文を地文とする。5155—5157は大木10式に相当する。

剥片石器 (5158) 外湾する右側縁に不規則な2次加工を施した剥片である。

礫石器 (5159) 複層石安山岩の不整角礫を素材とした凹石で、表面に1個の凹みをもつ。

遺構の時期 床面や炉から出土した時期決定資料を欠くが、炉の形態や埋土内出土土器からみて、大木10式期に位置づけられよう。

SIV 区

SIV—1 住居址 (第255図—第257図5160—5193, 写真図版108・134・151・157)

土器 (5160—5175) 5160は床面から出土した深鉢形土器の体部下半で、縦回転の単節斜縄文を地文とする。5162—5169は沈線で区画した無文帯がJ字文や逆S字文などの曲折文を展開する深鉢形土器である。5165には文様末端に鱗状隆帯が貼付され、5167には沈線に沿う無文帯に連続刺突文が施される。地文は5162が燃糸文のほかは単節斜縄文である。以上、5162—5169は大木10式に相当する。

5161は沈線で楕円文か口形文を描く深鉢形土器で、文様内には刺突文や単節斜縄文が充填される。5170は体部文様帯が隆起線で区画された円形文を描く壺形土器で、文様内には単節斜縄文が施される。5171・5172は縦回転の単節斜縄文、5173は綾絡文を伴う単節斜縄文を地文とする粗製深鉢形土器で、5174は無節斜縄文を地文とする壺形土器である。5175は口縁部文様帯に刻み目帯を伴う羊歯状文が描かれる。以上、5161、5170は大木9式、5175は大洞BC式に相当する。

剥片石器 (5176—5179) 5176は無茎平基の石鏃である。刃部は両面加工で作られるが、表裏2面とも1次剥離面を大きく残している。5177・5178は2個1対の刃部をもつピエス・エスキューである。5158の剥離面の奥行きは浅い。5159は左側縁に使用痕をもつ剥片である。

石斧 (5187) 定角式の磨製石斧である。刃部は両凸の扁刃で、先端に細破砕痕がみられる。

礫石器 (5180—5186・5189—5191) 5180—5182・5184—5186は、球形ないしは扁球形の複層石安山岩を素材とする磨石である。5180は表裏2面、5181・5182・5185・5186は側面、5184はほぼ全面に磨痕がみられる。5183は板状の細粒凝灰岩で作られた無成形の石皿と思われる。表裏2面とも中央付近が凹んで滑らかになっている。5189・5110は扁球形礫を素材とした凹石

で、表面中央に大きな1個の凹みをもつ。双方とも磨石との複合石器で、側面を中心に擦痕がみられる。5191は成形した縁をもつ石皿の折損品を転用した有溝砥石である。石皿側面に2条の規則的な擦痕が伴う。

石製品 (5188・5192・5193) 5188は粘板岩で作られた有孔石製品である。左側縁に寄った基端部の直下に、径0.6cmの円孔が両面から斜めに穿たれる。体部断面形が凸レンズ状を呈することから、石剣となる可能性がある。5192は粘板岩、5193は複輝石安山岩で作られた石棒である。5192は体部断面形が楕円形で、亀頭状の頭部に向かってやや細くなる。頭部先端は尖っており、基端部にも両平刃的な稜が作られる。全面が研磨されている。5193は大型の双頭形を呈する。体部断面形は円形で、中央に体部最大径をもつ。両頭部はリング状に成形され、端部には凹みが加工されている。

遺構の時期 炉の形態や埋土内出土土器からみて、大木10式期に位置づけられる。

SIV-2 住居址 (第257図5198—5203, 写真図版45)

土器 (5198—5203) 5198は炉埋設土器である。体部下半が大きく膨らむ深鉢形土器で、沈線区画の無文帯が二重のU字文を展開する。外周するU字文の連結部分には、沈線に重ねた刺突文列を伴う円形区画帯が施され、文様末端部には鰭状隆帯が貼付される。文様は4回繰り返され、文様区画外には複節斜縄文が充填される。5199・5201—5203も沈線で区画した無文帯が曲折文を展開する深鉢形土器で、5203には刺突文を充填した円形区画帯が伴う。5200は複節斜縄文を地文とする体部片である。以上、文様の分かるものはすべて大木10式に相当する。

遺構の時期 炉埋設土器からみて、大木10式期に位置づけられる。

SIV-3 住居址 (第258図・第259図5205—5240, 写真図版134・151)

土器 (5205—5228) 5205は口縁部が外反する小型深鉢形土器、5206は波状口縁の大型深鉢形土器で、双方とも沈線で楕円文か円形文が描かれ、文様内には単節斜縄文が充填される。

5207・5208・5210・5212—5222は沈線区画の無文帯がJ字文・逆S字文などの文様を展開する深鉢形土器で、5216・5218は文様接触部に連続刺突文、5219・5220は刺突文充填の円形区画帯を伴う。文様区画外に充填する地文は、5214・5216・5218が縦回転の複節斜縄文、ほかは縦回転の単節斜縄文である。5223は口縁部文様帯に鰭状隆帯を伴うもので、外面の文様先端部と内面の波頂部に貼付されている。5209・5211は微隆起縁で文様帯が区画される深鉢形土器である。5224—5228は粗製深鉢形土器で、いずれも縦回転の単節斜縄文を地文とする。

5207—5223は大木10式に相当する。5224—5228も作りなどからみて同時期に含まれよう。5205・5206は大木9式に所属する。

剥片石器 (5234—5240) 5234・5236は縦長剥片の外湾する1側縁を刃部とする削器である。双方とも、刃部は細かな樹状剝離痕で覆われる。5235・5237は折断石器である。5235は1辺が

折断され、未加工の2個の刃部をもち、5237は2辺が折断され、2次加工を施した1個の刃部をもつ。5238は非折り面尖頭型、5239は折り面—古剝離面交差型の彫器である。5238の刃部には光沢をもつ磨耗痕、5239には刃こぼれ状の微細剝離痕を伴う。5240は大きなつまみをもつ石鏃で、縦長剥片の先端部に狭長な刃部が作られる。刃部先端を折損する。

石斧 (5229) 珪質細粒凝灰岩で作られた小型の定角式磨製石斧である。刃部は両凸の円刃で、使用による擦痕が著しい。基端部を折損する。

礫石器 (5231—5233) 5231は球形の自然礫である。機能を類推する手がかりに欠けるが、石弾として分類した。5232は扁平な楕円形礫、5233は三角柱礫を素材とした磨石である。5232は表裏2面の扁平部に擦痕がみられ、5233は両端を除く全面が滑らかになっている。

石製品 (5230) 粘板岩で作られた磨製の石製品である。長径が3cmの扁平な楕円形を呈するが、裏面に剝落しているため厚さは不明である。表面は丁寧に研磨されている。

遺構の時期 炉の形態や埋土内出土土器からみて、大木10式期に位置づけられる。

SN—4 住居址 (第259図5247—5255, 写真図版45)

土器 (5247—5254) 5247・5248は炉埋設土器である。双方とも、縦回転の単節斜縄文を地文とする深鉢形土器の体部下半である。5248の底部外面には部分的に網代痕がみられる。5249は沈線で楕円文を描き、文様内に複節斜縄文を充填する深鉢形土器である。5250・5252は小型壺形土器、5251は粗製の深鉢形土器で、縦回転の単節斜縄文を地文とする。5253は無文の口縁部片、5254は0段多条の単節斜縄文を地文とする体部片である。以上、文様等から時期を特定できるものは少なく、5249が大木9式に相当する。

剥片石器 (5255) 折り面—古剝離面交差型の彫器で、刃部と刃部側縁に刃こぼれ状の微細剝離痕がみられる。

遺構の時期 この住居址は、大木10式期に所属するSN—2住居址に切られ、同時期のSN—3住居址を切るという重複関係にあることから、大木10式期に位置づけられる。

SN—5 住居址 (第259図・第260図5257—5285, 写真図版108・134)

土器 (5257—5272) 5257—5265は沈線区画の無文帯がJ字文、逆S字文などの曲折文を展開する深鉢形土器である。5261は沈線に沿う無文帯に、5264は文様接触部に連続刺突文が施される。地文は、5261・5263が縦回転の複節斜縄文、ほかは縦回転の単節斜縄文である。5268は口縁部文様帯が隆起線で区画される深鉢形土器で、隆起線に沿う口縁部無文帯には連続竹管文が施される。5266は綾絡文が伴う単節斜縄文を地文とする体部片である。5267・5269—5271は粗製の深鉢形土器で、5271が縦回転の複節斜縄文、ほかは縦回転の単節斜縄文を地文とする。5272は無節斜縄文を縦横不規則に回転施文した小型土器である。以上、5257—5265・5268は大木10式に相当する。5666—5271の粗製土器も作りなどからみて、同時期に含まれよう。

銅片石器 (5273—5280) 5273・5274・5276は撞器で、5273は刃部のみを残す折損品である。5273・5274は縦長剥片の側縁下端から先端部に、5276は1側縁と先端部に急傾斜の刃部加工が施される。5275は無茎で握りの浅い凹状の基部をもつ石鏃である。表裏2面とも細かな調整剝離面で覆われる。5277は非折り面尖頭型の彫器で、刃部には磨耗痕がみられる。5278は2個1対の刃部をもつピエス・エスキーユである。両極剝離面の奥行きは浅い。5279は折り面交差型の彫器で、刃部側縁に微細剝離痕を伴う。5280は左側縁に使用痕をもつ剥片である。

石斧 (5281) 珪質緑色細粒凝灰岩を素材とする磨製石斧である。基部の片面を残すのみの折損品で、基端部には敲打痕を伴う。

礫石器 (5284・5285) 5284は複輝石安山岩の三角柱礫を素材とした磨石である。両端を除く全面に擦痕がみられ、下端にはタールが付着している。5285は扁平な円形礫を素材とした小型の石皿である。他の石皿とは大きさや形態が異なるが、片面が使用の結果全体に凹んでいることから石皿に含めた。

石製品 (5282・5283) 5282は大型石棒の頭部である。体部と頭部の境はあまり明瞭でなく、研磨によって緩やかなくぼみが作られる。体部断面形は円形を呈する。5283は円盤状石製品である。周縁の1部を打ち欠いて成形し、全面を研磨している。

遺構の時期 炉の形態や床面等の出土土器からみて、大木10式期に位置づけられる。

SN-6住居址 (第261図・第262図5291—5351, 写真図版46)

土器 (5291—5315) 5291・5292は縦回転の単節斜縄文を地文とする深鉢形土器の体部下半で、5292は小型のものである。5293・5295・5297—5301・5303・5305・5306は沈線で区画した無文帯が丁字文、逆S字文などの曲折文を展開する深鉢形土器で、5300・5303は文様末端部に鱗状隆帯が貼付される。地文が分かるものでは、5298・5299が縦回転の複節斜縄文、ほかは縦回転の単節斜縄文である。5294は波状口縁の口縁部上端に連続刺突文が施される沈線文系土器、5302は波状の口縁部文様帯が隆起線で区画される隆起線文系土器である。

5296は沈線で区画した充填縄文帯が横S字文を描く深鉢形土器で、単節斜縄文を地文とする。5307—5312は粗製の深鉢形土器で、5309・5311は小型のものである。5307は頸部に細い1条の沈線が巡る。地文は、5309が横回転の複節斜縄文、ほかは縦回転の単節斜縄文で施文される。5313は縦回転の単節斜縄文、5314は摺糸文を地文とする体部片である。5304は朱塗りの無文土器で、外面は研磨されている。5315は体部上半に2条の平行沈線で直曲線が描かれる。

5293—5303・5305・5306は大木10式に相当し5304・5315は十腰内1式に併行する。

銅片石器 (5323—5351) 5323は1側縁に急傾斜の刃部加工を施した縦形石匙である。つまみの握りは刃部と同じ側縁にのみ作られ、タールが付着している。5324・5325は削器である。5324は1側縁から先端部に連続する刃部加工を施して尖頭形の刃部が作られ、5325は外湾する

1 側縁に凸刃形の刃部が作られる。5326・5329は縦長剥片の1側縁に不規則で奥行き浅い刃部加工を施した削器状石器である。5326の先端部は折損している。5327は左側縁に不規則な2次加工を施した剥片で、タールが付着している。5328・5330・5331は折断石器である。5328・5331は1辺が折断され、未加工の1個の刃部をもつもので、刃部には刃こぼれ状の微細剝離痕を伴う。5332は2辺が折断され、2個の刃部をもつもので、上端の刃部には2次加工が施される。5332・5333は非折り面尖頭型、5334は折り面—古剝離面交差型、5335は折り面交差型の彫器である。5334は1辺を折断することにより、折り面—古剝離面交差型の刃部を2個作り出している。5332・5333は刃部と刃部側縁に、5334は刃部側縁に、5335は刃部の片面に刃こぼれ状の微細剝離痕がみられる。5336は珪質細粒凝灰岩の石核である。5337・5338は2個1対、5339は4個2対の刃部をもつピエス・エスキューで、いずれも使用に伴う剝離面が生じている。5340—5345・5348・5350・5351は使用痕をもつ剥片で、5340・5341・5350・5351は右側縁、5345・5348は左側縁、5342—5344は先端部に使用痕を伴う。5346・5347・5349は加工痕や使用痕をもたない剥片である。

石斧 (5316—5319) いずれも珪質緑色細粒凝灰岩で作られた定角式の磨製石斧である。刃部の分かる5317・5318は両凸の円刃で、5316・5319は刃部を折損する。5319は大型品で、基部の剥落が著しい。5318は小型のもので、基部部から鎖にかけて身中央に1条の刻線が走る。

礫石器 (5320・5321) 双方とも複輝石安山岩の球形礫を素材とした磨石である。擦ったことにより表面が滑らかになっている。

石製品 (5322) 石英安山岩の角柱礫で作られた大型石棒の体部である。体部断面形は不整四角形を呈する。体部に研磨痕はみられない。

遺構の時期 床面上・埋土内出土土器や炉の形態などからみて、大木10式期に所属する。

SVI—7住居址 (第262図・第263図5355—5367, 写真図版45)

土器 (5355—5367) 5362は床面埋設土器、いわゆる埋壺である。体部が直線的に外傾する粗製深鉢形土器で、縦回転の複節斜縄文を地文とする。5364は5362の口縁部と思われる。5363は沈線区画の無文帯が文様を展開する深鉢形土器で、縦回転の単節斜縄文を地文とする。5365・5366は沈線で Π 形文を描き、文様内に単節斜縄文を充填する深鉢形土器である。5355・5359・5367は櫛目状沈線文を施した粗製土器、5356・5357・5360は単節斜縄文を地文とする粗製土器、5358・5361は無文の粗製土器である。5358・5360・5361は小型のもので、5358・5360は深鉢形、5361は壺形を呈する。

文様から時期の分かるものは少なく、5363が大木10式、5365・5366は大木9式に相当する。

遺構の時期 周囲の遺構のあり方や埋土内出土土器からみて、縄文時代中期後葉—末葉に所属する。炉の形態や埋設土器の器形などから、より限定的な推定を行えば、大木9式期に位

置づけられるものと考えられる。

SV区

SV-1 住居址 (第263図5368—5371)

土器(5368) 沈線で楕円文か円形文を描き、文様内に単節斜縄文を充填する深鉢形土器である。大木9式に相当する。

土製品(5369) 円盤状土製品である。土器片の再利用品ではなく、特別に成形されたものである。全面が研磨され、周縁は細く尖っている。

剥片石器(5370) 左側縁に使用痕をもつ剥片である。

礫石器(5371) プロピライトの球形自然礫である。機能を類推する手がかりを欠くが、一応石弾として分類した。

遺構の時期 炉や床面から出土した時期決定資料を欠くが、大木10式期に属すSV-2住居址に切られていることや炉の形態などからみて、大木9式期に位置づけられる可能性が高い。

SV-2 住居址 (第263図・第264図5372—5409, 写真図版45)

土器(5372—5392) 5373は床面から出土した。沈線で区画した無文帯が逆S字文を描く深鉢形土器である。文様接触部や文様内円形区画帯には、沈線に重ねて連続刺突文が施される。文様区画外には、縦回転の単節斜縄文が充填され、底部外面には木葉痕がみられる。5372は縦回転の単節斜縄文を地文とする体部下半である。5374—5382は沈線で区画した無文帯がJ字文、逆S字文などの文様を展開する深鉢形土器である。5375には口縁波頂部に、連続刺突文で囲まれた円形押印文が施され、5378には沈線に沿う充填縄文帯に連続竹管文が伴う。5382は沈線に重ねて刺突文が施され、内面には鱗状隆帯が貼付される。地文が分かるものはすべて縦回転の単節斜縄文である。5383・5384は体部片で、5383には綾絡文を伴う単節斜縄文、5384には櫛目状沈線文が施される。以上、5373—5382は大木10式に相当する。

5385は幅の広い無文の口縁部片、5386は単節斜縄文上に懸垂文が施される体部片である。5387・5388・5391・5392は同一個体の皿形土器である。口唇端に2個1対の小突起と1個の中大突起を何組か配置し、体部には大腿骨文が描かれる。5389・5390は同一個体で、沈線で変形工字文が施された高環形土器である。以上、5385・5386は大木9式に併行する。5387・5388・5391・5392は大洞C₁式に相当し、5389・5390は弥生時代初期に比定される。

剥片石器(5393—5409) 5393・5394は縦長剥片を素材とした大型の削器である。5393は外湾する1側縁、5394は直線状の1側縁に片面加工で刃部が作られる。双方とも、刃部は細かな櫛状剥離面で覆われる。5395は縦長剥片の1側縁に不規則な刃部をもつ削器状石器である。5396は2片が折断され、1個の刃部をもつ折断石器で、刃部には微細剥離痕を伴う。5397は尖頭石

器で、側縁から先端部に連続する刃部加工を施して尖頭形の刃部が作られる。石鐮の未完成品かもしれない。5398は折り面交差型の小型の彫器である。5399は打撃によって作られた1個の刃部をもつ抉入石器で、凸刃状の削器と複合する。5400は搔器で、縦長剥片の側縁から先端部に急傾斜の刃部が連続して作られる。基部付近にはつまみ状の浅い抉りをもつことから縦形石匙に含まれるものかもしれない。5401は非折り面尖頭型の彫器で、刃部側縁に微細剝離痕を伴う。5402は細部調整によって作られた1個の刃部をもつ抉入石器、5403は不規則な抉入部が連続する鋸歯縁状石器である。5404は非折り面交差型の彫器である。自然面を打面にもつ剥片に剝離を加え、剝面と自然面の交差部を刃部としたもので、刃部以外の2辺が折断されている。刃部と刃部側縁に刃こぼれ状の微細剝離痕がみられる。5406は2個1対の刃部をもつピエス・エスキューで、両極に奥行き浅い剝離面が伴う。5407は細部加工で作られた1個の刃部をもつ抉入石器である。5405・5408・5409は縦長剥片の外湾する1側縁に使用痕がみられる。

遺構の時期 床面直上出土遺物や炉の形態などからみて、大木10式期に位置づけられる。

SV-3 住居址 (第265図5410-5419, 写真図版46)

土器 (5410-5418) 5410は炉埋設土器である。体部中央が膨らむ粗製深鉢形土器で、1条の沈線で区画された無文の口縁部をもつ。縦回転の単節斜縄文を地文とする。5411・5413-5415は沈線区画の無文帯が曲折文を展開するものである。5411は間隔の狭い無文帯がD字文を描く鉢形土器と思われる。以上は大木10式に相当する。

5412には太い調整沈線で区画された充填縄文帯が縦方向に規制されたC字文か Ω 形文を描く深鉢形土器である。5416は地文の単節斜縄文上に沈線で懸垂文が施される。5417・5418は縦回転の単節斜縄文を地文とする粗製の深鉢形土器で、5417は朱塗りの小型土器である。以上、5412は大木9式に相当し、5416は大木9式に併行する。

剥片石器 (5419) 剥片先端部に不規則な2次加工を施した剥片である。

遺構の時期 炉の形態や炉埋設土器からみて、大木10式期に位置づけられる。

SV-4 住居址 (第265図・第266図5420-5441, 写真図版46・108)

土器 (5420-5432) 5420・5421は波状の口縁部文様帯が隆起線で区画された深鉢形土器である。隆起線に沿う口縁部無文帯には連続竹管文が施され、口縁部内面の波頂部には鱗状隆帯が貼付される。5420の体部は、沈線で区画した無文帯で4回繰り返しのJ字文が描かれ、文様区画外には単節斜縄文が充填される。J字文末端には鱗状隆帯が貼付されている。5425・5426・5428は同一個体で、炉埋設土器である。5421-5424・5427と同様、沈線区画の無文帯が逆S字文などの曲折文を展開する深鉢形土器で、5424・5428には沈線上に連続刺突文を配した円形区画帯が伴う。地文は、5424が縦回転の複節斜縄文、ほかは縦回転の単節斜縄文である。5431は口縁部無文帯に連続竹管文が施される。以上は大木10式に相当する。

5429は沈線で㊦形文を描き、文様内に単節斜縄文を充填する深鉢形土器で、無文帯は入念に研磨されている。5430は幅の広い口縁部をもつ広口壺形土器である。頸部には連続刺突文を伴う1条の沈線が通り、口縁部には中央に連続刺突文を配した三重の㊦形文が施される。5432は縦回転の単節斜縄文を地文とする小型の粗製土器である。以上、3429は大木9式に相当し、5430は大木9式に併行する。

剥片石器 (5433—5437) 5433は縦形石匙で、内湾する1側縁に奥行き浅い刃部が作られる。5434は非折り面尖頭型の形器で、刃部には磨耗による光沢がみられる。3435・5436は石錐である。3435は小剥片の鋭角部に細部加工を施した短い刃部をもち、5436は剥片尖頭部に2次加工を施した狭長な刃部をもつ。3537は右側縁に使用痕をもつ剥片である。

石斧 (5438) 凝灰質粘板岩で作られた磨製石斧である。刃部は両凸の偏刃である。基部には敲打痕がみられ、剥落が著しい。基端部を折損する。

礫石器 (5439—5441) 3439は複雑石安山岩の扁球形礫を素材とする凹石である。表面2、左側面1、裏面1の計5個の凹みをもつ。5440はプロピライトの球形自然礫である。一応石彈としての機能を推定した。5441は扁楕球形礫の磨石で、表裏2面に擦痕がみられる。

遺構の時期 炉の埋設土器や埋土内出土土器からみて、大木10式期に位置づけられる。

SV—5b住居址 (第266図5442, 写真図版46)

土器 (5442) 床面出土の浅鉢形土器である。沈線で区画した充填縄文帯が横e字文、S字文、横S字文などの複合文様を横方向に展開し、同じ文様単位の繰り返しとはならない。地文は単節斜縄文である。大木10式の初めに相当する。

遺構の時期 床面出土土器からみて、大木10式期の初期に位置づけられる。

SV—5a住居址 (第266図5443—5473, 写真図版46・108・134)

土器 (5443—5468) 5443は炉埋設土器である。沈線で区画した無文帯が4回繰り返しの逆S字文を描く深鉢形土器で、文様区画外には縦回転の単節斜縄文が充填される。5444は櫛目状沈線文が施された小型鉢形土器である。5445は無文の口縁波頂部で、内面に臙状隆帯が貼付される。5446は刺突文を配した2条の平行沈線区画帯が、内側の楕円文を囲んで曲折文(S字状文?)を描く深鉢形土器である。

5447—5460は沈線で区画した無文帯がJ字文、逆S字文などの曲折文を展開するもので、5448・5456には刺突文充填の円形区画帯、5460には波状の口縁部上端に連続竹管文が伴う。地文が分かるものでは5447—5449が燃素文、ほかは縦回転の単節斜縄文である。5461は沈線で㊦形文を描き、文様内に単節斜縄文を充填する深鉢形土器である。5462・5465・5466は単節斜縄文を地文とする粗製土器の口縁部で、5465は波状を呈する。5463・5467は燃素文、5464は単節斜縄文を地文とする体部片である。

5443・5445・5447—5460は大木10式に相当する。5446は大木10式でも初期に、5461は大木9式に比定される。5444は器形や作りからみて大木9式に含まれよう。

剥片石器 (5469—5473) 5469は上部を折損する削器で、横長剥片の1側縁に直線的な刃部が作られる。5470は2個1対の刃部をもつピエス・エスキューで、両極に階段状の剝離痕を伴う。5471・5472は1個の刃部をもつ抉入石器である。5471の刃部は打撃によって作られ、5472は細部加工で作られる。5473は先端部に2次加工を施した剥片である。

遺構の時期 炉埋設土器からみて、大木10式期に位置づけられる。

SV—6 住居址 (第267図・第268図5475—5490, 写真図版46)

土器 (5475—5488) 5475は床面から出土した。体部中央が膨らみ、口縁部が外反する小型深鉢形土器で、沈線で区画した楕円文が描かれる。2個の楕円文と1個の二重楕円文が対になっており、楕円文内には単節斜縄文、外周楕円文内には刺突文が充填される。5476は床面出土の小型鉢形土器で、無節斜縄文上に沈線で Ω 形文が描かれる。5479・5480は沈線で Ω 形文が楕円文を描き、文様内に単節斜縄文を充填するもので、5480の口縁波頂部には刺突文が施される。

5481・5482は口縁部文様帯が隆起線で区画される深鉢形土器で、隆起線に沿う口縁部無文帯には連続刺突文が施される。5482の体部には沈線区画無文帯で曲折文が描かれる。5478・5485—5488は沈線で区画した無文帯がJ字文・逆S字文などの文様を展開する深鉢形土器である。地文は5485・5488が縹糸文、5478が複節縄文、5486・5487が単節縄文を縦回転で施文する。5477・5483・5484は縦回転の単節斜縄文を地文とする粗製深鉢形土器である。

5475・5476・5479・5480は大木9式、5478・5481・5482・5485—5488は大木10式に相当する。

剥片石器 (5489・5490) 5489は非折り面尖頭型の彫器で、刃部には刃こぼれ状の微細剝離痕を伴う。5490の剥片には加工痕或使用痕がみられない。

遺構の時期 床面出土土器からみて、大木9式期に位置づけられる。

SV—7 住居址 (第268図—第272図5491—5585, 写真図版46・47・108・109・134・151)

土器 (5491—5567) 5497は床面出土の完形土器である。口縁部が緩やかに内湾する大型深鉢形土器で、隆起線で Ω 形状に区画した4個の波状突起をもつ。文様は沈線で楕円文と Ω 形文が描かれ、楕円文には刺突文、 Ω 形文には複節斜縄文が充填される。5495は三口土器である。沈線で区画した充填縄文帯で文様が構成され、表裏2面に描出法を違えた鑑形文が描かれる。無文帯は丁寧に研磨されている。双方とも大木9式に相当する。

5491・5492・5494・5496は縦回転の単節斜縄文、5493は複節斜縄文を地文とする深鉢形土器の体部下半である。5491—5493は小型のもので、地文上に沈線で懸垂文が描かれる。5494は沈線区画の Ω 形文を施し、文様内に地文が充填される。5495の底部外面には網代痕がみられる。5498は無文の短い口縁部をもつ浅鉢形土器で、体部上半は把手状の隆起線文で区画される。体

部文様は、調整隆沈線で渦巻状の円形文が描かれ、文様内には単節斜縄文が充填される。5505は口縁部文様帯が内外とも隆起線で区画されたものである。体部には沈線区画の無文帯で曲折文が描かれ、縦回転の単節斜縄文を地文とする。以上、5191—5193は大木9式に併行し、5194、5198は大木9式、5505は大木10式に相当する。

5499—5504・5508・5515・5518・5521・5522・5524は、沈線で楕円文や円形文を施し、文様内に単節縄文を縦回転で施文するものである。5499には頸部に連続刺突文を重ねた1条の太い沈線が巡り、5521には口縁部の文様間に丸棒状工具による円形押印文が施される。5507、5514、5523は楕円文と円形文が対になって文様に描く深鉢形土器で、5507はキャリパー形に内湾する口縁部をもつ。5507・5523は複節斜縄文、5521は単節斜縄文の縦回転施文である。以上はすべて大木9式に相当する。

5506・5509—5513・5516・5517・5519・5520は、沈線で区画した充填縄文帯が縦方向に規制された文様を展開するものである。5506はC字文と円形文、5509・5516・5517・5519はC字文か円形文、5511はゼンマイ状曲折文、5512は鑑形文が描かれる。文様内に充填される地文は、5509・5513・5520が複節斜縄文、ほかは単節斜縄文を縦回転で施文する。以上は、縦方向に規制された文様を展開されることから、大木9式に相当しよう。

5525・5527は幅の広い無文の口縁部をもつ広口壺形土器である。5525は頸部に2列の連続刺突文が巡り、体部にはゼンマイ状懸垂文が描かれる。ゼンマイ状懸垂文の渦巻中央には、丸棒状工具で施文された円形押印文が伴う。5527は頸部に連続刺突文列を配した2条の平行沈線が巡る。5525は縦回転の撚糸文、5527は単節斜縄文を地文とする。5526と5550は同一個体で、幅の広い無文の口縁部をもつ大型浅鉢形土器である。頸部はつば状の隆起線で区画され、隆起線に沿う口縁部無文帯には連続刺突文が施される。体部文様は、隆起線で何対かの円形文が貼付され、内部に沈線で楕円文が描かれる。残存する楕円文内には刺突文が充填されている。以上、5525・5527は大木9式に併行し、5526・5550は大木9式に相当する。

5528—5531・5534・5535・5539・5542は、沈線で区画された充填縄文帯が横方向に流れる文様を展開するものである。5528・5530・5539の口縁部は波状を呈し、横e字文かS字文が描かれる。5529・5531・5534・5535は同一個体と思われ、横S字文と円形文を組み合わせた文様が描かれる。5542は太い調整沈線で波頭文を描く壺形土器で、無文帯はやや高くなっている。地文はすべて単節斜縄文である。以上は大木10式の初めに相当しよう。

5532・5533・5537・5538・5540・5541・5543—5546は、沈線で区画した無文帯がJ字文、逆S字文などの文様を展開するものである。5532には沈線に沿う無文帯に連続刺突文が施され、5537には文様末端に鱗状隆帯が貼付される。5538・5544・5546は刺突文を充填した円形区画帯を伴う。5543は小型壺形土器である。地文が分かるものでは、5532・5540・5545・5546が複節斜縄

文、ほかには単節斜縄文が施される。以上は大木10式に相当する。

5547は頸部に微隆起線を巡らせた無文の浅鉢形土器で、口縁部は研磨されている。5536、5555は無文の口縁部片である。5548は櫛目状沈線文を施した小型鉢形土器で、5549・5556は単節斜縄文、5553は無節斜縄文を地文とする小型深鉢形土器である。5151・5152・5154・5157・5158・5163は粗製の深鉢形土器で、5551・5563は複節斜縄文、5552・5557・5558は単節斜縄文、5554は直前段反撚りの撚り戻し縄文を地文とする。5559・5561は櫛目状沈線文を施す体部片、5560・5562は小型土器の体部下半である。

5564は口縁部文様帯に綾絡文が施され、5565は体部に結東第1種羽状縄文が施される。5566は地文の無節斜縄文上に沈線で波頭文や山形文が描かれる。5567は口縁部上端と頸部に2条の平行沈線文が施された甕形土器である。以上、5564は縄文時代前期I群1類、5565はIII群に分けられ、5566は縄文時代後期初頭、5567は弥生時代初期に比定される。

剝片石器 (5568・5569・5571-5576) 5568は無茎円基の石鎌である。左右が非対称で、刃部先端を欠く。5569は横形石匙で、縦長剝片の1側縁を刃部とし、反対側縁につまみが作られる。5571は不整形円形剝片の1部に急傾斜の刃部加工を施した搔器状石器である。5572は非折り面尖頭型の彫器で、刃部背面側の稜線に櫛状の剝離痕がみられる。5573は1側縁から先端部に連続する刃部加工を施した削器状石器である。奥行きは浅い規則的な刃部をもつ。5574・5576は1側縁に使用痕をもつ剝片、5575は珪質凝灰質泥岩の石核である。

石斧 (5570・5577) 5570は硬質泥岩を素材とする打製石斧で、基部のみを残す折損品である。5577は珪質緑色細粒凝灰岩で作られた定角式の磨製石斧である。刃部側を折損する。

礫石器 (5578-5585) 5578・5582・5583は球形の自然礫である。用途や機能を類推する手がかりを欠くが石弾として分類した。5579・5580は楕円球形の自然礫を素材とした磨石で、器表面は滑らかになっている。5580には敲打痕がみられ、約半分を折損する。5581は有溝の砥石である。表面に2条、裏面に1条の規則的な溝状の擦痕がみられる。5584は扁平で長大な礫である。両面とも擦痕や敲打痕が認められないが、一応台石としての機能を推定した。5585は扁平な円形礫を素材とした石皿である。特別の成形は加えられておらず、片面が使用によって緩く凹んでいる。以上、礫石器の石質は複輝石安山岩である。

遺構の時期 床面や床面直上出土土器からみて大木9式期に位置づけられる。

SV-8 住居址 (第272図・第273図5614-5635, 写真図版47・109・110)

土器 (5614-5635) 5621は床面出土の粗製深鉢形土器である。体部下半に最大径をもち、口縁部に向かって内傾気味に立ちあがるもので、縦回転の単節斜縄文を地文とする。5622-5625・5629-5633は沈線で区画した無文帯が曲折文を展開する深鉢形土器である。5630は連結J字文を描くもので、文様連結部には刺突文充填の円形区画帯、文様末端部には鰭状隆帯を伴う。

5631の文様接触部や5632の沈線に沿う充填縄文帯には連続刺突文が施される。地文は、5622・5624・5629・5630が複節縄文、5631が燃糸文、ほかは単節縄文の縦回転施文である。以上、文様の分かるものはすべて大木10式に相当する。5621も器形や作りからみて同時期に含まれよう。

5614—5619は沈線で▽形文や楕円文を施文し、文様内に斜縄文を充填する深鉢形土器である。5614・5616の口縁部は波状を呈し、5616では大きく外反する。地文は5615・5618は複節縄文、ほかは単節縄文を縦回転で施文する。5620・5628は同一個体で、幅の広い無文の口縁部をもつ広口壺形土器である。頸部は細かな連続刺突文を配した2条の平行沈線で区画される。体部には単節斜縄文を充填した▽形文が描かれ、各▽形文間には丸棒状工具による大型円形押圧文が施される。5627は口縁部に刺突文を配列する深鉢形土器で、体部には太い沈線で楕円文か▽形文が描かれる。5626は無文の、5635は縦回転の単節斜縄文を施文する口縁部片である。5634は無文の器面に2条の平行沈線で唐草文的な入組状の曲線文が段を重ねて描かれる。以上、5614—5620・5627・5628は大木9式、5634は大洞BC式に併行する。

遺構の時期 床面や床面直上の出土土器からみて、大木10式期に位置づけられる。

TIII区

TIII-1 住居址 (第273図・第274図5637—5648)

土器 (5637—5644) 5637は単節斜縄文を地文とする小型土器の体部下半である。5638・5639は沈線で▽形文を施文し、文様内に単節斜縄文を充填する深鉢形土器である。5640・5641は沈線で楕円文か円形文を描くもので、5640は複節斜縄文、5641は単節斜縄文が充填される。5641の無文帯は入念に研磨されている。5643は単節縄文充填の沈線区画帯が縦方向に規制されたC字文か▽形文を展開するものである。5642は沈線区画の無文帯で文様が描かれる。5644は燃糸文を地文とする粗製土器である。以上、5638—5641・5643は大木9式、5642は大木10式に相当する。

剥片石器 (5645—5647) 5645は右側縁、5646は尖頭状の先端部、5647は左側縁に使用痕をもつ剥片である。

礫石器 (5648) プロピライトの隅丸長方形礫を素材とした磨石である。両端を除く全面に擦痕がみられ、光沢が著しい。

遺構の時期 床面や炉から出土した時期決定資料を欠くが、埋土内出土土器や住居址の形態などからみて、大木9式期に位置づけられよう。

TIII-2 住居址 (第274図5649—5670, 写真図版47)

土器 (5649—5669) 5649は縦回転の単節斜縄文を地文とする小型土器の体部下半である。5650—5652・5654—5663・5665・5667は沈線で区画した無文帯が横方向に流れる曲折文を展開するものである。5656・5657は同一個体で、D字文が描かれる。5656・5658—5660・5662には沈

線に沿う充填縄文帯に連続竹管文が施され、5659・5662には文様末端に鱗状隆帯が貼付される。5663は口縁部内面に隆起線が巡る。地文はすべて縦回転の単節斜縄文で、5650・5656・5657には綾絡文が伴う。5653は口縁部に刺突文が施される。5666は無文の口縁部で、波状を呈する。5664は捺糸文を地文とする体部片、5668・5669は縦回転の単節斜縄文を地文とする粗製深鉢形土器の口縁部片である。以上、文様の分かるものはすべて大木10式に相当する。

土製品 (5670) 土器片を再利用した円盤状土製品である。全周が研磨されている。

遺構の時期 埋土内出土土器や炉の形態などからみて、大木10式期に位置づけられよう。

TIV区

TIV-1 住居址 (第274図—第276図5675—5701, 写真図版47・110)

土器(5675—5688) 5678は床面出土の小型壺形土器で、縦回転の単節斜縄文を地文とする。5681は隆起線区画をもつ浅鉢形土器である。隆起線区画の凹形帯に、調整隆沈線で楕円文(渦巻文が含まれる)や凹形文が描かれ、文様内には単節斜縄文が充填される。無文帯は入念に研磨されている。5682は隆沈線で描いた楕円形区画文で、5681と同一個体と思われる。5680は沈線で凹形文を施し、文様内に単節斜縄文を充填する深鉢形土器である。5676は沈線で区画した充填縄文帯が横に流れる曲折文を展開する小型土器である。以上、5680—5682は大木9式、5674は大木10式の初めに相当する。

5677—5679は沈線区画無文帯が文様を展開する波状口縁の深鉢形土器で、5677・5678は縦回転の複節斜縄文、5679は単節斜縄文を地文とする。5683・5684は同一個体で、沈線で区画した無文帯でJ字文が描かれる。文様は4回繰り返され、文様区画外には複節斜縄文が充填される。5685・5686は同一個体で、沈線区画無文帯で連結状の抱玉文が描かれる。抱玉文内には地文の単節斜縄文を重ねて刺突文が充填される。5687・5688は縦回転の単節斜縄文を地文とする粗製深鉢形土器である。以上、文様の分かるものはすべて大木10式に相当する。

剥片石器 (5694—5701) 5694はつまみに対して刃部が直交する横形石匙である。縦長剥片の1側縁を刃部とし、反対側縁につまみが作られる。5695・5696は削器である。5695は縦長剥片の1側縁に直線的な刃部加工が施され、5696は狭長な縦長剥片の両側縁に直刃状と凸刃状の2つの刃部が加工されている。5697は外湾する1側縁に不規則で奥行きが浅い刃部加工を施した削器状石器である。5698・5701は非折り面尖頭型の彫器で、刃部と刃部側縁に刃こぼれ状の微細剝離痕が伴う。5699は2個1対の刃部をもつピエス・エスキューである。下端は奥行きが深い階段状剝離面で覆われるが、上端は細かな剝落痕があるにすぎない。5700は狭長な三角形剥片の全面に細部加工を施した石錐である。

礫石器 (5689—5693) 5689は扁平な円形礫を素材とした小型の石皿である。他の石皿とは

形状が異なるが、表面が使用によって凹んでいることから石皿に含めた。5690・5691は扁球形の磨石で、表裏2面に擦痕がみられる。5692は表面に1個の凹みをもつ凹石で、側面は磨石として使用されている。5693は皿部の外周に高い縁を成形した石皿の折損品である。

遺構の時期 床面上からはミニチュア土器が1点出土したのみで、時期決定資料を欠くが、床面直上出土土器や住居址の形態などからみて、大木10式期に位置づけられる可能性が高い。

TIV-2 住居址 (第276図5712-5719)

土器 (5712-5717) 5712-5714は同一個体と思われる。幅の広い無文の口縁部をもつ広口壺形土器で、頸部は2列の連続刺突文で区画される。体部文様は不明であるが、縦回転の燃糸文を地文とする。5715は沈線で楕円文か円形文を施文する深鉢形土器で、文様内には刺突文や燃糸文が充填される。5716は沈線区画の無文帯をもつ沈線文系土器、5717は体部中央に数条の沈線が巡る鉢形土器である。以上、5712-5714は大木9式に併行し、5715は大木9式、5716は大木10式に相当する。5717は縄文時代晩期に比定されよう。

剥片石器 (5718・5719) 5718は石錐で、横長小剥片の鋭角部に狭短な刃部が作られる。刃部先端には磨耗痕がみられる。5719は縦長剥片の先端部に2次加工が施された剥片である。

遺構の時期 床面上からの伴出土器を欠くため、所属時期の特定は困難である。周囲の遺構のあり方からして、縄文時代中期後葉-末葉、大木9式-10式期に位置づけられよう。

TIV-3 住居址 (第276図・第277図5720-5742, 写真図版47・48・110)

土器 (5720-5738) 5720は床面出土の小型深鉢形土器である。沈線区画の充填縄文帯が横S字文(背景は無文帯の連続逆S字文)を描くもので、無文帯は研磨されている。5722は5720と同じ文様を展開する。5728は床面出土土器である。体部中央で膨らみ、口縁部に向かって直立気味に立ちあがる大型の粗製深鉢形土器で、縦回転(口縁部上端は横回転)の単節斜縄文を地文とする。5723・5724は同一個体で、炉の埋設土器である。沈線で区画した無文帯が連結逆S字文を描く深鉢形土器で、文様内円形区画部には連続刺突文、文様末端部には鱗状隆帯を伴う。地文は縦回転の単節斜縄文である。5725-5727は沈線区画の無文帯が文様を展開する沈線文系土器で、5725・5726が単節斜縄文、5727が複節斜縄文を地文とする。5729・5730は無文の口縁部で、5370の内面には鱗状隆帯を伴う。以上、文様の分かるものはすべて大木10式に相当する。5728も器形や作りからみて同時期に含まれよう。

5721は単節斜縄文を充填した沈線区画帯がU字文を描く有孔の浅鉢形土器である。肩部に隆帯状の段を成形し、体部上半にかけて細い円孔が連続的に穿たれる。5731-5734は縦回転の単節斜縄文(5734には綾絡文が伴う)を地文とする粗製深鉢形土器である。5735-5737は沈線で円形文か楕円文を描く深鉢形土器で、文様内には単節斜縄文が充填される。5738は口縁部文様帯に絡糸体疋痕文、頸部の微隆起帯と口唇端には連続刻み目文を施すもので、木目状燃糸文を地

文とする。以上、5721は大木10式の初め、5735—5737は大木9式に相当し、5738は縄文時代前期Ⅲ群2類に分けられる。

剥片石器 (5739・5740) 5739は削器で、1側縁から先端部に連続する2次加工を施して尖頭形の刃部が作られる。5740は1辺が折断され、2個の刃部をもつ折断石器である。双方の刃部には微細剝離痕を伴う。

礫石器 (5741・5742) 5741は複輝石安山岩、5742は流紋岩で作られた石皿である。双方とも皿部外周に低い縁が成形されている。5741には表面に足状の微隆起部が作られる。

遺構の時期 炉埋設土器や床面出土土器からみて、大木10式期に位置づけられる。

TIV—4 住居址 (第278図5742—5758, 写真図版48)

土器 (5743—5753) 5743は幅の広い無文の口縁部をもつ広口壺形土器で、頸部は1条の沈線で区画される。体部には地文の単節斜縄文上に沈線で凹形懸垂文が描かれ、頸部直下の凹形文間には連続竹管文が施される。5744は5743と同様の器形を呈するもので、地文の燃糸文上に懸垂文が描かれる。5745は太い調整沈線で区画された充填縄文帯が、3回繰り返してC字文を描く小型土器である。無文帯は研磨され、文様内には単節斜縄文が充填される。以上、5743・5744は大木9式併行の中の平皿式、5744は大木10式の初めに位置づけられる。

5746は口縁部が無文で、体部文様が沈線で描かれる小型土器である。5747—5752は沈線で楕円文か凹形文を施文し、文様内に単節斜縄文を充填する深鉢形土器である。5747はキャリバー形に内湾する波状の口縁部をもち、凹形文間には丸棒状工具による円形押圧文が施される。5748は凹形文を二重に施文するもので、外周する凹形文は隆起縁で描かれる。5753は外面に網状痕をもつ底部片である。以上、5747—5752は大木9式に相当する。

剥片石器 (5754—5758) 5754は縦形石匙である。縦長剥片の1側縁に奥行き浅い刃部が作られる。5755は剥片鋭角部を挟んで連続する刃部加工を施した尖頭形の削器である。5756は1辺が折断され、1個の刃部をもつ折断石器で、刃部には微細剝離痕がみられる。5757は横長剥片の先端部に不規則な刃部加工を施した削器状石器である。5758は2個1対の刃部をもつピエス・エスキューで、上端に奥行き深い階段状剝離痕を伴う。

遺構の時期 床面や炉から出土した時期決定資料を欠くが、埋土内出土土器からみて大木9式期に位置づけられよう。

TIV—5 住居址 (第278図5759—5762)

剥片石器 (5759—5762) 5759は無茎円基の石鏃である。狭長な刃部をもち、刃部側辺は外湾気味に張り出している。5760は先端尖頭部、5762は右側縁に使用痕をもつ剥片である。5761は1個の刃部をもつ抉入石器で、刃部は打撃によって作られる。

遺構の時期 出土土器がなく時期決定資料を欠く。大木9式期に属すTIV—4住居址を切っ

ていることや周囲の遺構のあり方からみれば、大木9式—10式期に位置づけられよう。炉の形態などを参考にしてさらに推測を進めるならば、大木9式期に含まれる可能性が高い。

TIV—6 住居址 (第278図5763—5781, 写真図版48)

土器 (5763—5776) 5763は体部が内湾気味に立ちあがり、頸部でややくびれる小型深鉢形土器である。体部には単節斜縄文を充填した凹形文が沈線で描かれる。5764は体部中央が膨らむ小型深鉢形土器である。粗い沈線で楕円文と凹形文の複合文様が繰り返して描かれ、文様内には不規則で粗い単節斜縄文が充填される。5766—5768・5770—5772は体部に沈線で凹形文や楕円文を描く深鉢形土器で、5767は口縁部がキャリパー形に内湾する。5768・5771は楕円文と凹形文を組み合わせた文様が描かれ、5768の楕円文内には刺突文が充填される。地文はすべて単節縄文を縦回転で施文する。5769は地文の単節斜縄文上に懸垂文が描かれる。以上、5769が大木9式に併行し、そのほかは大木9式に相当する。

5765は中空の口縁部突起で、連続刺突文が伴う。5773・5775は沈線区画の充填縄文帯、5774は沈線区画の無文帯が文様を展開する沈線文系土器である。5776は頸部に1条の沈線が巡り、波状の口縁部上端に連続刺突文が施される。以上、5773・5775は大木10式の初め、5765・5774・5776は大木10式に相当する。

剥片石器 (5777—5781) 5777は石錐である。剥片の2辺を折断して狭長な長方形の素材を作り出し、その一端に片面から2次加工を施して刃部が作られる。5778は硬質泥岩の浅核、5779は2次加工を施した剥片である。5780・5781は左側縁に使用痕がみられる。

遺構の時期 炉や床面からの伴出遺物を欠くが、埋土内出土土器や炉の形態からみて、大木9式期に位置づけられる。

TIV—7 住居址 (第279図5782—5790)

土器 (5782—5789) 5782・5783は同一個体で、口縁部が外反する小型深鉢形土器である。細い沈線で凹形文が描かれ、文様内には粗い単節斜縄文が部分的に施文されている。5784・5787は体部に沈線で楕円文か凹形文を描くもので、5784は複節斜縄文、5787は単節斜縄文が充填される。5785・5786は沈線で区画した無文帯が曲折文を展開する深鉢形土器で、縦回転の単節斜縄文を地文とする。5788は無節斜縄文を地文とする小型土器の口縁部片、5789は綾絡文を伴う単節斜縄文を地文とする深鉢形土器の体部片である。以上、5782—5784・5787は大木9式、5785・5786は大木10式に相当する。

石製品 (5790) 流紋岩の角柱礫を素材とした石棒の基部である。部分的に研磨されている。

遺構の時期 炉や床面からの伴出遺物を欠くが、大木9式期に属すTIV—6住居址を切り、同時期のTV—1住居址に切られる重複関係にあることから、大木9式期に位置づけられよう。

TV区

TV-1 住居址 (第279図・第280図5791—5812, 写真図版110・152)

土器 (5791—5815) 5791は幅の広い無文の口縁をもつ広口壺形土器の波状口縁部で、内外面とも研磨されている。5813は5791と同一個体と思われる。頸部に1列の連続刺突文が巡り、単節斜縄文を地文とする。5792は浅鉢形土器の無文の体部片である。5794—5798・5802は沈線で凹形文や楕円文を施文し、文様内に単節斜縄文を充填するもので、5794が肩部に段をもつ浅鉢形土器となるほかは深鉢形土器である。5799は地文の単節斜縄文上に2条1対のゼンマイ状態懸垂文が描かれ、懸垂文間の縄文は丁寧に磨消されている。5800は頸部に連続刺突文を配した2条の平行沈線を巡らすもので、体部には凹形文が描かれる。以上、5791・5813・5799は大木9式に併行し、5794—5798・5800・5802は大木9式に相当する。

5801・5803・5804は単節斜縄文を充填した沈線区画帯が縦方向に規制された文様を展開するもので、C字文か凹形文が描かれる。5801は小型土器で、5803・5804は大型の深鉢形土器である。5806は連続刺突文を充填した沈線区画帯で楕円文が描かれる。以上は縦方向に規制された文様を展開することから、大木9式に相当しよう。

5793・5808は単節斜縄文を充填した沈線区画帯が横方向に流れる文様を展開するもので、S字文が描かれる。5805・5807・5809・5810は沈線で区画した無文帯が曲折文を展開するもので、5805には沈線に沿う充填縄文帯に連続刺突文が施される。地文は5809が燃糸文、ほかは単節縄文を縦回転で施文する。5811は外面に網代痕をもつ底部片、5812は口縁波頂部の中空突起である。5814は口縁部が外反する粗製深鉢形土器で、縦回転の単節斜縄文を地文とする。以上、5793・5807は大木10式の初め、5805・5807・5809・5810・5812は大木10式に相当する。

剥片石器 (5815) 剥片先端の尖頭部に使用痕がみられる。

礫石器 (5816—5819) 5816は球形の自然礫である。一応、石弾としての機能を類推した。5817・5818は扁球形、5819は扁楕円球形の磨石である。5817は小型で、表裏2面とも擦ったことによる光沢が著しい。5818・5819の器表面は滑らかになっている。5818には敲打痕を伴う。

遺構の時期 床面や炉から出土した時期決定資料を欠くが、埋土下部から出土した5797・5803などの土器からみて、大木9式期に位置づけられよう。(佐々木 勝)

2. ビット

検出されたビットは347基である。ビットの形態についての名称は、フラスコ形ビット・ピーカー形ビットのほか、皿形ビット・長方形ビット・ビットの5種類を使用した。前2者が数量的には卓越している。

347基のうち、遺物が出土したのは172基で、そのほぼ全部について代表例を図示し、記載した。しかし、出土遺物の数量は、IⅦ-54フラスコ形ピットのように一括土器群を主体に約60kgの遺物をもつものから、GVI-51フラスコ形ピットなどのように石器1点だけの出土しかないものまで、差が著しい。したがって、掲載遺物の数もそれに応じてバラツキがある。

この項では掲載遺物について主に記載する。出土遺物から所属時期をある程度推定できるピットについては、住居址との重複関係や占地なども考慮して、その時期を記載した。また出土遺物がなくても、重複関係によっておおまかな時期を推定できるピットもあるが、遺構編に記載された重複関係から推定できる時期以上には限定できないため、割愛した。

DV区

DV-52フラスコ形ピット (第281図5822-5833)

土器 (5822-5831) 地文や織維の有無などからみて、すべて縄文時代前期の土器である。網目状燃糸文を地文にする5826・5829、単節斜縄文を地文にした5822・5823はI群2類の土器である。5825・5831は条の間隔が広い斜位～竪位の燃糸文が地文であり、I群に含まれる。5824・5830・5828は単節斜縄文が施文されている。

土製品 (5832) 不整形の円盤状土製品で、周縁部は研磨されている。

石器 (5833) 両側縁を刃部とした使用痕のある剝片である。

遺構の時期 埋土から出土した土器からみて、縄文時代前期、土器分類群でいえば前期I群の時期に位置づけられるであろう。

EIII区

EIII-51フラスコ形ピット (第281図5834-5847)

土器 (5834-5837) 5834・5835は底部を含む体部下半が残存する。いずれも底部外縁が張り出し、体部は外傾している。体部は、5834が単節斜縄文を地文にし、5835はケズリの痕跡を残して無文であり、2点とも内面はみがかれている。縄文時代後期以降のものである。5836・5837は磨耗が著しく、施文原体は不明である。胎土には織維を含まない。

石器 (5838-5847) 5839は凸刃削器である。5843は折断石器で、2面の折り面にはきまされた刃部には2次加工を施す。5841は非折り面型尖頭形の彫器で、右側縁と先端部の交差部に微細な剝離痕が認められる。5847は先端部に近い部分に2個の刃部が作られた抉入石器である。5846は細かな2次加工痕を尖頭部にもつ尖頭石器である。5840・5842・5844・5845は使用痕のある剝片である。5842は細かな剝離痕が左側縁の突出部先端にみられる。5845は小さく細長い槌状の剝離痕が右側縁と先端部の交差部にあり、彫器的な機能をもつものかもしれない。

5838は直径4.8cm±の球形の礫であるが、加工痕や使用痕はみられない。形状や大きさからは石弾としての用途も考えられるが、確実なことは分らない。

EV区

EV-53フラスコ形ビット (第281図5848・5849)

土器 (5848・5849) 磨耗の著しい小破片のため、施文原体は分らない。5848は胎土に繊維を多く含み、縄文時代前期の土器である

EV-54フラスコ形ビット (第281図5850)

石器 (5850) 無基平基の石鏃で、先端部をわずかに失っている。

EV-58フラスコ形ビット (第282図5851-5853, 写真図版110)

土器 (5851-5853) 3点は同一個体の破片である。5852・5853は口縁部から肩部を含む部分である。口縁部はわずかに内傾し、肩部は膨らみをもつ。幅の広い口縁部は、肩部から立ち上がる2個1対の小渦巻文と、逆に口唇部から下がる小渦巻文が沈線によって描かれる以外は無文である。体部地文は単節斜縄文である。第1図1などと類似の土器で、縄文時代後期初頭に位置づけられるものかもしれない。

EV-60長方形ビット (第282図5856-5860)

土器 (5856-5860) いずれも縄文時代前期の土器である。5857は指頭状押痕を伴った幅の広い隆帯2条が文様帯を区画し、幅の狭い口縁部には横位の綾絡文が施文される。5859は頸部にめぐる隆帯の上に斜位の刻みが加えられる。口縁部には横位の綾絡文が施文される。2点は胎土に繊維を含み、I群1類に分類できる。5858は太い撚糸文が地文で、条の間隔は広い。胎土には少量の繊維を含み、I群の土器である。5856は結束第1種羽状縄文が体部地文で、II群-IV群に含まれる。5860は施文原体が不明である。

EV-61皿形ビット (第282図5854, 写真図版49)

土器 (5854) 接合復元ができたほぼ完形の高坏で、高さが23.9cm、口径が30.4cmである。坏部は6単位の波状口縁になり、外面の文様は変形工字文と斜位のLR、内面の口唇部の下には1条の沈線がめぐる。台部は、平行沈線とその間を埋める波状文により文様が構成される。内外面とも、赤色顔料の付着がわずかに認められる。東北地方の弥生時代初頭の土器であり、須藤(1983)は第Ib期に位置づけている。

遺構の時期 倒立した状態で底面から出土した5854がこのビットの時期を示している。

EV-64ビーカー形ビット (第282図5855, 写真図版48)

土器 (5855) 体部半ばが膨らみ、両端にむかってせばまってゆく器形で、底部はわずかに掲げ底様になる。頸部にめぐる沈線を起点として、波頭状ほかの曲線的な沈線文が体部上半に

展開する以外は無文である。文様は4単位の構成である。縄文時代末葉大木10式に相当する。

遺構の時期 埋土から倒立した状態で出土した5855や占地などからみて、縄文時代中期末葉大木10式期に位置づけられるであろう。

FII区

FII-53フラスコ形ピット (第283図5861-5867, 写真版152)

土器 (5861-5863) いずれも縄文時代前期の土器である。太めの単節斜縄文が施文され、胎土には繊維を含む。

石器 (5864-5867) 5864・5867は半円状扁平打製石器である。5867はI-A₂型で、下端に浅い抉入部をもつ。5864はII-A₂型である。ともに右側縁が背部で、一部は打ち欠かれて平坦である。また、刃部は左側縁に磨耗痕が著しい。

5865は磨石である。断面が三角形のやや細長い礫が素材で、長軸方向の稜線部のひとつが使用面である。5866は折損した凹石で、表面に浅いくぼみが1個ある。

FIII区

FIII-51フラスコ形ピット (第283図5860・5861)

土器 (5868) 研磨された無文土器の体部破片である。縄文時代後期以降のものである。

石器 (5869・5870) 5870はつまみ部の対辺を折損した横形石匙である。5869は折損した凹石で、浅い1個のくぼみがみられる。

FIII-52フラスコ形ピット (第283図5871・5872)

土器 (5871・5872) 5871は底部の一部を含み、底部は外縁が張り出している。5872は複節斜縄文が体部地文である。2点は胎土に繊維を含む。5871は縄文時代前期I群の土器である。

FIII-53フラスコ形ピット (第283図5873-5876)

土器 (5874・5875) 5875は縄文時代後期前葉の土器、5874は晩期のものであろう。

石器 (5873・5876) 5873はやや扁平な亜円礫を素材にした磨石、5876は剥片である。

FIII-54フラスコ形ピット (第283図5877・5878, 写真図版152)

石器 (5877・5878) 5877は使用痕のある剥片である。5878はII-B型の半円状扁平打製石器である。左側縁は磨耗が著しく、平坦な面ができています。

FIII-55フラスコ形ピット (第283図・第284図5879-5890)

土器 (5879-5886) 5879-5883は縄文時代前期に含まれる。5879・5881は同一個体の破片で、口縁部が綾絡文帯になり、口唇端には刻みになるような押圧が加えられている。胎土には少量の繊維を含む。I群I類に分類できる。5883は1条の綾絡文が口縁部にめぐり、それを起

点とする縦位の綾絡文が2条認められる。地文は単節斜縄文で、胎土には繊維を含まない。5882は燃余文が施され、少量の繊維を含む。2点はI群2類に含まれる。5884・5885は磨消縄文をもつ後期前葉の小破片である。5886は、外面が落目状文、内面が叩き目文をもつ須恵器の破片である。

石器 (5887-5890) 5887は無茎平基の石鏃である。5888は基端が折り面である折断石器、5890は使用痕のある剥片である。5889は不規則な剝離痕が裏面の両側縁に生じている。

FIII-58ピーカー形ビット (第284図5891-5900, 写真図版49)

土器 (5891-5897) 5891・5893は上半を失った深鉢形土器である。5891は体部半ばに平行沈線がめぐり、幅のやや広い縄文帯を作りだす。その下位は無文である。5893も体部半ばに沈線がめぐるが、その上を欠くために詳細は不明である。下半には横位の単節斜縄文が施文される。ともに底部は揚げ底である。5894は注口土器で、注口部の付け根には瘤状の突起がつく。体部は研磨されて無文で、小さな底部は揚げ底である。5892は小型の深鉢形土器である。体部上半に最大径があり、口縁部は外反する。底部はわずかに揚げ底様になる。地文は斜位を主にした無節斜縄文で、体部下端は研磨されて無文である。5896は無節斜縄文、5897は単節斜縄文を地文にする体部破片である。5891・5893・5894は縄文時代後期中葉十腰内IV式などの時期に相当する。5892・5896・5897も同時期のものであろう。

石器 (5898-5900) 5900は打面と1側縁に階段状の剝離痕をもつ剥片である。5898は扁平な亜円礫が素材で、両側縁に潰痕状の剝離痕、片面および側縁の一部に磨面をもつ。敲石と磨石の複合石器である。5899は打損した凹石で、浅い不定形なくほみ2個が表面にみられる。また、その面と1側縁が作る稜線部は磨石として機能している。

遺構の時期 5891・5893などは埋土中部から下部にかけての層準から出土している。その点からみて、このビットは縄文時代後期中葉期に位置づけられるであろう。

FIII-60フラスコ形ビット (第284図5901)

土器 (5901) 単節斜縄文の上に平行沈線2条が引かれた体部小破片で、時期は分らない。

FIII-61ピーカー形ビット (第284図5902-5907, 写真図版152)

石器 (5902-5907) 5904は折断石器である。刃部になる1側縁を除いた3面が折り面である。5907は2個1対の刃部をもつピエス・エスキューであるが、刃部の剝離痕の奥行きは浅い。5906は折り面と古剝離面に挿まれた狭い部分に微細剝離痕がみられる。形態や剝離痕のあり方からみて、彫器的な機能をもったものであろう。5905は使用痕のある剥片である。

5902・5903は半円状扁平打製石器である。5902は抉入部が一端にあるI-B型で、左側縁には磨耗痕が生じている。5903は下端を除いた周縁を2次加工している。左側縁が主に磨耗しているほか、下端にも磨耗痕がみられ、II-B型とすることができる。

FIII-62フラスコ形ビット (第285図5908-5920)

土器 (5908-5914) 5908-5911・5913は単節斜縄文が施文された口縁部破片で、いずれも胎土に繊維を含む。縄文時代前期I群2類に分類できる。5912は波状口縁である。複合口縁の上には横位の単節斜縄文が施文され、その下は無文である。後期前葉の土器である。5914は無文の体部に平行沈線が横に引かれている。

石器 (5915-5920) 5915は無茎偏基の石鏃である。5917は右側縁を折断し、刃部になる先端部には微細剝離痕が生じている。5916は基端が折り面で、先端部には微細剝離痕が連続している。5919は尖頭形の先端部に両面から2次加工をした尖頭石器である。5920は加撃による扶入部が1側縁に連続的に作られた鋸歯縁石器、5918は細かな2次加工が施された石器の破損品である。

FIII-63フラスコ形ビット (第285図5921-5924, 写真図版152)

土器 (5921-5923) 5921・5922は頸部から体部にかけての破片である。5921は、横位の平行沈線にはさまれた隆帯の上には、体部とともに、無節斜線文が施文される。この部分では口縁部は無文である。5922は頸部に沈線がめぐり、口縁部は無文である。体部は単節斜縄文の上に沈線による文様が描かれる。5923は磨消縄文をもつ体部破片である。いずれも立石遺跡第III群に含まれるもので、縄文時代後期前葉に位置づけられる。

石器 (5924) 凹石である。直方体状の亜角礫で、大きく深い潰痕が表面に2個、裏面に1個みられる。

FIII-64フラスコ形ビット (第285図5925-5936, 写真図版50・110)

土器 (5925-5933・5935・5936) 5926は5個の山形突起を口縁部に伴った深鉢形土器である。底部はわずかに揚げ底様になる。5925は上半を失っている。底部はわずかに揚げ底になる。2点は全体が研磨されて、無文である。5926は山形突起からみて、縄文時代後期末葉十腰内V式に相当する。5925も同時期のものであろう。5927-5929は前期の土器である。5927は撚り戻し縄文を地文にする。5928・5929は同一個体の破片で、口縁部には横3列の綾格文帯があり、口唇端の一部には斜位の刺突が加えられる。3点は胎土に繊維を含み、5928・5929はI群1類、5927はI群2類に分類できる。5930-5932・5935は同一個体の体部破片で、無節斜縄文を施した上に沈線による曲線的な文様を描き、部分的には磨消している。後期初頭に位置づけられる。5933・5936は同一個体の体部破片で、磨消縄文をもつが詳しいことは分らない。中期末葉～後期初頭の時期に含まれる。

石器 (5934) 横長の剥片である。

遺構の時期 5925・5926は埋土上部から出土したもので、このビットとの共伴関係を考えることは難しい。重複する縄文時代前期前半期の住居址を切っているが、所属時期は不明であ

る。

FIV区

FV—52皿形ピット (第286図5938, 写真図版50)

土器 (5938) 口縁部および下半の多くを失っている。横位の単節斜縄文が施文されている。縄文時代後期～晩期の時期内に位置づけられるであろう。

FV—59皿形ピット (第285図5937, 写真図版50)

土器 (5937) 接合によってほぼ原形に復元できた壺形土器である。底部は丸底で、球形の体部と細長い口頸部をもつ。全体が研磨され、無文である。器形的には縄文時代後期後葉～末葉の壺形土器に類似している。

遺構の時期 深さ20cm±と浅いピットから出土したもので、5937はピットと共存することが考えられ、このピットは縄文時代後期後葉～末葉の時期に位置づけられることが推定される。

FV—61ビーカー形ピット (第286図5939—5942, 写真図版110)

土器 (5939—5942) 5939・5941・5942は同一個体の破片である。横位の単節斜縄文を施文したあと、口縁部に捻紐圧痕を横4列でめぐらしている。5940も類似の文様構成をもつ口縁部破片である。4点は胎土にわずかに繊維を含む。縄文時代前期1群1類に分類できる。

FV区

FV—51皿形ピット (第286図5943)

石器 (5943) 打面を除いた部分に、裏面からの2次加工を施した削器である。

FV—52皿形ピット (第286図5944, 写真図版50)

土器 (5944) 土師器の甕形土器の大型破片である。体部上部が膨らみ、口縁部は外反している。体部外面は察位の粗いヘラケズリ、内面はヘラナデの痕がみられる。一部にはいわゆる化粧塗りがされる。

FV—53皿形ピット (第286図5945—5947)

土器 (5945—5947) いずれも体部の小破片である。5946は単節斜縄文が地文で、胎土には繊維を多く含む縄文時代前期の土器である。5945は複節斜縄文、5947は捻糸文が地文で、胎土には繊維を含まない。

FV—60ビーカー形ピット (第286図5955—5958)

土器 (5955—5957) 5955は口縁部が無文で、頸部には沈線がめぐる。5956は磨消縄文をもつ体部破片である。2点は縄文時代中期末葉大木10式に相当するであろう。5977は小型の土器の体部破片で、櫛歯状沈線文を地文にする。

石器 (5958) 基部が残った小型の定角磨製石斧である。

FVI区

FVI—53ピーカー形ビット (第286図5948—5954, 写真図版110)

土器 (5948—5952) 5948は台付鉢形土器の体部下半から台部の一部を含む残存である。台部には対になる4個の小孔をもつものであろう。体部地文は横位の単節斜縄文、台部は無文である。縄文時代後期の時期に含まれるであろう。5949は大波状口縁である。複合口縁状に肥厚した上には、波状部にみられる円形凹文のほか、撻紐を不規則に押圧する。その下位はこの部分では無文で、小円孔1個が認められる。中期中葉円筒上層式Cに相当する。5950は粘土紐の貼り付けが体部にみられる中期中葉、5952は磨消縄文をもつ中期末葉大木10式の土器である。5951は無文の上に沈線の一部がみられるが、詳しいことは分らない。

石器 (5953・5954) 5954は左側縁から先端部にかけての部分を実部とした使用痕のある剥片、5953は打面を失っている剥片である。

GII区

GII—52フラスコ形ビット (第287図5959—5968, 写真図版50・51)

土器 (5959—5968) 5959—5961はいずれもほぼ原形を保っている。鉢形土器5959は口唇部に刻目が連続し、口縁部には2条の沈線がめぐる。体部地文は羽状縄文である。底部外面の縁には浅い沈線がめぐる。5960・5961は壺形土器である。5960は体部が直線的に外傾し、肩部が張り出している。口唇部には刻みが連続して加えられ、口縁部は無文である。肩部には横位の小突起1個がつく。体部地文は横位や斜位の単節斜縄文である。5961は口縁部が無文で、口唇部には1条、体部との境には2条の沈線がめぐる。口唇部には刻目の入った小突起7個が配され、その間は刻目が連続する。体部地文は横位の単節斜縄文である。3点は縄文時代晩期大洞C式に相当する。拓本土器5962・5964は同一個体の破片で、無文の口縁部は口唇部に5960と同様の刻みをもつ。

5967は口縁部破片で、単節斜縄文が内外面に施文されている。胎土には少量の繊維を含む。5968は網目状撻糸文を体部地文にする。繊維は含まれない。2点は前期I群2類に分類できる。5965は無節斜縄文の上に沈線による文様が描かれ、中期末葉大木10式に相当する。5963は頸部が無文で、体部地文は横位の単節斜縄文である。5966は細い単節斜縄文を地文にする。

遺構の時期 5959—5961の3個体は埋土下部から一括して出土したものである。ビットの所属はそれらの土器群に近い時期に求められるであろう。

GIII区

GIII-55フラスコ形ピット (第287図・第288図5970-5984)

土器 (5970-5975) 5970・5972とも破片であるが、浅鉢形ないしは塊形の器形をもつ。口縁部がやや内湾し、内外面はていねいに磨かれている。5971は研磨されて無文の高台部の部分である。3点は縄文時代後期のものと推定される。5973は綾絡文が口縁部に施文された前期I群1類の土器、5975・5976は胎土に繊維を含む体部破片である。5976は複節斜縄文が地文である。5974は無節斜縄文と無文帯がみられる体部破片である。

石器 (5977-5984) 5977は大型の剥片の右側縁から先端にかけての部分の部分が刃部になる割器状石器、6978は小型の剥片の尖頭部に2次加工を施して刃部とした石錐状の石器である。

5979-5984の6点は半円状扁平打製石器である。5981・5982はII-A₂型である。5981は右側縁から下端を含む部分、5982は右側縁の下端寄りの約1/2が背部になり、刃部は鋭利である。5979・5980・5983・5984はII-B型である。5983は両面、5980は裏面を粗割りして形状を整えたあと、2次加工によって刃部を作りだしている。5979・5984では奥行きが深い2次加工がほぼ全周にわたっておこなわれる。2点は刃部の一部に磨耗痕が生じている。

GIII-59フラスコ形ピット (第288図5985・5986, 写真図版51)

土器 (5985・5986) 5985は台付鉢形土器である。口唇部には刻目が連続する。1個の突起を伴うが、上半を失っている。文様帯は3条の沈線で区画され、横位の単節斜縄文の上に大腿骨文の変形文を描き、部分的に磨消している。台部は研磨されて無文である。内外面に煤が付着している。縄文時代晩期大洞C₂式に含まれる。5986は単節斜縄文が施文された口縁部破片で、胎土には繊維を含む。前期I群2類に分類できる。

遺構の時期 伏せた状態で底面直上から出土した5985からみて、縄文時代晩期大洞C₂式期に位置づけられるであろう。

GIII-60フラスコ形ピット (第289図5987-5990)

土器 (5987-5989) いずれも体部の小破片である。5987は異条斜縄文、5988は太い単節斜縄文を地文にする。胎土には繊維をやや多く含む。5989は頸部に横位の隆沈線、体部に磨消縄文をもつ縄文時代後期前葉の土器である。

石器 (5990) 2個1対の刃部をもつピエス・エスキューである。刃部の奥行きは深く、剝離面は互いに接している。

GIII-61ビーカー形ピット (第289図5991-5997)

土器 (5991-5995) 5991-5993は縄文時代前期の土器である。いずれも口縁部破片で、単節斜縄文を地文にする。5992は同一原体が口唇端にも回転施文される。5991は胎土に繊維を含

むが、他の2点は含まない。I群2類に分類できる。5994は小型の土器で、狭い口縁部は外反する。5995は、頸部が残った部分は無文で、体部には横位の単節斜縄文を施文する。

石器 (5996・5997) 5996は挟入石器で、右側縁にある自然の挟入部が刃部になる。5997は使用痕のある剥片で、先端部の一部に微細刺痕痕が生じている。

III-62ピーカー形ビット (第289図5998・5999)

土器 (5998) 底部の一部を含む体部下端の破片で、底部外縁が張り出している。体部は無文で、混入された繊維束の痕が著しい。縄文時代前期I群の土器である。

石器 (5999) 折損した半円状扁平打製石器である。残存部はすべて刃部で、左側縁は磨耗している。

III-63フラスコ形ビット (第289図6000・6001)

土器 (6000・6001) 6000は口唇端が上から押圧され、小波状になる。体部は無文で、多くの繊維を含む。縄文時代前期I群2類に分類できる。6001は単節斜縄文が地文で、繊維を含む。

III-65ピーカー形ビット (第289図6002-6004, 写真図版51)

土器 (6002-6004) 6002は上半を失っている。体部には太い横位の単節斜縄文を施文する。底部は一部が残るにしかすぎないが、外縁がやや張り出し、わずかに揚げ底様になる。外面の周辺部には沈線状の圧痕が3条並んで認められる。胎土にはやや多くの繊維を含む。縄文時代前期I群2類に分類できる。6003は複節斜縄文を地文にする体部破片、6004は施文原体が不明の体部破片で、ともに胎土には繊維を含まない。

GV区

GV-55フラスコ形ビット (第289図6005, 写真図版51)

土器 (6005) 台部の一部を欠くが、ほかにはほぼ原形を保っている。口縁部文様帯は2条の平行沈線で区画され、羊歯状文が文様を構成する。口唇部には2個1対の小突起が連続している。体部は下端を1条の沈線で区画し、その間に単節斜縄文を施文するが、その下位から台部にかけての部分は無文である。縄文時代晩期前葉大洞B-C式の土器である。

遺構の時期 6005は埋土上部から出土したもので、ビットとの共存関係は不明である。ほかに出土遺物はなく、所属時期は不明である。

GV-56フラスコ形ビット (第289図6006-6010, 写真図版51)

土器 (6006-6009) 6008は上半を失っている。底部はやや揚げ底様で、外縁が張り出している。体部地文は複節斜縄文である。胎土には繊維を多く含む。6006は口縁部に綾絡文をもつ。6007は横位の単節斜縄文が施文された口縁部破片で、口唇端には指頭状押圧痕がやや間隔をおいて施文される。6006・6007は胎土に繊維を含む。以上の3点は縄文時代前期I群の土器

で、6006は1類、6007は2類に分類できる。6009は縦位の単節斜縄文が施文された体部破片である。

剃片石器 (6010) 抉入石器である。刃部は左側縁にあり、奥行きは浅い。

GV-59フラスコ形ピット (第290図6011-6016, 写真図版51・110)

土器 (6011・6014-6016) 6011は皿形土器で、約1/4が残存している。丸底で、口縁部が半歯状文、底部が大腿骨文を文様とする。縄文時代晩期中葉大洞C₁式の土器である。6014は体部破片、6016は底部の一部を含む破片で、地文は網目状燃糸文である。6016は底部外縁がやや張り出す。6015は横位の単節斜縄文の地文のほかに、綾絡文が横3列に認められる。いずれも胎土に少量の繊維を含む。前期I群2類に分類できる。

石器 (6012) 半円状扁平打製石器で、II-A₂型である。表面は広い部分に粗割りに近い2次加工をし、裏面は背部を除く周縁に浅い2次加工をしている。背部は右側縁にあり、やや鈍い稜線を含む。

石製品 (6013) 石剣の破片である。表面には擦痕が著しい。石質は凝灰質粘板岩である。

GV-61フラスコ形ピット (第290図6017-6020)

土器 (6017-6019) いずれも体部の小破片である。胎土に繊維を含むのは6017・6018で、単節斜縄文が地文である。6019は磨消縄文をもつ。

石器 (6020) 微細な剥離痕が鋭い縁辺にみられる使用痕のある剃片である。

GV-63フラスコ形ピット (第290図6021-6025)

土器 (6021-6025) 6022・6023・6025は同一個体の破片である。太めの単節斜縄文を横位～斜位に施文する。胎土には少量の繊維を含む。縄文時代前期I群2類に分類できる。6021はやや内湾する口縁部破片である。口唇端は内面に傾斜している。口唇部には2条の燃紐圧痕がめぐり、斜行する細い隆起線に沿う両側にも燃紐を押圧する。中期前葉大木7b式に相当する。6024は縦位の燃糸文が地文である。

GV-64フラスコ形ピット (第291図6027, 写真図版52)

土器 (6027) 下半の一部を失っている変形土器である。体部は急傾斜で外傾し、体部上部に最大径がある。口縁部はやや外反する。口唇部には斜位の刻目が連続し、小波状になる。その下端および体部との境にはやや乱雑な1～2条、口唇部内面には1条の沈線がめぐり、口縁部無文帯には縦位の突起1個がつく。体部地文は横位の単節斜縄文である。縄文時代晩期中葉大洞C₁式に含まれるであろう。

遺構の時期 6027は埋土下部から出土した。ピットの所属時期は土器のそれに近いことが考えられる。

GV-66フラスコ形ピット (第290図6026, 写真図版52)

土器 (6026) 台付鉢形土器で、台部を失っている。口唇部には2個1対の小突起が連続的につく。2条の平行沈線で区画した口縁部文様帯にはくずれた羊歯状文の意匠が展開するほか、縦位につく小突起1個がある。その下位には大腿骨文を描き、下半とは3条の平行沈線で区画している。体部下半は横位の単節斜縄文が地文で、下部の平行沈線から台部にかけての部分は無文である。縄文時代晩期中葉大洞C₂式の土器である。

遺構の時期 このピットは前述したGV-64フラスコ形ピットと重複するが、新旧関係は不明である。6026は埋土中部から直立した状態で出土しており、ピットの所属時期は土器のそれに近い可能性がある。

GV-72ピット (第291図6033, 写真図版52)

土器 (6033) ほぼ原形に近い形に復元できた粗製の深鉢形土器である。地文は、口縁部が横位、それより下方が斜位を主とした単節斜縄文である。

遺構の時期 このピットはGV-64フラスコ形ピットの埋土を切って構築され、土器埋設遺構ではないかと推定されている。その重複関係からみて、6033は先の6027と同時期かそれよりも新しい時期に位置づけられる。そして、土器はピットに共伴するものである。

GVⅥ区

GV-51フラスコ形ピット (第291図6028)

石器 (6028) 使用痕のある小型の剝片である。

GV-54ビーカー形ピット (第291図6029, 写真図版152)

石器 (6029) 石皿で、ひとつの隅を含んだ大型の破片である。周縁部には高い縁が形作られている。石質は複輝石安山岩である。

GV-64フラスコ形ピット (第291図6031-6033)

土器 (6031-6033) いずれも体部破片である。6033は結束第1種羽状縄文を地文とする。縄文時代前期Ⅱ群-Ⅳ群に含まれる。6031・6032は縦位の単節斜縄文が施文された中期以降の土器である。

GV-70ビーカー形ピット (第291図・第292図6034-6043, 写真図版52・111)

土器 (6034-6042) 6034は鉢形土器の大型の破片である。口唇部は大小の突起がついて波状になり、口唇端には沈線がめぐる。口縁部文様帯は変形工字文、地文は横位の単節斜縄文である。内面は口縁部に1条の沈線がめぐる。縄文時代晩期中葉大洞C₂式の土器である。なお拓本6042・6043は同一個体の破片である。6035・6036は蓋形土器の破片である。6035は口唇部がやや角ばって、縁の部分に沈線がめぐるのに対し、6036はやや丸味をおびている。いずれも無文で、両面に赤色顔料が塗られている。6034と同時期のものかもしれない。

拓本土器6040は磨消縄文がみられる中期後葉～末葉の土器である。6038・6039は同一個体の破片である。口縁部は幅の広い複合口縁状になる。その上には細い横位の沈線2条が引かれ、その間をつなぐ弧状文がみられる。頸部も無文で、沈線が認められるが文様意匠は分からない。6042は同一個体の体部破片である。立石遺跡第Ⅲ群第Ⅳ類の土器に類例があり、後期前葉に位置づけられる。6037は鉢形土器の口縁部破片で、沈線で区画された口縁部は研磨されて無文である。後期後半期の時期に含まれるであろう。

GⅦ区

GⅦ-51フラスコ形ピット (第292図6044-6049, 写真図版111)

土器 (6044・6045・6047) 6045・6047は同一個体の破片である。皿形に近い器形になる。平行沈線間と曲線的に引かれた沈線内には単節斜縄文が充填されている。縄文時代後期中葉加曾利BⅡ式に併行するものであろう。6044は縦位の燃糸文をもつ体部破片で、中期末葉～後期初頭に含まれるであろう。

石器 (6046・6048) 6046は基部を失っている。奥行きが浅い2次加工が両側縁から先端部にかけて施された削器状石器である。6048は扁平な垂角縁が素材で、左側縁の傾斜面と裏面が作る稜線部に敲打痕が生じている敲石である。

石製品 (6049) 断面が不整な六角形をした石棒の破片である。ひとつの稜線部が研磨されている。石質は石英安山岩である。

遺構の時期 6045・6047は埋土上部から出土した。その点や重複関係にある縄文時代中期末葉大木10式期と推定される住居址を切っていることからみて、中期末葉から後期中葉の時期に位置づけられるであろう。

GⅦ-53フラスコ形ピット (第292図6050)

石器 (6050) 剥片の鋭い側縁に、微細な剥離痕が連続した使用痕のある剥片である。

GⅦ-56フラスコ形ピット (第292図6051, 写真図版134)

石器 (6051) 奥行きが深い規則的な2次加工による刃部をもつ凸刃削器である。

GⅦ-58フラスコ形ピット (第293図6052-6058)

石器 (6052-6056) 6052は折断石器で、先端部に折り面がある。6054は折り面と古剥離面の交差部を刃部とする彫器、6053・6055は使用痕のある剥片である。6056は凹石で、やや扁平な垂角縁の表面に2個の浅いくぼみがある。

石製品 (6057・6058) いずれも石棒である。6357は両端を折損している。表面はよく研磨され、断面は円形～楕円形になる。6358は一端が折損面である。断面は不整な五角形を示し、表面は2面に研磨面をもつ。石質は、2点とも石英安山岩である。

GⅦ-59フラスコ形ビット (第293図6059—6061)

土器 (6059—6061) 6059はやや幅広い隆帯が頸部にめぐる縄文時代前期Ⅱ群の土器である。6060・6061は磨消縄文をもつ中期後葉～末葉の破片である。

GⅦ-60フラスコ形ビット (第293図6062—6067, 写真図版111)

土器 (6062—6067) 6062は口縁部に撻紐を押圧した縄文時代前期Ⅲ群の土器である。6065は口縁部に結束第1種羽状縄文、その下位に結束第1種同撻りの回転圧痕をもつ。胎土には少量の繊維を含み、前期Ⅱ群あるいはⅢ群に含まれる。6063はこの部分では単節斜縄文がみられる口縁部の小破片で、胎土には少量の繊維を含む。6066は小波状口縁で、中期末葉大木10式に相当する。6069は口唇部に刻みが連続し、口縁部に平行沈線がめぐる晩期前半の鉢形土器である。6064は口縁部がわずかに外反し、斜位の撻糸文を地文にする。

GⅦ-61フラスコ形ビット (第293図6068—6070)

石器 (6068—6070) 6069は抉入石器で、先端部に2個の刃部が並ぶ。6068は、断面が三角形の先端部に2次加工痕をもつ剝片、6070は剝片である。

GⅦ-62フラスコ形ビット (第293図6071—6073)

土器 (6071—6073) いずれも縄文時代前期の土器である。6071は撻紐圧痕が口唇部にめぐり、その下には0段多条の原体と綾絡文を施文する。6072・6073は単節斜縄文が地文で、6073の口唇端の一部には斜位の撻紐圧痕がみられる。6071・6073は胎土に繊維をわずかに含むが、6072は含まない。Ⅰ群2類に分類できる。

GⅦ-68フラスコ形ビット (第294図6014—6017)

土器 (6014—6017) いずれも小破片である。6075は磨消縄文をもつ縄文時代中期後葉～末葉、6077は細い単節斜縄文が地文の後期～晩期の土器である。6074・6076は無文の口縁部破片で、詳細は不明である。

GⅦ-69フラスコ形ビット (第295図・第296図6078—6092, 写真図版52・53)

土器 (6078—6085) 6078はキャリパー形の土器である。口縁部の文様は隆沈線による波状文、体部上半の文様は、肩部から垂下する綾絡文が1/5周毎にあるほか、撻紐を平行線状に押圧している。地文は、口縁部が横位、体部が縦位の単節斜縄文である。なお、拓本6080は同一個体の破片である。6079は口縁部が直立気味になる。1/4周毎の突起とその間に配される4個の小突起を口唇部にもつ。地文を施文したあと、口縁部には沈線による同一意匠の文様を4回繰り返している。体部地文は縦位の単節斜縄文である。6083は、口唇部には向い合う位置にある2個の突起を伴うほか、波状隆起線がめぐる。先の突起の中間の位置2カ所では渦巻状になるほか、上には撻紐を直交するように押圧する。口縁部から体部にかけての文様帯は沈線と刺突文によって4分割するような構成になる。地文は縦位の単節斜縄文である。6084は4個の突起部

をすべて失っている。やや肥厚する口唇部には短かい粘土紐を斜めに貼りつける。そのほか地文である横位の複節斜縄文を施文したあと、細い隆起線を貼りつけて口縁部の文様を構成する。6085は上半を失っている。体部地文は縦位の単節斜縄文である。

拓本土器6081と6082は同一個体の破片である。波状口縁部には隆起線による文様をもち、6082では、蛇行垂下する隆起線の剝落痕が体部に残る。それぞれの所属時期は6078-6083・6085が縄文時代中期中葉大木8a式、6084が円筒上層式eである。

石器 (6086-6092) 6089は折断石器で、基端が折り面である。6090は2個1対、6091は4個2対の刃部をもつピエス・エスキューである。6087は彫器である。打面と折り面の交差部が刃部で、細長い小さな種状の剝離痕が1条生じている。6092は加撃による抉入部が左側縁に連続した鋸歯縁石器である。6086は使用痕のある剝片、6088は剝片である。

遺構の時期 6078・6079・6083・6084は接合復元ができ、よく原形をとどめている。出土状態の詳細は不明であるが、埋土上部から出土している。ピットの所属時期は縄文時代中期中葉大木8a式期あるいはそれに近い以前に求められるものかもしれない。

GVII-70フラスコ形ピット (第295図・第296図6093-6101, 写真図版54)

土器 (6093-6100) 6093は4個の低い突起を口唇部に伴う。口縁部は隆起線による4単位の曲線的な文様をもち、体部地文は複節斜縄文である。6094-6100は同一個体のものである。口唇部には縦位の刻みを伴った直方体の突起が1/4周毎につく。頸部にめぐる隆沈線によって文様帯を区画し、口縁部は沈線による4単位の波状文のほか、渦巻文によって文様が構成される。地文は、口縁部が横位、体部が縦位の複節斜縄文である。以上の土器は縄文時代中期中葉大木8a式に相当する。

石器 (6101) 小型の鋸歯縁石器である。形態は円形に近く、加撃による浅い抉入部が連続する。

遺構の時期 ほぼ完形品である6093は埋土最下部から倒立した状態で出土した。そのことからみて、縄文時代中期中葉大木8a式期に位置づけられる。

GVII-71フラスコ形ピット (第296図6102・6103)

土器 (6102・6103) 6102は単節斜縄文、6103は0段多条の原体の回転圧痕を地文とする体部破片である。胎土・焼成などからみて縄文時代中期のなかに含まれるものかもしれない。

GVII-72フラスコ形ピット (第296図6104-6112)

土器 (6104・6107-6112) 6104・6107は口縁部文様帯が撚紐圧痕で構成される。6104は頸部に刺突文がめぐる。縄文時代前期III群に分類できる。6109、6111とその同一個体破片6112は中期中葉大木9式に相当する。6111は縦位の楕円形文になり、6112ではその上に刺突文を伴う。6108は頸部に沈線を伴った無文の口縁部、6110は縦位の撚糸文が地文である。

石器 (6105・6106) 6105は2次加工による刃部を1側縁にもつ削器状石器、6106は使用痕のある剥片である。

HIII区

HIII-53皿形ビット (第296図6113)

石器 (6113) 磨石である。小型の亜円蹄の一端が使用面で、ゆるやかな凹面になる。

HIII-54皿形ビット (第297図6115-6118)

石器 (6115-6118) 6115は縦形石匙、6116は2次加工が両面に施された削器である。6117は基端が折り面で、1側縁を刃部としている。6118は縦長剥片の両端に刃部をもつピエス・エスキューである。

HIV区

HIV-51皿形ビット (第297図6119-6122)

土器 (6119・6121) 6119は縦位の単節斜縄文、6121は複節斜縄文と磨消縄文をもつ体部破片である。施文からみて、6121は縄文時代中期後葉～末葉のものであろう。

石器 (6120・6122) 6120は使用痕のある剥片である。6122はII-B型の半円状扁平打製石器である。2次加工が両面に施され、左側縁がわずかに磨耗している。

HV区

HV-52フラスコ形ビット (第297図6123-6132, 写真図版54・111)

土器 (6123-6127・6132) 6123は下半を失っている。間に燃紐圧痕をはさんだ横2列の刺突文が文様帯を区画し、口縁部には燃りの方向を異にした2本1組の燃紐を横線状に押圧している。体部地文は結束第1種羽状縄文で、整然としている。胎土には少量の繊維を含む。6125は波状口縁で、刺突文を伴った低い隆帯が文様帯を区画する。口縁部とともに口唇端にも燃紐が押圧されている。6132は低い波状口縁である。狭い口縁部には燃紐を平行横線状に押圧し、文様区画帯である幅の広い隆帯の上には横2列の爪形文を施文する。体部地文は結束第1種羽状縄文である。6125・6132は胎土に繊維をわずかに含む。6126は木目状燃糸文が体部地文で、胎土には少量の繊維を含む。以上は縄文時代前期の土器で、6123・6125・6132はIII群2類に分類でき、6126はIII群2類あるいはIV群の土器である。6131は複合口縁状の部分に横位の無節斜縄文を施文し、その下位は無文である。後期前葉の土器である。6124は複節斜縄文をもつ体部破片、6127は底部外面にササの葉の圧痕をもつ破片である。

石器 (6128-6130) 6129は左側縁から先端部が刃部になる削器、6130はやや小型の筧状石

器である。6128は奥行き深い2次加工が両面に施されている。

遺構の時期 6123は底面から出土した。このビッドは縄文時代前期末葉期、土器分類群でいえば前期Ⅲ群2類の時期に位置づけられる。

HV-53フラスコ形ビッド (第298図6133)

土器 (6133) 結束第1種羽状縄文をもつ体部破片である。胎土には少量の繊維を含む。縄文時代前期Ⅱ群-Ⅳ群の土器である。

HV-54フラスコ形ビッド (第298図6134-6139・6144-6147, 写真図版111)

土器 (6134-6139) いずれも縄文時代前期に位置づけられ、胎土には繊維を含んでいる。6135は口縁部破片で、単節斜縄文を地文にする。Ⅰ群2類に分類できる。6134・6139は口縁部文様帯を捻紐圧痕で構成したⅢ群、6137は平行沈線間に刺突文を充填したⅣ群の土器である。6138は結束第1種羽状縄文を体部地文にしたⅡ群-Ⅳ群、6136は木目状捻糸文を体部地文にしたⅢ群2類あるいはⅣ群の土器である。

石器 (6144-6147) 6144・6145は無茎凹基の石鏃である。6146・6147は鋭い側縁に微細刻離痕が生じている使用痕のある剥片である。

HVI-53フラスコ形ビッド (第298図6140-6143・6148・6149, 写真図版54)

土器 (6140-6143) いずれも縄文時代前期に位置づけられる。6140はほぼ円筒形の器形をもち、口縁部がわずかに外反する。底部はわずかに揚げ底縁になる。横3列の捻紐圧痕で区画された口縁部には横位の単節斜縄文、体部には結束第1種羽状縄文を施文する。胎土には少量の繊維を含み、Ⅱ群に分類できる。6141は結束第1種羽状縄文が施された口縁部破片である。6143は平行沈線が頸部にめぐり、その間は刻目になる。6142は網目状捻糸文を体部地文にする。3点はいずれも胎土に繊維を含み、6142はⅠ群2類、6141・6143はⅡ群あるいはⅢ群に含まれる。

石器 (6148・6149) 6148は無茎平基の石鏃で、全長5cmと細長い。6149は鋭い両側縁を刃部とした使用痕のある剥片である。

遺構の時期 埋土中部から出土した6140からみて、縄文時代前期後半期、土器分類群でいえば前期Ⅱ群の時期に近いものと推定される。

HVI-54ピーカー形ビッド (第298図6150・6151)

土器 (6150・6151) 2点は体部の小破片である。6150は斜位の単節斜縄文である。6151は単節斜縄文の上に細い沈線2条が引かれている。ともに繊維は含んでいない。

HVI-55ピーカー形ビッド (第298図6152)

土器 (6152) 縦位の捻糸文をもつ体部破片である。

HVI-56フラスコ形ビッド (第298図6153)

石器 (6153) 基端は折り面で、1側縁から先端部にかけての部分が刃部になる。

HVI-64フラスコ形ピット (第299図6154-6159, 写真図版111)

土器 (6154-6156・6158・6159) すべて縄文時代前期に位置づけられる。口縁部が残る6154・6156・6158・6159は燃紐圧痕が口縁部文様を構成するⅢ群の土器である。6154・6156は隆帯が文様帯を区画し、その上に、6154が刺突文、6156が横線状の燃紐圧痕を施文する。口縁部の文様は横線状のものと山形文を組み合せ、体部地文を知ることができる6154は結束第1種羽状縄文である。6159は横3列の燃紐圧痕とその間を充填する刺突文が文様帯を区画する。口縁部の文様は斜線状の直交するものである。体部地文は縦位の燃糸文である。以上の4点は胎土に繊維を含む。6155は木目状燃糸文を体部地文にする。胎土には繊維を含まない。Ⅲ群2類あるいはⅣ群の土器である。

石器 (6157) 両側縁を刃部にした使用痕のある刮片である。

遺構の時期 埋土中部からの出土土器からみて、縄文時代前期後半期、土器分類群でいえば前期Ⅲ群の時期に近いものであろう。

HVI-65フラスコ形ピット (第299図6160-6172, 写真図版111・134)

土器 (6160-6172) 6160は浅鉢形土器になるであろう。口唇部が肥厚し、口縁部には燃紐圧痕を施文し、頸部には低い隆帯がめぐる。胎土には少量の繊維を含み、縄文時代前期Ⅲ群に分類できる。6161・6165・6166は同一個体の破片である。6165は口唇部が外方へ屈曲し、その端には上に刻みを伴った小波状隆起線を貼りつける。口縁部の文様は細い隆起線と沈線による渦巻文によって構成される。6162は細い隆起線が頸部に沿い、それに沿った両側に燃紐を押圧している。6163・6169は体部に細い隆起線がみられ、6169では渦巻文になる。6168は山形口縁で、肥厚した口唇部の上には直交するように燃紐を押圧し、その下位には2条の沈線を引く。6164は口縁部に2cmの無文帯があり、その下には横位の単節斜縄文を施文する。6161ほか・6162・6163・6169は中期中葉大木8a式に相当するものであろう。

土製品 (6167) 楕円の形をした円盤状土製品で、2.0cm×2.5cmの大きさである。

石器 (6170-6172) 6171は左側縁にやや急傾斜の2次加工が施され、先端部を失っている刮器である。6172は、小さく奥行きが浅い2次加工が右側縁から先端部にかけて連続する刮器状石器である。6170は折損した半円状扁平打製石器である。右側縁が背部になる。

HVI-66フラスコ形ピット (第299図6173・6174)

土器 (6173・6174) いずれも体部破片で、6173は木目状燃糸文、6174は燃糸文が施文されている。2点は胎土に少量の繊維を含む。縄文時代前期のもので、6173はⅢ群2類あるいはⅣ群の土器である。

HVI-67フラスコ形ピット (第299図・第300図6175-6184, 写真図版111・134)

土器 (6175—6182) 6175・6176は縄文時代前期Ⅲ群の土器である。6176は刺突文を伴った低い隆帯が頸部にめぐる。6177は横2列の綾絡文を伴う。3点は胎土に繊維を含む。6179は単節斜縄文の上に、蛇行垂下する2条1組の隆起線によって円形文を作り出している。6180は楕円形文をもつ中期後葉大木9式の土器である。6181は大木9式あるいは大木10式で、磨消縄文をもつ。6182は頸部に高い隆帯がめぐる以外は無文、6178は横2列の綾絡文が施文されている。

石器 (6183・6184) 6183は、縦長剥片の基部を折断し、先端部に2次加工を施した削器である。6184は平刃・直刃の磨製石斧で、刃縁には磨耗痕がわずかに認められる。

HV—68フラスコ形ピット (第300図6185—6188, 写真図版111)

土器 (6185—6187) いずれも縄文時代前期の土器である。6186はⅢ群2類に分類できる。横2列の刺突文が文様帯を区画し、口縁部には燃りの方向を異にした2本1組の燃紐、体部には結束第1種羽状縄文を施文する。胎土には少量の繊維を含む。6185・6187はⅣ群の土器である。6185は低い波状口縁で、口縁部には平行する横線が引かれている。6187は波状口縁で、低い隆帯が文様帯を区画し、口縁部には小円形刺突文を密にする。胎土には繊維をわずかに含む。

石器 (6188) 剥片である。

HV—69フラスコ形ピット (第300図6192)

土器 (6192) 磨消縄文をもつ口縁部破片で、縄文時代中期後葉～末葉に含まれる。

HV—70フラスコ形ピット (第300図6189—6191, 写真図版155)

土器 (6189—6191) 6191は口縁部の大部分と底部を失っている。体部半ばが膨らみ、その上位はやや内湾する。口縁部は外反し、4単位の波状になるものであろう。口縁部文様帯は波状部の下にある円形貼付文と沈線文、頸部にある区画帯はそれぞれ横3列の平行沈線と半截竹管文によって構成される。体部地文は木目状燃糸文である。6189は同一個体の破片である。胎土には繊維を含まない。縄文時代前期Ⅳ群に分類できる。6190は口縁部に2条の平行沈線がめぐる以外は無文である。後期～晩期の土器である。

遺構の時期 埋土最下部から出土した6191からみて、縄文時代前期末葉期、土器分類群でいえば前期Ⅳ群の時期に位置づけられるであろう。

HV—71フラスコ形ピット (第300図6193—6195)

土器 (6193・6194) いずれも胎土に繊維を含む縄文時代前期の土器である。6193は縦位の燃糸文が地文である。6194は刺突文が施文された隆帯を頸部にもつ以外は不明である。

石器 (6195) 2次加工痕或使用痕をもたない剥片である。

HV—74フラスコ形ピット (第300図6196—6198)

土器 (6196・6197) いずれも縄文時代前期の土器である。6197は網目状燃糸文を地文にするⅠ群2類、6196は結束第1種羽状縄文を地文にするⅡ群—Ⅳ群のものである。

石器 (6198) 削器状石器で、右側縁に裏面から2次加工されている。

HVI-75フラスコ形ピット (第300図6199)

土器 (6199) 細い原体による単節斜縄文を地文にした縄文時代後期～晩期の破片である。

HVI-76フラスコ形ピット (第300図・第301図6200—6204)

土器 (6200—6204) 6200—6202は縄文時代前期の破片である。6200は単節斜縄文が施文された口縁部破片で、胎土には多くの繊維を含む。I群2類に分類できる。6201は口縁部が沈線とその間に施文された撚紐圧痕による文様をもち、文様帯を区画する隆帯の上にも撚紐を押圧している。胎土には繊維は含まれない。III群とIV群の識別形質を併せもつ。6202は単節斜縄文が地文で、胎土には繊維を多く含む。6203は口縁部に沈線による文様をもつ大木8a式の土器である。

石器 (6204) 先端部と茎部の一部を失った有茎石鏃である。

HVI-78フラスコ形ピット (第301図6205—6213)

土器 (6205—6210・6212) 6205は底部を含む体部下端が残っている。体部地文は単節斜縄文で、底部外面の周辺部にはスダレ状圧痕の一部が認められる。胎土には繊維を含む。6209は撚紐圧痕を口縁部に施文する。6207・6210は結束第1種羽状縄文を体部地文にする。3点は胎土に繊維を含む。以上は縄文時代前期の土器で、6209はIII群2類、6207・6210はII群—IV群の土器である。6212は小型の土器で、口縁部が外反する。沈線が頸部にめぐり、口縁部には刺突文を伴う。体部は磨消縄文とみられ、中期末葉大木10式の土器である。6206は口縁部に平行沈線が引かれ、6208は縦位の撚糸文を地文にする体部破片である。

土製品 (6211) ややいびつな円の形状になる円盤状土製品である。磨消縄文帯の部分を利用してのことからみて、中期後葉～後期初頭のものである。

石器 (6213) 微細剝離痕が先端部にみられる使用痕のある剝片である。

HVI-79フラスコ形ピット (第301図6214—6224, 写真図版111・112)

土器 (6214—6222) 6214は下半が残存した小型の土器である。底部はわずかに揚げ底になり、体部地文は単節斜縄文である。縄文時代後期～晩期のものである。6215は刺突文を伴う幅の広い隆帯が文様帯を区画する前期III群の土器である。6218・6219は同一個体の破片である。円孔をもつ大突起があるほか、横位の単節斜縄文を施文した上に隆起線による文様を展開する。6216は沈線が引かれた楕円形状の突起が口縁部につくほか、横位の隆起線が平行している。6217は肩部が強く張り出す。口縁部には円孔があり、その周囲には沈線がめぐり、そのほか、撚紐圧痕による渦巻文をもつ。体部には隆沈線が斜行している。6220は体部に細い隆起線を伴う。以上はいずれも中期中葉大木8a式に相当するであろう。6219・6221は晩期の土器で、同一個体の破片である。口唇部に刻目が連続し、内面には1条の沈線が引かれている。口縁部は無文で、

体部は単節斜縄文を施文した上に沈線による文様を描く。中葉大洞C₁式である。

石器 (6223・6224) 6223は先端部を折断し、鋭い1側縁を刃部に行っている。6224は定角磨製石斧で、刃部を失っている。

HVI-80フラスコ形ピット (第302図6225-6241, 写真図版111・112・134)

土器 (6225-6231) 6225は、口縁部下には横位2列、その下位には縦位の結束第1種羽状縄文を施文している。胎土には少量の繊維を含む。6226の口縁部は円形刺突文が密に施文され、頸部には斜位の刻みを加えられた隆帯がめぐる。体部地文は木目状燃糸文で、胎土には繊維を含まない。6227と6230は同一個体の破片である。体部は直立気味になり、口縁部は外反したあと直立する。口縁部の文様は楕円形の突起・沈線文・半截竹管文によって構成される。体部地文は木目状燃糸文で、胎土には繊維をわずかに含む。6226・6227は縄文時代前期IV群に分類できる。6225は前期II群の土器である。6228は口唇部を欠くが、楕円形文の間を刺突文で充填した中期後葉大木9式の土器である。6229は鉢形土器で、口唇部および口縁部の平行沈線間には刻目が連続する。体部地文は横位の単節斜縄文である。晩期大洞C₁式である。6231は頸部がやや張り出し、体部に沈線がみられる。

石器 (6232-6241) 6232は折損した凸刃削器である。6238は2次加工が側縁に施されている。とくに右側縁のそれは奥行きが深く規則的であるが、裏面にも不規則な剝離痕がみられる。削器に含まれるであろう。6234・6236は削器状石器で、6234は左側縁、6236は右側縁を2次加工している。6235は2個1対の刃部をもつピエス・エスキューである。6237は1側縁と先端部の交差部に急傾斜の2次加工が施されている。6233は両側縁に、6239は先端部に微細剝離痕が連続する使用痕のある剝片である。

6240はいく分円刃になる磨製石斧で、左右が非対称の形になる。6241は折損した半円状扁平打製石器で、この部分の周縁部はすべて刃部になる。左側縁には磨耗痕が認められる。

遺構の時期 埋土最下部から出土した6227・6230からみて、縄文時代前期末葉期、土器分類群でいえば前期IV群の時期に位置づけられる。

HVI-81ビーカー形ピット (第302図6242-6246)

土器 (6242-6246) 縄文時代前期の土器は6243・6244・6246である。6244はIII群に分類できる。口縁部には捻紐を斜線状に押し、刺突文を伴う隆帯が文様帯を区画する。6243は単節斜縄文、6246は複節斜縄文に横位の綾絡文を伴う体部破片である。6242は複節斜縄文が地文の口縁部、6245は口縁部が無文帯で、その下位は単節斜縄文である。

HVI-83フラスコ形ピット (第302図・第303図6247-6251)

土器 (6247-6249) いずれも縄文時代前期の土器である。6247は縦位の燃糸文、6249は木目状燃糸文を地文にする体部破片である。6248は口縁部に捻紐圧痕がみられ、体部地文は木目

状燃糸文と推定される。6248はⅢ群2類、6249はⅢ群2類あるいはⅣ群の土器である。

石器 (6250・6251) 6250は磨石である。ほぼ球形の礫で、使用面はわずかに平坦になる。6251は扁平な円礫で、器面は滑らかである。磨石の可能性はあるが、明瞭な使用痕はない。

HVI-84フラスコ形ピット (第303図6252・6253, 写真図版55)

土器 (6252・6253) 6253は大型の破片で、4単位の波状口縁と推定される。体部半ばには文様帯を区画する波状沈線がめぐる。上半には長楕円形区画帯が並び、縦位の単節斜縄文を充填する。そのうちの1個は撚りの方向を異にした原体による縦位の羽状縄文である。縄文時代中期後葉大木9式と末葉大木10式の両方の要素をもつ土器である。6252は磨耗した体部破片である。

HVI-85フラスコ形ピット (第303図6254—6261, 写真図版55・112)

土器 (6254—6256・6258・6259) 6254は器高が16cmとやや小型である。円筒形の器形をもち、底部は平底である。内外面とも無文で、内面はていねいに研磨されている。繊維は含まれない。6259は大型の破片である。文様帯は区画されず、結束第1種羽状縄文が全体に施文されている。胎土には少量の繊維を含む。6256は燃紐と結条体が口縁部に押圧され、横2列の刺突文が施文された隆帯が文様帯を区画する。6258は低い隆帯が文様帯を区画し、幅2cmと狭い口縁部には燃紐を平行横線状に押圧する。体部地文は結束第1種羽状縄文である。6255は木目状燃糸文をもつ体部破片である。以上の3点は胎土に繊維をわずかに含む。6256・6258は縄文時代前期のⅢ群2類、6255はⅢ群2類あるいはⅣ群の土器である。6259はⅡ群あるいはⅢ群の土器と近い関係にあるであろう。

土製品 (6257) 不整円形をした5cm×5.4cmの円盤状土製品である。中期後葉あるいは末葉の土器片を利用している。

石器 (6260・6261) 6260は折損した横形石匙である。6261は珪質細粒凝灰岩の残核である。

HVI-86フラスコ形ピット (第305図6266—6268, 写真図版56)

土器 (6266—6268) 6266は下端を失っているが、器高の高い細身の円筒形をしている。文様帯は横3列の燃紐圧痕とその間を埋める結条体圧痕によって区画される。口縁部文様帯は、その半ばに1条の燃紐圧痕をめぐらし、撚りの方向が異なる原体をその上下に横回転するため、羽状縄文になる。体部上半も口縁部と同様の施文をする。その下位は縦位の燃糸文である。胎土には繊維をやや多く含む。縄文時代前期Ⅱ群に分類できる。6267・6268は胎土に少量の繊維を含み、6267は単節斜縄文、6268は燃糸文が地文の前期の土器である。

遺構の時期 6266は埋土から出土しているが、出土層位は不明である。ピットとの関連がつかめないため、所属時期の詳細は不明である。

HVI-88フラスコ形ピット (第304図6262, 写真図版155)

土製品 (6262) 一端を失っているが、土版あるいは土偶の一種である。表面には斜位の低い沈線2条とそれに交差するように施文された刺突文、裏面には斜位の低い隆起線と条痕様のナデ痕がみられる。胎土には繊維を含まない。共伴する土器はなく、所属時期は不明である。

HVI-89フラスコ形ピット (第304図6263)

土器 (6263) 研磨されて無文の塊形土器で、縄文時代後期～晩期のものであろう。

HVI-90ピーカー形ピット (第304図6264・6265)

土器 (6264・6265) 6264aは大型の破片である。体部上部が膨らみ、その上位はやや内湾、口縁部は直立気味になる。口縁部は2cm±の幅で無文帯になり、その下位は斜位の単節斜縄文を施文する。胎土には繊維を含まない。6264bは同一個体の体部下端から底部にかけての部分である。6265は口縁部が無文で、その下位には複節斜縄文が施文される。これらは縄文時代中期以降のものとして推定できるが、時期の詳細は不明である。

HVI-91フラスコ形ピット (第305図6269-6283, 写真図版55・134)

土器 (6269-6277) 6272をのぞいては縄文時代前期の土器である。6269・6270は底部を含む体部下半～下端が残っている。6269は単節斜縄文、6272は縦位の撚糸文が地文である。2点は胎土に繊維を多く含む。6271は単節斜縄文が一部にみられる以外は無文、6274は施文原体が不明な口縁部破片で、ともに胎土には繊維を多く含む。6276は2条の撚紐圧痕が文様帯を区画し、幅4.7cmの口縁部および体部には横位の単節斜縄文を施文する。胎土には少量の繊維を含む。6273は撚紐圧痕にはさまれた低い隆帯が文様帯を区画し、体部には多軸絡糸帯を回転施文する。胎土には繊維をやや多く含む。6275は2条の低い隆帯が頸部にめぐる以外は不明、6277は複節斜縄文を施文にする体部破片で、ともに胎土に繊維を含む。以上のうち、6276はII群に分類でき、6273はIII群に含まれるものであろう。6272は頸部にめぐる沈線の上下に刺突文を施文した中期後葉大木9式の土器である。

石器 (6278-6283) 6278・6280・6281は有茎の石鏃で、6281は完形品である。6278の茎部付近にはタール状の付着物がわずかに残っている。6282は直刃削器、6279は使用痕のある剝片である。6283はややいびつな卵形であり、全体が磨石として使用されている。さらに一部には潰痕を伴い、敲石との複合石器になる。

HVII区

HVII-51フラスコ形ピット (第306図6286-6292)

土器 (6286-6292) 6286-6288・6290・6291は縄文時代中期後葉～末葉の土器である。そのうち、頸部に隆帯を伴う6287、磨消縄文の無文帯に刺突文を伴った6290は大木10式になる。6289は撚りの方向を異にした羽状縄文をもつ体部破片である。6292は底部の破片である。外面

の一部には単節斜縄文が施文され、内面には円棒状工具による刺突痕が主に周辺部に認められる。剝落の状態からみて、底部の作りでⅠ型としたものの核になる部分であろう。胎土には繊維を含まない。前期Ⅰ群2類に分類できる。

HVI—54フラスコ形ビット (第306図6293—6303)

土器 (6293—6299) 6293は口唇端に貼付文を伴うが、詳しいことは不明である。6294は半截竹管による沈線文をもつ体部破片である。6296は細い粘土紐の貼付文を伴う縄文時代中期中葉大木8b式、6295は中期後葉大木9式、6298は大木9式あるいは大木10式と推定される。6297・6299は口縁部が狭い無文帯になり、その下には単節斜縄文が施文される。他からみて中期のなかに含まれるであろう。

石器 (6300—6303) 6300は基部と先端部を折断した方形気味の折断石器で、刃部は1辺にある。6301は右側縁に刃部をもつ抉入石器、6303は使用痕のある剥片、6302は剥片である。

HVI—55フラスコ形ビット (第306図—第308図6304—6320、写真図版56・57・112)

土器 (6304—6317・6319・6320) 6304は台付鉢形土器である。口唇端は刻目が連続し、口唇部無文帯には小刺突文がめぐる。文様帯は沈線で区画された体部上半にある。やや変形的なX字状文を文様意匠とするほか、縦位につく小突起1個をもつ。体部地文は横位の単節斜縄文で、台部は無文である。縄文時代晩期大洞C₁式の土器である。6306は口縁部の多くの部分を失っている。この部分では、口縁部は外傾し、隆沈線による文様が展開する。地文は、口縁部が横位、体部が縦位の複節斜縄文である。体部下端は広く無文帯になる。6319はキャリパー形の土器で、口唇部には渦巻状の突起が1/4周毎につけられる。口縁部には隆沈線による山形文と小渦巻文を組み合わせた文様を4回繰り返している。頸部下端にめぐる沈線からは蛇行沈線文が突起の位置に対応して施文される。地文は口縁部・体部とも縦位の単節斜縄文であり、体部下端は無文帯として残る。6320は口縁部が外傾している。円孔を有する大突起が1/4周毎にあり、口縁部には隆沈線および沈線による曲線的な文様が展開する。体部との境には低い隆起線がめぐり、瘤状の小突起が1/4周毎にある。地文は口縁部・体部とも縦位の単節斜縄文である。6312は口縁部を含む上半の一部を失っている。体部地文は横位の単節斜縄文が主で、下半では斜位もみられる。6306・6319・6320は縄文時代中期中葉大木8a式の土器で、6312もそれらに共伴する。

拓本土器6307—6311・6313・6315・6317は前期の土器である。そのうち6307—6309はⅢ群2類に分類できる。6310・6317は木目状燃糸文をもつ体部破片で、Ⅲ群2類あるいはⅣ群に含まれる。6311は文様区画帯が絶条体圧痕と刺突文、体部地文が結束第1種羽状縄文である。Ⅱ群あるいはⅢ群に含まれる。6315は横2列の爪形文が頸部にめぐる。その上下の施文ははっきりしない。胎土には繊維をわずかに含む。6313は口唇端が深く押圧され、小波状を呈する。口縁

部には撚紐を縦位～斜位に押圧する。胎土には繊維をわずかに含む。I群2類の土器である。6314は口縁部に隆沈線がみられ、大木8a式に含まれる。6305は無文の口縁部破片で、小礫を多く含む。6316は体部破片で、斜行する細い沈線が交差している。

石器 (6318) 半円状扁平打製石器である。II-A₂型で、刃部は表面に、背部は裏面に2次加工している。刃部は一部に磨耗痕が認められる。

遺構の時期 6304は埋土上部から、6306・6312・6319・6320は埋土中部から下部にかけて出土した。6306ほかみて、縄文時代中期中葉大木8a式期に近い時期に位置づけられるであろう。

HVII-59フラスコ形ピット (第308図6321-6325)

土器 (6321-6323) 6323は口縁部に撚紐圧痕をもつ縄文時代前期III群の土器である。6321は無文の口縁部破片、6322は磨耗が著しく、沈線の曲線が体部にみられる以外は不明である。

石器 (6324・6325) 6324は右側縁に刃部をもつ直刃削器、6325は剥片である。

HVII-60ピーカー形ピット (第308図6326-6334)

土器 (6326-6332) 6326は横位の撚紐圧痕を縦位のそれで区画したなかに円形竹管文を施文する。縄文時代前期III群に分類できる。6332は縦位の隆起線をもつ体部破片で、中期中葉、6327-6330は中期後葉～末葉の土器である。6328は楕円形文をもち、6329は外反する波状口縁の頸部に刺突文を伴う。2点は大木9式である。6331は縦位の単節斜縄文を地文にする。

土製品 (6333) 直径4.3cmの円盤状土製品である。周縁は研磨されている。単節斜縄文が施文されているだけで、時期は不明である。

石器 (6334) 右側縁から先端部にかけての両面に、不規則な2次加工が施されている。

HVII-67フラスコ形ピット (第308図6335-6346)

土器 (6335-6345) 縄文時代前期の土器が多い。6335は撚紐圧痕が口縁部に施文されたIII群2類、6341は沈線による文様をもつIV群の土器で、6341は胎土に繊維を含まない。6338・6340は絡条体圧痕や刺突文が文様帯を区画するが、口縁部を失っている。2点は胎土に繊維を含み、II群あるいはIII群の土器である。6336・6339も胎土に繊維を含み、撚糸文が地文である。以上の前期の土器のほか、隆沈線による渦巻文ほかの文様意匠をもつ6344・6345、頸部に低い隆帯がめぐり、幅の広い口縁部・体部とも無文の6542とその同一個体破片6543がある。

石器 (6346) 半円状扁平打製石器で、折損している。右側縁は背部になり、上端から左側縁にかけての部分に2次加工によって作り出された刃部は鋭利である。

HVII-69フラスコ形ピット (第309図6347-6356)

土器 (6347-6354) ほとんどが縄文時代前期の土器である。6347は網目状撚糸文をもち、I群2類に分類できる。6350とその同一個体破片6353は横2列の爪形文が文様帯を区画し、口縁部に撚紐を押圧したIII群、6354は刺突文を伴う横2列の隆帯が文様帯を区画し、口縁部には

沈線、体部には撚糸文の一部がみられるIV群の土器である。6349は結束第1種羽状縄文、6351は多軸絡条体の回転撚痕が地文である。以上の土器は胎土に繊維を含む。横位の綾絡文が間隔をおいて横2列にみられる6352は胎土に繊維を含まないが、前期の土器である。6348は低い隆起線が体部にみられ、中期のものであろう。

石器 (6355・6366) 6355は縦形石匙、6366は削器が破損したものである。6366は両側縁が刃部で、両面加工されている。

HVI-71プラスコ形ピット (第309図・第310図6357-6374, 写真図版57・58・112・135・152)

土器 (6357-6368) 6357は器高13.3cmと小型である。肩部が強く張り出し、口縁部が屈曲する壺形土器に近い土器である。底部はやや揚げ底様になる。口縁部から肩部にかけては撚りの方向を異にした2本1組の撚紐を平行横線状に押し、体部には結束第1種羽状縄文を施文する。胎土には繊維を多く含む。6360・6361は下半を失い、類似の器形や文様構成をもつ。やや幅広い隆帯が文様帯を区画し、6360では撚紐撚痕が刻目状に連続する。口縁部文様は平行横線状の撚紐痕4条、体部地文は結束第1種羽状縄文で、6360が0段多条、6361は上半と下半とでは条の太さが異なる原体を使用している。胎土にはやや多くの繊維を含む。以上は縄文時代前期III群2類に分類できる。出土状況からみて3点は共伴関係にある。6358は底部を含む体部下半が残存している。底部は厚く、周縁部を高くした揚げ底である。体部地文は撚糸文で、胎土には繊維をわずかに含む。器形などからみて、前期1群2類に含まれる。6359はやや小型の高台部である。無文で、胎土に繊維を含まない。時期は不明である。

6365は大型の破片である。頸部の文様区画帯は、平行沈線の間を刺突文が充填している。口縁部文様帯は幅が2.5cmで、体部と同じ原体、結束第1種同撚りの単節斜縄文が施文される。胎土には少量の繊維を含む。前期II群に分類できる。

拓本土器6362・6363は前期III群の土器である。6368は体部破片で、結束第1種同撚りの単節斜縄文を縦位に回転している。胎土には多くの繊維を含む。

前期以外では、6364はキャリバー形の口縁部破片で、大木8a式、6366は磨消縄文をもつ中期末葉～後期初頭の土器である。6367は口縁部に幅広い無文帯をもち、その下位には単節斜縄文を施文する。

石器 (6369-6374) 6370は尖頭削器、6373は基部と左側縁を刃部にした削器状石器である。6374は裏面からの急傾斜の2次加工によって搔器状の刃部が左側縁に作られるが、不規則な剥離である。6372は尖頭部先端に小剥離痕が生じている。6371は両側縁に使用痕のある剥片である。

6369はII-B型の半円状扁平打製石器である。両面加工が施されているが、左側縁では剥離角が小さく、最大幅20mmの幅広い刃部になっている。

遺構の時期 底面直上部から一括して出土した6357・6360・6361からみて、縄文時代前期末葉期、土器分類群でいえば前期Ⅲ群2類の時期に位置づけられる。

HVI-72フラスコ形ピット (第310図6375・6376, 写真図版58)

土器 (6375・6376) 6376は、体部は円筒形であるが、幅の広い口縁部は外傾している。口縁部文様帯は、数条を1単位とした斜行沈線と、その下位から頸部にめぐる4条の平行沈線とで構成される。体部地文は結束第1種羽状縄文で、胎土には繊維を含まない。縄文時代前期IV群に分類できる。6375は折り返し口縁状に肥厚し、横位の単節斜縄文が施文された中期初頭大木7a式に相当する土器である。

HVI-73フラスコ形ピット (第311図6377)

石器 (6377) 半円状扁平打製石器で、折損している。奥行きが浅い2次加工が両面に施され、鋭い刃部が作り出されている。左側縁の一部に磨耗痕がみられる。

HVI-74フラスコ形ピット (第311図6378—6385, 写真図版135)

土器 (6378—6383) すべて縄文時代前期に位置づけられる。6378は捻紐圧痕が口縁部に施文され、Ⅲ群に分類できる。6379・6382は結束第1種羽状縄文、6380は木目状燃糸文を地文にする体部破片である。6381は、羽状縄文かどうかは不明であるが、上部には単節斜縄文がみられ、その下位には燃糸文が施文されている。6383は頸部に隆帯をもち、それに沿う爪形文が体部に施文されている。以上の土器は胎土に繊維を含む。6381はⅡ群、6379・6382はⅡ群—Ⅳ群、6380はⅢ群2類あるいはⅣ群の土器である。

石器 (6384・6385) 6384は、基部から左側縁にかけての部分と先端部に刃部をもつ削器である。6385は折り面交差型の影器で、折り面には1個の大きな剝離痕のほか、微細剝離痕が生じている。

HVI-77フラスコ形ピット (第312図6386—6402, 写真図版112)

土器 (6386—6392) 6387は捻紐圧痕3条が文様帯を区画し、口縁部に糜状燃糸文、体部に縦位の燃糸文を施文する。胎土には繊維を含む。縄文時代前期Ⅱ群に分類できる。6386と6391は同一個体の破片で、頸部には横2列の爪形状の刺突文がめぐる。口縁部は幅が広く、口唇寄りの一部にも施文がみられるが詳しくは分からないが、そのほかは無文である。中期後葉大木9式に相当する土器の可能性が。6392は無文の上に、6390は地文の上に沈線を引いた後期前葉の土器である。6388は単節斜縄文で、口唇部には2条の捻紐圧痕がみられる。6389は地文の上に口唇部から斜行する隆起線を貼りつけている。

石器 (6393・6494) 6394は左側縁に使用痕をもつ剥片、6393は剥片である。

HVI-78フラスコ形ピット (第311図・第312図6395—6404)

土器 (6395—6397) いずれも縄文時代前期の土器の体部破片である。6395は木目状燃糸文、

6396は捺糸文、6397は多軸絡条体の回転圧痕を地文にする。6397はII群あるいはIII群、6395はIII群2類あるいはIV群の土器である。

石器 (6398—6404) 6399は凸刃削器、6398・6402は奥行きが浅い小さな2次加工による刃部をもつ削器状石器である。6401は基端が折り面で、左側縁には2次加工によって刃部を作り出している。6400は横長剥片で、奥行きが深い大きな2次加工が裏面に施されているが、角度は小さく、不規則である。刃部は左側縁の弧状の部分にあり、寛状石器のような機能をもつものである。

6403・6404は半円状扁平打製石器で、折損している。6403は、残存部には背部を含まず、左側縁は磨耗している。6404は右側縁の大部分が背部である。刃部は奥行きが浅い2次加工が両面から施され、鋭利である。

HVI—79フラスコ形ピット (第312図6405—6407)

土器 (6405—6407) 6405は底部破片で、やや揚げ底様になる。6406は、口縁部が外反し、横位の単節斜縄文がみられる。6407は、撚りの方向を異にした2本1組の撚紐が頸部にみられ、体部地文は結束第1種羽状縄文である。3点は胎土に繊維を含む。6407は縄文時代前期III群の土器の可能性があり、ほかの2点も前期の土器であるが、詳細は不明である。

HVI—81フラスコ形ピット (第312図6408—6416, 写真図版112)

土器 (6408—6414) 6408—6410は撚紐圧痕を口縁部に施文する。いずれも平行横線状の施文であるが、6409はさらに鋸歯状圧痕を伴う。6410の体部地文は結束第1種羽状縄文である。6409は、同一個体の破片6414をみると単節斜縄文を地文にする。体部破片6411は結束第1種羽状縄文をもつ。6413は絡条体の回転圧痕とみられる。以上は、いずれも胎土に繊維を含む。6408—6410は縄文時代前期III群に分類でき、6411は前期II群—IV群の土器である。6412は磨消縄文をもつ体部破片で、中期後葉～末葉のものであろう。

石器 (6415・6416) 6415は使用痕のある剥片である。6416は半円状扁平打製石器である。横折れしていたものが接合した。両端に平坦面をもつII—A₃型で、刃部は左側縁の大部分と右側縁の一部に磨耗痕が認められる。

HVI—82フラスコ形ピット (第312図—第314図6417—6444, 写真図版58・59・112・113・135・152)

土器 (6417—6431・6438—6440) 6418は、最大径が体部半ばにあり、口縁部が外反する。幅4.5cmの口縁部文様帯は撚紐が平行横線状に施文され、体部地文は0段多条の原体による結束第1種羽状縄文である。胎土には繊維をわずかに含む。6419は下半を失っている。口縁部は低い4単位の波状口縁で、波状頂部には刻みの入った小突起がつく。幅2cm～2.5cmの口縁部文様帯は6418と同様の意匠であり、体部地文は横位の単節斜縄文である。胎土には繊維を含ま

ない。6417は上半を失っている。外面は器面が荒れて繊維痕が著しいが、内面はみがかれている。以上のうち、6418・6419は縄文時代前期Ⅲ群2類に分類できる。

拓本土器の多くも前期の土器である。6428と6438は同一個体の破片である。口縁部も含めた部分に横位の単節斜縄文を施文したあと、口唇部に2条、頸部に1条、その間に鋸歯状の撚紐圧痕が施文される。胎土には少量の繊維を含む。Ⅱ群とⅢ群の両方の識別形質をもつ土器である。6422・6424—6426・6429—6431はⅢ群に分類できる。口縁部文様帯への施文は撚紐圧痕による。6429は、3条の撚紐圧痕が頸部にめぐり、口縁部は縦線状の撚紐圧痕を区画にもちい、その間は斜線状の撚紐圧痕が著しい。体部には単節斜縄文のほか、3条1単位の横位の綾絡文を間隔をおいて施文する。6425は小突起が口唇端につき、6430は波状口縁で、波状頂部には1個の刻みが加えられる。体部地文を知ることができる6424・6425が結束第1種羽状縄文、6430・6431が横位の単節斜縄文である。以上の土器は胎土に繊維を含む。6422・6429は1類に細分できる。口縁部破片6420・6421は単節斜縄文が施文され、胎土には繊維を含む。6423は胎土に繊維を含むが施文原体は不明である。

以上が前期の土器である。6439は刺突文を伴った隆帯が文様帯を区画し、口縁部文様帯は半截竹管の内側を引いた鋸歯状文が施文され、体部は無節斜縄文のほか、縦位の綾絡文を伴う。中期初頭大木7a式に相当する。単節斜縄文が施文された6427や無文の上やや幅広い隆帯の一部がみられる6440は時期不明である。

石器 (6432—6437・6441—6444) 6437は左側縁を刃部にする削器状石器、6432は先端部を折断し、両側縁を刃部にした折断石器である。6434は2個1対の刃部をもつピエス・エスキーユである。下端の刃部は奥行きが深い、上端は平坦面で、潰痕状の剝離痕が表面に生じている。6436は先端部に刃部が作られた抉入石器、6433・6435は使用痕のある剥片である。

半円状扁平打製石器は3点があり、6441・6444はⅡ-A₂型、6443はⅡ-B型である。6441は裏面が研磨されている。6444は右側縁から下端の部分が背部になり、打ち欠きによってほぼ平坦な面を作る。3点は左側縁に磨耗痕がみられ、8mm—12mmの平坦面が形成されている。6442は磨石で、扁平な亜円礫の1側縁が使用されている。

遺構の時期 底面直上から出土した6418・6419からみて、縄文時代前期後半期、土器分類群でいえば前期Ⅲ群2類の時期に位置づけられる。

HVI—83フラスコ形ピット (第314図・第315図6445—6455)

土器 (6445・6446・6448・6451) 4点は縄文時代前期に位置づけられる。口縁部文様帯が撚紐圧痕によって構成される6445・6451はⅢ群に分類できる。曲線的な文様意匠をもつ6445は細分では1類になる。6448は刺突文を伴う2条の隆帯が文様帯を区画し、隆帯間には撚紐圧痕を横線状に施文する。Ⅱ群あるいはⅢ群の土器である。6446は横位の単節斜縄文が施文された

口縁部破片である。以上の土器は、いずれも胎土に繊維を含む。

石器 (6447・6449—6455) 6452は基部を失っているが、左側縁に表面からの急傾斜の2次加工が施され、搔器状の刃部が作り出される。6453は2個1対の刃部をもつピエス・エスキューである。刃部は、不規則な潰痕状の剝離を示す。

半円状扁平打製石器は5点が出土している。完形品の6455はII-A₃型、6449はII-B型である。6455は両端が背部になり、左側縁には磨耗痕が著しい。6449は素材の形状をそのまま利用し、左側縁にわずかに2次加工を施している。折損している3点6447・6450・6454は、残存部には背部を含まない。いずれも奥行きが深い2次加工が両面に施され、6454は左側縁、6450は両側縁が磨耗している。

HVII-85プラスコ形ピット (第315区6456—6477, 写真図版113・135・152)

土器 (6456—6468) すべて縄文時代前期の土器である。6456は浅鉢形土器である。器形は、上半がほぼ直立し、下半が急激にすぼまる。口縁部には低い隆起線2条がめぐる。体部は3条1組の綾絡文を縦位に施文する以外は無文である。胎土には多くの繊維を含む。口縁部の特徴やほかの出土土器からみて、III群2類ないしはIV群の土器に伴うものであろう。6466は同一個体の破片である。

6457・6465は同一個体の破片である。口縁部には幅2.5cmの結束第1種羽状縄文、その下位には縦位の燃糸文が施文される。胎土には少量の繊維を含む。II群に分類できる。6458・6459・6461・6464は横線状の燃紐圧痕を口縁部に施文し、6459では円形竹管文、6461・6464では燃紐圧痕を伴う低い隆帯が文様帯を区画する。いずれも、体部地文は結束第1種羽状縄文で、胎土には繊維を含む。なお、6460・6463・6468は6459と同一個体の破片である。以上の土器はIII群2類に分類できる。6462はIV群、6467は結束第1種羽状縄文をもつII群あるいはIII群の土器である。

石器 (6469—6477) 6472は基部を失っているが、両側縁に刃部をもつ削器、6473は左側縁に刃部をもつ直刃削器である。6476は小型の尖頭削器である。6475は尖頭部先端をわずかに失っている尖頭石器で、現存長は5.7cmである。6474は2個1対の刃部をもつピエス・エスキューである。上端の刃部には奥行きが深い剝離痕が生じている。6477は折り面と古剝離面にはさまれた狭い部分を刃部とする彫器で、刃部には微細な剝離痕が生じている。

6470は半円状扁平打製石器で、II-B型に分類できる。成形のための粗割りの段階で、刃縁は薄く整えられるため、刃部を作り出す2次加工は部分的におこなわれるにすぎない。6469は凹石である。扁平な垂円礫の両面に、大きく深い円形のくぼみが1個ずつある。6471は磨石で、扁平で細長い垂円礫の両面が使用面である。

遺構の時期 底面直上から出土した6456・6459からみて、縄文時代前期末葉、土器分類群で、

例えば前期III群2類あるいはIV群の時期に位置づけられる。

HVII—87ビット (第316図6478・6479)

土器 (6478・6479) 6479は縄文時代前期IV群、6478は磨消縄文をもつ中期末葉大木10式の土器である。

III区

III—51フラスコ形ビット (第316図6480—6483)

土器 (6480—6483) 6482は横位の綾絡文帯が一部にみられ、縄文時代前期I群1類の土器である。6481は網目状燃糸文が地文で、前期I群2類に分類できる。6483は単節斜縄文をもつ以外は不明であるが、前期I群の仲間である。以上の3点は胎土に繊維を含む。6480は単節斜縄文をもつ体部破片である。

III—52フラスコ形ビット (第316図6484—6495, 写真図版135)

土器 (6484—6491) すべて縄文時代前期の土器である。6484・6486・6487・6489は口縁部に綾絡文帯をもち、6485は、横位の単節斜縄文を施文したあと、横2列の撚紐瓦痕を口縁部にめぐらす。以上の土器は胎土に繊維を含み、I群1類に分類できる。6496は網目状燃糸文が地文で、I群2類に分類できる。6488は条の間隔が広い燃糸文が施文されたI群の土器である。6491は単節斜縄文と斜行する燃糸文とが接して施文された体部破片で、II群の土器である。6488・6491は胎土に繊維を含むが、6496は含まない。

石器 (6492—6495) 6492は竪形石匙であるが、折損している。6493は削器状石器で、打面を除いた部分に2次加工している。6495は4個2対の刃部をもつピース・エスキューであるが、左側縁は折損している。6494は使用痕のある剃片である。

遺構の時期 埋土からの出土遺物や占地からみて、縄文時代前期前半期、土器分類群でいえば前期I群の時期に位置づけられるであろう。

III—53フラスコ形ビット (第316図6496—6499)

土器 (6496—6499) すべて縄文時代前期の土器である。6496・6498・6499は単節斜縄文が施文された口縁部破片である。6497は口唇部がわずかに肥厚し、斜位の燃糸文を地文にする。いずれも胎土には多くの繊維を含む。I群2類に分類できる。

遺構の時期 土器片は埋土中部から出土した。それらの土器や占地からみて、縄文時代前期前半期、土器分類群でいえば前期I群の時期に位置づけられるであろう。

III—54ビット (第316図6504・6505)

土器 (6504・6505) 6505は低い波状口縁で、斜位の単節斜縄文が施文されている。6504は単節斜縄文が施文された体部破片である。2点は胎土に繊維を含む。6505は縄文時代前期I群に

分類できる。

遺構の時期 占地や埋土からの出土土器を参考にすれば、縄文時代前期前半期、土器分類群でいえば前期I群の時期に位置づけられるものと推定される。

IVI区

IVI-52フラスコ形ピット (第316図6500-6503)

土器 (6501-6503) 6501・6502は口縁部に捻紐を押圧した縄文時代前期III群2類の土器で、6501は横2列の爪形文が頸部にめぐる。6503は縦位の捻糸文が施文され、中期末葉～後期初頭に位置づけられるであろう。

石器 (6500) 基部を折損した尖頭削器で、刃部には規則的な2次加工が施されている。

IVI-53フラスコ形ピット (第316図6506-6508)

土器 (6506-6508) 6506は捻紐が平行横線状に施文された口縁部破片、6507は木目状捻糸文が施文された体部破片である。2点は胎土に繊維を含まない。6506は縄文時代前期III群2類、6507は前期III群2類あるいはIV群の土器である。6507は小型の浅鉢形土器である。口縁部は小波状になり、口唇部は肥厚する。その部分には横位渦巻文がみられ、中期中葉大木8b式に比定されるであろう。

IVI-54フラスコ形ピット (第317図6509-6518)

土器 (6509-6516) 6509は円孔を有する突起部である。6514-6516は縦位の単節斜縄文を施文した上に、低い隆起線による文様をもつ。以上の土器は縄文時代中期中葉大木8a式に相当する。6510・6512・6513は同一個体の破片である。口縁部は狭い幅で無文帯になり、その下位は単節斜縄文と縦位の綾絡文が施文される。6511は楕円状沈線文が施文された体部破片である。

石器 (6517・6518) 6517は基端が折り面で、左側縁に微細剝離痕が生じている。6518は使用痕のある剝片である。

IVI-55フラスコ形ピット (第317図6519・6520, 写真図版113)

土器 (6519) キャリバー形をした土器の口縁部破片である。口縁部文様帯は、小波状隆起線文が口唇部につくほか、隆沈線と沈線・刺突文で構成される。器形や文様構成からみて、縄文時代中期中葉大木8a式に相当するであろうが、刺突文が多用される点がやや逸脱している。

石器 (6520) 2個1対の刃部をもつピエス・エスキューである。下端からは表面にある稜線を切って細長い剝離痕が生じているのに対し、上端は平坦面で、裏面に潰痕状の剝離痕がみられるにすぎない。

IVI-56ピーカー形ピット (第317図6521-6524, 写真図版113)

土器 (6521-6524) 6521は口縁部を含む上半の一部が残存している。文様帯の区画は円形

竹管文によるが、その部分では隆帯状にわずかな高まりを示す。幅が1.5cmと狭い口縁部文様帯は絡条体と捻紐の側面圧痕が交互に平行横線状に施文される。体部地文は結束第1種羽状縄文で、胎土には多くの繊維を含む。6522は平行横線状の捻紐圧痕を口縁部に施文し、体部地文は木目状捺糸文である。胎土にはわずかの繊維を含む。2点は縄文時代前期Ⅲ群2類に分類できる。木目状捺糸文が体部地文である6523はⅢ群2類あるいはⅣ群の土器である。6524は口唇部が肥厚し、鋸歯状の細い隆起線を伴う。口縁部にも細い隆起線がみられ、その間は笥状工具による刺突文で充填されている。中期前葉円筒上層式cに相当する。

Ⅶ区

Ⅶ-52プラスコ形ピット (第317図-第323図6525-6540, 写真版59-61)

土器 (6525-6538・6541) 縄文時代中期中葉の土器が多く出土している。まず、地文以外の文様をもつ一群から記載してゆく。6526・6533は、外傾して立ち上がった体部が上半からは内湾に転じ、口縁部に達する平縁の深鉢形土器である。6526は2条の平行沈線で文様帯を区画し、口縁部には口唇部にめぐる1条の隆起線のほか、2条1組の波状沈線文を施文する。体部には小渦巻文を伴う曲線的な文様を沈線によって描く。地文は縦位の単節斜縄文が主体で、底部には網代痕を残す。6533は、隆起線による横位のS字状文を口唇部に4回繰り返し、それぞれの間は横2列の細長い凹線で区画する。体部上半には2条1組の隆起線がめぐる、幅の広いその間には小波状隆起線文を施文する。その下位は渦巻文を伴う懸垂文を主体にした6単位の隆起線文が文様を構成する。地文は横位の単節斜縄文である。6538は6526などに類似する器形をもつが、器高が低く、上半の膨らみが著しい。口唇部には横位のS字状隆起線文を4回繰り返し、それぞれの間は横2列の隆起線が連絡する。体部上位には3条1組の隆起線を横2列に施文し、その下位には渦巻文を伴う懸垂文を主体にした隆起線による文様が展開する。地文は横位の単節斜縄文である。6530は、上半が内湾するのではなく、直立気味になる点がこれまでのものとやや異なる。口縁部には横位の隆起線で連結されたS字状隆起線文が4回繰り返される。体部の文様は隆起線によるもので、上半は小渦巻文を伴う懸垂文を主体にした文様が横方向に連結し、下半は懸垂文により8区画されている。地文は縦位の単節斜縄文である。

6527はキャリパー形の深鉢形土器である。文様帯は口縁部に集約し、横位の小渦巻文ほか隆起線によって施文される。6529は4単位の波状口縁であるが、山形に高い2個が並び、それに向い合う2個は低いものとなっている。口縁部の文様はS字状渦巻文ほかの隆起線によって構成される。頸部には3条1組の沈線が横2列にめぐる、その間には小波状沈線文を施文する。体部には沈線による3条1組の懸垂文が3組みられる。6527・6529の地文は、口縁部が横位、体部が縦位の単節斜縄文である。

以上のほか、地文だけ、あるいはほぼ地文だけをもつ土器がある。6525・6537・6541の器形は6526などに類似する。6537は口唇部が肥厚し、その下位には隆帯がめぐり、地文は縦位の単節斜縄文である。6525・6541は地文が施文されただけのもので、口縁部の一定幅には横位、その下位は縦位の単節斜縄文である。

これまで述べてきた土器は、すべて大木8b式である。拓本土器6528・6531・6532・6534—6536も同型式の破片である。

石器 (6540) 半円状扁平打製石器で、約1/2の部分失っている。右側縁の直線部は背部になり、左側縁の刃部には磨耗痕が著しい。

遺構の時期 実測して掲載した8個体は埋土下部から底面にかけての層準から一括して出土した。いずれもほぼ原形に近い形状を保っているが、6526・6527・6530以外は接合復元したものである。出土層位からはこれらの土器群は遺構に共伴するものと考えられ、このピットは縄文時代中期中葉大木8b式期に位置づけられる。

Ⅳ—54 フラスコ形ピット (第323図—第328図6542—6563, 写真図版62—65・113)

土器 (6542—6562) 縄文時代中期中葉の土器が数多く出土している。地文以外の文様をもつ一群から記載してゆく。キャリバー形になるのは6546・6555である。6546は文様帯が口縁部に集約し、隆沈線による横位の(有棘)渦巻文が5回繰り返して施文されるが、それぞれの間は連結されていない。地文は、口縁部が横位、体部が縦位の単節斜縄文である。6555は波状口縁である。向い合う2個1対が大波状、その間の2個1対は小波状になる。口縁部の文様は連結された横位の(有棘)渦巻文で、波状部につく突起の上にも施文される。大きくは4回の繰り返してである。体部には、曲流渦巻文といわれるような文様が沈線によって施文され、底部へ向う3条1組の垂下沈線を伴う。大きくは2回の繰り返してである。地文は、口縁部・体部とも縦位の複節斜縄文である。

6545は、体部が直線的な外傾を示し、口縁部が外反する。頸部には3条の平行横線がめぐり、それを起点とする2条あるいは3条の垂下沈線と1条の蛇行垂下沈線が1単位である文様が体部へ展開される。文様は7回の繰り返してである。口縁部上半は無文帯で、その下位から体部へは縦位の単節斜縄文を施文する。6554は体部下半から底部を失っている。体部上部に最大径があり、その上位は緩やかに内湾している。口縁部は6単位の小波状になる。波状部には下向きの隆起渦巻文が施文され、それぞれの間を隆起線が連結する。体部の文様は隆起線によって構成される。上部は小波状文を間に伴う平行横線、その下位には2条の平行垂線のほか有棘曲流渦巻文が全面に展開する。地文は単節斜縄文である。6548は上半を失っている。縦位の単節斜縄文を地文にし、沈線による曲流渦巻文を主体にした文様が展開する。体部下端の約1/2周の部分には棒状の施文を3回繰り返す。6551は体部半ばが大きく膨らみ、口縁部と底部へは著しく

内湾してゆく。口縁部には隆起線が連結する4個の橋状把手がつく。その隆起線の上には沈線による横位渦巻文を施文する。体部の文様は隆沈線によるものである。横2列にめぐる隆起線を起点とし、その下位は、短い横位渦巻文を伴った1単位のほか、垂線から長くのびた横位渦巻文3単位が文様を構成する。それ以外の部分は無文である。

6552・6553・6556は口縁部に簡単な装飾をもつ。6552・6553が体部半ばから口縁部にかけては緩やかに内湾していくのに対し、6556はほぼ直立気味になる。6552は口縁部が肥厚し、円形凹文で4分割した間を長楕円形状にくぼめている。6553は口唇部が肥厚し、指頭状押圧痕が稜線部に連続する。6556は器高が48.7cmである。折り返し口縁状に肥厚した部分に細い沈線1条がめぐる。3点は縦位の単節斜縄文を地文にする。

6544・6547・6549・6550は地文以外の装飾をもたない。器形は類似し、体部半ばに最大径があつて口縁部や底部へは緩やかに内湾してゆくが、6544だけが口唇部がわずかに外反する。地文は、6544が複節斜縄文である以外は単節斜縄文である。施文方向は、6547は全面が縦位、ほかの3点は口縁部が横位で、その下位が縦位になる。6550は補修孔1個をもつ。6542・6543は上半を失っている。単節斜縄文が施文されているが、6542では垂下する隆起線が一部にみられる。

以上の土器は大木8b式である。拓本土器6558-6563も同型式である。6557は口唇部に燃紐圧痕1条がめぐり、単節斜縄文が地文である。

遺構の時期 6554をはじめとする多くの一括土器群は埋土中部から下部にかけての層準から出土した。それらは遺構に共存するものと考えられ、このピットは縄文時代中期中葉大木8b式期に位置づけられるであろう。なお、先述のIV7-52フラスコ形ピットとは5m±しか離れていない位置関係にある。

IV7-57フラスコ形ピット (第329図6564-6571, 写真図版66・113)

土器 (6564-6569) 6564は多くの部分を失っている。体部半ばが膨らみ、その上位は緩やかに内傾しながら、口縁部で外反する。口縁部の文様は4条1組の縦位の沈線によって区画されるが、6〜7単位になるものであろう。その間には3条1組の横位の沈線を引く。頸部には4条の沈線がめぐり、その間を角棒状の工具による刺突文で充填する。体部地文は木目状燃糸文で、胎土には繊維を含まない。6568は同一個体の破片である。

拓本土器6565・6566は波状口縁、6567は口縁部の形態が不明であるが、いずれも口唇部は幅広く肥厚している。6565は波状部にある円形凹文と沈線文、6566は沈線文と刺突文が口縁部文様帯を構成する。6567は口縁部が外反し、半截竹管による刺突文が狭い幅に施文され、体部地文は木目状燃糸文である。3点は胎土に繊維を含まない。6569は隆沈線による横位渦巻文が口唇部に施文され、その下位には平行沈線がめぐる。以上の土器は、6564-6568が縄文時代前期

IV群に分類でき、6569は中期中葉大木8b式に相当する。

石器 (6570・6571) 6570は尖頭形の削器、6571は2次加工痕のある剥片である。

遺構の時期 埋土からの出土土器や占地などからみて、縄文時代前期末葉期、土器分類群でいえば前期IV群の時期に位置づけられるであろう。

Ⅶ-60フラスコ形ピット (第329図・第330図6572-6594、写真図版135)

土器 (6593) 研磨された体部小破片で、細く浅い沈線が横3列にめぐるとは無文である。

石器 (6572-6594) 6572は無基尖基の石鏃である。6574・6578は縦形、6575は横形の石匙である。6574の挟入部と刃部の一部にはタール状の付着物がみられる。6573ほかは削器である。6573は基部を失っている。6576は両面から2次加工された小型の製品である。6579も小型で、両側縁に刃部をもつ。6577は打面を除いた周縁を刃部にする。6582は、弧状の先端部が2次加工されているが、剥離角は小さい。6580・6590は1側縁を刃部にする削器状石器である。6585は掘器である。左側縁にも急傾斜の2次加工が連続している。6581は浅い1個の刃部、6589は2次加工による奥行き深い刃部を両側縁にもつ挟入石器である。

6583・6588は基端が折断面である折断石器で、刃部には微細な剥離痕を生じている。6591は折断面と自然面の交差部を刃部とする彫器である。刃部には小剥離痕とともに磨耗痕がみられる。6586は基部を失い、右側縁には奥行き浅い階段状剥離痕がみられる。6584・6587は剥片である。

6592は下端を折損した半円状扁平打製石器である。残存部には背部を含まない。刃部は両面から2次加工されるが、部分的にはその面よりも新しい研磨面がある。左側縁には磨耗痕が著しい。6594は直径4.8cm±のほぼ球形の礫である。加工痕や使用痕は認められない。形状や大きさからは石弾の可能性もあるが、確実なことはわからない。

Ⅶ-63フラスコ形ピット (第330図・第331図6595-6603、写真図版66・113)

土器 (6595-6601・6603) 6595は、口縁部が外反して肩部が張り出すため、甕形土器に近い形状になる。口縁部は4単位の低い波状口縁で、器高は45cm±である。半截竹管文を伴う低い隆帯が文様帯を区画し、幅2.5cm～3cmの口縁部文様帯には平行横線状の撻紐圧痕を施文する。頸部から体部には木目状撻糸文を施文し、内面はていねいにみがかれている。胎土には繊維を含まない。6603は大型の破片で、円筒形の器形をもつ。刺突文を伴う狭く低い隆帯によって区画した幅1.3cmと狭い口縁部文様帯には横線状の撻紐圧痕を施文する。体部地文はLRとR<の結束第1種羽状縄文である。胎土には少量の繊維を含む。2点は縄文時代前期Ⅲ群2類に分類できる。

拓本土器6597・6598は口縁部文様帯が撻紐圧痕によって構成され、6597では横2列の円形刺突文を伴う隆帯がめぐるとは。2点は前期Ⅲ群2類に分類できる。6599-6601は同一個体の破片で、

波状口縁になる。一部に刺突文を伴う隆帯が文様帯を区画する。口縁部文様帯は低い橋状把手や刺突文・沈線文によって構成される。橋状把手は波状部につき、上には刺突が加えられる。口唇部には粘土を貼りつけて肥厚させ、上には刺突を加える。そのほかはわずかに弧状になる縦位の沈線文で文様を構成し、胎土には繊維を含まない。前期IV群に分類できる。

石器 (6602) 小型の剥片で、両側縁に使用痕をもつ。

遺構の時期 埋土中部から出土した6595やほかの土器・占地などからみて、縄文時代前期末葉期、土器分類群でいえば前期III群2類に近い時期に位置づけられるであろう。

Ⅶ-64フラスコ形ビット (第331図6604・6605, 写真図版66・113)

土器 (6604・6605) 6604は底部を含む下半の一部を失っている。円筒形の器形をもつが、口縁部は外反している。4単位の低い波状口縁になり、幅7cm±の口縁部には、波状部が弧状、そしてその間を埋めるように横線状の燃紐圧痕を施文する。体部地文は結束第1種羽状縄文で、胎土には少量の繊維を含む。6605は口縁部の破片で、横4列の半截竹管文がみられる。胎土には少量の繊維を含む。6604は縄文時代前期III群1類、6605は前期IV群に分類できる。

遺構の時期 埋土から出土した6604や占地を参考にすれば、縄文時代前期後半期、土器分類群でいえば前期III群1類の時期に位置づけられるものと推定される。

Ⅶ-66フラスコ形ビット (第331図・第332図6606-6615, 写真図版67・113)

土器 (6606-6615) 6606は下半を失っている。低い隆帯が文様帯を区画し、その上には竹管による「ハ」字状の刺突文が連続する。幅2cmの口縁部は横線状の燃紐圧痕、体部は、磨耗が著しいが、結束第1種羽状縄文が施文される。胎土には少量の繊維を含む。6608は波状口縁になる。頸部にめぐる区画帯は半截竹管文を伴った隆帯であるが、橋状把手の下位には2個1対の小突起がある。口縁部文様帯は、口唇部が折り返し口縁状に肥厚し、波状部の下位には沈線文を伴う橋状把手が横位につく。その両側は縦位の沈線文、隆帯に沿っては横位の沈線文が施文される。それらは半截竹管の内側を引いたものである。体部は磨耗がひどく、斜行する条が痕跡的にみられるものの、詳細は不明である。胎土には繊維を含まない。6606は縄文時代前期III群2類、6608は大木6式～大木7a式の土器である。

拓本土器6609・6611は頸部に刺突文が連続し、口縁部文様帯は燃紐圧痕が横線状に施文される。体部地文は木目状燃糸文で、6609が胎土にわずかの繊維を含むが、6611は含まない。6613は肩部がやや張り出し、口縁部は外反する。口縁部文様帯は2段である。狭い上段は刺突文を伴う隆帯、下段は肩部にめぐる刺突文によって区画され、斜線状あるいは横線状の格条体圧痕が施文される。体部地文は結束第1種羽状縄文で、胎土には少量の繊維を含む。以上の3点は前期III群2類に分類できる。6607は4条の平行沈線が口縁部にみられ、前期IV群に分類できる。6610・6614・6615は木目状燃糸文、6612は結束第1種羽状縄文をもつ体部破片で、前者は前期

Ⅲ群2類あるいはⅣ群、後者はⅡ群-Ⅳ群の土器である。

遺構の時期 埋土からの出土土器や占地などからみて、縄文時代前期末葉期、土器分類群でいえば前期Ⅲ群2類あるいはⅣ群の時期に位置づけられるであろう。

ⅦⅡ-67フラスコ形ピット (第332図6616-6620、写真図版113)

土器 (6616-6619) 6618・6619は幅の狭い口縁部文様帯に燃紐圧痕が施文され、6619では刺突文が文様帯を区画する。体部地文は6618が燃糸文、6619が木目状燃糸文である。6617は竹管の押し沈線文が口縁部に施文される。6616は木目状燃糸文をもつ体部破片である。以上の土器は胎土に少量の繊維を含む。すべて縄文時代前期のもので、6618・6619はⅢ群2類、6617はⅣ群に分類でき、6616はⅢ群2類あるいはⅣ群の土器である。

石器 (6620) 横長の剥片である。

遺構の時期 埋土からの出土土器や占地からみて、縄文時代前期末葉期、土器分類群でいえば前期Ⅲ群2類あるいはⅣ群の時期に位置づけられるであろう。

ⅦⅡ-69フラスコ形ピット (第332図6621-6625)

土器 (6621-6623) いずれも小破片である。6622は頸部に低い隆帯がめぐり、その上には刺突あるいは燃紐圧痕が加えられるが、磨耗が著しく、口縁部の文様とともに詳しくは分らない。6621・6623は同一個体の破片である。3点は胎土に繊維を含む。6622は縄文時代前期Ⅱ群あるいはⅢ群の土器であろう。

石器 (6624・6625) 2点は使用痕のある剥片である。

ⅦⅡ-71フラスコ形ピット (第333図6626-6630)

土器 (6626-6630) 6626・6627は体部下端から底部が残存する。6627は木目状燃糸文が体部地文である。胎土には繊維をわずかに含む。6626は横位の単節斜縄文が密に施文されている。6628は指頭状押し痕を伴う幅の広い隆帯が頸部にめぐり、体部には太い単節斜縄文がみられる。胎土には少量の繊維を含む。6629・6630は木目状燃糸文をもつ体部破片である。以上のうち、6627・6629・6630は縄文時代前期Ⅲ群2類あるいはⅣ群、6628は、ほかの例からみて前期Ⅲ群に含まれるであろう。6626は中期以降のものと推定される。

ⅦⅡ-72長方形ピット (第333図6631)

土器 (6631) 縦位の単節斜縄文と磨消縄文をもつ体部破片で、大木10式であろう。

ⅦⅡ-74ピーカー形ピット (第333図6632)

石器 (6632) 扁平で細長い亜円礫を素材にした凹石である。表面のくぼみは細長い、裏面のそれは小さく浅い。

ⅦⅡ-75ピーカー形ピット (第334図6633・6634)

石器 (6633・6634) 2点は使用痕のある剥片で、6633は右側縁と先端部の交差部が刃部で

ある。

Ⅶ-76ビーカー形ピット (第334図6635)

土器 (6635) 上半の一部を欠いた鉢形土器のミニチュアである。底部はわずかに揚げ底様になる。無文で、胎土には繊維を含まない。時期は不明である。

Ⅶ-77皿形ピット (第333図6636—6656, 写真図版67・113)

土器 (6636—6647) 6636は上半を失っている。底部からやや内傾気味に立ち上がった体部は下端から強く外傾してゆく。体部地文は縦位の結束第1種羽状縄文で、内面はていねいにみがかれている。胎土には繊維を含まない。器形の特徴からみて、縄文時代前期Ⅲ群2類あるいはⅣ群の土器に共伴するものであろう。

拓本土器のうち、前期のものは6637—6643・6644・6646である。6637・6640はⅢ群1類、6643はⅢ群2類に分類できる。6637は指頭状押圧痕が連続したやや幅の広い隆帯が文様帯を区画する。口縁部には捻紐圧痕による幾可学的な文様を描く。胎土には少量の繊維を含む。6638は口縁部が肥厚し、その上には矢羽根状沈線文が施文される。6644は小突起2個が口唇端につき、口唇部には半截竹管文が連続する。胎土には繊維を含まない。2点はⅣ群に分類できる。6639は結束第1種羽状縄文が施文された口縁部破片、6642は木目状捺糸文、6646は捺糸文を地文にする体部破片である。6639はⅡ群あるいはⅢ群、6642はⅢ群2類あるいはⅣ群の土器である。6641は網目状捺糸文を体部地文にする。6645は瘤状小突起と捻紐圧痕が口縁部文様帯を構成する。中期前葉のものとして推定される。6647は小円孔を有する突起で、上面には2個の凹面をもつ。中期中葉大木8a式であらう。

石器 (6648—6656) 6648は無茎凹基の石鏃、6649は複刃削器の破片である。6651は基端が折り面で、左側縁の刃部には不規則な小剝離痕が生じている。6652は2個1対の刃部をもつピエス・エスキーユで、2辺を折断して形態を整えている。下端の刃部の剝離痕は奥行きが浅い。6654は側縁の一部に、小型の剝片の6653は先端部に刃部を作り出した削器状石器である。6650・6655は使用痕のある剝片、6656は石核である。

遺構の時期 ピットの深さは24cm±と浅い。その点を考慮に入れると、6636は埋土からの出土であるが、ピットに共伴する可能性が強いものである。ここでは、縄文時代前期末葉期に位置づけておく。

JⅦ区

JⅦ-51皿形ピット (第334図6657—6664)

土器 (6657—6659・6661—6663) 6657—6659は縄文時代前期の土器である。6658はⅢ群2類、小円形刺突文を口縁部に施文した6657はⅣ群に分類できる。6657は胎土に繊維を含まない。

6659は底部の破片で、外面に幅5mm±の曲線状の圧痕1条がみられる。何の圧痕かは不明である。胎土にはわずかに繊維を含む。6661は浅鉢形土器の口縁部破片で、無文である。口唇部が内面で肥厚し、中期中葉のものとみられる。6662は研磨された無文の口縁部破片、6663は磨消縄文をもつ体部破片で、後期の土器であろう。

石器 (6660・6664) 6660は使用痕のある剝片である。6604は半円状扁平打製石器である。左側縁の凸辺部の中央付近の短い部分に、2次加工による鋭い刃部が作り出されている。ほかは2次加工されていても剝離角は小さく、素材の形状を残した厚い縁になり、背部とするべきであろう。II-A₁型である。

JVII-52ピット (第334図6665-6676、写真図版113)

土器 (6665-6673) すべて縄文時代前期の土器である。III群に分類できるのは6665-6667である。6666は斜位の刻みを伴った隆帯が文様帯を区画する。6667は鋸歯状文と平行横線状の文様をもつ。3点は胎土に繊維をわずかに含む。6667は1類、6666は2類になる。6668・6670は同一個体の破片で、半截竹管の内側を引いて文様を描く。胎土には繊維を含まない。IV群に分類できる。木目状捺糸文が施された体部破片6671-6673はIII群2類あるいはIV群の土器である。頸部に爪形文を伴う6669はIII群の土器と推定される。

石器 (6674-6676) 6675は両側縁に刃部をもつ削器の破片である。6676は、右側縁は両面から、先端部は表面から奥行き深い2次加工を施した横形削器である。6674は剝片である。

JVII-53血形ピット (第334図・第335図6677-6691、写真図版67・113・135)

土器 (6677-6680) 6677は円筒形の器形をもつが、体部は外傾している。刺突文が施された低く幅の狭い隆帯が文様帯を区画し、口縁部には捺紐を横線状あるいはゆるやかな斜線状に押圧する。体部地文は結東第1種羽状縄文で、0段多条の原体をもちいる。胎土には繊維をわずかに含む。縄文時代前期III群2類に分類できる。6678は低い波状口縁になる。刺突文を伴う低く幅の狭い隆帯が文様帯を区画し、口縁部文様帯は幅6.5cm±を測る。口唇部には鋭い刺突文が施され、その下位には複数を1組とした波状～鋸歯状の沈線文が向かい合い、菱形になる部分には円形竹管文を伴う。磨耗しているため、体部地文は不明である。胎土にはわずかに繊維を含み、前期IV群に分類できる。6679は前期III群2類である。6680は横位の単節斜縄文を施文した上に、沈線1条が横に引かれ、それに沿って下方向から刺突文が連続する。中期初頭大木7a式に相当するであろう。

石器 (6681-6691) 6681は無茎凹基、6682は無茎平基の石敷である。6681は先端部を失っている。6684は左側縁を刃部にしたほぼ直刃の削器、6683は基部を失い、両側縁と先端部に2次加工が施された削器である。6688は基部が折り面である横長の剝片で、奥行き浅い刃部2個が右側縁に並んである抉入石器である。6685・6687は加撃によって作られた複数の抉入部が

左側縁に連続した鋸歯縁石器である。6690は、折断面にはさまれた先端部に、裏面から急傾斜の2次加工がおこなわれている。6689・6691は使用痕のある剥片、6686は剥片である。

遺構の時期 埋土からの出土土器や占地などからみて、縄文時代前期末葉期、前期III群2類あるいはIV群の時期に位置づけられるであろう。

JVII-54 フラスコ形ピット (第335図6692-6700, 写真図版67・113)

土器 (6692-6698) 6692は口唇部を欠くが、ほぼ底部までである。しかし、残存状態は良くない。横位の単節斜縄文を施文した上に、隆起線による文様を構成する。口縁部の文様は横方向に発展・連続する曲線文を主とし、体部の文様は4単位の蛇行垂下文である。文様構成からみて、縄文時代中期中葉大木8a式に相当する。

拓本土器6696は前期III群2類に分類できる。文様の区画帯は横3列の燃紐圧痕をめぐらせ、内を刺突文で充填している。口縁部文様帯には燃紐を密に押圧している。体部地文は結束第1種羽状縄文で、胎土には繊維をわずかに含む。6693は前期IV群の土器である。竹管文を伴った低い隆帯が文様帯を区画するが、口縁部とともに隆帯の下位にも沈線による矢羽根状の文様が展開する。胎土には繊維をわずかに含む。6695は波状口縁で、肥厚した口唇部には燃紐圧痕が刻目状に連続し、口縁部には細い隆起線がみられる。円筒上層式あるいはeに相当する。6698は隆起線を伴い大木8a式に相当する。6697は隆起線を伴う体部破片、6694は間隔の広い縦位の沈線が施文された体部破片である。

石器 (6699-6700) 6700は左側縁や先端部を刃部とする使用痕のある剥片である。6699は尖頭部先端に磨耗痕がみられ、彫器のような機能をもつものかもしれない。

JVII-55 皿形ピット (第335図・第336図6701-6704, 写真図版113)

土器 (6701-6703) 6701は、燃りの方向を異にした2本1組の燃紐を口縁部に押圧し、体部地文は結束第1種羽状縄文である。6703は体部下端から底部の破片で、結束第1種羽状縄文と横位の単節斜縄文が施文されている。2点は胎土に少量の繊維を含む。6701は縄文時代前期III群2類に分類でき、6703は前期II群-IV群の土器である。6702は櫛歯状沈線文を地文にする体部破片で、胎土には繊維を含まない。

石器 (6704) 不規則な2次加工による刃部が左側縁に作られた割器状石器である。

遺構の時期 重複する縄文時代前期末葉期に切られていることや埋土からの出土土器・占地などからみて、前期後半期のなかには位置づけることができるであろう。

JVII-56 ビーカー形ピット

遺構の時期 出土遺物はない。重複する住居址との新旧関係や占地などからみて、縄文時代前期末葉期に位置づけられるであろう。

JVII区

JVII-51ピーカー形ビット（第336図6705-6709、写真図版114）

土器（6705・6706） 6705は刺突文を伴った低く幅の狭い隆帯が文様帯を区画し、口縁部には絡条体圧痕文を施文する。6706は低い波状口縁で、口唇部は肥厚し、沈線文と円形刺突文が施文される。2点とも、体部地文は木目状摺糸文で、胎土には少量の繊維を含む。6705は縄文時代前期Ⅲ群2類、6706は前期Ⅳ群に分類できる。

石器（6707-6709） 3点は無茎の石鏃で、6707・6709が尖基、6708が平基である。6708は先端部をわずかに欠いている。

遺構の時期 このビットは重複する縄文時代前期後半期の住居址を切っている。その点や埋土からの出土土器・占地などを参考にすると、前期末葉期、土器分類群でいえば前期Ⅲ群2類あるいはⅣ群の時期に位置づけられるものと推定される。

JVII-53・54・56ピーカー形ビット（第336図6710-6713、写真図版114）

土器（6710-6713） 4点は口縁部文様帯が撻紐圧痕によって構成された縄文時代前期Ⅲ群2類の土器である。6711は低い波状口縁で、横線状の圧痕とともに垂下する2条の圧痕がみられる。6710・6713は隆帯が文様帯を区画し、6710は撻紐圧痕、6713は沈線が隆帯の上下をはさんでいる。また、2点は体部に摺糸文の一部がみられる。

遺構の時期 遺物は重複関係にある3基から一括して取りあげたものである。したがって個々のビットの時的的な位置づけは不明である。

JVII-55フラスコ形ビット（第336図-第339図6714-6748、写真図版68・69・114）

土器（6714-6737） すべて縄文時代前期の土器である。6717は器高が43cmである。円筒形の器形をもち、底部はやや揚げ底様になる。文様帯は絡条体圧痕で押まれた低い隆帯によって区画され、その上には横位の爪形文が連続する。7.5cmと幅の広い口縁部には結束第1種羽状縄文、体部には縦位の摺糸文を施文する。胎土にはやや多くの繊維を含む。Ⅱ群に分類できる。なお、拓本土器6730は同一個体の破片である。6716・6718・6722は口縁部文様帯が平行横線状の撻紐圧痕によって構成され、Ⅲ群2類に分類できる。6716・6722は下半を失っているが、円筒形の器形をもち、6716は横線状の撻紐圧痕が施文された隆帯が文様帯を区画する。体部地文は、6716が結束第1種羽状縄文、6722が上部・中部・下部にそれぞれ結束第1種羽状縄文を施文し、その間を0段多条と2段の原体の横位回転文で埋めている。2点は胎土に少量の繊維を含む。6718は、ゆるやかに外傾する体部が半ばから上はほぼ直立し、口縁部は外反する。4単位の低い波状口縁になり、波状部には深く広い3個の刻みを加える。底部はわずかに揚げ底様になる。体部地文は無節の結束第1種羽状縄文を縦位に施文するほか、単節斜縄文をその間や

下端にもちいる。胎土には少量の繊維を含む。

6721は円筒形の器形をもち、低いが4単位の波状口縁になる。横位の単節斜縄文を全体に施文したあと、口縁部には4条の撚紐圧痕を横線状にめぐらす。胎土には繊維は含まれず、小礫が多い。6719は円筒形をしたやや小型の土器で、下半を失っている。文様帯は区画されず、結束第1種同撚りの単節斜縄文と同羽状縄文が施文される。胎土には繊維をわずかに含む。6714・6715は底部を含む下半が残る。ともにわずかに揚げ底縁になる。6714は横位の単節斜縄文、6715は結束第1種羽状縄文が施文される。2点は少量の繊維を含む。6719はII群あるいはIII群の土器に伴うもの、6721はIII群の識別形質の一部をもつものである。6714・6715も、文様構成の特徴や共存する土器からみて、II群あるいはIII群に含まれる土器であろう。

拓本土器のうち、II群に分類できるのは6720・6723、6724とその同一個体の破片6727、6726である。文様帯の区画は、6720・6723が3条の撚紐圧痕、6726が撚紐と絡条体の圧痕、6724が刺突文を伴った隆帯によっておこなわれる。口縁部への施文は、6720・6723・6724が結束第1種羽状縄文である。口縁部の幅は、6720が3cm、6724が1.5cmと狭い。体部地文を知ることができる6723・6724は結束第1種羽状縄文である。いずれも胎土には少量の繊維を含む。III群に分類できるのは6731・6733、6734とその同一個体破片6735、6736・6737で、撚紐圧痕を口縁部に施文する。6734は低い波状口縁で、波状部からは隆帯が垂下して頸部の隆帯につながり、上には半截竹管文が連続する。体部地文は木目状撚糸文と推定される。6737は低い波状口縁で、撚紐圧痕が斜位の刻目状に施文された隆帯が文様帯を区画し、体部地文は結束第1種附加条付である。すべて、胎土には少量の繊維を含む。6728はIV群に分類できる。波状口縁で、口唇部は肥厚している。波状部には円形凹文があり、その両側には斜位の刻目が連続する。その下位には半截竹管の内側を引いて山形状の施文をする。胎土には繊維を含まない。

6732は低い隆帯が文様帯を区画する。口縁部文様帯は横線状に施文した撚紐圧痕の上に小波状沈線文を重ねている。胎土にはやや多くの繊維を含む。III群とIV群の識別形質を併せもつものである。6729は結束第1種羽状縄文が施文された口縁部破片で、II群あるいはIII群に含まれる。6725は横位の単節斜縄文ほかを地文にする体部破片で、胎土には少量の繊維を含む。

石器 (6738—6749) 6744は基部を折損した槌形削器である。6740・6747は削器状石器で、6747は大型の剥片の両側縁を刃部としている。6739は1面の折り面をもつ折断石器である。6746はピエス・エスキューである。上端の刃部は平担面であるが、階段状剥離が裏面に著しい。4個2対の刃部をもつものであるが、多くの部分を折損している。6743は折り面—古剝離面交差型の彫器で、刃部には微細剝離痕と磨耗痕がみられる。6738の基端は折れ面である。奥行きは深い粗雑な2次加工を両側縁に施し、先端部には規則的な2次加工による刃部を作る。6742は両面に2次加工痕をもち、6741は使用痕のある剥片、6745は残核である。

6748は半円状扁平打製石器で、折損している。残存部には背部は含まれず、左側縁の刃部には磨耗痕が著しい。6749は磨石である。ややいびつな球形の礫で、全面が使用面である

遺構の時期 遺構編には埋土上部および下部から深鉢形土器が出土したことが記載されているが、掲載遺物のなかからそれらを分離することができなかった。したがって、縄文時代前期後半期のなかには位置づけられるであろうが、それ以上のことは不明である。

JⅧ-57ピット・JⅧ-58ピーカー形ピット (第339図6750-6758, 写真図版114)

土器 (6750-6758) すべて縄文時代前期の土器である。6757はⅡ群に分類でき、撚紐圧痕が文様帯を区画する。6755・6756はⅢ群2類に分類できる。刺突文を伴った低く幅の狭い隆帯が文様帯を区画する。6755は波状口縁で、波状部から垂下する2条のほかは横線状の撚紐圧痕が口縁部の文様を構成し、体部地文は結束第1種羽状縄文である。胎土には少量の繊維を含む。そのほか6751-6754・6758がⅢ群の土器である。6751・6752は低い波状口縁であり、6758は刺突が加えられた隆帯が文様帯を区画する。6754・6758は1類、6751は2類である。6750はⅣ群に分類できる。口縁部には平行横線4条がめぐり、体部は無文である。胎土には繊維をわずかに含む。

遺構の時期 JⅧ-58ピーカー形ピットはJⅧ-57ピットの内部にあり、前者が埋土も含めて後者を切っていたため、出土遺物はそれぞれに分離できなかった。したがって、個々の所属時期は不明である。

KⅧ区

KⅧ-51皿形ピット (第339図・第340図6759-6778, 写真図版69・114)

土器 (6759-6768) すべてが縄文時代前期の土器である。6759は下半を失っている。低い4単位の波状口縁で、結束第1種附加条付が全体に施文されている。胎土には少量の繊維を含む。本遺跡でのほかの例からみて、Ⅲ群の土器に共伴する可能性がある。拓本土器のうち、6760はⅢ群2類に分類できる。横2列の刺突文が文様帯を区画し、口縁部には平行横線状の撚紐圧痕、体部には結束第1種羽状縄文を施文する。胎土にはわずかに繊維を含む。6767もⅢ群の土器である。6761・6763はⅣ群に分類できる。6761はわずかに肥厚した口唇部に円形竹管文を施文し、6763は横位の平行沈線とその間を充填する半截竹管文が口縁部の文様を構成する。胎土には繊維を含まない。6766は撚紐圧痕が頸部にめぐり、体部には結束第1種羽状縄文を1段、その下位には縦の撚糸文を施文する。6764・6768は木目状撚糸文をもつ体部破片である。6766はⅡ群、6764・6768はⅢ群2類あるいはⅣ群に含まれる。6762は単節斜縄文がみられる口縁部破片で、胎土には少量の繊維を含む。6765は縦位の綾絡文をもつ体部破片である。

石器 (6769-6778) 6769は横形、6773は縦形の石匙である。6770は打面も含めた周縁に両

面からの2次加工を施した削器である。6774・6777は折断石器で、6774は1面、6777は3面の折り面をもつ。6771は2個1対の刃部をもつ小型のピエス・エスキューである。6775・6778は2次加工痕のある剥片、6772・6776は使用痕のある剥片である。

遺構の時期 重複する住居址との新旧関係や埋土からの出土土器・占地などからみて、縄文時代前期後半期のなかには位置づけられる。

KVII—52皿形ピット (第341図・第342図6779—6797, 写真図版69・114)

土器 (6779—6787・6797) 6779ほかは縄文時代前期の土器である。6779は上半が残存しているにすぎないが、低い6単位の波状になる口縁部はゆるやかに外反し、体部は半ばへかけて次第に膨らんでゆく。頸部にめぐる捻紐圧痕にはさまれた2条の低い隆帯の上には円形竹管文が連続する。口縁部の文様は捻紐圧痕による菱形文のほか、波状部などでは2条の垂線状の圧痕がみられ、その間は円形刺突文で充填される。体部地文は結束第1種羽状縄文で、胎土には少量の繊維を含む。Ⅲ群1類に分類できる。6797は大型の破片で、口縁部は波状になり、外反している。斜位の刻みに加えられた低い隆帯が文様帯を区画し、口縁部文様帯は沈線による渦巻文や平行横線間を充填する半截竹管文などで構成される。体部地文は木目状捻糸文で、胎土には繊維をわずかに含む。Ⅳ群に分類できる。

6780・6781・6783はⅢ群2類に分類できる。6781は絡条体、他の2点は捻紐を口縁部に押圧する。いずれも頸部には低く幅の狭い隆帯がめぐり、6781は半截竹管文、6783は横線状の捻紐圧痕をその上に施文する。体部地文を知ることができる6780は結束第1種羽状縄文である。3点は胎土に繊維をわずかに含む。6784は捻紐圧痕が文様帯を区画し、口縁部には捻りの方向を異にした2本1組の捻紐によって曲線的な文様を描く。Ⅲ群1類に分類できる。6782は捻紐圧痕が文様帯を区画し、体部地文は結束第1種羽状縄文である。Ⅱ群あるいはⅢ群の土器である。

以上が前期の土器である。6786・6787は同一個体の破片である。磨消縄文をもつ中期末葉大木10式の土器である。6785は無文帯である口縁部が強く外反し、体部地文は単筋斜縄文である。

石器 (6788—6796) 6991は無茎円基の石鏃、6789は複刃削器である。6790は搔器で、裏面からの急傾斜の2次加工によって刃部を作る。6792・6794・6795は使用痕のある剥片、6796は剥片である。6793は硬質泥岩で、1側縁に両面からの大きな剝離痕がみられる。

6788は凹石である。やや扁平な亜円礫の両面に、円形の小さなくぼみが2個ずつある。

遺構の時期 埋土からの出土土器や占地などからみて、縄文時代前期後半期のなかには位置づけられるであろう。

L VII 区

L VII—51フラスコ形ピット (第341図6798—6800)

土器 (6798-6800) いずれも体部破片である。6798は撚糸文が地文で、胎土には繊維を含む。6799・6800は単節斜縄文が地文である。

LⅦ-53フラスコ形ピット (第341図6801-6803)

土器 (6801・6802) 6801は羽状縄文、6802は縦位の単節斜縄文を地文とする小破片である。

石器 (6803) 表面からの2次加工が先端部に施された削器である。

LⅦ-55フラスコ形ピット (第342図6804・6805)

土器 (6804・6805) 6804は結束第1種羽状縄文を地文とする体部破片で、胎土にはわずかに繊維を含む。縄文時代前期Ⅱ群-Ⅳ群の土器である。6806は隆起線による渦巻文をもつ口縁部破片で、中期中葉の土器である。

MⅥ区

MⅥ-51フラスコ形ピット (第341図6806-6808)

石器 (6806-6809) 6806は折断石器で、2面の折り面をもつ。刃部は2次加工されている。6807・6808は使用痕のある剥片である。

OⅥ区

OⅥ-51フラスコ形ピット (第341図6809・6810)

土器 (6809・6810) 2点は同一個体の破片で、単節斜縄文を地文にする。

SⅢ区

SⅢ-51フラスコ形ピット (第341図6811・6812, 写真図版114)

土器 (6811・6812) 6812は低い波状口縁で、隆起線による楕円形文をもつ。縄文時代中期後葉大木9式の土器である。6811は口縁部が狭い幅で無文になり、その下位は縦位の単節斜縄文が施文される。中期後葉～末期の土器であろう。

遺構の時期 埋土からの出土土器や住居址との重複関係・占地などからみて、縄文時代中期後葉～末葉の時期に位置づけられるであろう。

SⅢ-52ピーカー形ピット (第342図6813-6815)

土器 (6813-6815) 6813は口縁部が狭い無文帯である。6814は磨消縄文、6815は刺突文と複節斜縄文がみられる。6814・6815は縄文時代中期末葉大木10式の土器である。

遺構の時期 埋土からの出土土器や住居址との重複関係・占地などからみて、縄文時代中期後葉～末葉の時期に位置づけられるであろう。

SVI区

SN-51フラスコ形ピット (第342図6816-6818)

土器 (6816-6818) 6816・6817は磨消縄文をもつ縄文時代中期末葉大木10式の土器である。6818は磨耗が著しい。

遺構の時期 埋土からの出土土器や占地などからみて、縄文時代中期末葉大木10式期に位置づけられるであろう。

SN-53フラスコ形ピット (第342図6824)

石器 (6824) 細長い垂円磔を素材にした磨石である。

SN-56ピーカー形ピット (第342図6825, 写真図版70)

土器 (6825) 大型の破片である。幅の広い口縁部はゆるやかに外傾し、肩部がやや張り出している。低い山形口縁になる。口縁部の文様は磨消縄文による入組文の意匠をもち、体部には平行する幅広の磨消帯がみられる。地文は一部が羽状縄文になり、施文原体はR<| やLR・0段多条のもの3種類がもちいられている。縄文時代後期中葉十腰内Ⅳ式に比定される。

遺構の時期 重複する縄文時代中期末葉大木10式期の住居址を切っていることや埋土からの出土土器・占地などからみて、中期末葉～後期中葉の時期内に位置づけられる。

SV区

SV-54ピーカー形ピット (第342図6826-6829, 写真図版114)

土器 (6826-6829) 6826-6828は縄文時代中期末葉大木10式の土器である。口縁部が狭い無文帯で、その下位に縦位の単筋斜縄文が施文された6829も同時期であろう。

遺構の時期 埋土からの出土土器や占地などからみて、縄文時代中期末葉大木10式期に位置づけられるであろう。

SV-57フラスコ形ピット (第342図6830-6832)

土器 (6831・6832) 2点は磨消縄文をもつ縄文時代中期末葉大木10式の土器である。

石器 (6830) 両側縁に使用痕のある剝片である。

遺構の時期 埋土からの出土土器や占地などからみて、縄文時代中期末葉大木10式期に位置づけられるであろう。

TV区

TV-51フラスコ形ピット (第342図・第343図6833-6842)

土器 (6833-6840) 6834-6840は縄文時代中期末葉大木10式の土器である。6833は口縁部

が狭い無文帯になり、同時期のものであろう。

石器 (6841・6842) 2点は側縁に使用痕のある剥片である。

遺構の時期 埋土からの出土土器や住居址との重複関係・占地などからみて、縄文時代中期末葉大木10式期に位置づけられるであろう。

TV-52ピット (第343図6843-6873, 写真図版114)

土器 (6843-6858) すべて縄文時代中期末葉大木10式の土器である。6847・6848は幅の狭い口縁部をもち、6847は鱗状突起、6848は横方向への刺突文を伴う。6853は体部の磨消帯に刺突文を伴う。6850・6851は同一個体の破片で、頸部には低い隆帯がめぐり、体部は「S」字状の文様意匠をもつ。6849は内外面に赤色顔料が付着している。地文は、6852が複節斜縄文である以外は単節斜縄文である。

石器 (6859-6873) 6862・6864は尖頭石器である。6862は折損している。6864は小型の縦長剥片の尖頭部に2次加工を施し、鋭利な刃部を作り出している。6873は両面縁に不規則な2次加工を施した削器状石器である。6866・6871は折断石器で、2面の折り面をもつ。6871は三角形の形状を示す。6861・6863・6867は2個1対の刃部をもつピエス・エスキューであるが、6867は一端を折損している。6861は打面を切る2次剥離面が裏面に生じている。6865・6869・6870は使用痕のある剥片、6868・6873は剥片である。

6859はわずかに扁平な円盤で、磨石である。6860は石皿の破片で、皿になる面は著しく傾斜している。

遺構の時期 埋土からの出土土器や占地などからみて、縄文時代中期末葉大木10式期に位置づけられる。

3. 配石遺構

配石遺構は3基が検出された。出土層位の埋土としたものは雑群を覆う土層の意味である。遺構の形態からみて、出土遺物がそれぞれの遺構に固有のものであるとは必ずしもいえないことを注意しておきたい。

GIV-151配石遺構 (第345図6874-6884, 写真図版114)

土器 (6874-6879) 6874-6878は縄文時代前期の土器である。6874・6875・6878は単節斜縄文が施文された口縁部や体部の破片で、6874・6878は胎土に繊維を含むが、6875は含まない。6877は網目状摺糸文を地文にする1群2類、6876は木目状摺糸文を地文にするIII群2類あるいはIV群の土器である。6879は波状口縁になる。隆沈線と口唇部につく1個の小突起が文様を構成し、小突起の上には撚紐圧痕がみられる。中期中葉大木8a式に相当する。

石器 (6880—6884) 6880は折り面と打面との交差部を刃部とする彫器である。刃部には小さく細長い槌状の剝離痕が生じている。6881は4個2対の刃部をもつピエス・エスキューである。下端からの剝離面は奥行きが深い。6882は基端が折れ面である大型の破片で、不規則な2次加工痕が右側縁の一部にある。6883は使用痕のある剥片である。

6884は細長い亜円礫で、器面の全体が滑らかである。大きさや形状からみて台石の可能性もあるが、用途や機能を示す痕跡はみられない。

HW—151配石遺構 (第344図6885)

土器 (6885) 単節斜縄文が施文された体部破片で、胎土には繊維をわずかに含む。

4. 焼土遺構

焼土遺構は16基が検出された。出土層位の埋土としたものは焼土を覆う土層の意味である。焼土以外には施設を伴わない遺構の形態からみて、出土遺物がそれぞれの遺構に固有のものであるとは必ずしもいえないことを注意しておきたい。

GIII—201焼土遺構 (第344図6886)

石器 (6886) 縦長の剥片で、使用痕なども認められない。

GIII—202焼土遺構 (第344図6887・6888, 写真図版135)

石器 (6887・6888) 6888は右側縁と先端部にある自然の挟入部を刃部にした挟入石器、6887は剥片である。

GV—201焼土遺構 (第344図・第345図6889—6901)

土器 (6889—6893) 6889はミニチュア土器の下半の一部である。底部は揚げ底縁になる。無文で、胎土には繊維を含む。6891は頸部に燃紐圧痕3条がめぐり、体部地文は結東第1種羽状縄文である。6890・6892・6893は単節斜縄文が体部に施文されている。4点は胎土に繊維を含む。6891は縄文時代前期II群あるいはIII群に含まれる。

石器 (6894—6901) 6894は無茎円基の石鏃である。6896・6897は縦形石匙で、折損している。6896は挟入部と刃部にタール状の附着物が残る。6895・6900は削器の破片である。6898は奥行きが浅い小さな2次加工が右側縁に施された削器状石器である。6899は非折り面型尖頭形の彫器である。刃部には裏面からの小剝離痕が生じている。6901は階段状剝離痕が表面に著しく、ピエス・エスキューの破片とみられる。

GVI—201焼土遺構 (第345図6902・6903)

土器 (6902・6903) 6903は口縁部が無文で、頸部に燃紐圧痕1条がみられる。6902は単節斜縄文が施文された体部破片である。2点は胎土に繊維を含まない。

HV-201焼土遺構 (第345図6904—6908, 写真図版114)

土器 (6904—6908) すべて縄文時代前期の土器である。6908は口縁部に幅5cm±の綾絡文帯があり、口唇端には間隔をおいて指頭状押圧痕がみられる。胎土には多くの繊維を含む。I群1類に分類できる。6904は単節斜縄文と間隔をおいた横位の綾絡文が施文される。6906は単節斜縄文が地文で、口唇部からやや間隔をおいた部分に横位の綾絡文1条がみられる。口唇端には指頭状押圧痕が連続する。6907は然り戻し縄文が地文である。3点は胎土に繊維を含み、6906・6907はその量が多い。I群2類に分類できる。6905は縦位の燃糸文をもつ体部破片で、胎土には繊維をわずかに含む。

HVI-201焼土遺構 (第345図6909—6911)

石器 (6909—6911) 6910は片面加工の縦形石匙、6911は剥片である。6909は石皿の破片で、周縁は高く形作られている。石質は複雑石安山岩である。

JVI-201焼土遺構 (第345図6912—6917)

土器 (6912—6917) 6912・6913・6915は縄文時代前期の土器である。6915は燃紐圧痕間に刺突文を充填して文様帯の区画をするII群、6912は燃紐が口縁部に押圧されたIII群の土器である。6913は縦位の燃糸文を地文にする。3点は胎土に繊維を含む。6914・6916は中期中葉大木8b式の土器である。6917は2条の沈線が口唇部にめぐる晩期のものである。

5. 土器埋設遺構

土器埋設遺構は3基が検出された。この遺構は土器埋設部以外に施設をもたない。出土層位の埋土としたものはそれらの部分を覆っていた土層という意味である。とくにJVI-251土器埋設遺構は周辺部一帯に形成された遺物包含層の下位に検出され、掲載遺物のうち、埋設土器を除いてはその包含層に固有のものが多く含まれている可能性がある。

JVI-251土器埋設遺構 (第345図—第351図6918—7031, 写真図版70・72・114・115・135・152・157)

土器 (6918—6974) 大部分が縄文時代前期の土器であり、それらから記載してゆく。埋設土器であるのは6919・6923・6925である。6923は、わずかに外傾して立ち上がった体部が半ばからはゆるやかな内傾に転じ、口縁部でふたたび外傾する。口縁部が狭い無文帯になるものの文様帯は区画されず、体部下半の一部に横位の単節斜縄文が施文される以外は結束第1種羽状縄文を地文とする。胎土には繊維をやや多く含む。6919・6925は底部を含む下半が残存している。6919の体部は外傾が著しく、6925の底部はわずかに揚げ底縁になる。いずれも結束第1種羽状縄文が施文され、6925では横位の単節斜縄文も併用されている。2点は胎土に繊維を含む。6923はII群あるいはIII群の土器に共存するものと推定される。ほかもII群あるいはIII群に含ま

れるであろう。

実測した土器のなかで、II群に分類できるのは6924・6931である。2点は下半を失っている。6924は先の6923に似た器形をもつが、4単位の低い波状口縁になる。文様帯の区画帯は、絡条体圧痕にはさまれた低い隆帯状の上に半截竹管文が施文されている。口縁部の文様は、波状部のひとつに垂線状の絡条体圧痕がみられるほかは横位の単節斜縄文である。体部地文は結束第1種羽状縄文である。6931は円筒形の器形をもつ。横2列の燃紐圧痕が文様帯を区画し、口縁部・体部とも縦位～斜位の燃糸文を施文する。2点は胎土に繊維を含むが、6924ではその量は少ない。

III群の土器は6918・6922・6927・6928である。6918・6922は体部半ばがやや膨らみ、口縁部が開き気味の器形になる。6918は燃りの方向を異にした2本1組の燃紐を平行横線状に口縁部に押し、体部には結束第1種羽状縄文を施文する。6922は4単位の低い波状口縁になる。横3列の絡条体圧痕が文様帯を区画する。口縁部の文様は6918と同様の原体によって構成され、波状部では1条の垂線状、その間は横線状あるいは弧状の意匠をもつ。体部地文は、上半が結束第1種羽状縄文、下半が多軸絡条体の回転圧痕文である。6927は体部の外傾が著しく、低い4単位の波状口縁になる。口縁部文様帯の幅は1.5cm～2.5cmと狭く、燃紐圧痕が横線状に施文される。体部地文は結束第1種羽状縄文である。6928は底部だけを失っている。器高に比べると口径と底径が大きく、ずんぐりした器形で、4単位のやや高い波状の口縁になる。燃紐圧痕ではさまれ、上に指頭状押し痕が施文された隆帯が文様帯を区画する。口縁部は6.5cm～7.5cmと幅が広く、燃紐圧痕による平行横線状あるいは鋸歯状の文様が施文される。体部地文は、下端が結束第1種羽状縄文である以外は結節の回転痕を伴った横位の単節斜縄文である。4点は胎土に繊維を含み、6918ではその量が多い。III群のなかでも、6922・6928は1類、6918・6927は2類に細分できる。

6921は文様帯の区画がおこなわれない。器高は21.7cmとやや小型で、4～6単位の低い波状口縁になり、底部はわずかに揚げ底様になる。地文は結束第1種羽状縄文である。胎土には繊維をわずかに含む。6926もやや小型の土器で、4単位の低い山形突起をもつ。突起部に円形凹文があり、地文は3条1組を主とした細い沈線による波状文あるいは鋸歯状文である。いわゆる化粧粘土が両面に塗られている。胎土には繊維を含まない。6921はII群～IV群の土器に、6921は円形凹文や地文からみてIII群2類あるいはIV群の土器に共伴することが考えられる。

6920・6929・6930・6932・6934は底部を含む下半が残存している。6930・6932・6934は底部がわずかに揚げ底様になる。地文は、6930は結束第1種羽状縄文、6929は結束第1種羽状縄文とその間を充填するように施文された単節斜縄文、6920は木目状燃糸文、6932・6934は単節斜縄文である。6920を除いては胎土に繊維を含む。6929・6930はII群あるいはIII群、6920はIII群

2類あるいはIV群に含まれる土器であろう。

6933は大型の破片である。口縁部が強く屈曲し、肩部が強く張り出していることからみて、壺形土器に近い器形になるであろう。口縁部は無文で、体部の文様は、沈線による山形文ないしは鋸歯状文を肩部に施文するほか、縦に引いた沈線の間を刺突文で充填している。沈線は半截竹管の内側を引いたものである。胎土には繊維を含まない。大木6式に相当する。

拓本土器のうち、II群に分類できるのは6949・6959である。6949は間に燃紐圧痕をはさむ横2列の刺突文を伴った低い隆帯が文様帯を区画する。口縁部文様帯は口唇部にめぐる燃紐圧痕、垂線状の燃紐圧痕2条のほか横位の単節斜縄文と綾絡文によって構成される。6959は口縁部に結束第1種羽状縄文が施文され、燃紐圧痕がめぐる隆帯が文様帯を区画する。2点は胎土に繊維を含む。III群2類の土器は6936・6938・6940・6941・6944・6950—6952・6956・6962・6966・6970・6972である。6956・6972は隆帯が文様帯を区画し、6972ではその上に円形刺突文を伴う。6950は口縁部幅が8cm以上と広く、燃紐が平行横線状のほか重線状に押圧される。6940は燃紐圧痕による幾可学的な文様を口縁部にもち、体部地文は木目状燃糸文である。6944は、間に燃紐圧痕をはさむ横2列の刺突文を伴った低い隆帯が文様帯を区画する。口縁部の文様は横線状の燃紐圧痕を主とするが、2条の垂下沈線がみられ、その間および口唇部に刺突が加えられる。体部地文は結束第1種羽状縄文である。6962・6972も隆帯によって文様帯を区画し、6967は木目状燃糸文が体部地文である。そのほか、6935・6939・6942・6967がIII群に含まれる。IV群に分類できるのは6954・6955である。6954は波状口縁である。狭い口縁部には沈線、頭部には半截竹管文を伴った隆帯がめくり、体部側には平行横線の間を埋める矢羽根状沈線文を施文する。6955は波状口縁である。肥厚した口唇部には刻みを加え、その下位は口唇部に沿って半截竹管の内側を引いている。体部には縦位の結束第1種羽状縄文と単節斜縄文を施文する。6954は胎土に繊維をわずかに含むが、6955は含まない。

口縁部破片で、結束第1種羽状縄文が施文されるのは6943・6945・6953・6958である。文様区画帯を含む体部破片は6961・6964・6966—6968・6974である。そのうち、隆帯をもつものは6964・6966—6968で、6964・6968は間に沈線をひいた2条をもつ。6968は隆帯の下位には半截竹管の内側を引いた沈線を伴う。6961は燃紐圧痕の下位には綾絡文を施文する。6974は絡条体圧痕が文様帯を区画し、体部地文は結束第1種羽状縄文の上に燃糸文が一部で重ねられる。ほかに体部地文を知ることができる6964は結束第1種羽状縄文、6967は木目状燃糸文である。6967はIII群2類あるいはIV群に含まれる。6968はIV群に含まれるものかもしれない。ほかはII群あるいはIII群に含まれるものである。体部破片のうち、6973は結束第1種、6965は結束第2種の羽状縄文、6971は網目状燃糸文、6963は燃糸文が地文である。6969は単節斜縄文のほか、縦位の綾絡文が施文され、胎土には繊維を含まない。

以上が前期の土器である。6948とその同一個体の破片6960は波状口縁である。口唇部は肥厚し、縞紐圧痕が斜位に押圧される。波状部には1個の円形貼付文、その下位には縦2列の円形貼付文があり、その両側には縞紐を押圧している。中期初頭円筒上層式aに相当する。6937は隆沈線をもつ中期中葉の土器である。6946は口縁部に平行沈線が引かれた晩期大洞C₂式の甕形土器の破片であろう。

剥片石器 (6975—7019・7021) 6975—6979は無茎の石鏃である。6975は円基、6976・6978は凹基、6977は尖基、6979はほぼ平基である。6978・6979は一部を折損している。6980・6982は縦形石匙で、6982は長さが9cmと大型である。6981・6983・6986—6988・6992・7002は削器である。6981は横形削器、6988は凸刃削器である。6987は横長剥片で、打面を除いた周縁に刃部を作る。7002は急傾斜の2次加工が裏面から施される。6984・6985・6989・7004は連続する2次加工によって刃部が作られた削器状石器である。6990は掘器であるが、基部を折損している。7003は先端部に2次加工をし、断面が菱形になる石鏃である。7005は右側縁と先端部が交わる角に2次加工された小さな刃部をもつ。石鏃の一種であろう。

折断石器のうち、6997・7001は1面、6991・6994・7008は2面の折り面をもつ。刃部数はそれぞれ1～2個である。7008の刃部は微細剝離痕のほか磨耗痕が著しい。6998は折り面交差型の彫器である。交差部の裏面には1条の細長く小さな槌状の剝離痕、折り面とが作る後縁部には微細剝離痕を生じている。6999・7000・7006も折り面交差型の彫器であるが、使用痕は6998の場合ほど顕著ではない。7016は横長剥片の両側縁に刃部をもつピエス・エスキーユである。潰痕状の剝離痕が両面にみられる。

抉入石器のうち、7007・7009・7010は1個、7011—7014は2個の刃部をもつ。7011は2個の刃部が接してあり、7013は刃部以外の部分にも2次加工痕が連続する。7017は厚い剥片で、加撃による大きな抉入部3個が連続している。6993・6995・6996・7018・7019・7021は使用痕のある剥片である。7015は水晶で、石器としては認定できない。

石斧 (7020・7022) 7020は打製石斧である。刃部は鋭利であるが、2次加工の剝離面もつ後縁部は角がとれて丸味をおびている。意図的に研磨したことが考えられる。7022は基部が残存した定角磨製石斧である。

礫石器 (7023—7027・7030) 半円状扁平打製石器は4点である。7027は扁平な自然礫の原形を生かしている。表面は上半を厚さの半分ほどに大きく割り、左側縁には奥行き浅い2次加工を両面から施している。ほかの部分は礫の角がとれた後縁部をそのまま残す。左側縁は著しく磨耗し、10mm±の平坦面が形成されている。II-A型に分類できる。7023—7025は折損している。いずれも残存部には背部をもたず、刃部は2次加工されていて鋭利であるが、7023・7025は左側縁が磨耗している。

7026は磨石である。断面が三角形の細長い稜の稜線部を使用している。7030は凹石と磨石の複合石器である。不定形でやや深くぼみが両面に連続しており、側縁の一部には磨ることによってできた平坦面をもつ。

石製品・その他 (7028・7029・7031) 7028は有孔石製品の未製品である。板状の細長い形状をし、一端がやや狭くなる部分の片面に穿孔しているが、貫通はしていない。石質はチャート質粘板岩である。7029は破片のため、形状などの詳細は不明である。厚さ9mmほどで、表面の周縁部は幅10mm・高さ2mmほどの帯状に残り、その内側には擦痕がみられる。裏面はゆるやかな凹凸を示す。岩版の類に含まれるものであろう。石質は珪質細粒凝灰岩で、軟質である。7031は平面が三角形の薄い角礫で、赤色顔料が付着している。表面と側面には良く残っているが、裏面にはわずかである。石質は複輝石安山岩である。

遺構の時期 埋設土器6919・6923・6925や付近に広範囲に分布する包含層の下位に検出されていることからみて、縄文時代前期、土器分類群でいえばⅡ群あるいはⅢ群の時期に位置づけられる。

6. 包含層

包含層についての概略は遺構編に記載している。そのなかで、西側遺物包含層と呼称したなかにHⅢ区・HⅣ区・HⅤ区・HⅥ区・HⅦ区・HⅧ区・HⅧ区、東側遺物包含層としたなかにJⅧ区・KⅧ区の出土物が含まれる。両地域の包含層の主な出土層準はⅡ層である。そのほかには上位を占めるIc層や0層(表土)からの出土遺物を掲載した。

HⅢ区(第352図7032—7050, 写真図版115・135)

土器 (7032—7046) 縄文時代前期の土器が多い。Ⅰ群Ⅰ類に分類できるのは7035である。幅が4cm±の綾絡文帯が口縁部にあり、その下位は単節斜縄文が地文である。胎土には織維をやや多く含む。7034・7039・7041・7043・7045はⅠ群Ⅱ類に分類できる。7045は外面のほか、内面の一部に単節斜縄文がみられる。7034は単節斜縄文が地文で、口唇端にはやや間隔をおいて、斜位の刻みを加える。7041は単節斜縄文、7043は無節斜縄文が地文の口縁部破片である。7039は網目状燃糸文が地文である。以上の土器は胎土に織維を含む。7037は指頭状押圧痕を伴った隆帯が頸部にめぐる。やや外反する口縁部には単節斜縄文を施し、口唇端にも指頭状押圧痕を施す。7044は隆帯が文線帯を区画する。口縁部と体部に条の間隔の広い燃糸文を施し、裏面の口唇部から一定幅の部分にも同じ原体を横位～斜位に施文する。2点は胎土に織維を含み、Ⅱ群に分類できる。7038は折り返し口縁状に肥厚した上に矢羽根状の沈線文を施文する。7042は口唇部に爪形文が連続する。2点の体部地文は木目状燃糸文で、胎土には織維を含まな

い。IV群に分類できる。7046は施文原体が不明である。胎土には多くの繊維を含み、I群2類に含まれるものと推定される。

以上の前期の土器のほか、磨消縄文をもつ7032・7033・7036は中期末葉大木10式、同じく磨消帯をもつ7040は後期の土器である。

剃片石器 (7047・7049・7050) 7047は基部と先端部を失った石鏃である。7049は搔器で、両側縁にもていねいな2次加工を施している。7050は2面の折り面をもち、両側縁の刃部には2次加工を施している。

石斧 (7048) 基部を折損した両刃の打製石斧である。刃縁には階段状剝離痕が著しい。

III区 (第352図—第354図7051—7087, 写真図版72・135・136・153)

土器 (7051—7059) すべて縄文時代前期の土器である。7052は下半を失っている。斜位の単節斜縄文が施文され、口唇端の一部には指頭状押圧痕がある。7053は底部を含む下半が残存している。底部はわずかに揚げ底様になり、外縁が張り出す。体部地文は単節斜縄文である。底部の外面の周辺部を主とした部分にはスダレ状圧痕が認められる。7055は単節斜縄文を地文とした大型の破片である。以上の3点は胎土に繊維をやや多く含み、I群2類に分類できる。7051はミニチュア土器で、底部は揚げ底になる。胎土には少量の繊維を含む。器形などからみて、I群に共存するであろう。

拓本土器のうち、7057は口縁部に綾絡文帯をもつI群1類の土器である。7054は単節斜縄文を地文にする。底部の一部を含む7056は体部下端まで横位の綾絡文がみられる。底部は外縁が張り出し、外面にスダレ状圧痕をもつ。同じく7059は単節斜縄文が体部地文で、底部は外縁が張り出し、外面にはスダレ状圧痕の類とみられる圧痕が著しい。以上の3点は胎土に多くの繊維を含み、I群2類に分類できる。7058は単節斜縄文、7060は磨耗の著しい体部下端から底部の部分で、胎土には繊維を含む。2点もI群の土器である。

剃片石器 (7061—7087) 7061—7069は縦形石匙である。7062—7064は先端部をわずかに折損している。形態にはバラツキがあるが、7061・7063・7066は尖頭形になる。7070—7073・7081・7082は削器である。7070は複刃、7072・7081は直刃、7082は横形の刃部をもつ。7081は細身で、左側縁にも2次加工を施すが、直角に近い角度であり、刃潰しを目的にしたものであろう。7071は三日月形の形状をもつ。裏面から2次加工を施し、弧の内傾は急傾斜である。7074・7078はつまみ部をもつ石錐である。7077は抉入石器で、2次加工によって作られた刃部が両側縁にある。

7080は1面、7075・7079は2面の折り面をもつ折断石器で、刃部には微細剝離痕が生じている。7076は折り面—自然面交差型の彫器で、小さく細長い槌状の剝離痕のほか、裏面にはやや大きな剝離痕が刃部に生じている。また、刃部を構成する以外にもひとつの折り面がある。

礫石器 (7083・7084・7086・7087) 7086はI-A型、7083はII-B型の半円状扁平打製石器である。7086は浅い抉入部が両端にあり、自然面を残した短い刃部が左側縁にある。7083の2次加工痕は奥行きが浅い。2点とも左側縁が磨耗している。7084・7087は凹凸である。7084は両面と右側面にくぼみ複数があり、それぞれは深い。7087は2個のくぼみが表面にある。

石製品 (7085) 一端を含む石剣の折損品である。石質は粘板岩である。

I 川区 (第355図—第363図7088—7229, 写真図版73・74・115・136・137・153)

土器 (7088—7158) 実測した土器のうち、縄文時代前期のものから記載する。7093は口縁部に綾絡文帯をもち、体部地文は前々段反摺りと推定される。I群1類に分類できるが、胎土には繊維を含まない。7091は体部が外傾している。地文は斜位を中心とした捻糸文である。口唇端にも斜位の刻み状に同じ原体を回転施文する。胎土には繊維を含む。7097は大型の破片である。横位の単節斜縄文が地文で、胎土には多くの繊維を含む。7101・7107はやや小型である。7101は口縁部の大半を失っているが、大波状口縁になる。残っているのはひとつであるが、2単位ないしは4単位になるものであろう。波状部の口唇端には1個の刺突を伴う。底部はわずかに揚げ底様になり、外縁が張り出している。7107は体部下半がすぼまり、上半が開く器形をもつ。上面観は楕円形になる。底部は揚げ底様になり、外面に沈線状の圧痕1条を伴う。2点の地文は単節斜縄文で、7107のそれは太い。胎土には多くの繊維を含む。

7089・7090・7104・7105は底部を含む下半が残存している。4点は底部の作りがI型である点が共通し、7105を除いては外縁が張り出している。7089・7104は底部外面に沈線状の圧痕を伴う。いずれも体部地文は横位の単節斜縄文で、胎土には繊維を含み、7090を除いてはその含有量が多い。以上、これまで述べてきた7091以下はI群2類に分類できる。

7088・7094・7096・7098は底部を含む体部下端が残存している。いずれも底部はわずかに揚げ底様になり、7094・7096は外縁が張り出す。7098は底部外面の主に周辺部に、不規則ではあるが、スダレ状圧痕とみられるものを伴う。4点は体部地文が単節斜縄文である。胎土には繊維を含むが、7094・7098ではその量は少ない。以上の土器は器形的な特徴からみて、I群2類に含まれる。

7099は口縁部を含む上半の一部が残存している。捻紐圧痕で上下をはさまれた隆帯が文様帯を区画し、隆帯の上にも捻紐圧痕を横線状に施文する。口縁部と体部には結束第1種羽状縄文を施文し、胎土には繊維をやや多く含む。II群に分類できる。

7109は底部を含む下半の一部を失ったやや小型の土器である。口唇部は薄い、剥落が著しい。間隔の広い結束第1種羽状縄文を全体に施文する。胎土には繊維をわずかに含む。II群あるいはIII群の土器に伴うものかもしれない。7103は体部だけが残る。細い単節斜縄文を地文にし、胎土には繊維をわずかに含む。

7092・7095・7100は小型の土器で、7100は上半を失っている。3点は底部外縁が張り出し、7092・7100はわずかに揚げ底様になる。いずれも無文で、胎土には繊維を含む。器形的な特徴からみて、I群の土器に共伴するものであろう。

以上が前期の土器である。7102は壺形土器で、帯状の隆沈線が近接してめぐり、その上には多くの瘤がつく。いわゆる瘤付土器で、後期末葉宮戸Ⅲa式などに相当する。7108は上半の多くを欠いた壺形土器である。底部は浅い沈線がめぐり、丸底様になる。文様帯は沈線で区画された上半に大腸骨文を描き、地文は横位の単節斜縄文である。晩期中葉大洞C₁式である。7106は内外面ともいねいに研磨された無文の壺形土器で、後期～晩期の土器である。

拓本土器はすべて前期の土器である。I群1類に分類できる7129・7136は幅が3cm±の綾絡文帯を口縁部にもつ。口縁部破片でI群2類に分類できるのは7110・7112・7114・7118・7123・7131・7137・7141・7150・7153・7158である。そのうち、7123は口唇端と内面の口縁部にも単節斜縄文が施文され、7114・7118は円形の刺突文を口唇端に伴う。施文本体が分からない7114・7153を除いては単節斜縄文が地文で、胎土には繊維を含む。底部を含む破片7115・7119・7126-7128は底部外縁が張り出し、外面には沈線状の圧痕を伴う。7119・7126は体部下端まで横位の綾絡文が施文される。7155は体部地文が網目状燃糸文で、体部外面には1条の沈線がみられるが、スダレ状圧痕の可能性がある。以上の土器は7155を除いては胎土に繊維を含む。7150は口唇端に小波状貼付文を伴い、体部には単節斜縄文と縦位の綾絡文を施文する。以上の土器はI群2類に分類できる。

体部破片のうち、網目状燃糸文を地文にするのは7120・7121・7138、7147とその同一個体破片7149である。そのうち、7120・7138は胎土に繊維を含まない。7124は横位の綾絡文がやや密である。これらはI群2類に分類できる。7125・7132・7140・7143・7156は結束第1種羽状縄文を地文にし、7156は0段多条の原体をもちいている。いずれも胎土に繊維を含み、II群-IV群の仲間である。7133・7146は一部が見られる単節斜縄文と燃糸文を地文にしたII群の土器である。7139・7144は木目状燃糸文が地文で、III群2類あるいはIV群の土器である。そのほか7134・7154・7157は燃糸文が地文である。7111は間隔をおいた横位の綾絡文がみられる以外は無文である。7124などの仲間かもしれない。

底部を含む破片のうち、7117は体部地文と同じ単節斜縄文を外面にも施文する。7145はスダレ状圧痕を底部外面に伴う。7113は底部外縁が張り出している。以上の土器はいずれも胎土に繊維を含み、形態や施文などからみてI群2類の土器である。そのほか7130・7148も胎土に繊維を含む。7148は大型の底部で、わずかに揚げ底様になる。外面は櫛歯状沈線文が著しいが、乱雑である。胎土には繊維をわずかに含む。

剥片石器 (7159-7213) 7159は無茎平基、7160は無茎尖基の石鎌で、7160は先端部を失っ

ている。石匙のうち、7161—7163・7166—7173・7176・7178—7182の17点は縦形である。7161・7170・7176・7180は一部を折損している。形態はさまざまである。7173・7179は細身の尖頭形で、先端部は両面加工され、三角形の断面になる。7181は2次加工の剥離面が両面を覆い、断面は菱形である。7164・7165・7174・7175・7177の5点は横形である。7165・7175は刃部の一部を折損している。7174の刃部は一部に小剥離痕がみられるだけである。

7183—7188・7190—7193は削器である。そのうち、7183・7185は複刃、7186・7187・7191は直刃、7188は凹刃の刃部をもつ。7190は基端が折れ面であるが、直刃削器であろう。7193は厚い大型の剥片である。奥行きが深い規則的な2次加工を右側縁に施すが、先端部から左側縁の半ばにかけては急傾斜の2次加工である。7189ほかは掻器である。7189は掻器刃部に続く左側縁にも規則的な2次加工を施している。7194は右側縁に刃部をもつ挟入石器との複合である。そのほかに7196・7197が掻器で、裏面から急傾斜の2次加工を施す。

7195・7203—7205は2個1対、7199—7206は4個2対の刃部をもつピエス・エスキューである。7203は著しい剥離痕が両面に生じている。7205の上端は平坦面であるが、剥離痕は両面に生じている。7198も4個2対の刃部をもつが、刃部のひとつを折損している。7200・7201は折断石器で、2面の折り面をもつ。7201の刃部には小剥離痕を生じている。7207・7212は折り面交差型の彫器である。刃部は小剥離痕が生じ、7212にはそれが著しい。7210は折り面を打面にして彫刻刀面をつくりだした彫器で、刃部は磨耗している。先端部には規則的な2次加工が施されており、削器からの転用とみられる。7202・7208・7209・7211・7213は挟入石器である。刃部数は、7208が2個である以外はそれぞれ1個である。7209は挟入する刃部から続く側縁にも小さな2次加工が施されている。

石斧 (7214—7218) 5点は磨製石斧である。7214は基端が尖鋭で、刃部が凸刃・直刃の両刃石斧である。刃縁には潰痕が著しい。7215—7217は折損している。7216は右側面に擦り切り痕を残す。刃部は直刃で、片刃縁になる。刃縁には使用痕が生じている。7217は平刃・円刃の両刃石斧で、刃縁には小剥離痕を生じている。7215はやや小型の製品で、両端を失っている。刃部を失った7218は、両面、とくに表面に深い潰痕が著しい。敲石への転用であろう。

礫石器 (7219—7226・7228) 半円状扁平石器3点のうち、7223はI—B型で、一端に挟入部をもつ。左側縁には磨耗痕が著しい。7220・7224はII—A₂型で、左側縁には磨耗が著しい。

7219・7222は凹石である。7219はやや深い楕円形のくぼみが表面にあり、7222は不定形な浅い潰痕が表面の長軸方向に連続している。7225は磨石と凹石・有溝砥石の複合石器である。断面が三角形の扁平な直角二等辺が素材で、一端を折損している。磨石としての使用面は裏面の一側に寄った部分にあり、擦痕を伴っている。くぼみは3面にある。表面では長軸方向に走る溝状になり、裏面では複数が長軸方向に並んでいる。有溝砥石になる使用痕は裏面から側面に

けてみられるが、短い。7226は表面中央部に浅いくぼみ、その周辺に細長い擦痕多数がみられ、凹石と砥石の複合したものである。7228は卵形をした磨石で、両面が使用面である。

石製品 (7227・7229) 2点は円盤状石製品である。7227は扁平な窪円縁の側縁の一部に敲打を加えるが、ほかの部分には加工痕はみられない。7229は周縁を打ち欠いて成形したあと、剝離面の切り合いが作る稜線部を研磨している。両面も研磨されて平滑である。

IV区 (第363図一第374図7230—7398, 写真図版74—78・115・116・137・138・139・153・154)

土器(7230—7308) 7242以外は縄文時代前期の土器である。実測できたもののうち、7244・7250はI群1類に分類できる。2点は口縁部に捻紐圧痕3条をめぐらし、体部地文は横位の単節斜縄文である。7244の原体は非常に太い。胎土には多くの繊維を含む。

7251は器高21.3cmである。底部は揚げ底様になる。7236・7247は下半を失っている。7236は口縁部がわずかに波打っている。3点は単節斜縄文を地文にし、胎土には繊維を多く含む。7232・7239・7240・7246は11cm±～15.5cm±の器高をもつ小型の一群である。7232・7246は円筒形の器形をもつ。7232は底部がわずかに揚げ底様で、外縁が張り出す。底部外面には沈線状圧痕を伴う。7246は口唇端に爪形文～指頭状押圧痕を施す。底部は外縁が一部で張り出し、外面には沈線状の圧痕を伴う。2点は横位の単節斜縄文を地文にし、胎土には繊維を含む。7239は口縁部が大きく開き、向かい合う2ヵ所が高い波状になる。上面観は楕円に近い形状である。底部は外縁がわずかに張り出し、外面の周辺部には沈線状の圧痕を伴う。体部地文は太い単節斜縄文で、胎土には繊維をわずかに含む。7240は山形口縁になる。残存状況からみて1ヵ所が高くなるだけである。残りの他の部分は口唇部に両面から交互の押圧を加えるため、上面観が小波状を呈する。底部は外面がわずかに張り出す。体部地文は横位の単節斜縄文で、下端は無文である。胎土には繊維を含まない。以上の土器はI群2類である。

7243・7245・7248は網目状捻糸文が地文である。7243は底部外縁がわずかに張り出す。3点は胎土に繊維を含むが、7245はその量が少量である。7237・7238は上半を失っている。7237は体部が直立気味になる。斜行する捻糸文を密に施文し、下半の一部には単節斜縄文も併用する。下端はケズリを加えたあと捻糸文を横位に施文し、底面外面の周辺部の2ヵ所にも捻糸文をわずかに施文する。胎土には繊維をやや多く含む。7238の底部は一部が残るにすぎないが、外面には後述の7233と同様の圧痕を伴う。体部地文は複節斜縄文で、胎土には多くの繊維を含む。7233は体部下端から底部が残存する。底部はいくぶん揚げ底様になり、外縁がわずかに張り出す。外面には圧痕がみられる。圧痕はほぼ全面にみられ、ある程度規則的であることからみて、何らかの編み物の可能性はあるが、詳しくは分からない。体部地文は単節斜縄文で、胎土には繊維を多く含む。以上のうち、網目状捻糸文が地文である3点はI群2類に分類できる。7233・7238も同じ仲間と考えておく。ただし、7237はI群1類の第386図7534との類似性が強い。

7235は17.5cmの器高をもつやや小型の土器で、底部は外縁がわずかに張り出す。頸部には1条の沈線がめぐる。外反する口縁部は、体部から連続する綾絡文が一部にみられる以外は無文である。体部には一定幅に縦位の綾絡文を施文するほか、上半は単節斜縄文を地文にするが、下半は無文である。胎土には繊維をわずかに含む。7249は大型の破片である。単節斜縄文と2条1組の綾絡文を、口縁部には横位、体部には縦位に施文している。綾絡文2条の間の一部にはナデを加える。胎土には繊維をわずかに含む。2点はII群に分類できる。7241は下半を失っている。体部半ばが膨らみ、頸部へ向って内傾したあと口縁部が外反する。口縁部と体部上半には結束第1種羽状縄文、下半は縦位の燃糸文である。胎土にはやや多くの繊維を含む。施文原体の使い方は第305図6266などII群の土器に共通する。なお拓本7276は同一個体の破片である。

7234の口縁部は約1/2周の部分が残っている。それから推定すると4個2対の小波状貼付文を口唇端に伴い、向かい合う2個1対は山形状に高く、残りの2個1対は口唇部よりわずかに高い程度である。体部地文は単節斜縄文で、回転方向はやや乱雑である。I群2類に含まれる。

以上が前期の土器である。7242は台付鉢形土器である。口唇部には刻目が連続して小波状になり、その下には2条の平行沈線がめぐる。口縁部には縦位の小突起1個がつく。体部地文は横位の単節斜縄文である。高台部は器の部分に沈線1条がめぐり、一部に縄文が残る以外は無文である。晩期中葉大洞C式に相当する。7230は完形、7231は底部が残ったミニチュア土器である。7231は1/2周を揚げ底にしている。胎土には繊維を含まない。

拓本土器はすべて前期の土器である。口縁部破片のうち、I群1類に分類できるのは7262ほかである。口縁部に燃紐圧痕がめぐるのは7262・7265・7306で、7306は口唇端に指頭状押圧痕を伴う。口縁部に綾絡文帯をもつのは7269・7289である。以上の土器は胎土に繊維を含む。I群2類に分類できるものは多い。7254—7256・7268・7271・7277・7281・7287・7292・7299・7300・7303である。多くは単節斜縄文を地文にするが、7271は異条斜縄文、7287は網目状燃糸文である。口唇端に爪形文を伴うのは7299であるが、一部不連続の部分がある。7303は両面から交互に押圧され、上面観がゆるやかな小波状を呈す。体部には縦位の綾絡文を伴う。7256は内面、7281は内面と口唇端に外面と同じ原体を施文する。内面は口唇部から一定幅への施文である。以上の土器は7303を除いては胎土に繊維を含む。

II群に分類できるのは7296・7302・7308である。7296は燃紐圧痕3条にはさまれた狭く低い隆帯2条が文様帯を区画し、上には刺突を加える。口縁部への施文は結束第1種羽状縄文で、体部も同様であろう。7302は口唇部に横位、体部に縦位の燃糸文を施文する。3点は胎土に繊維を含む。III群に分類できるのは7258・7278・7279・7305・7307である。7258は低い波状口縁で、燃紐圧痕が文様帯を区画する。燃りの方向を異にした2本1組の燃紐を横線状や縦線状あ

るいは斜線状に押圧する。7278は波状口縁である。幅が10cm±の口縁部には銘条体を横線状と山形文状に押圧する。体部地文は縦位の結束第1種羽状縄文である。7307は肩部が張り出し、口縁部は外反する。口縁部は低い波状口縁で、銘条体圧痕が文様を構成し、体部地文は木目状燃糸文である。それぞれは胎土に繊維を含むが、その量は少ない。7258・7278・7305は1類、7307は2類に細分できる。IV群の土器は7304で、沈線文と刺突文による文様をもつ。胎土には繊維をわずかに含む。

体部破片は多い。網目状燃糸文が地文の7263はI群2類の土器である。結束第1種羽状縄文をもつものは7259・7280・7284・7286である。そのうち、7280は縦位である。7259は沈線が文様帯を区画し、口縁部が無文になることからみて、第364図7256に類似する。7259はII群9土器と近い関係にあり、そのほかや7297・7298はII群—IV群の仲間である。木目状燃糸文をもつ7261・7295はIII群2類あるいはIV群の土器である。そのほか、7257・7282は横位、7272は縦位の綾絡文、7267・7275・7294は燃糸文が地文である。7293は直前段合盛り、7291は結束第1種羽状縄文と縦位の燃糸文、7288も7291と同様と推定でき、7264は無節斜縄文、7285は単節斜縄文が地文である。7283は施文原体が不明である。以上のうち、7291はII群の土器である。

底部の一部を含む破片7252・7266・7270・7301は底部外縁がわずかに張り出し、7270は外面に沈線状の圧痕がみられる。体部地文は7270・7301が単節斜縄文、7266は複節斜縄文、7252は不明である。それぞれは胎土に多くの繊維を含む。7270はI群2類の土器である。そのほか、7273は単節斜縄文、7274は多軸銘条体の回転圧痕を体部地文にし、底部の一部を含む。

剥片石器 (7309—7383・7385—7388) 7309—7318・7320は無茎の石鏃である。7309・7310・7312・7315・7316・7318は平基で、7312・7318は先端部の一部を失っている。7311はわずかに凹基気味になる。7313・7314は尖基に入るであろう。7317は長さ5.7cmと大型で、平基である。7320は基部が残存しているが、大型のものである。7319・7370は石鏃である。7319は両端を失い、先端部の断面は菱形である。7370はつまみ部をもち、刃部は短い。7321—7341の21点は石匙である。7329・7330・7332が横形である以外はすべて縦形である。7329の刃部には2次加工痕がみられず、微細剝離痕が生じているだけである。縦形石匙の形状や大きさはさまざまである。7322・7323・7328は先端部の一部を折損している。7336は深く抉入する刃部を右側縁にもつ。7329は細身の尖頭形のもので、両面が2次加工の剝離面に覆われている。断面は菱形である。

7342—7349・7351—7356は削器である。7353・7354は直刃削器で、7354は右側縁に抉入石器としての刃部をもつ。7344は凹刃、7347・7349は横形、7346は尖頭、7342・7348は複刃の刃部形態をもつ。7345は楕円形の小型の削器である。7352は両面が2次加工の剝離面に覆われた粗製の削器である。7350・7369は削器状石器である。7350は尖頭形、7369は凸形の刃部をもつ。

7357—7360は掘器である。7359は円錐に近い形状をもつ。

折衝石器のうち、7362—7365・7368は1面、7366・7367は4面の折り面をもつ。7364・7366は2次加工による刃部をもつ。7371・7372・7374は折り面交差型の彫器で、刃部には微細刺痕痕や小さく細長い楕状の剝離痕が生じている。7371は非折り面型尖頭形の刃部を相対する位置にもつ。7373・7375—7378は2個1対の刃部をもつピエス・エスキューである。7376を除いては剝離面の奥行きが深く、互いに接触、あるいは対辺に達している。7373の上端は平坦面になる。7379・7380・7382・7383・7387は抉入石器である。刃部の数は7379が3個である以外は1個ずつである。7383は反対縁に削器としての刃部を伴う。7385・7388は抉入部が両側縁に連続してある鋸歯縁石器である。7361は両面を2次加工し、規則的な剝離による刃部を先端部にもつ篋状石器、7386は使用痕のある剝片である。

石斧 (7384・7390・7397) 7384は刃部を含む部分を失った打製石斧である。7390は刃部を含む一部が残存する磨製石斧で、凸刃・円刃の両刃石斧である。7397は長さが20.6cmを測る大型の磨製石斧である。基端と両側面、それらの付近の両面は研磨されていないため、敲打成形痕を残している。偏刃の両刃石斧であるが、刃縁は非常に厚く、使用痕なども認められない。

礫石器 (7391—7396・7398) 7392・7395・7396は半円状扁平打製石器である。7395・7396はII-B型である。7395は左側縁が磨耗している。7396は左側縁の凸形の部分に磨耗が著しい。その部分に施された2次加工の剝離面が作る稜線部も角がとれて滑らかで、長軸方向に走るものを主にした擦痕を伴う。7392は折損している。残存部には背部を含まず、左側縁が磨耗している。

7393は有溝砥石である。使用痕は両面にあるが、とくに表面に著しい。7394はやや扁平な亜円盤である。円形の深くはみが両面に2個ずつあるほか、表面には擦痕を伴った平滑面、それに接する一部には潰痕が生じている。凹石と磨石・敲石の複合石器である。7398は凹石で、不定形の深くはみ複数が両面にある。7391は石鎌である。基部から両側縁には両面からの2次加工を施している。先端部は両面に残る自然面を研磨加工し、鋭利である。長さが26.5cm、最大幅が12.8cmを測り、石質は粘板岩である。

石製品 (7389) ほぼ円の形状を示し、直径が2.6cm、厚さが1.2cmを計る。周縁部を打ち欠いたあと研磨を加え、側面には稜線部を作る。円盤状石製品の一つである。石質は細粒凝灰岩で、軟質である。

JⅢ区 (第375図・第376図7399—7413, 写真図版78・139・154)

土器 (7399—7402) 7402は上半を失っている。磨消縄文による4個1組の木の葉状文を2回繰り返し、その間に1個の弧状文と2条の垂線を配する。垂線は沈線によるもので、間には1個の貫通孔を伴う。特殊な形態の注口土器で、貝島貝塚第Ⅲ群土器などに相当し、縄文時代

後期中葉に位置づけられる。7400は小型の広口壺形土器で、底部は広く、中央部を円形に小さく区画し、その周辺に低い四脚をつける。口縁部には半歯状文、肩部には同意匠の変形文をもつ以外は無文で、内外面には赤色顔料が付着している。晩期前葉大洞B-C式である。7399は器高が17.2cmである。口縁部は無文で、肩部との境にはナデ痕があり、軽い段がつく。体部地文は、肩部が横位、その下位は斜位や縦位の単節斜縄文である。7401は上半を失っている。底部は揚げ底である。体部地文は横位・斜位・縦位の単節斜縄文で、下端は幅の広い無文帯である。2点は晩期の土器で、7399は中葉の時期のものとして推定される。

剥片石器 (7403-7409) 7403-7406は縦形石匙である。7406は細身で尖頭形のものの破片である。7408は小型の槌器で、刃部には裏面からの2次加工を施す。7407は非折り面型の彫器である。非常に狭い幅で残った打面が刃部になり、裏面からの小剥離痕が生じている。7409は4個2対の刃部をもつピエス・エスキーユである。左側縁は平坦面で、剥離痕は表面に生じているだけである。

石斧 (7410・7411) 7410は基端を失った平刃・円刃の両刃磨製石斧である。刃部と基端寄りの部分のそれぞれの両面は研磨されているが、ほかに敲打成形痕を残す。刃縁は磨耗している。7411は定角磨製石斧で、平刃・ほぼ直刃の両刃石斧である。基端は非常に小さく、潰痕を伴う。刃縁はわずかに磨耗している。

礫石器 (7412・7413) 7412は石皿で、縁を部分的に欠いただけのほぼ完形品である。三角形に近い形で、1辺が凸凹形になる。皿面は縁がいく分高く作り出される。使用の結果、ゆるやかな湾曲を示すくぼみが形成され、深いところでは周囲の面よりも3cmほど低くなる。裏面には3個の脚が付き、2個はほぼ円形、1個は長楕円形である。長さは45.8cm、最大幅が26.4cm、脚も含めた高さが7.0cmを測り、石質は安山岩である。7413は磨石と敲石の複合石器である。いく分扁平になる卵形の礫で、磨石としての使用面は両面と側面の一部、敲石としてのそれは側面と両端にある。

JV区 (第378図7446, 写真図版78)

土器 (7446) 肩部付近に最大径があり、口縁部が外反気味になる。口唇部には刻目が連続し、口縁部には幅の広い平行沈線を描文する。体部地文は横位の単節斜縄文である。縄文時代晩期中葉大洞C₂式に相当する。

JV区 (第376図-第378図7415-7445, 写真図版78・139・140・154)

土器 (7415) 7415は上半を失っている。底部はわずかに揚げ底縁になる。体部地文は単節斜縄文のほか複節斜縄文がみられるが、はっきりしない。体部下端は無文になる。胎土には繊維を含まない。

剥片石器 (7416-7439・7442・7443) 7416ほかは石鏃である。無基石鏃のうち、7418がほ

は平基、7417・7419が凹基、7420が円基、7416が尖基である。7421は有茎石鏃である。石鏃のうち、7422・7426・7427は縦形、7424・7425は横形である。細身の7426は刃部が途中で屈折し、先端部の断面は菱形である。7428は複刃削器である。7438は両側縁に凹刃の削器刃部をもつほか、左側縁と先端部に挟入する刃部を伴う。7439は凹刃削器に近い。7429は周縁部を両面加工し、上端には表面から、下端には裏面から急傾斜の2次加工を施した搔器である。7430は大型、7434は小型の楕円形の搔器で、ともに打面を残している。

7423・7431—7433・7436は2面の折り面をもつ折断石器である。そのうち、7432・7433・7436は刃部に2次加工を施している。7435は折り面交差型の彫器で、裏面からいく分大きな剝離痕が生じている。7437は挟入石器である。左側縁に2個、右側縁に1個の大きな刃部がある。7442・7443は鋸歯縁石器で、7443は一部を除いた周縁部が刃部である。

石斧 (7440・7441・7445) 7440は小型の打製石斧で、両刃である。7441は刃部を失った打製石斧である。7445は基部を失った定角磨製石斧で、平刃・直刃の両刃石斧である。

礫石器 (7444) 半円状扁平打製石器である。2次加工の剝離面は裏面によくみられる。左側縁は磨耗している。II-B型である。

JVII区 (第379図—第380図7447—7482, 写真図版79・140)

土器 (7447—7451) 7450は上半が残存している。低い4単位の波状口縁になる。燃紐圧痕3条の間を横2列の刺突文で充填して文様帯を区画する。口縁部は燃紐圧痕による菱形文ほかの文様意匠をもち、体部地文は結束第1種羽状縄文で、胎土には繊維をわずかに含む。縄文時代前期III群1類に分類できる。7448は文様帯を区画せず、口縁部から体部まで木目状燃糸文を施文するが、片側は燃りが弱く、節は細長くなっている。胎土には繊維を含まない。前期III群2類あるいはIV群に共存するものであろう。なお7449は同一個体の破片である。7447は鉢形土器で、底部はわずかに揚げ底になる。体部は内湾気味になるが短く、口縁部は外反する。器壁は厚く、無文である。胎土には繊維を含まず、小礫が多い。器形などからみて、前期末葉～中期前葉に位置づけられるであろう。

拓本土器7451は文様帯を横2列の絡条体圧痕で区画し、口縁部・体部とも結束第1種羽状縄文を施文する。口縁部の幅は2.8cmである。胎土には少量の繊維を含む。前期II群である。

剣片石器 (7452—7480) 石鏃はすべて無茎である。7455—7457は凹基、7452は尖基、先端部を失った7453は円基である。7454は五角形鏃といわれるものである。石鏃のうち、7458・7461・7466は縦形、7459・7460・7464・7465・7467は横形である。7460は折損している。7471は複刃削器、7470は凸刃削器、7468は尖頭削器である。7469はほぼ直刃に近い刃部をもつ削器である。7462・7463も削器であるが、7462の2次加工は粗く、7463は両面加工をしている。7474・7475・7477は搔器で、7477は折損している。7475の刃部は鋸歯縁状である。

7473は1面、7474は2面の折り面をもつ折断石器で、7472は刃部を2次加工している。7476は折り面と打面の交差部を刃部にする彫器で、刃部は磨耗している。7478は2個1対の刃部をもつビエス・エスキューで、素材は非常に厚い。剥離痕の奥行きは深く、互いに接している。7479は抉入石器である。7480は大型の鋸歯縁石器である。両面からの加撃によって刃部を作る。

石斧 (7481) 定角磨製石斧で、基端を含む部分が残っている。

礫石器 (7482) 凹石と磨石の複合石器である。いく分扁平な凹円状で、凸曲面になる表面に不規則な深いくぼみが複数ある。裏面は磨石として使用されて平坦面になり、小さなくぼみ1個を伴う。多孔質の素材のため、自然のくぼみも両面に多数ある。

KVIII区 (第381図—第383図7483—7516、写真図版79・116・140・154)

土器(7483—7511) 7486は縄文時代前期の土器である。円筒形の器形を示し、爪形文を伴ったいく分広い隆帯が文様帯を区画する。口縁部は一部が残るにすぎないが、撚りの方向を異にした2本1組の撚紐を横線状、斜線状に押圧している。体部地文は多軸絡条体の回転疔痕である。胎土には繊維を含む、III群に分類できる。

7484は高台部が残り、上半には体部からの単節斜縄文が続くが、下半は無文である。胎土にはわずかに繊維を含む。7483は体部下端から高台部が残る。柄の部分には1条の沈線文がめぐり、一部には縄文が残る。体部地文は単節斜縄文で、晩期大洞C₁式以前の前半型式に相当する。

7487・7488は底部を含む体部下半の一部が残る。ともに体部地文は単節斜縄文で、下端は幅の広い無文帯になる。7485は体部だけが残存する。体部は直線的に外傾する。地文は横位や斜位の単節斜縄文で、下端に無文帯の部分が残る。7485は晩期のものと推定される。

拓本土器7496ほかは前期の土器である。7496は絡条体と撚紐の疔痕が文様帯を区画し、口縁部・体部とも結束第1種羽状縄文を施文し、口唇部にも1条の撚紐疔痕がめぐる。7491は横2列の円形竹管文が文様帯を区画し、口縁部には多軸絡条体を回転施文する。2点はII群に分類できる。III群の土器は多い。7493・7497・7499は肩部が張り出し、口縁部が外反する壺形土器に近い器形をもつ。7493の口縁部の文様構成は絡条体疔痕と刺突文を主体に、撚紐疔痕・縦位の綾格文と多様な施文具をもちいる。体部地文は結束第1種羽状縄文で、縦位と横位の綾格文を伴う。7497は波状口縁で、撚りの方向を異にした2本1組の撚紐を押圧する。以上の3点は胎土に繊維を含む。7490は刺突文を伴った隆帯が文様帯を区画し、口縁部には撚紐を横線状に押圧する。7492は刺突文が文様帯を区画し、口縁部には絡条体を押圧施文する。2点は体部地文が木目状撚糸文で、胎土には繊維を含む。7495・7500・7502は絡条体、7507は撚紐の疔痕が口縁部文様帯を構成する。体部地文を知ることができる7500は結束第1種羽状縄文をもつ。それぞれは胎土に繊維を含む。幾可学的な文様をもつ7507は1類、そのほかは2類に細分できる。7489は口唇端に小突起を伴い、狭い口縁部には沈線による鋸歯状文を施文する。体部地文は木

目状燃糸文で、胎土には繊維を含まない。IV群に分類できる。7508はII群あるいはIII群、7511はIII群2類あるいはIV群の土器の体部破片である。

以上は前期の土器である。7509は沈線による渦巻文をもつ中期中葉大木8b式の土器である。7494は複合口縁状に肥厚し、体部は無節斜縄文が地文である。口縁部には横位楕円形文、体部には曲線文を沈線によって描く。7510は沈線文以外は無文である。7498は小突起が口唇端につき、単節斜縄文の上に沈線による入組文を描き、一部を磨消する。7501と7506は同一個体の破片で、平縁の深鉢形土器である。口縁部には沈線文による入組文をもつ。7494・7510は後期前葉、7498は後期末葉、7501・7506は晩期前葉大洞B式の土器である。7504は2個1対の小突起が口唇部につき、その間には刻目が連続する。口縁部の文様も平行沈線間に刻みを入れる。7505は沈線で区画した口縁部に浮彫り様の手法で半円弧状文ほかを描く。2点は晩期前半型式のもので、7505は大洞B-C式に相当する。7503は碗形の土器で、平行沈線3条がめぐるほか、斜行する一部がみられる。

銅片石器(7513-7516) 7514は先端部を折損した無茎の石鏃、7513は横形石匙である。7515は片面加工の匱状石器である。7516はひとつの折り面をもつ折断石器で、刃部には微細刺離痕が生じている。

礫石器(7512) 石皿である。一部を失っているが、小型のものである。使用の結果、皿面は著しくくぼみ、縁は高く残る。裏面は研磨して形を整えている。

7. その他の土器

その他の土器としたのは、先の包含層から出土した土器以外で、主に表土や遺物包含層としての性格をもつII層、あるいは出土地点や出土層位が不明な土器で、そのほかには土製品を一部含む。

FV区(第384図7517, 写真図版80)

土器(7517) 上半が残存する大型の破片である。単位は不明であるが、波状口縁になる。頸部にめぐる隆起線は波状部ほかで口唇部へはねあがり、それに沿って刺突文が連続する。内面では波状部に鱗状突起を伴うほか、頸部が隆帯状に肥厚する。体部の文様は沈線で区画したあと縦位の単節斜縄文で充填する。無文帯の接触部には鱗状隆帯、縄文区画帯の一部には沈線に沿う刺突文を伴う。縄文時代中期末葉大木10式である。

GIII区(第384図7518-7520, 写真図版80)

土器(7518-7520) 7518は底部を失ったやや小型の土器である。円筒形の器形をもち、口唇部は内外面から交互に押圧されるため、上面観が小波状を呈する。網目状燃糸文が地文で、

胎土には繊維を含まない。縄文時代前期I群2類に分類できる。7519は上半が残存する。8単位の波状口縁になり、波状部の内面には鰭状突起を伴う。口縁部は突起部の下位に弧状沈線文を施文するほか、刺突文が密な状態でみられる。体部文様帯は逆S字状の無文帯を5回繰り返す。その接触部には両側に刺突文を伴った隆帯がある。中期末葉大木10式である。7520は鉢形土器で、口縁部には3条の平行沈線がめぐり、口唇部に刻目が連続する。体部地文は横位の単節斜縄文である。晩期の前半型式のもので、大洞C₁式に近いものであろう。

GⅦ区 (第384図7521・7523—7525, 写真図版80・81)

土器 (7521・7523—7525) 7524は小型の壺形土器である。体部が球状に膨らんで丸底になり、口縁部は内傾して短い。口唇部は外方へ屈折している。肩部には隆帯がめぐり、その上に1/4周毎につき2個1対の小突起間には沈線を引く。体部文様帯は上下を隆沈線で区画し、浮彫り様の手法による同一の文様意匠を4回繰り返す。そのほかは無文で、内外面には赤色顔料が付着している。7523は小型の広口壺である。体部は球状に膨らみ、丸底である。口縁部はいく分外湾する。口唇部は外方へいく分か張り出し、肩部には浅い沈線を引いて細い隆起線を残す。内外面ともていねいに研磨されて無文であり、赤色顔料が付着している。7525は台付鉢形土器である。沈線で区画された文様帯は体部上半にあり、地文である横位の単節斜縄文を施文した上に浮彫り様の手法によって文様を構成するが、破損部分が多く、詳細は不明である。高台部は無文である。7521は壺形土器である。体部半ばに最大径があり、直立する口縁部は短い。口縁部と体部下端は無文帯になり、その間には横位の単節斜縄文を施文する。以上の土器はすべて縄文時代晩期の土器で、7524は前葉大洞B—C式、7525は中葉大洞C₁式に相当し、7523は器形からみて大洞B—C式あるいは大洞C₁式に相当するであろう。

HⅡ区 (第385図7526, 写真図版81)

土器 (7526) 上半約1/3周程度の残存である。外反する大波状の口縁になり、波状頂部には深い抉りが入る。口唇部は外傾する。隆帯が頸部にめぐり、波状部からは隆帯が垂下し、それから離れた両側の位置には直方体の小突起が付く。口縁部に施文される原体は燃紐と絡条体の押圧痕で、燃紐は隆帯や小突起の上および縦位にみえる部分、絡条体は口唇部沿いや垂下隆帯の両側および頸部隆帯の上位に施文される。口唇部は波状部をはきんで施文原体が異なる。体部地文は結束第1種同撓りの回転圧痕である。縄文時代中期初頭円筒上層式aに相当する。

HⅣ区 (第384図7522, 写真図版80)

土器 (7522) 鉢形土器である。体部は直線的に外傾して肩部が張り出し、口縁部は外傾する。2個1対の突起が口唇部に1/4周毎につき、その間には刻目が連続している。口唇部の内面には1条の沈線がめぐり、文様帯は口縁部から肩部にかけての部分にあり、工字文を文様意匠とするほか、その下位には沈線区画の狭い縄文帯がめぐり、体部地文は横位の単節斜縄文であ

る。縄文時代晩期中葉大洞C₂式である。

HVII区 (第385図・第386図7527—7534, 写真図版81—83)

土器 (7527—7534) 7534は口縁部に綾絡文帯をもち、体部は斜位の燃糸文と下端に一部みられる単節斜縄文を地文にする。胎土には繊維を含む。縄文時代前期I群1類に分類できる。7530は円筒形の器形であるが、器高に比べると口縁部と底部の径が大きく、ずんぐりした形になる。口唇部は肥厚し、下方から粘土を押し上げて突起状の部分を作り出す。その間には斜位の刻みが連続し、円形凹文を一部に伴う。口縁部は平行沈線とその間を充填する爪形文を含む指頭状押圧痕が文様を構成する。磨耗が著しいが、体部地文は結束第1種羽状縄文とみられる。胎土には少量の繊維を含み、前期IV群に分類できる。

7532は浅鉢形土器である。体部は急傾斜で外傾し、口縁部では内傾に転ずる。口縁部は隆帯で区画され、前面には渦巻文を伴った突起がつくが、数は不明である。そのほかは燃紐圧痕が文様を構成し、口縁部が長楕円形文、体部が波状文・蛇行垂下文・小渦巻文を意匠とする。地文は横位の単節斜縄文である。中期前葉大木7b式に相当する。

7531は低い台が付いた鉢形土器である。口唇部そのものは失っているが、口唇部と体部上半にめぐる刻目を伴った沈線が文様帯を区画し、磨消縄文による入組文を意匠とする。体部地文は単節斜縄文で、下端から台部は無文である。7529は台付鉢形土器である。2個1対の小突起が口唇部につき、その間には小波状になる。口唇部の内面には浅い沈線がめぐる。口縁部文様帯は狭く、平行沈線間に刻目が連続する。台部は、つけ根の部分を低い隆帯状に作り出し、裾の部分は刻目帯と縄文帯の文様になる。体部地文は横位の単節斜縄文である。7528の口唇部には2個1対の小突起が1/4周毎につき、その間には刻目が連続する。口縁部は無文である。体部下端を失っているが、台付の鉢形土器になる。7533はいくぶん大型の鉢形土器で、口縁部には3条の平行沈線がめぐる。7528・7533の体部地文は横位の単節斜縄文である。7527は粗製の深鉢形土器である。地文はややふとめて燃りの弱い単節斜縄文で、横位と斜位に回転施文する。上半の一部には横位の綾絡文を伴う。以上は晩期の土器である。7531は前葉大洞B式、7529は中葉大洞C₁式である。7528・7533は大洞B—C式あるいは大洞C₁式に相当するであろう。

IIII区 (第386図7535, 写真図版83)

土器 (7535) 大型の破片である。燃紐圧痕によって上下をはさまれ、上に刺突文を伴う低い隆帯が文様帯を区画する。口縁部の文様は絡条体圧痕による菱形文の意匠、体部地文は結束第1種羽状縄文である。胎土には少量の繊維を含み、縄文時代前期III群1類に分類できる。

IVII区 (第386図—第388図7536—7544, 写真図版83・84)

土器 (7536—7544) 7538は底部を含む体部下端を失っている。円筒形の器形をもち、4単位の低い波状口縁になる口縁部は燃紐圧痕による文様をもつ。横線状・斜線状のものを主体に、

一部には垂線状のものを加えている。体部地文は結束第1種羽状縄文である。7537は上半が残存している。甕形土器に近い器形であるが、体部は直立気味で、外湾する口縁部は4単位の低い波状になる。口縁部文様帯は、撚りの方向を異にした2本1組の撚紐を横線状に押圧するほか、波状部には垂線状の2条を施文し、交差する部分には縦2列に刺突を施す。また体部との境にも横2列の刺突文をめぐらせる。体部地文は結束第1種羽状縄文である。2点は胎土に繊維をわずかに含み、縄文時代前期Ⅲ群2類に分類できる。

7543は下半を失っている。波状口縁で、縦位の単節斜縄文を充填した楕円形文と逆U字状文を文様意匠とするものであろう。中期後葉大木9式の土器である。

7536は鉢形土器の上半が残存する。口唇部には2個1対の小突起とその間に低い山形の小突起がつき、前者は1/6周毎にみられる。また口唇部の一部には刻みを加えている。平行沈線で区画された文様帯は磨消縄文による変形大腿骨文の意匠をもつ。そのほかには、口縁部の区画沈線の下位には2個1対の小突起が横位につき、口唇部の内面には1条の沈線がめぐる。地文は横位の単節斜縄文である。7540は鉢形土器で、下半を失っている。口唇部と頸部には密な刻みを施し、頸部のもは多くの単位が集合している。また口唇部の内面には1条の沈線、肩部には平行沈線がめぐり、体部地文は横位のLRとRLによって羽状縄文になる。7544も鉢形土器である。外傾して立ち上がった体部は上部で内湾して口縁部に達する。底部は掲げ底である。口唇部には山形の小突起1個がつくほか、刻目が連続し、その下位には2条の平行沈線がめぐる。体部地文は斜位の単節斜縄文である。7542は壺形土器である。体部は球形に膨らみ、口縁部は外傾する。口唇部および肩部には沈線がめぐり、肩部は刻みを伴った小突起が横位につく。口縁部は無文で、体部地文は横位のLRとRLである。7541は体部下端から高台部が残存している。高台部には上下に2個1対になる三叉文の意匠になる透しを5回繰り返す、その間には小円孔1個ずつを穿孔する。香炉形土器の高台部の可能性がある。7539は体部上部に最大径をもつ粗製の深鉢形土器である。口縁部はいく分幅広く肥厚し、一部に単節斜縄文がみえるものの、大部分は無文である。頸部にはやや幅の広い無文帯が形成され、体部地文は横位と縦位の単節斜縄文である。底部外面には網代痕を伴う。以上の土器のうち、7536・7540は晩期中葉大洞C₂式の土器である。7541は文様意匠からみて晩期前葉大洞B-C式のものであろう。7542は大洞C₂式あるいはC₃式、7544C₁以前の大洞前半型式の土器である。7539は口縁部の作りからみて、後期前葉に位置づけられる。

JIII区 (第388図7545—7548, 写真図版84・85)

土器 (7545—7548) 7548はやや小型の壺形土器である。肩部には有孔の突起が向い合う位置につくが、1個は剥落している。その孔から続くいく分幅の広い垂線は体部下端まで引かれている。文様帯は体部上半にあり、沈線による横位のU字状文を4回繰り返す。ほかの部分は無

文である。7547は高台付の深鉢形土器である。体部から口縁部にかけては直線的に外傾している。体部地文は横位の単節斜縄文で、磨消縄文による入組文状の文様帯が下半にあり、その下位から高台部は無文である。2点は縄文時代後期の土器で、7548は前葉十腰内I式、7547は中葉貝島塚Ⅲ群土器などに相当する。

7545は高台付鉢形土器であるが、高台部を失っている。口唇部には2個1対の小突起が連続する。文様帯は沈線で区画され、磨消縄文による大腿骨文を意匠とする。文様帯上部には小突起1個が縦位につく。文様帯の下位は横位の単節斜縄文帯で、下端は平行沈線が区画する。高台部の付け根にも沈線がめぐり、それに接して短い曲線がみられる。7546は台付鉢形土器の体部下端から高台部が残存する。体部地文は横位の単節斜縄文である。高台部の付け根には太い1条の沈線がめぐり、それに接する部分と裾には刻目文が連続するが、上位のそれは狭く低い凸帯状の部分に施文している。7545は晩期中葉大洞C₁式であり、7546は大洞B-C式に相当するものであろう。

JIV区 (第388図7549・7550, 写真図版85)

土器 (7549・7550) 2点は台付鉢形土器で、7550は台部を失っている。7549は低い小突起1個が口唇部にあるほか、口唇端には沈線を引く。口縁部は無文である。平行沈線が文様帯を区画し、磨消縄文による変形大腿骨文の意匠をもつ。そのほか、肩部には刻目文が連続し、2個1対の小突起1個が縦位につく。体部地文は横位の単節斜縄文である。台部は裾に単節斜縄文が残る以外は無文である。7550は2個1対の小突起が口唇部に連続的につき、その間には浅い刻目を施す。口縁部には平行沈線がめぐるほか、横長の小突起1個がある。文様帯は沈線が区画し、磨消縄文による大腿骨文を意匠とする。地文は横位の単節斜縄文で、体部下端から台部にかけて部分は無文である。2点は縄文時代晩期中葉大洞C₁式のものである。

JVII区 (第388図・第389図7551-7555, 写真図版85)

土器 (7551-7555) 7554は6単位の波状口縁で、そのうち3カ所は高く、その間に低い波状部がある。7555は4単位の波状口縁で、そのうち向かい合う位置にある2カ所が高くなる。2点とも、肥厚した口唇部には沈線を引き、その末端の多くは小渦巻文になる。その下位は無文帯で、体部には隆沈線による有縁曲流渦巻文を主とした文様を展開する。体部地文は7554が複節、7555が単節の斜縄文で、いずれも縦位である。2点は縄文時代中期中葉大木8b式である。

7552は台付鉢形土器であるが、多くの部分を失っている。口唇部には刻目文が連続する。口縁部は無文で幅が狭い。肩部にめぐる3条の平行沈線の下位には磨消縄文による変形大腿骨文が展開し、体部下端は無文になる。台部の付け根には平行沈線を引き、刻目文がその間に連続し、裾部には沈線1条がめぐり、体部地文は横位の単節斜縄文である。7553は丸底の皿形土器である。口唇部には3条の平行沈線がめぐり、上位2条の間には小刺突文を充填する。文様帯

は体部一帯に展開し、大腿骨文を意匠とする。底部とは2条の沈線が区画し、底部中央部には沈線による小円文を伴う。体部地文は横位の単節斜縄文である。7551は台部である。付け根の部分と裾部に沈線がめぐり、その間には裾部の沈線と連結する横位屈折沈線文を5回繰り返す。沈線は幅が広く、全体としては浮彫り様の感じになる。7552・7553は縄文時代晩期中葉大洞C₁式である。7551は大洞B—C₁式に相当するものであろう。

KIII区 (第390図7558, 写真図版86)

土器 (7558) 壺形土器であるが、口縁部を失っている。体部は球状に膨らみ、磨消縄文による曲線的な文様が施されている。地文はLRを横位と縦位に施文して羽状縄文にするが、一部では斜縄文だけになる。文様は3回の繰り返しである。縄文時代後期中葉の土器で、十腰内IV式に相当する。

OIII区 (第389図7557, 写真図版86)

土器 (7557) 底部を含む下半を失っているほか、残存部でも1/2周程度を失っている。口唇部には表面からの押圧痕が連続し、その下位は幅の狭い無文帯になる。体部地文は横位の無節斜縄文で、帯状の施文をする。縄文時代晩期前半期の型式の土器である。

OVI区 (第389図7556, 写真図版85)

土器 (7556) 大型の破片である。口縁部は無文で、体部には沈線区画のJ字状無文帯を繰り返し、隣あわせになる部分ではそれぞれに刺突文を施文する。縄文帯は充填手法によるものである。縄文時代中期末葉大木10式の土器である。

RIV区 (第390図7559・7560)

土器 (7559・7560) 7559は台部であるが、裾の部分も含め多くを失っている。地文は横位と斜位の単節斜縄文で、上限を2条の沈線で区画し、磨消縄文による文様を展開する。7560は壺形土器の口縁部で、波状口縁になる。体部との境に1条の沈線がみられる以外は無文である。7559は東北地方北半の弥生時代前期二枚橋式相当の土器である。7560も同時期のものと推定される。

TIV区 (第390図7561, 写真図版86)

土器 (7561) 口唇部の一部を含めて残る筒形土器である。U字形文とその逆転したものが向かい合い、内部には竹管文を充填する。文様は2回の繰り返しで、その間は2条の縦位沈線によって区画される。文様構成や周辺からの出土土器からみて、縄文時代中期末葉大木10式に相当するものと推定される。

表採資料 (第390図7562—7564, 写真図版86・155)

土器 (7564) 小型の鉢形土器である。6単位の波状口縁で、その間の口唇部には沈線を引き、頸部には沈線がめぐり、口縁部は弧状の沈線文がみられる以外は無文である。体部は縦位

や斜位の単節斜縄文を地文とし、下端には1条の沈線がめぐる。底部外面は4つに区画され、それぞれを「状の沈線文が埋める。東北地方北半の弥生時代前葉二枚橋式に相当するものであろう。

土製器 (7562・7563) 7562は下半を失った板状の土偶である。胸部に長方形凹面をもつほか、ほぼ左右対称であることを意識した小波状垂線や垂線ほかの文様を沈線によって両面に施している。胎土に繊維を含む縄文時代前期のものである。7563は滑車形耳飾りである。両面には小円形刺突文を施文する。縄文時代中期末葉の時期のものである。 (三浦 謙一)

III 要約

1. 縄文土器

(1) はじめに

本調査では重量にして約6,000kg弱の縄文土器が出土した。時期別の数量は前期に位置づけられるものが卓越し、中期・晩期・後期の順に続く。早期の土器は出土していない。

本報告書では、比較と記載のため、数量の多い前期の土器についてのみ任意の分類群を設定した。そのほかの時期の土器は、従来の型式観や編年観を基本に、型式名やある程度指標となる遺跡での土器分類群にできるだけ対応させた記載をしてきた。本項では、遺構群、なかでも住居址との関連が強い前期および中期後葉～末葉の土器について型式学的な特徴を記載し、従来の型式観・編年観と比較してゆく。そのほかの時期のものについては土器集成図への掲載と簡単な記載をする。

図版 i - v iii は各時期の代表例を掲載したものである。それらには一連の番号をつけ、図版に使用した遺物番号を() 内に記した。したがって以下の記載には土器集成図の通し番号を使用するが、説明に必要なそれ以外の土器は、6-20のように図版番号-遺物番号で示した。なお、集成図の土器は図版編のものに一部修正を加えて使用している。

(2) 前期 (図版 i - iv)

前期の深鉢形土器の器形は大きくは2つの型に分けることができる。ひとつは口縁部一体部未分化型のもので、これをA型とする。円筒土器の名称の由来にもなった円筒形基調のものに代表されるように、口縁部から底部までの間には隆帯を別にすれば明確な器形変換点をもたない。ほかのひとつは口縁部一体部分化型のもので、これをB型とする。口縁部と体部は部位的に異なった器形をもつ。代表的な器形は、体部はゆるやかに外傾して立ち上がり、半ばあるいは上半がいくぶん膨らんだあと、その上位は内傾に転じ、口縁部が外傾あるいは外反するものである。2型は個別的にはさまざまな変異形を含む。なかには大木6式に特徴的な長脚付深鉢形土器などのように、2型に含めることができないものもある。なお、文様区画帯をもつA型の場合、便宜的に頸部としてその部位を指して記載していることがあるが、それは器形的にみた頸部ではなく、文様帯の構成による口縁部一体部分化型という意味での使用である。

前期の土器には任意の分類群 I 群-IV 群を設定し、I 群と III 群はそれぞれ1類・2類に細分した。これまでの記載のなかでは、従来の型式観との関連から分類群のある程度の型式的な枠としても使用し、識別形質の一部をとらえてある分類群へ含め、時間的な目安を与えている場合がある。

a) I 群

I 群は1類と2類に細分した。

1類(2・4・9・13・15・19):この類には、口縁部に、①横位の綾絡文帯、②撚紐瓦痕文帯をもつものを分類した。①は2・3・13・14・19である。器形はすべてA型である。3・13は低い波状口縁である。14は口唇部が狭い繩文帯になり、その下位に綾絡文帯が形成される。体部と同じ原体は、2・3が口唇部、13が底部外面にも施文される。地文は、2・3が単節斜縄文、14が複節斜縄文、3・19が燃糸文で、19は下部に単節斜縄文を併用する。そのほかには40-173などがある。19を除いては胎土に繊維を含む。126-2317は燃糸文が地文であるが、糸は太く、間隔が広い。79-1292は山形口縁で、口唇端には指頭状押圧痕を伴う。285-5929や345-6908ほかにも刺突文や指頭状押圧痕を口唇端に伴う。

上述の土器は文様区画帯としての隆帯を伴わないが、破片10-156、24-373、31-552、32-553などは幅の広い隆帯がめぐる。553は単節斜縄文・円形刺突文・横位沈線文を隆帯の上に施文し、口唇端にも刺突を加える。体部は隆帯下位の横位綾絡文帯と縦位燃糸文をもつ。127-2317は口唇部と頸部に沈線を引き、その間を綾絡文帯にする。

②に含まれるのは4・9・15である。4の器形はB型で、底部はわずかに揚げ底様になる。いずれも単節斜縄文が地文で文様区画帯は伴わない。355-1249もこの仲間で、体部地文は前々段反摺りと推定される。いずれも胎土に繊維を含む。破片のなかで特徴的なくつかをあげると、94-1608・100-1718ほかは口唇端に指頭状押圧痕を伴う。116-2134は2条の撚紐瓦痕が口縁部にめぐり、地文は横位綾絡文1条を伴った単節斜縄文である。内面は口唇部から幅5cm±の部分に単節斜縄文が施文される。

2類(1・5・8・10-12・16-18・21-26):この類に含めたものは、口縁部から底部まで単一の地文をもつが、661のように綾絡文を全面に伴う例がある。地文以外の装飾は、口唇端に加えられる刺突文や貼付文ほかがある。器形は大部分がA型であるが、91-1555のようにB型のものもある。

2類の土器は住居址から大量に出土した。ここではそれらの類縁関係をいくつかの相似点からもとめてゆきたい。

まず、I型としてきた底部の作りについて説明する。底部が剝離・破損したときの底面観が㊸になるものがある。それは、体部と底部は一体化しているが、円盤状の核になる部分を別につくるため生じたものである。大きさや核部分の作りには若干の変異形を含む。

網目状燃糸文をもつのは10・16・21・26である。16・21の底部は外縁が張り出し、16は揚げ底様になる。10・16は口唇部が両面から交互に押圧され、上面観が小波状を呈する。75-1251なども同様である。21・26は胎土に少量の繊維を含むが、10・16・1251は含まない。同じ地文をもつ75-1252は単位が不明であるが、山形口縁になる。口縁部はわずかに肥厚し、無文帯になる。胎土には繊維をわずかに含む。76-1261は底部の作りがI型で、外面にはスグレ状瓦痕

と沈線状圧痕を伴う。

10・16ほかの上面観が小波状を呈する特徴は無節斜縄文を地文にする24にも共通する。24は胎土に繊維を含まない。18は口縁部が1カ所で高い山形口縁になる点は1252に、残りの部分に両面からの交互の押圧を施す点は24ほか類似する。17は向かい合う2カ所が山形口縁になる。上面観は楕円に近い形状を示し、底部外面には沈線状の圧痕を伴う。17・18は単節斜縄文が地文で、18が胎土に繊維を含まないが、17は少量を含む。64-1078は3個1対の小突起が口唇端につくが、破損部分が多く数は不明である。そのほかの部分は上から押圧するため、側面観が小波状を呈する。単節斜縄文が地文で、胎土には繊維を含まない。

以上、網目状捺糸文をもつ一群とその特徴のひとつである上面観が小波状を呈する点や山形口縁である点から類縁的に近いと考えられる土器群について述べてきた。16と同じ住居址から出土している5は、単節斜縄文のほか、横位の綾格文を全面に施文する。底部外面にはスグレ状圧痕を伴う。また、同じ住居址から出土した39-670は体部への施文が5と同じである。670は底部の作りがI型で、胎土には少量の繊維を含む。16とは繊維の有無に違いがあるが、小礫を多く含む胎土や焼成は非常に良く似ている。

口唇端に施文するのは1ほかである。1の体部下端がすぼまる器形が2類の土器のなかでもやや特異である。1・6は小円形刺突文、7は爪形文を含む指頭状押圧痕が口唇端に連続する。いずれも体部地文は単節斜縄文で、1・6は胎土に繊維を含まない。破片では、126-2304・2312ほか口唇端に刺突文を伴い、網目状捺糸文が地文である80-1320も指頭状押圧痕を伴う。8・12は体部と同じ原体を口唇端に施文する。8は単節斜縄文、12は捺糸文が地文である。8は底部の作りはI型で、揚げ底様になって外縁が張り出す。8は胎土に少量の繊維を含み、12は含まない。口唇端に体部と同じ原体を施文する破片は59-1003をはじめ多数ある。さらに内面にも施文する例は47-815、66-1108ほかがある。42-714は口唇端に指頭状押圧痕、頸部に区画の隆帯を伴い、内面には単節斜縄文を施文する。

底部へ施文する例は多い。そのうち、底部外面へ体部地文と同じ複節斜縄文を施文する20・25はI型の作りで、外縁が張り出す。2点は胎土に繊維を含む。75-1255ほかも底部外面へ施文し、77-1268はI型の作りである。42-713、77-1263は内外面へ施文し、1263はI型の作りである。713は外面の一部に沈線状の圧痕も伴う。それらの特徴は施文が周辺部へおよばず、I型のものではその核になる部分へ施文されることである。306-6292は核になる円盤状の部分が残存している。この例は内面に刺突を加え、外面には単節斜縄文を施文する。

5ほかはスグレ状圧痕を伴い、46-805にはとくに良好な状態でみられる。805は低い波状口縁で、底部は揚げ底様になり、外縁が張り出す。胎土には多くの繊維を含む。圧痕は地文を施文する例とは違い、周辺部に顕著である。もちろん、揚げ底様になることと関係することであ

る。沈線状の圧痕としたものは周辺部に主に残り、幅は3mm～5mmで、長さは短い。深度はバラツキがある。数は1条から数条のものまであり、方向性は不規則である。一部には反対縁へ連するものもある。これらの圧痕は刺突文などとは違い、意図された施文ではなく、成形から焼成までの段階に何らかの理由で生じたものであろう。周辺部に残るのは揚げ底様の器形をもつことに関係する。刺突文をもつものは先の6292ほか少数である。59—995ほかは網代痕の類なのであろうが、詳しいことは分からない。

22・23は4個2対の小波状文が口唇端につき、向かい合う2個1対は高く、他の2個1対は低い。22は貼付文以外の口唇端には指頭状押圧痕を伴い、体部は縦位綾格文が密にみられる以外は無文、23は単節斜縄文が地文である。2点は胎土に繊維を含まない。

11は体部に結束第1種羽状縄文を乱雑に施文するほか、単節斜縄文を併用する。胎土には繊維を含まず、小礫が多い。

以上がI群の土器である。1類は、江坂(1970)や村越(1974)・鈴木(1978)・三宅(1982)が分類する円筒下層式aと同bの一部を含む。たとえば2・4・9・13—15は円筒下層式aに相当する。体部地文が燃糸文である3・19の場合、江坂・村越が円筒下層式aとするのに対し、三宅は同bとし、見解に違いがある。また、32—553に類似する土器はいずれも円筒下層式bとされている。本遺跡での例をあげれば、31—552、32—553などは、器形や隆帯の形状、その隆帯の上への施文などの点で、II群としたものの一部80—1326・1327、81—1367などに類縁的に近いものであろう。しかし1326ほかは、II群のなかでも主体を占め、円筒下層式bに相当する、いわばtypicalな一群とはやや遠い関係にある。また、3のように燃糸文を体部地文にするという理由だけで、口唇端への施文などにも共通点をもつ2と分離し、型式的に異なる名称を与えることには疑問がある。

口唇端への施文は、体部地文と同じ場合、あるいは指頭状押圧痕・刺突文が加えられる場合も、ともに2類に数多くみられる。底部外面への施文は13を除いてはまったくみられない。何らかの圧痕を伴うのは2類の特徴である。

2類の土器のなかで、鍵形質をもつのは大木2式に相当するものである。網目状燃糸文や横位併行綾格文をもつ一群、64—1078のように小突起を伴うものなどである。

網目状燃糸文をもつ一群11例の特徴をあげると、①器形はA型である。②口縁部が残る7例のうち、上面観が小波状を呈するもの3例、側面観が小波状を呈するもの1例がある。③底部が残る6例のうち、外縁が張り出すのは3例で、そのうちの1例は揚げ底縁になる。作りがI型であるのは1例で、スグレ状圧痕を伴っている。④胎土に繊維を含まないのは7例、含まないものは4例で、②の上面観が小波状を呈する3例は後者に含まれる。

網目状燃糸文をもつものは大木2a式、同2b式の両者にある。上面観が小波状を呈するもの

は胎土に繊維を含まないことからみて、大木2式でも後半型式とすることができるかもしれない。

全体に横位の平行綾絡文が施文される5や39—670ほか、口唇端に3個1対の小突起が付く64—1078は大木2a式に相当する。結束第1種羽状縄文が地文の11は胎土に繊維を含まないが、大木2式に相当すると考えられる。

以上のほかにも、類縁的にみて、大木2式に近いと考えられる一群がある。それは、内面に口唇端から5cm±の幅で、外面と同じ施文をする42—714・47—815ほかである。同じような施文をする例は、岩手県堂ヶ沢II遺跡（高橋正，1980）から出土した網目状捺糸文をもつ土器にあり、大木2式の前半型式に比定するとされている。また、1類に分類した116—2134にも共通する。91—1562は破片であるが、頸部に隆帯を伴う特徴からみて、大木2b式に相当するものであろう。1562は口唇端に小波状貼付文を伴っている。貼付文の大ききとかは異なるが、22・23はその仲間と考えておく。また24も網目状捺糸文の一部との共通性からみて、大木2式に位置づけることができるであろうし、やはり後半型式のものと考えておく。なお、22—24に類似の土器は岩手県滝ノ沢遺跡の出土品に類例があり、大木5式に比定されている。

口唇端に小円形刺突文を伴う1・6のうち、1の器形は他の出土土器に比べるとやや特異であるが、宮城県三神嶺遺跡（佐藤ら，1980）の大木2a式とされる土器に類似の器形をもつ例がある。ただし、三神嶺遺跡のそれは波状口縁で、口唇端へは施文されていない。6は5と同じ特徴をもつ65—1086とともに出土している。

以上の土器は大木2式に類縁的に近いと考えられるものである。次に1類と類縁的に近いものをあげると、口唇端に縄文や捺糸文を施文する8・12があり、1類の2・3に類似する。破片では単節斜縄文を施文する例が多数ある。7のように指頭状押圧痕を伴う例は79—1291ほかにも多くみられ、1類の79—1292ほかに共通する特徴のひとつである。底部外面へ体部と同じ地文を施文する20・25は1類の15と共通する。20・25の底部の作りはI型である。

底部の作りI型としたものは多くの土器にみられる。網目状捺糸文をもつものや平行綾絡文をもつものにもあることから、大木2式あるいはそれに相当する一群がもつ特徴としてよいであろう。そして、それらはほとんどが胎土に繊維を含む。同時に、底部に何らかの圧痕を伴う一群も胎土には繊維を含む。

以上のように2類とした土器のうち、多くは大木2式あるいはそれに類縁的に近い土器と考えておく。

白鳥（1974）は大木1式は底縁が若干外側に張り出し、底面に縄文の施文が見られる土器が多く、大木2式になるとそれらは少なくなるとしている。本遺跡での場合、網目状捺糸文を地文にするものにも底部外縁が張り出すものは約半数があり、うち1例は揚げ底様になる。大木

1式とされる土器群に特徴的であるとされる羽状縄文やループ文をもつ土器は本遺跡では出土していない。もちろん斜行縄文を施文されたものもあるわけだが、積極的に大木1式とする根拠はなく、原則的には、2類には大木1式の土器は含まれないものと考えておく。ただし、46-802のような揚げ底が1点ではあるが出土しており、三神嶺遺跡(佐藤ら、1980)の例をみれば、大木1式に相当するのかもしれない。また、口唇端に施文をする土器は、東北南半では上川名Ⅱ式や桂島式に相当するとされている(宮城県教育委員会、1977・1980)。しかし、それらのもうひとつの特徴である羽状縄文を併せもつ例は本遺跡では出土していない。したがって、2類の土器とそれらの関連は薄いものと考えておく。

本遺跡での出土状況からみて、1類の一部と2類は共存関係にあるものと考えられる。型式名でいえば、円筒下層式aと大木2式との共存関係が考えられる。その円筒下層式aは1類として分離したもののほかに地文だけで構成される一群があるとされている(江坂、1970;村越1977ほか)。それらを2類としたなから分離することはできないが、2類に含まれている可能性は否定できない。ただ、底部外面へ施文される点においてもそれらに類似性の強い20・25は底部の作りがI型であるのに対して、1類として分離した土器でI型になるものはない。もちろん後者の数が少なく、確実な点は不明である。円筒下層式a以前の東北地方北半の前期初頭の土器の表館式とか深郷田式とかとの比較は十分におこなうことができず、それらとの関係は不明である。

以上の点をまとめれば、1群1類とした土器は円筒下層式aと円筒下層式bの一部を含む。2類の土器は大木2式とそれに類縁的に近い一群を主体にしているが、その前後に位置づけられる土器や円筒下層式aの一部なども含んでいる可能性がある。

b) Ⅱ群

Ⅱ群の土器の主要な特徴は、文様帯が口縁部と体部に分化し、撚紐や絡条体・結節部などをそれぞれに回転施文することである。ただし、口縁部に横位の綾絡文帯をもつ一群は1群1類として分離している。

器形はA型が卓越するが、31や214-4117、232-4581などB型の器形をもつものもある。A型のなかには、器高に比べると口縁部・底部の径が大きく、ずんぐりしたバケツ型の器形をもつ35・36の例がある。口縁部の形態は、実測できた土器では波状口縁1に対して平縁が3の割合になる。底部形態を知ることができる29や232-4581はいくぶん揚げ底様になるが、ほかは平底である。胎土には繊維を含み、一般にその含有量が多い。

文様帯は、後述する少数例を除いては、明確な区画がおこなわれる。区画帯の構成は大きくは3つに分かれる。①は隆帯あるいはわずかな高まりを示すだけの隆帯状の区画帯をもつものである。その上に刺突文や撚紐圧痕を重ねるもの(35・36)、さらにその上下に撚紐や絡条体の

押圧痕を施すもの(29、209-4008、346-6924)、上下に円形竹管文を伴うもの(34)がある。②は燃紐圧痕が文様帯を区画するもの(27、31-33)で、絡条体圧痕を併用する例(30)もある。③は沈線によるもので(28)で、刺突文を伴う例(310-6365)もある。そのほかには爪形文(60-1017)や綾絡文(366-7249)などが文様帯を区画する。

口縁部と体部へ施文する地文にはいくつかの組み合わせがある。それを、口縁部から体部下端まで残存している7例について観察すると次のようになる。

口縁部に結束第1種羽状縄文を施文するのは3例で、それらの体部は、29が燃糸文、31が結束第1種羽状縄文+単節斜縄文、32は結束第1種羽状縄文+燃糸文である。口縁部の中央部に燃紐圧痕1条をめぐらし、その上下に単節斜縄文を回転して羽状縄文にするのは30と35で、体部は、30が口縁部と同様の羽状縄文+燃糸文、35が結束第1種羽状縄文+単節斜縄文である。口縁部が単節斜縄文、体部が結束第1種羽状縄文であるのは27、口縁部が縦位綾絡文、体部が縦位綾絡文+単節斜縄文であるのは32である。これらの例にみられるように、体部に2種類の原体が用いられるのは7例中5例と高率である。

次に、下半を失っているものをみると、28が結束第1種羽状縄文、33が燃糸文を口縁部と体部に施文している。そのほかの実測できた例では、174-3359をはじめ7例が結束第1種羽状縄文を両部位に施文し、214-4117、346-6924は口縁部が単節斜縄文、体部が結束第1種羽状縄文である。6924は垂線状の燃紐圧痕2条を1カ所に伴う。

破片では、口縁部が単節斜縄文、体部が縦位の結束第1種羽状縄文である179-3492、両部位に結束第1種同燃りの回転施文をする310-6365、口縁部が縷状燃糸文、体部が縦位燃糸文である311-6387の例などがある。

以上のほかに特徴的な施文をもついくつかの例をあげる。34は口縁部に結束第1種羽状縄文を施文し、口唇部に燃紐圧痕3条がめぐるほか、口唇端に円形竹管文を施文する。38は単節斜縄文を口縁部に施文したあと、燃紐圧痕を鋸歯状に押圧する。体部は燃紐圧痕の上下に単節斜縄文を施文した羽状縄文である。366-7249は単節斜縄文が地文であるが、綾絡文が文様帯を区画し、口縁部には横位、体部には縦位の綾絡文を施文する。364-7235は沈線が文様帯を区画し、口縁部は一部に縦位の綾絡文を施文する以外は無文、体部は縦位の綾絡文を伴う単節斜縄文である。7249・7235は胎土に少量の繊維を含む。

以上は文様の区画帯をもつ例である。区画帯はもたないが、原体や施文方向を変えることによって文様帯を区画する例が少数ながらある。186-3576は、口縁部に横位、体部に縦位の多軸絡条体を回転施文し、315-6457は、口縁部に結束第1種羽状縄文、体部に縦位燃糸文を施文する。ともに口縁部の幅は狭く、6457では2.5cmである。

口縁部の幅は一般に広い。もっとも広い36は9cm±、29は8cm±、31は4cm±である。

逆に1.5cm～2.7cm前後の狭い口縁部をもつものがある。32—562、234—4630、338—6724は口縁部と体部に結束第1種羽状縄文を施文する。146—2779、184—3548は体部を失っているが、口縁部にはやはり結束第1種羽状縄文を施文する。先述の6365も幅が2.5cmと狭い。

また、37—645、80—1326・1327、81—1363ほかも口縁部の幅が狭い。これらはいくぶん幅の広い隆帯によって文様帯を区画し、隆帯の上には単節斜縄文や指頭状押圧痕、横位沈線文を伴う。口縁部・体部とも単節斜縄文が施文される。

以上のII群に分類した土器は、大部分が円筒下層式bに相当するであろう。本群の特徴のひとつに結束第1種羽状縄文の多用があげられ、さらに体部に2種類の原体が併用される例も多い。この群のtypicalなものは29—33・35などに求められるであろう。36は器形や文様区画帯・体部への施文法が35にきわめて良く似ている。364—7235や366—7249は36と類縁的に近いものと考えられるためにこの群に含めたが、円筒下層式bとして良いかどうかは分からない。34は円形竹管文や燃紐圧痕を伴う点でI群の土器に、38は鋸歯状の燃紐圧痕を伴う点でIII群1類に近いものと推定される。

32—562ほかの一群は、口縁部の幅が狭いことを除けば、作りや文様構成の点でtypicalな一群に類似していることから、その仲間と考える。ただし、同じく口縁部の幅が狭い37—645ほかの一群は器形や隆帯の形状、その隆帯に重ねられる施文などの点で、I群1類としたものの一部31—552や32—553などに類縁的に近いことが考えられ、typicalな一群とは分離して考えることができるものなのかもしれない。

c) III群

III群のもっとも主要な特徴は、文様帯が分化し、口縁部は燃紐や絡条体の側面圧痕による文様帯、体部は地文帯になることである。この群は便宜的に1類と2類とに細分した。

1類(37・39—41・46・50)：この類には、口縁部文様帯の意匠が菱形文や曲線文・鋸歯状文などになり、体部地文が木目状燃糸文であるもの以外の土器を含めた。器形はA型のほか、41や46のようにB型のものがある。A型のなかには40のようにいく分ずんぐりした器形をもつものがある。50を除いては4～6単位の波状口縁になる。胎土には繊維を含むが、その量は多くはない。

口縁部の文様意匠は、37が曲線文と平行横線状文、39・41・46が菱形文、40・50が鋸歯状文と平行横線状文である。41は小刺突文を一部に伴う。文様の施文は50が絡条体である以外は燃紐である。文様区画帯は、39が燃紐圧痕、46が絡条体圧痕であり、41・50は燃紐や絡条体の側面圧痕にはさまれた低い隆帯状の部分が横2列になり、上には刺突が加えられる。40はやや高い隆帯の上に刺突が加えられる。

体部への施文は、体部下端まで残存している例では、50が多軸絡条体回転圧痕文、35が結束

第1種羽状縄文+単節斜縄文、40が横位平行綾絡文を伴う単節斜縄文+結束第1種羽状縄文、46が結束第1種羽状縄文+多軸絡条体回転圧痕文である。このほかに200—3839が結束第1種同撚りである。379—7450は口縁部の残存部が少ないが、この類へ含まれるものと推定され、体部には多軸絡条体回転圧痕文を施文する。下端を失っているものでは、37・39・41が結束第1種羽状縄文で、39は縦位綾絡文を伴う。破片では、299—6159の縦位撚糸文、338—6737の結束第1種附加条付などもある。

2類(42—45・47—49・51—53・56—59・61・62・67・81)：この類には、①平行横線状の文様意匠を主とし、その変異形がみられるものの一部、②体部に木目状撚糸文をもつもの、③器形的にみてIV群の一部に近いものを含めた。

器形としてはA形が多いが、③とした57や58のほか、B型になる42・43・47などがある。A型のなかには45のようにずんぐりした形のものがある。また、61・62・67のように壺形土器に近い器形をもつものがある。42・45・51・53ほかのように波状口縁になるものは多く、58はやや大ぶりの波状になる。なかには、47のように波状部に3個1対の刻みが加えられるものや47のように刻みの入った小突起が付くものがある。底部形態を知ることができるもののうち、42・47・61はいくぶん揚げ底様になる。胎土には繊維を含むが、木目状撚糸文を体部にもつもの一部に含まない例がある。

口縁部への施文は、撚紐圧痕が絡条体圧痕に卓越し、撚紐のなかには撚りの方向を異にした2本1組をもちいる例がある。文様意匠は平行横線状が主体で、51・53・57・62のように重線状の圧痕を伴い、51・62ではその交差部に刺突が加えられる。56は平行横線状文のほか山形文状の施文がおこなわれ、58はやや乱雑な斜線状の意匠になる。59は絡条体の交差部を押押し、平行横線状の意匠を作り出す。81は波状部に刻みが入り、小円孔や槌状把手を伴う。施文原体も撚紐と絡条体が用いられる。文様帯の区画がおこなわれるものでは、撚紐圧痕に刺突文を伴う52、隆帯の上に刺突文を伴う42・51・57・67・81、隆帯の上に撚紐圧痕を伴う49、横2列の刺突文を施文する62ほかがある。240—4758は隆帯が文様帯を区画する。

体部への施文は、体部下端まで残存している例では、42・43・61が結束第1種羽状縄文、45が縦位の羽状縄文であるが、結束の有無が不明、44が第1種羽状縄文とその間に単節斜縄文を併用、47が縦位の結束第1種羽状縄文+単節斜縄文、53が結束第1種羽状縄文+撚糸文である。上半が残存している例では、47の単節斜縄文、51の結束第2種羽状縄文、228—4532の前々段反撚りがある。破片では、162—3089の縦位撚糸文、210—4024の網目状撚糸文、241—4775の結束第1種附加条付、215—2143の結束第2種と同第1種羽状縄文の併用例などが知られる。また、216—4151は区画の隆帯の下位に横位綾絡文帯があり、その下位には結束第1種羽状縄文を施文する。163—3098は同じく隆帯の下位に斜行沈線文帯があり、その下位には横位綾絡文と結束第

2 種羽状縄文を施文する。

1 類と 2 類の細分は、平行横線状の意匠とその変異形とすることができる一群の多くは文様帯の幅や体部地文などの点で IV 群と共通性が強いことから、まず 2 類として分離した。しかし、平行横線状の意匠をもつものでも、45 のように文様帯の幅が非常に広いものがある。したがって文様帯の幅を数値的に求め、任意の基準を与えて細分する方法はとっていない。IV 群との共通性という点では、円形凹文や貼付文を伴うもの、あるいは体部地文が木目状捺糸文であるものは 2 類に含めた。

体部への施文は 1 類・2 類とも結束第 1 種羽状縄文が卓越する。1 類の 35・40・46 などのように II 群にみられた 2 種類の原体を使用する例は、2 類とした 47・51 などにも共通するもので、両類を識別する決め手とはならない。多軸絡条体がもちいられる例は数が少ないが、1 類の特徴のひとつであろう。木目状捺糸文については、59 のように IV 群の 66 と器形や文様帯の幅、あるいは体部地文が良く似るものがあり、また 58 や 81 にも用いられている点と IV 群に卓越する地文であることを考慮すれば、2 類のなかでも時間的に新しい要素をもつものと考えることができる。

以上の III 群の土器は、三宅 (1982) の第 II 段階—縄文原体押圧施文土器群に相当し、円筒下層式 c と同 d を含む。そして、1 類は円筒下層式 c、2 類は同 d を主体とした一群を含むことになるであろう。円筒下層式 c と d の分類は、例えば村越 (1974) と三宅とは異なった型式観によって細分されているもので、本報告書での 1 類・2 類の分類は多分に便宜的なものである。また円筒下層式 d は d_1 と d_2 とに細分され、円筒下層式 d_2 は大木 6 式の影響を受けた一群とされているが、その意味では 2 類の大部分は円筒下層式 d_1 に相当するであろう。しかし、81 ほかのように円筒下層式 d_2 として分離できる一群も含んでいる。

以上の III 群と関連するいくつかの土器について述べておく。55 は器形からみて、円筒下層式 d の仲間である。74 は B 型の器形をもち、底部はわずかに揚げ底様になる。捻紐圧痕で区画された口縁部には斜位の捻紐圧痕がみられるものの、大部分は無文である。体部には結束第 1 種同捻りの原体を縦位に回転している。III 群 2 類の構成員と考えておく。54 は単節斜縄文を施文したあと、口縁部に捻紐圧痕をめぐらしている。同じピットからは II 群の 29 や III 群 2 類の 44・47 などが出土しており、捻紐圧痕をもつことから III 群 2 類あるいはそれに近いものと考えておいた。

d) IV 群

IV 群の主要な特徴は、文様帯は一部の例外を除いては口縁部に集約し、沈線文と半截竹管文を主とする刺突文の類・円形凹文・貼付文などが文様を構成すること、そして体部は原則的には地文帯になることである。

器形としてはB型が卓越し、75・76のように口縁部が強く外反する例がある。A型のなかで70はずんぐりした器形をもつ。口縁部は、64・69・75・76のように4～6単位の波状を呈するものと平縁のものがあるほか、73は低い山形突起を伴う。波状口縁のなかでは76がやや大ぶりである。70は口唇部を下から押し上げて、小突起状に作り出す。胎土には繊維を含むものや含まないものがあり、含む場合でも含有量はわずかなものが多い。

文様帯は明瞭に区画されるのが一般的である。区画帯には、63・64ほかの平行沈線、76・77ほかのように平行沈線間を半截竹管文や刺突文で埋めるもの、75ほかのように刻目状の刺突文を伴う隆帯がある。そのほかには159—3012の爪形文、211—4033の刺突文が区画する例などがある。JVII—27住居址はIV群の土器片が多く出土しているが、文様区画帯を伴わない例が卓越している。

口縁部の文様意匠はさまざまであるが、文様構成は、沈線文63—65・68・71、沈線文と半截竹管文をはじめとする刺突文66・69・70・72・73、沈線文と貼付文75—77によるものがある。貼付文の種類は、75・77のような短い垂下降帯、76の円盤状小突起がある。そのほかには、203—3856・3865などのように円形凹文をもつもの、302—6226などのように円形刺突文だけで口縁部文様帯が構成される例もある。また218—4216などは捻紐瓦痕を併用している。沈線文の施文具は竹管などの外側を引いたものが圧倒的に多く、半截竹管の内側を引く例は少数である。

口縁部のもうひとつの特徴としては、口唇部あるいは口縁部全体を折り返し口縁状に肥厚させる例が多いことがあげられる。口縁部の幅はさまざまであるが、66のように2 cmに満たないものも少数ながらある。211—4026、215—4137、348—6954なども狭いものの例である。

体部地文は13例中、木目状捻糸文が9例、結束第1種羽状縄文が2例、単節斜縄文が1例、無節斜縄文に縦位綾格文を伴うものが1例である。破片類でも木目状捻糸文が卓越し、次いで結束第1種羽状縄文がある。そのほかには、217—4207が縦位の結束第1種羽状縄文をもち、348—6955が4207と同様の原体に単節斜縄文を伴い、204—3897・3899の半截竹管の内側を引いた縦位の小波状沈線文などの例がある。211—4029・4033、335—6693は体部へも文様帯が伸びているが、破片のため、詳しいことは分からない。

以上がIV群の土器で、従来の型式名でいえば大木6式に併行する一群である。しかし、大木6式の特徴とされる「口頭部文様帯と体部文様帯が相伴う」(興野, 1970)点では、明らかに区別されるものである。また、大木6式に相当するものは83をはじめ少数が出土しており、それらとは文様意匠や構成・胎土ほかが異なる。したがって、類縁的にこの群を位置づけるなら、口縁部文様帯は大木6式との関連性が強いものの、体部が地文のみで構成され、しかもIII群にみられた木目状捻糸文や結束第1種羽状縄文がほとんどを占める点では円筒下層式系列の伝統を強く引いていると言いうことができるであろう。先述のIII群2類との関係を知ることができる

良好な資料はないが、円筒下層式dを細分したもののうち、d₂式は大木6式の影響を受けて成立したものとされており、IV群土器はそのd₂式からも逸脱していることからみて、きわめて地方色の濃い一群であるといえる。

e) そのほかの円筒下層式

前述のI群—IV群に分類できない円筒下層式の土器がある。それらは文様帯の区画がおこなわれず、木目状襷糸文ほかの地文だけで構成され、円筒下層式の土器と共伴して出土している。

60、173—3355ほかは全体に結束第1種羽状縄文、200—3842、213—4113、232—4584ほかは木目状襷糸文を施文する。地文や共伴土器からみて、前者はII群—IV群、後者はIII群2類あるいはIV群の土器に近い関係にあることが推定できる。また、339—6759は結束第1種附加条付が地文で、III群の土器との関連が考えられる。365—7241は体部上半に結束第1種羽状縄文、下半に襷糸文を施文する点からみて、II群あるいはIII群の土器との類縁性が考えられる。

78—80は沈線文が地文で、78は口縁部に円形凹文を伴う。84は浅鉢形土器で、胎土には多くの繊維を含む。地文や口縁部の作り、共伴土器などを参考にすれば、4点はIII群2類あるいはIV群に併行する時期のものであろう。

f) 大木式土器

大木式土器は、大木2式に相当する土器群がI群2類に多く含まれるほか、大木6式がIV群の成立に強い影響を与えている。83はいわゆる長脚付深鉢形土器で、大木6式に相当する。82は同じ住居址から出土した大木6式の219—4251に器形や文様意匠ほかが類似し、同じ仲間と考えておく。85は横位の橋状把手と2個1対の小突起を伴う。大木6式あるいは大木7a式に相当する。そのほか、明確には識別できなかったが、大木6式に相当する破片は、JVII—23住居址やJVII—27住居址群などの出土土器片に含まれている可能性がある。

67—1114・1116などは大木3式、9—116、81—1344などは大木4式に相当するものであろうが、いずれも小破片でしか出土していない。

g) そのほかの土器

157—2956は関東地方の前期末葉の一型式である十三唇台式である。

(3) 中期初頭—中葉 (図版iv—v)

中期初頭大木7a式に相当するのは86で、長脚付深鉢形土器である。同型式の破片は218—4234・4235ほかが少量出土している。87は大木7b式に相当する浅鉢形土器である。この土器型式はほかにはほとんどない。89は円筒上層式aで、ほかにはJVII—27住居址群などから破片でわずかに出土している。同b・cは小破片が僅少あるにすぎない。

中葉になると大木式の土器が多く出土している。その時期の住居址は9群9棟が確認されているが、良好な資料はフラスコ形ピットから出土している。

大木8a式は88・90—92・95—99である。そのうち、90—92はGVII—69フラスコ形ピット、95・96はGVII—70フラスコ形ピット、97—99はHVII—55フラスコ形ピットから出土している。97—99は一括の資料としてよい出土状態を示している。大木8b式は100—109である。そのうち、102—109はIVII—52フラスコ形ピット、110—119はIVII—54フラスコ形ピットから出土したもので、ほぼ一括資料として良いものである。2基のピットからはそのほかにも同型式の粗製深鉢形土器が出土している。

大木式土器に比べると円筒上層式の土器は極端に少ない。93は円筒上層式dである。JVII—18住居址の埋設土器で、床面からは大木8a式に相当する192—3691、195—3707が出土しており、共存関係にあることが考えられる。94は円筒上層式eである。大木8a式の90—92と同じピットから出土したもので、やはり共存関係にあるものと推定される。 (三浦 謙一)

(4) 中期後葉—末葉 (図版vi・vii)

本遺跡では、縄文時代中期後葉—末葉に位置づけられる住居址が78群105棟検出されている。検出住居址数が多数にのぼるにもかかわらず、該期の出土土器は少なく、しかも出土状況からみて住居址に固有で原位置を保つ土器(炉埋設土器や埋塞・床面出土土器)は非常に少ない。

図版vi・viiに示した資料は、3点の包含層出土資料を除き、すべて遺構から出土したものである。完形品あるいは復元できた土器は数が少ないため、破片(拓本資料)をも含め、本遺跡で出土した文様の異なる資料を網羅することに努めた。

a) 土器の分類

縄文時代中期後葉—末葉の土器は、文様を識別形質にして類似する資料をまとめると、下記の1類—9類に分けられる。また、4類を除く各類は文様の様成方法や施文部位の差異などによってそれぞれ2類型に細分される。

なお、本文中の記載では、1類—4類を大木9式ないしは大木9式併行土器に比定し、5類—9類土器を大木10式ないしは大木10式併行土器に比定して記述した。

1類土器 (120—123)：隆起線区画文で縦方向の文様を構成する土器類

1類土器は、隆起線区画文で文様を構成するものである。縦に区画された隆起線文内には沈線や隆起線で縦方向に流れる楕円文や円形文が描かれ、文様内には斜縄文や刺突文が充填される。隆起線区画文の内側に隆起線で文様を描くもの(a)と沈線で文様を描くもの(b)とに分けられる。

1類—a (120・121) 1類aは隆起線区画文の内側に縦に区画された隆起線文を展開するもので、円形文や円形文などが描かれる。無文帯は丁寧に研磨されている。

120・121は隆起線でつば状に区画した円形文が施される浅鉢形土器である。隆起線区画文の内側には隆起線で渦巻状円形文が展開し、121は円形文の下部に円形文が描かれる。

1類-b (122・123) 1類bは隆起線区画文の内側に沈線で区画した文様を縦に展開するもので、楕円形文や円形文が描かれる。

122は隆起線区画文内に沈線で円形文が描かれる浅鉢形土器で、隆起線文に挟まれた三角形の沈線区画帯には刺突文が充填される。123は隆起線で突起状に区画した円形文が施された大型の深鉢形土器である。沈線で楕円文や円形文が描かれ、楕円文内には刺突文が充填される。

2類土器 (124-130)：沈線区画文で縦方向の文様を構成する土器類

2類土器は、沈線で区画した楕円文や円形文が縦に文様を展開するものである。1類土器との違いは、隆起線区画文をもたず沈線区画文だけで文様が構成されることにある。区画文を描き、文様内に斜縄文や刺突文を充填するもの(a)と地文の斜縄文上に区画文を展開するもの(b)とに分けられる。

2類-a (125-130) 2類aは沈線で楕円文や円形文を区画し、文様内に斜縄文や刺突文を充填するものである。器形は幅の広い無文の口縁部をもつ広口壺形土器(125・126)と小型の深鉢形土器(127-130)とに分けられる。

125・126の頸部は連続刺突文を配した2条の平行沈線で区画され、体部は125が円形文、126が楕円文と円形文で構成される。125の円形文間無文帯には丸棒状工具による円形押圧文が施され、126の楕円文には刺突文が充填される。

127-130は口縁部から体部に連続して文様が描かれる。127は円形文、128は楕円文と円形文、129は長楕円文で文様が構成される。130は2個の長楕円文と1個の二重長楕円文を1対とする文様が2回繰り返して描かれ、二重長楕円文の外周区画帯には刺突文が充填される。

2類-b (124) 2類bは地文である斜縄文上に沈線で区画文を施し、磨消線無文帯をもたないものである。124は小型鉢形土器で、全面に施文した無節斜縄文上に円形文が描かれる。

3類土器 (131-137)：沈線で懸垂文(懸垂状区画文を含む)を描く土器類

3類土器は沈線で懸垂文や懸垂状化された区画文を描くものである。文様は地文の斜縄文上や無文の口縁部に描かれ、基本的には磨消線無文帯はみられない。文様の施文部位の違いによって2分され、体部の縄文上に文様を展開するもの(a)と無文の口縁部に文様を展開するもの(b)とに分けられる。

3類-a (131-135) 3類aは体部に地文の縄文を施文し、その上に懸垂文を施すものである。器形には斉一性がみられ、幅の広い無文の口縁部をもつ広口壺形土器に限られる。

131は体部に不規則な円形状懸垂文を描き、頸部を1条の沈線で区画する小型土器で、各円形文の間には、連続する竹管文が施される。132・133は体部に不規則な2条1対のゼンマイ状懸垂文が展開するもので、133の頸部は1条の沈線とその直下に配した連続刺突文で区画される。134・135は規則的な2条1対のゼンマイ状懸垂文が展開する大型土器で、頸部は134が2列の連

統刺突文、135は1条の沈線とその直下に配した半截竹管の連続刺突文で区画される。134は懸垂文の渦巻中央に、135は2条の懸垂文間に大型の円形押圧文を伴う。135の2条の懸垂文の間には、斜縄文を磨消して半截竹管で刺突文が施される。

3類-b (136・137) 3類bは3類aでは無文となる口縁部に同系列の文様(区画文化された懸垂文)を描くものである。3類aと同様、頸部は沈線や刺突文で区画される。

136は口縁部に三重の Ω 形文を縦に描くもので、 Ω 形文の内部には縦の連続刺突文を伴う。頸部は1条の沈線とその直上に配した連続刺突文で区画される。137は小型の鉢形土器で、頸部を巡る2条の沈線のうち上位の沈線が口縁部に連なって茸状文が描かれる。頸部の平行沈線と茸状文の内部には刺突文が充填され、文様直下の体部上端には大型の円形押圧文が施される。

4類土器(139-146):沈線区画文で縦方向に規制された曲折文を構成する土器類

4類土器は、斜縄文を充填した沈線区画帯が縦方向に規制された曲折文を展開するものである。2類土器の文様展開が縦方向に限定されていたのに対し、4類土器は2類土器のモチーフを横に連結させて急角度に変曲する曲折文を構成する。

139-140は Ω 形文の中央を連結し、H字文を描く深鉢形土器である。139は140と異なり、 Ω 形文も描かれており、完全なH字文には転換していない。140の文様内無文帯には刺突文が施される。141は楕円文を連結してC字文が描かれ、142-144はC字文か Ω 形文が描かれる。145は小型土器で、ゼンマイ状の垂下文が施される。146は幅の広い無文の口縁部をもつ広口壺形土器で、体部には3個の楕円文で鑑形文が展開する。

5類土器(147-162):沈線区画文で横方向に流れる曲折文を構成し、口縁部に横位の沈線区画無文帯をもたない土器類。

5類土器は、斜縄文を充填した沈線区画帯が横方向に流れるアルファベット文状の曲折文を展開するものである。4類土器が縦方向に規制された文様を描くのに対し、5類土器は横方向に流れる文様を展開する。また、後述する6類aとも異なり、口縁部が横位に区画されており、口縁部から体部に滑らかに連続する曲折文が描かれる。

文様の施文部位の違いから、器面全体に文様を描くもの(a)と体部中央に波形沈線文を施して体部上半に文様を描くもの(b)とに分けられる。

5類-a (147-160) 5類aは沈線区画の充填縄文帯が器面全体にアルファベット文状の曲折文を展開するものである。

147-148は調整沈線でC字文を描く小型土器で、147の無文帯はやや浮きあがっている。149はU字文、150は横e字文が展開する有孔の浅鉢形土器である。頸部から体部上端へ斜めに穿った小円孔が横に連続して配される。151は口縁部が外反する深鉢形土器で、横e字文が描かれる。152は横e字文、S字文、横S字文などの複合文様が横に連続して展開する浅鉢形土器である。

153—157はS字文系の文様が展開する。153は縦のS字文が6回繰り返して描かれた大型の深鉢形土器である。154—156はやや斜めに傾いたS字文、157は横S字文が展開する。

158・159も横S字文系の文様が描かれる。158は4類土器にみられた縦方向に展開する円形文などの沈線区画帯を、外周する沈線区画帯で横S字状に圍繞するものである。159は1類土器や2類土器の区画文である楕円形文や渦巻状円形文を、刺突文充填の沈線区画帯で横S字状に囲むもので、130(2類a)の外周区画帯が横に展開したものとみなすことができよう。

160は全体の文様展開が不明であるが、曲折文と長大な波頭文の混合文が描かれる。

5類—b(161・162) 体部中央を波形沈線文で区画し、体部上半に充填縄文の沈線区画帯で文様を展開するものである。

161は体部上半に横位の楕円文とU字形区画文の混合文を展開する小型深鉢形土器で、波形文は楕円文に沿って描かれる。162は口縁部が外反する大型深鉢形土器である。体部上半に縦位の楕円文が描かれ、波形文は楕円文の下端に沿うかたちで展開する。

6類土器(163—175)：沈線区画文で横方向に流れる曲折文を構成し、口縁部に横位の沈線区画無文帯をもつ土器類。

6類土器は、口縁部を横位に区画する沈線文が体部に接続して曲折文を展開するものである。背景に縄文を充填した磨消状の無文帯が横方向に流れる文様を描くもの(b)が大部分を占めるが、5類土器と同様、充填縄文の沈線区画帯が文様を描くもの(a)もみられる。

6類—a(163・164) 6類aは充填縄文の沈線区画帯が横方向に流れる文様を展開し、体部中央が沈線による波頭文や波形文で区画されるものである。5類bとほぼ同様の施文方法を示すが、5類bが口縁部に横位の区画文をもたないのに対し、6類aは口縁部を横位に区画する文様が描かれる。

163は小型壺形土器で、体部上半にJ字文、体部中央に波頭文が描かれる。164は体部上半に横S字文が展開し、体部中央は波形文で区画される。

6類—b(165—175) 6類bは無文の沈線区画帯(背景に縄文を充填した無文帯)が横方向に流れる文様を展開するものである。文様は体部上半に描かれるが、文様帯を区画する波形沈線文は施されていない。

165・166はJ字文が描かれ、波頭文が背景になっている。167は逆S字文が展開し、文様内の円形区画帯には沈線に重ねて刺突文が施される。168はほぼ正方形に区画されたD字文が描かれ、文様変曲部には竹管文を伴う。171—172は167の文様を横に連結させた逆S字文が展開する。172の文様接触部には連続刺突文が施され、文様連結部には刺突文充填の円形区画帯を伴う。169・170は文様変曲部が張り出した逆S字文を描くもので、170の文様帯には沈線に沿って連続刺突文が施される。破片の観察によれば、169—170は171・172と同様、文様が横に連結されている。

173・174は整った逆S字文が描かれる。175は横に連結された抱玉文が展開する。2個の円形文が接続して描かれ、文様内の円形区画帯には充填縄文に重ねて刺突文が施される。

7類土器(176—183)：6類土器に部分的な隆起線が貼付される土器類。

7類土器は鰭状隆帯といわれる短い隆起線を伴うものである。文様の構成や展開方法などは6類土器とほぼ共通する。充填縄文の沈線区画帯が文様を展開するもの(a)と背景に縄文を充填した無文の沈線区画帯が文様を展開するもの(b)とに細分される。

7類-a(176) 7類aは斜縄文を充填した沈線区画帯が文様を構成するもので、体部中央は波形文で区画される。176は6類a164の反転文である横S字文が体部上半に展開し、口縁部内面に鰭状隆帯が貼付される。

7類-b(177—183) 7類bは無文の沈線区画帯(背景に斜縄文を充填した沈線区画の無文帯)が文様を構成するものである。文様は体部上半に描かれるが、文様帯を区画する沈線文は施されていない。

177は6類b167と同形の逆S字文が描かれる。178はJ字文、179は二重のU字文が展開する。179の文様連結部には沈線に重ねて刺突文を施した円形区画帯を伴う。180は6類b172と同形の連結逆S字文が描かれ、波状の口縁部全面に刺突文が施される。181は整位の逆S字文の連結部と思われる。182はY字形、183は円形に区画された抱玉文が展開する。183の抱玉文は、円形文を横位に連繋した無文の沈線区画帯によって横に連結されている。

鰭状隆帯は177・178・181が文様末端、180・182が口縁部内面被頂部、179・183が文様連結部に貼付され、183の鰭状隆帯には刺突文が伴う。

8類土器(184—188)：口縁部文様帯が隆起線で構成される土器類。

8類土器は口縁部文様帯が隆起線で区画されるものである。体部文様は7類bと同一の施文方法で構成されるが、横方向への文様展開が弱まって簡略化された文様が描かれる。口縁部外面に隆起線文をもつもの(a)と口縁部内面にもつもの(b)とに分けられる。

8類-a(184—187) 8類aは口縁部外面が隆起線で区画されるものである。口縁部は波状を呈し、隆起線に沿う口縁部無文帯には連続刺突文や竹管文が施される。

184・185は体部上半にJ字文が描かれる。185は口縁部を欠損するが、同形文を展開する破片から推定してここに含めた。186は体部にS字文を展開する小型深鉢形土器である。187は7類b182と同形の抱玉文が描かれ、抱玉文内には沈線に沿って連続刺突文が施される。187は口縁部内面も隆起線で区画されている。184・185・187は文様末端に鰭状隆帯を伴う。

8類-b(188) 8類bは口縁部内面が隆起線で区画されるものである。188は体部文様の一部も隆起線で構成され、隆起線と沈線を組み合わせた抱玉文が描かれる。抱玉文は、鰭状隆帯を連続的に貼付した横位の沈線区画文によって連結され、それぞれの文様帯には沈線に沿って

連続刺突文が施される。

9類土器(189・190)：沈線区画文が6類-8類と異なる不規則な曲折文を構成する土器類。

9類土器は沈線区画文でJ字文と波頭文が一体化した不規則な文様を描くものである。沈線区画の磨消帯が文様を展開するもの(a)と無文の器面に沈線区画文を展開するもの(b)とに分けられる。

9類-a(189) 189は沈線区画の磨消帯が文様を描くものである。6類-8類土器とは異なり、沈線区画の無文帯は磨消縄文によって構成される。体部にJ字文と波頭文を組み合わせた不規則な文様を展開する。

9類-b(190) 190は無文の器面に沈線区画文で9類a189と同形文を描くものである。

b) 住居址における土器の出土状況

前項において分類した土器群は、文様を主な識別形質とし、類似する資料を配列して集積したが、現在までにおこなわれている編年作業(丹羽:1971・1981, 柳沢:1980, 鈴木:1976)を参考にして、ある程度は時間的な序列を意識して類型化したものである。前述したように、本文中において出土土器を従来の型式名に同定するに際しては、1類-4類土器を大木9式土器ないしは大木9式併行土器として記載し、5類-9類土器を大木10式土器ないしは大木10式併行土器として記載した。

本遺跡において検出された住居址に係わる出土土器は、2類土器から7類土器までのものが大部分を占めている。それらの新旧関係を遺構の重複関係や同一住居址における共伴関係などから把握することを試みたが、住居址に固有のものである炉埋設土器や床面出土土器は非常に少なく、確認できた事例は2例のみである。床面出土の152は炉埋設の174に切られ、床面出土の124と130は同一住居址で共伴する。

明確な決定資料とはならないが、同一住居址内における床面出土土器と埋土内出土土器との関係にまで対象を広げると、168と178は床面直上で共伴し、床面出土の139は埋土内出土の153に覆われ、163は169、171は186、177は185、182は188に覆われる。

以上のように、類型化した土器群の新旧関係は、住居址における出土状況からは明確な判断事例を抽出できない。とりわけ、本遺跡の中心を占める6・7類土器については、形態的な識別形質をも含め系統的な相関関係を検討したが明らかにできなかった。

大木9式土器および大木9式併行土器とした1類-4類土器は、1・2・4類土器を大木9式に同定し、3類土器を大木9式併行土器に比定した。3類a土器は青森県を中心として出土する中の平Ⅲ式に相当しよう。3類b土器としたものは、懸垂状文が区画化された曲線的な文様を描く傾向がみられることから、3類a土器に後出するものと考えられる。中の平Ⅲ式の懸垂文と

大木9式4類ないしは大木10式5類の曲折文が融合したものとみることもできよう。

大木10式土器および大木10式併行土器とした5類-9類土器は、5類-8類土器を大木10式に同定し、9類土器を大木10式併行の大木系土器に比定した。大木10式期の住居地に係わる出土土器は5類-7類土器が大部分を占めているが、既述したように、6・7類土器の時間的な相関関係は明確にできなかったことから、本文中の記載では大木10式土器を5類土器と6・7類土器を中心にして大きく2分するにとどめた。なお、8類土器としたものには、時間的な幅をもった土器が含まれているが、出土数が少なかったため一括して掲載してある。9類土器は大木10式に併行する土器として類別したが、詳細は不明である。青森県を中心にして出土する大木10式併行の大木系土器と文様や文様の表現技法が類似する。なお、地文の斜縄文上に沈線で同形の曲折文を描き、磨消帯をもたない土器も小破片で数点出土している。

以上の1類-9類土器を文様の表現技法などからみて時間的な序列を推定するならば、大木9式相当土器は、1類→2類→4類の変遷を窺うことができよう。3類aは2類に併行し、3類bは4類(あるいは5類にわたる可能性もある)に併行するものと想定した。大木10式相当土器は、5類は4類からそのまま変遷し、以下6・7類→8類の推移が考えられよう。大木10式併行土器とした9類土器は、文様の類縁性からみる限り6・7類土器と共通するが、遺構等を媒体とした相互関係は不明である。

1類→2類→4類→5類→6・7類→8類
3類a→3類b…… 9類……

(佐々木 勝)

(5) 後期 (図版 v iii)

後期の土器は、破片も含めれば、遺跡全体に広く分布し、前葉~中葉のものが多い。191・192は前葉十腰内I式である。193-197は中葉の土器で、193は加曾利B II式、そのほかは貝島貝塚第III群土器や十腰内IV式に相当する。199-202はいわゆる瘤付土器の仲間で、後葉~末葉の宮戸IIIa式や十腰内V式に相当するものであろう。そのほかにはFIII-58フラスコ形ピットやFIII-64フラスコ形ピットなどからも中葉-後葉の実測可能な土器が出土している。238-4712は八天遺跡第II群6類に相当する初頭の土器である。

(6) 晩期 (図版 v iii)

晩期の土器は、破片も含めれば、中期後葉-末葉の住居址群が占地するS・T-IV・V区を除いた広範囲に分布する。完形土器などはGII-52フラスコ形ピットやGIII-59フラスコ形ピットをはじめとするピット類、あるいは遺構外の表土やIc層-II層から出土しており、住居址ではVII-4住居址やVII-5住居址群などから少量が出土したにすぎない。晩期に位置づけられる住居址は検出されなかったが、調査区域外に晩期の活動域の主体部があることが予想されている。

前葉大洞B式に相当するものは382—7506など僅少があるにすぎない。大洞B—C式になると資料が増加し、203—205ほかがある。中葉大洞C式に相当するものが量としては卓越し、206—209、213ほかがある。大洞C式資料は210—212、214ほかで、少量である。後葉大洞A式・同A'式に相当するものは出土していない。

2. 弥生土器 (図版 v iii)

弥生土器は量的には非常に少ない。ただ、弥生時代の住居址4群24棟が検出されたQ・R—IV区からは216、390—7559・7560が出土しており、それらは東北地方の弥生時代初頭二枚橋式に相当するものであろう。215はEV—61皿形ピットから出土した。須藤(1983)は初頭の第Ib期に位置づけている。(三浦 謙一)

3. 土師器・須恵器 (図版 v iii)

平安時代の住居址10群10棟の出土遺物のうち、酸化炭焼成の土器は、完形の坏形土器1点であり、復元実測できたものは僅かである。破片をあわせたその大部分は甕形土器であり、他は若干の坏形及び高台付坏形土器である。還元炭焼成された土器には、甕・甕形土器各1点がある。

甕形土器(217~225)復元できた甕形土器の器高により25cm以上を大型、20~25cmを中型、20cm未満を小型とすると、殆ど器高25cm未満の中・小型の甕形土器であり、破片を含めて全体の傾向と把らえられる。

ロクロ不使用の甕形土器では、口縁部が全体に小さく外反し、短く引き出されるものが多く、直線状をなして立ちあがるものは少ない。頸部から体部にかけては、僅かに内弯気味をなし、体部上半に最大径をもつ中・小型の甕形土器と体部下半にかけて直線状に下降し、最大径を口縁部にもつ中型の甕形土器に分けられる。体部下半から底部にかけては僅かに内弯してから外反するくびれ状をなし、底部周縁の張り出しはない。底部は全体に厚手である。底面に葉脈の大きく広がる木葉底が1点含まれる。

調整は外面に縦、または斜方向のヘラ削りであり、口縁部直下や底部周縁では横方向のヘラ調整が施される。また、粘土紐の接合痕を内外面に残すものがあり、やや粗い削りが多い。内面では横、または斜方向の指ナデ及びヘラ状工具のナデ調整であり、口縁部の内外面に指頭による圧痕をもつものが含まれる。

胎土は長径1.2~0.5cmの小石が内外面に露見するものが多く粗雑であるが、焼成は全体に良好である。

ロクロ成形による甕形土器は、体部中央部に最大径をもつ小型の土器である。口縁部がやや

強く外反し、体部の脹らみの小さいものが含まれる。体部から底部にかけては直線状に続き、底部は回転糸切りである。胎土はロクロ不使用のそれに比して均質である。

そのほか、手捏ね土器1点があり、体部下半では壘形土器に類似し、調整・胎土等はいずれもロクロ不使用の壘形土器と同様である。

環形土器(226・227・229) ロクロ成形される環形土器と高台付環形土器である。いずれも酸化炭焼成され、高台付のそれには内面に黒色処理されるものが含まれる。環形土器には口縁部の僅かに外反するものとやや内弯気味に逸き出されるものがあり、後者は器高が低く、口径に比して底径が小さい。底部の切り離しは回転糸切りであり、再調整は認められない。胎土・焼成とも良好なものが若干含まれる。

高台付環形土器(228・230・231) 脚部を欠損して全体が不明であるが、口径15.0cmのやや大型のものが含まれる。坏部は既述の環形土器と同様のものと体部の立ちあがり強く、弯曲の大きいものに分けられる。坏部の切り離しは、すべて回転糸切りとみられるが、脚部の貼付に伴っては不明となるものがある。調整は内面、または内外面にヘラ磨きが施され、内面底部では放射状、体部から口縁部にかけては横方向を示す。

以上の土器群を要約すると、壘形土器が主体をなし、坏が著しく少ない。壘形土器は、ロクロ不使用成形で粗雑な調整を施される特徴があり、糸切り無調整の環形土器のほか、内面の黒色処理される高台付環形土器が含まれる。その様相によって、平安時代後半に位置付けられよう。土器群の年代については、すでに9世紀末から10世紀代の土器として報告されているが(高橋, 1982)、県北部の土師器の特徴等(高田, 1981; 光井ら, 1983など)を考慮するならば、10世紀後半から11世紀にかかる時期として扱えることもできよう。(昆野 靖)

4. 剥片石器

遺構や包含層からは多数の剥片石器が出土した。器種の分類と掲載遺物の掲載は高橋がすでに済ませていたもので、本報告書ではおおむねその分類にしたがっている。

住居址から出土した器種別の点数とそのなかで占める比率は次のとおりである(比率は石槍を除いては小数点以下四捨五入)。石鏃123点(6%) 石匙155点(8%) 削器291点(14%) 削器状石器258点(13%) 搔器60点(3%) 搔器状石器94点(5%) 折断石器225点(11%) 彫器・彫器状石器271点(13%) ビース・エスキュー148点(7%) 挟入石器114点(6%) 挟入石器状石器103点(5%) 尖頭石器91点(4%) 石鏃30点(1%) 鋸歯縁石器・鋸歯縁状石器65点(3%) 石槍3点(0.1%)である。そのほかにはナイフ形石器に類似のものや2次加工痕をもつ剥片・器種不明のもの・使用痕のある剥片・石核・残核がある。篋状石器は打裂石斧とあわせて41点である。上記の数は、器種変更をする前の集計であり、実数には一部変動が

あるが、著しいものではない。

次に器種についていくつか説明を加える。〇〇状石器としたものは、赤澤ら（1980）や鈴木（1981）ほかの定義を参考にし、それらに準ずるものの意味で使用している。たとえば、削器状石器とした場合、削器刃部の加工形態や長さなどの点で、削器として分類することができないものを含めている。折断石器は阿子島（1979）や岡村（1979）が折断調整石器としたものとほぼ類似のものを指している。ただし、形態的には不定型な一群である。彫器は、高橋（1982）が縄文時代の石器組成のなかに新たに位置づけた器種である。ピエス・エスキーユは岡村（1976・1983）によって注目された石器である。尖頭石器としたものは、石鏃や石槍・石鏃・尖頭削器の類を除き、2次加工によって尖頭部が作り出されたものを一括している。鋸歯縁石器は挟入部が連続した刃部をもち、刃部の正面観がジグザグの形態を示すものを指しているため、機能とは直接的には結びつかないものも含まれている。

5. 礫石器

礫石器としたものは、磨石・凹石・蔽石・石皿・台石・有溝砥石・半円状扁平打製石器・両刃石器・石鏃・石弾である。ここでは量的にもっとも多い半円状扁平打製石器をとりあげる。

半円状扁平打製石器は図版に掲載した分だけでも246点を数える。記載の便宜上、次のように分類している。

まず、挟入部の有無によって2型に分類する。

I型……両端あるいは一端に挟入部をもつ。

II型……両端のいずれにも挟入部をもたない。

I型・II型とも機能部位からみて、次のように細分した。

A型……刃部と背部とに分かれている。

B型……刃部だけで構成され、背部となる部分をもたない。

ここで刃部としたものは、主に2次加工によって鋭い稜線部を作り出した部分を指し、背部としたものは、2次加工痕を伴うことがあるものの、断面形が \cap 形や \square 形になり、先の刃部とは異なる形態をもつ部分である。

B型はI型しかないが、A型はさらに細分される。

A₁型……刃部は1側縁に形成され、残りの部分は背部になる。一般的には刃部は直線部にある。背部>刃部になる。

A₂型……A₁型と異なり、刃部は1側縁以外の部分にも形成され、刃部 \geq 背部になる。

A₃型……背部が両端あるいは一端に作られる。この型に含まれるものは形状としては限定される。刃部>背部になる。

本文では、それらを組み合わせ、I-A₁型・II-B型のように記載した。I型のものは青森県熊沢遺跡の報告書で分類したIV類に相当するものであるが(小笠原, 1978)、挟入部の幅や挟りの程度については一定の基準を求めることができなかったため、主観的にならざるをえなかった。

形状は、半円状とはいえないものも含め数多くの類型がある。しかし、1側縁の直線部を刃部に含む点ではほぼ共通性をもつといえる。なかには、180—3507のように挟入する刃部をもつ例、334—6604のように凸辺部を刃部とする例もある。一般には刃部は両面加工されるが、一部には鋭い自然の稜線部を刃部にする例もある。背部は打ち欠くことによって平坦面を作る場合や素材の自然面をそのまま利用する場合、2次加工を施して調整する場合などがある。33—572はI-A₂型である。両端の挟入部は両面加工され、左側縁の刃部は片面加工されるが、それ以外には自然面を残す。69—1177・207—3983はII-A₁型である。素材の形状はほぼそのまま残り、左側縁に奥行きを浅い小さな2次加工を施して刃部とする。一方、II-B型のものにはほぼ全面が2次加工の剝離面に覆われる例がある。

先の分類別の点数は、完形品179点についてみると、I型28点、II型151点である。I型のものは、A₁型2点、A₂型8点、A₃型1点、B型17点である。II型のものでは、A₁型7点、A₂型63点、A₃型20点、B型61点である。I型、II型ともA₂型・B型が卓越している。

同じく完形品から長さを計測すると、最小が226—4475の8.1cm、最大が314—6449の19.7cmである。その間の分布を小数点以下を四捨五入して1cm単位でみてゆくと、10cm4点(2%)・11cm7点(4%)・12cm30点(17%)・13cm41点(23%)・14cm39点(22%)・15cm29点(16%)・16cm14点(8%)・17cm9点(5%)・18cm3点(2%)・19cm1点(0.5%)である。13cmにもっとも量が多く、12cm～15cmの間には139点(78%)が含まれる。

長さに比べると重量はバラツキが著しい。最小が307—6318の115g、最大が63—1064の755gである。その間の分布をみると、120g—200g21点(12%)・210g—300g60点(34%)・310g—400g55点(30%)・410—500g28点(15%)・510g—600g10点(5%)・610—700g4点(2%)・710g以上1点(0.5%)である。210g—300gの間に含まれるものももっとも多く、400gまで広げれば115点(64%)が入る。

石質は、複輝石安山岩が240点で97%を占め、そのほかには黒雲母片岩・雲母片岩・流紋岩・緑色凝灰岩・硬砂岩・凝灰質細粒砂岩が各1点ずつである。

出土状況を住居址に限ってみれば、縄文時代前期前半期とした住居址から出土したものが195点中135点である。そのなかでもGIV—3A・3B住居址群からは24点、FIV—3住居址群からは16点と多い。そのほかには前前後半期に位置づけられるJVII—23住居址やKVIII—1住居址ほかから36点が出土している。土器分類群でいえば、前期I群からIV群までの土器に共伴するが、量的にはI群に共伴するものが卓越する。

この石器の機能や用途については、名称の提唱者である鈴木（1958）や村越（1976）ほかがこれまで触れてきている。本遺跡の例では、直線部に磨耗による平坦面が形成される例が非常に多く、幅の広いものでは1.8cmになるものもある。また直線部への2次加工の斜離面を切る研磨面を伴うものがあることからみて、鈴木が指摘するように、擦りつぶす、あるいは擦り減らす機能が想定されるであろう。

（三浦謙一）

IV おわりに

長者屋敷遺跡の発掘調査面積は61,310㎡である。遺跡全体の面積を254,000㎡とする高橋文夫の試算があり（高橋、1979）、約1/4の範囲が調査されたことになる。

居住を中心とした活動は縄文時代前期前半期に開始された。特殊な形態をもつ大型住居系列の住居址群からの出土土器は大木2式と出土状況からみてそれと併行関係にあることが推定される円筒下層式aを主体としたものである。次に続く型式は円筒下層式系列の土器が卓越する。円筒下層式bは出土量は多いが、それに伴う住居址群を明確には特定できない。円筒下層式cは少量である。しかし、円筒下層式cと円筒下層式dの区分があいまいで、本遺跡でもそれを明確にできなかったことにもよるであろう。円筒下層式dの量は住居址群の増加とともに増える。その一部は、前期IV群とした土器群と時期的に重なることが考えられる。IV群の土器は、口縁部文様帯が大木6式、体部地文帯が円筒下層式dという、いわば両型式の融合形態をもつ一群である。一部には長脚付深鉢形土器のように大木6式そのものの形態をもつ土器があるが、僅少である。

中期前葉では大木7a式の住居址1群3棟が知られ、土器は大木7a式・大木7b式が少量出土している。対する円筒上層式ではa～cが出土しているが、いずれも破片であり、量も非常に少ない。続く中葉の時期には住居址が増加する。確実なものは大木8a式期4群4棟、大木8b式期2群2棟である。それと埋設土器に円筒上層式dを使用した1群4棟がある。この時期は大木式土器が圧倒的に多い。円筒上層式dは上述の埋設土器として1個体、円筒上層式eはフラスコ形ピットから1個体が得られているほかは破片として若干出土しているにすぎない。それに対して大木8a式・大木8b式は住居址やフラスコ形ピットから完形品を含め数多く出土している。これらの関係を見ると、円筒上層式d・eとも大木8a式に共存することが知られる。

中期後葉～末葉になると、居住域は拡大し、住居址群は占地を異にしていくつかのまとまりをしめす。土器は大木9式と大木10式が卓越し、それらは数段階の変遷として時間的にとらえることができる。そして、大木9式には中の平皿式、大木10式には磨滑縄文手法によらない沈線文と地文のみで構成される地方色の強い土器が少量ではあるが共存する。これらの土器は青森県などに分布域をもつものである。

後期・晩期の土器の出土量に比べ、住居址は後期末葉の1群2棟だけと少ない。しかし、居住域の主体部は調査区域外にあることが予想される。後期・晩期の土器は、従来の型式観にほぼ沿うものである。

弥生時代の住居址は4群24棟が検出された。これらは「遺構編」では縄文時代晩期に位置づけていたもので、沢沿いの沖積地に営まれていた。住居址からの出土土器は粗製土器しかな

いが、それらの土器や付近から得られた土器を参考にすれば、東北地方の弥生時代初期、二枚橋式に併行する時期のものである。そのほかには、須藤（1983）が山王Ⅲ式とした高環形土器のほぼ原形に近い復元品が出土している。

平安時代の土器は土師器を主体にしたもので、須恵器は還元焰焼成のものは破片で僅少、酸化焰焼成のものは環形土器の一部として出土しているにすぎない。県内の他遺跡からの出土品との比較や十和田^a降下火山灰と推定される浮石を埋土に伴う住居址の在り方からみて、それらは10世紀代のもの考えることができる。なお、2点の土器には靱痕が認められ、山間地における生業形態を考えるうえでの手がかりのひとつになるであろう。

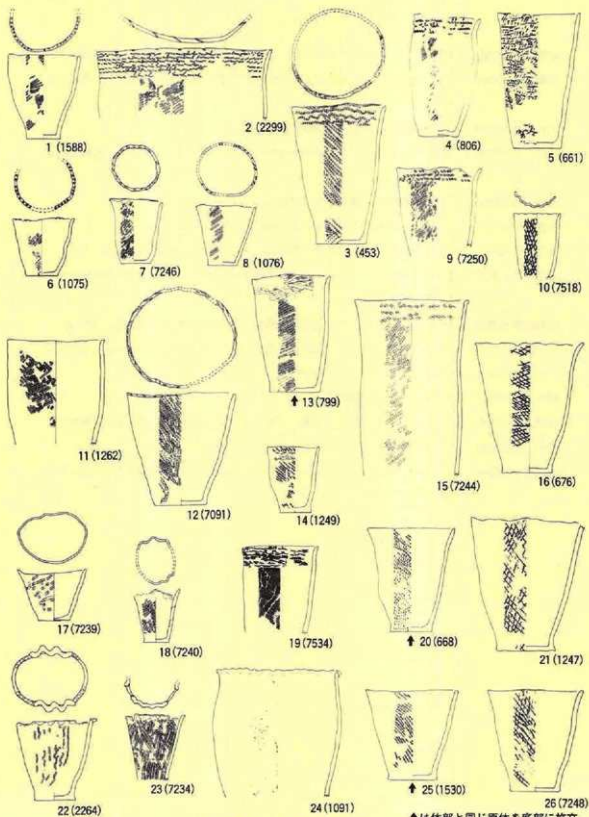
鈴木孝志は1957年の松尾村水切場遺跡の発掘調査をおこない、縄文時代前期末葉の円筒下層式dと大木6式とが共伴する地域であることを指摘していた（鈴木、1958）。今回の調査でも、前期～中期を通じて、大木式系列と円筒下層式・上層式系列の土器が出土し、それらからみて、本遺跡が両文化の指交状態での接触地帯の一部に位置していることを知ることができる。ある時期には大木式文化が卓越し、別の時期には円筒下層式・上層式文化が優位を占める。しかし、それはほぼ縄文時代前期の時期内における現象とみることができ、中期のなかでは大木式文化が絶えず優位性を保っている。

今回の報告は遺物を中心としたものである。それらをもとにした遺構群の動きについても触れる予定だったが、紙数や時間の都合でできないでしまった。それについては、当センターが発行している「紀要」V（1984年度刊）に稿を起す予定である。（三浦 謙一）

〈引用文献〉

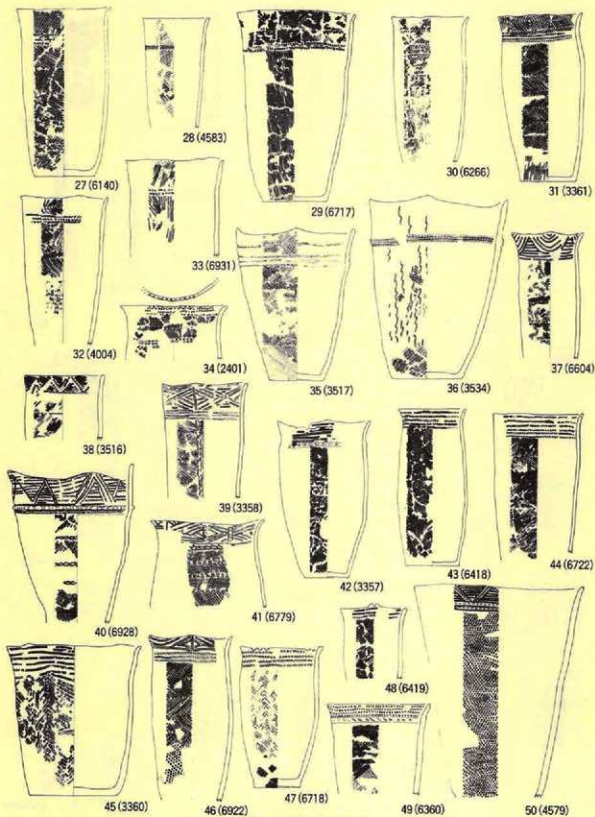
- 赤澤 威・小田静夫・山中一郎(1980)：『日本の旧石器』、立風書房
- 阿子島香(1979)：「折断調整石器」、「聖山」、149—153、東北大学文学部考古学研究会
- 稲野雄介・稲野彰子ほか：『滝ノ沢遺跡』、北上市教育委員会
- 江坂輝彌・笹津備洋・西村正剛(1958)：「青森県蟹沢遺跡調査報告書」、石器時代第5号、20—37
- 江坂輝彌(1970)：「V遺物(1)土器」、「石神遺跡」(江坂編)、15—28、ニュー・サイエンス社
- 岡村道雄(1976)：「ピエス・エスキューについて」、「東北考古学の諸問題」、75—96、寧楽社
- 岡村道雄(1979)：「縄文時代石器の基礎的研究法とその具体例—その1—」、研究紀要vol. 5、1—19、東北歴史民族資料館
- 岡村道雄(1983)：「ピエス・エスキュー、楔形石器」、「縄文文化の研究7」、109—116、雄山閣
- 小笠原幸範(1977)：「第8節石器(6)半円状扁平打製石器」、「熊沢遺跡」、199—204、青森県教育委員会
- 興野義一(1970)：「大木式土器理解のために(VI)」、考古学ジャーナルNo.48、20—22
- 草間俊一(1958)：「岩手県田代遺跡調査報告」、岩手大学学芸学部研究年報vol.13、No.1、13—21
- 草間俊一編(1971)：『貝島貝塚』、花泉町教育委員会
- 草間俊一編(1974)：『崎山弁天遺跡』、大槌町教育委員会
- 佐原 真(1977)：「石斧論—横斧から縦斧へ—」『考古論集(慶祝松崎寿和先生六十三歳論文集)』、45—86
- 佐藤則之・岩淵廣治(1980)：『三神嶺遺跡発掘調査報告書』、仙台市教育委員会
- 白鳥良一(1974)：「仙台市三神嶺遺跡の調査」、「東北の考古・歴史論集」(平重光先生還歴記念会編)、1—54、宝文堂
- 鈴木克彦(1976)：「東北地方北部に於ける大木系土器文化の編年的考察」、北奥古代文化8、1—24
- 鈴木克彦(1977)：「第3節円筒土器下層a・b式土器」、「熊沢遺跡」、107—134、青森県教育委員会
- 鈴木孝志(1958)：「岩手県岩手郡松尾村水切場遺跡調査概報」、上代文化第28輯、29—36
- 鈴木道之助(1981)：『石器の基礎知識III』、柏書房
- 須藤 隆(1983)：「東北地方の初期弥生土器—山王III層式—」、考古学雑誌Vol.68、No.3、1—53
- 高田和恵(1981)：『一戸バイパス関係埋蔵文化財報告書1』、一戸町教育委員会
- 高橋信雄(1981)：「3. 古代」、「岩手の土器」、27—34、岩手県立博物館
- 高橋文夫(1979)：「遺跡の概略」、「長者屋敷遺跡現地説明会資料」、13—31、(財)岩手県埋蔵文化財センター
- 高橋文夫・佐藤 勝・佐々木清文(1979)：『松尾村長者屋敷遺跡—遺構編(1)』、(財)岩手県埋蔵文化財センター

- 高橋文夫・佐藤 勝(1980)：『松尾村長者屋敷遺跡―遺構編(2)』、(財)岩手県埋蔵文化財センター
- 高橋正之(1980)：『堂ヶ沢II遺跡』、『御所ダム関連遺跡発掘調査報告書』、(財)岩手県埋蔵文化財センター
- 中村良幸(1979)：『立石遺跡』、大迫町教育委員会
- 丹波 茂(1971)：『東北地方南部における縄文時代中・後葉土器群研究の現段階』、福島考古第12号、1-21
- 丹波 茂(1981)：『大木式土器』、『縄文文化の研究4』、43-60、雄山閣
- 本堂寿一(1978・1979)：『八天遺跡』(図版編・本文編)北上市教育委員会
- 三浦謙一(1983)：『湯沢遺跡発掘調査報告書―遺物編一』、(財)岩手県埋蔵文化財センター
- 光井文行・種市 進・田鎖寿夫(1983)：『上の山VII遺跡発掘調査報告書』、(財)岩手県埋蔵文化財センター
- 宮城県教育委員会(1977)：『III. 金山貝塚発掘調査概報』、『亀岡遺跡・金山貝塚』、27-72
- 宮城県教育委員会(1980)：『宇賀崎貝塚』、『金剛寺貝塚・宇賀崎貝塚・宇賀崎1号墳他』、55-166
- 三宅徹也(1982)：『円筒土器』、『縄文文化の研究3』、177-189、雄山閣
- 村越 潔(1974)：『円筒土器文化』、雄山閣
- 村越 潔(1976)：『円筒土器に伴う特殊な石器』、『東北考古学の諸問題』、99-108、寧楽社
- 渡辺 誠(1976)：『スダレ状圧痕の研究』、『物質文化26』、1-23
- 柳沢清一(1980)：『大木10式土器論』、『古代探叢―滝口宏先生古稀記念考古学論集一』、55-77、早稲田大学出版部

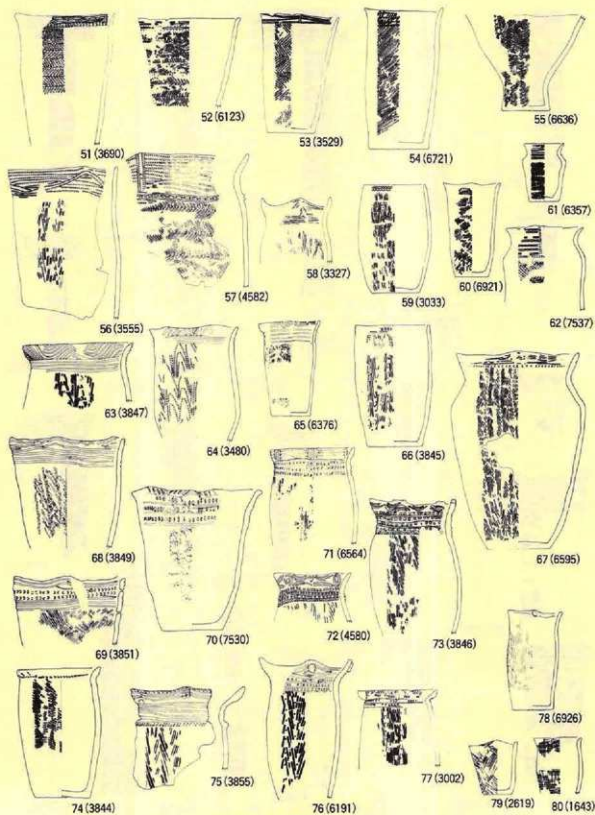


図版 I 土器集成図(1)

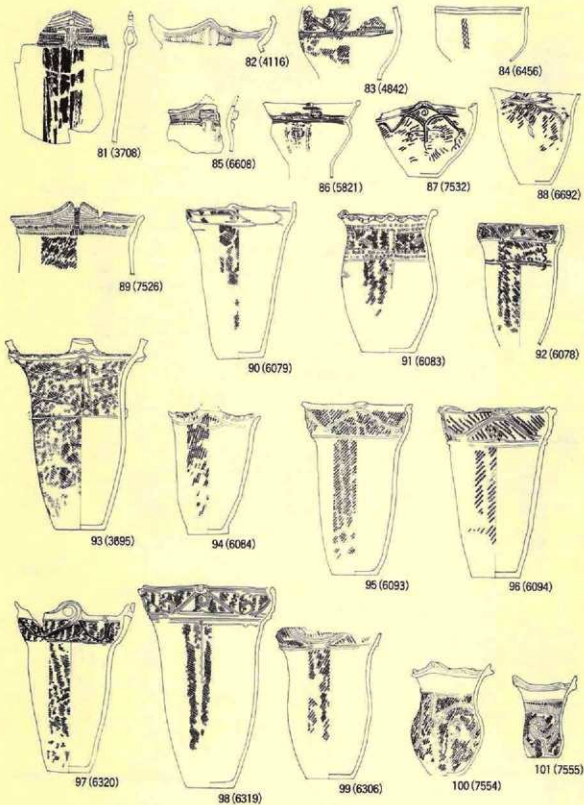
↑は体部と同じ原体を底部に施文



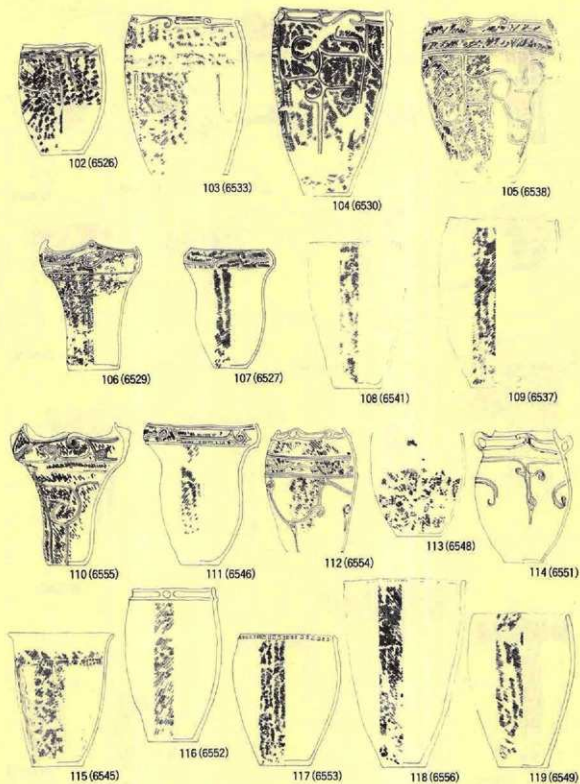
图版 II 土器集成图(2)



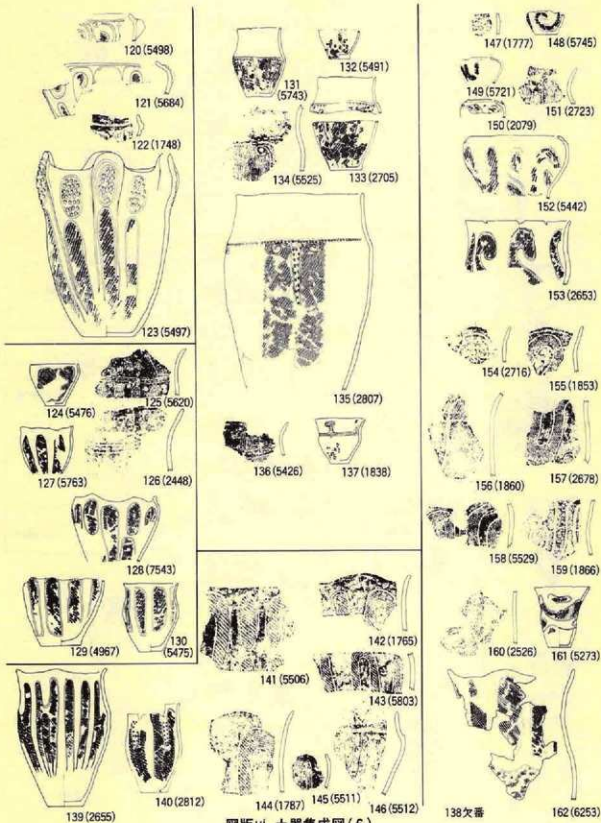
圖版 III 土器集成圖 (3)



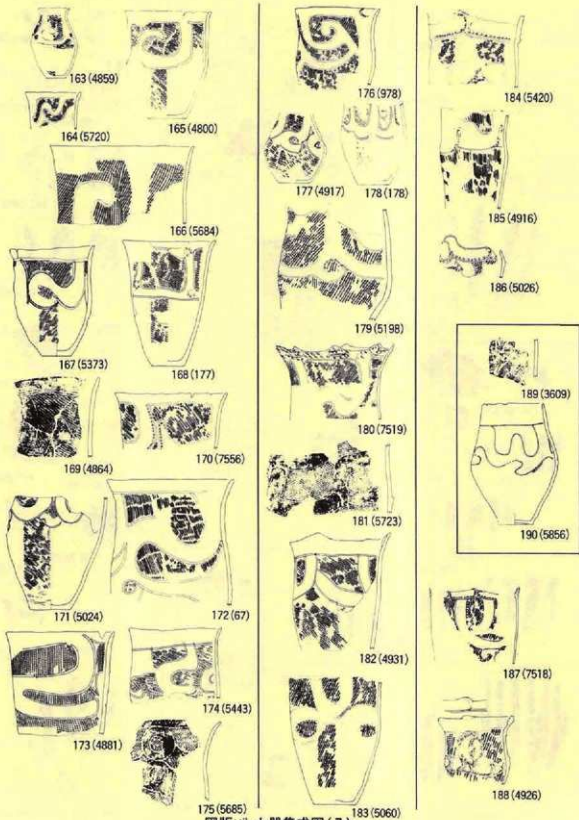
图版IV 土器集成图(4)



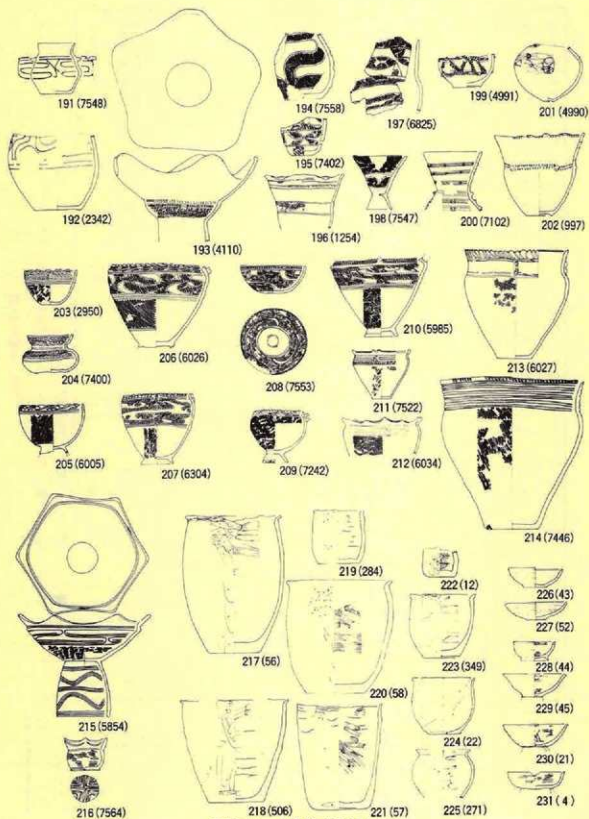
图版 V 土器集成图 (5)



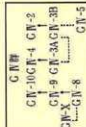
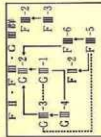
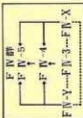
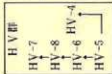
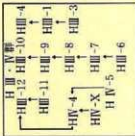
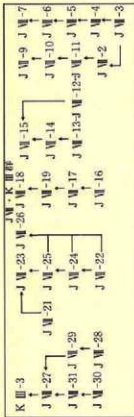
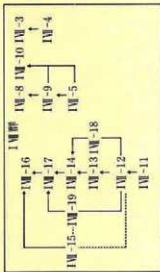
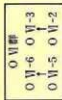
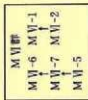
图版VI 土器集成图(6)



圖版 VII 土器集成圖(7)



図版VIII 土器集成図(8)



付図) 重複する住居址間の新旧関係分解図

1. 遺構編の記載にもとづいて編集した。
2. 矢印で示したものは、矢印の先にある住居址が新しい。
3. 破線で示したものは、新旧関係が不明である。
4. 繁雑さをふせぐため、最小限の矢印で新旧関係を示してある。
5. 群とひとつとつのもともまりは大区画名と対応させた便宜的なものである。
6. 遺構編では、住居址と住居址群の2つの用語が使われている。住居址群は新旧関係をもちつ住居址の複合体であり、本図ではそのなかの最新のものに代表させ、他の住居址との関係を示した。

岩手県埋文センター文化財調査報告書第77集

長者屋敷遺跡発掘調査報告書(Ⅲ)

東北縦貫自動車道関連発掘調査

(遺物編—本文)

印刷 昭和59年3月16日

発行 昭和59年3月26日

発行 財団法人岩手県埋蔵文化財センター

〒020 岩手県紫波郡都南村大字下飯岡 電話0196(38)9001

印刷 河北印刷株式会社

〒020 盛岡市本町通り2丁目8番7号 電話0196(23)4256

©岩手県埋文センター1984